

山梨県南アルプス市  
Sone  
曾根遺跡(第2地点)

下市之瀬上宮地線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011. 3

南アルプス市  
南アルプス市教育委員会

山梨県南アルプス市  
Sone  
曾根遺跡(第2地点)

---

下市之瀬上宮地線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011. 3

南アルプス市  
南アルプス市教育委員会

## 例　　言

- 本書は平成21・22年に発掘調査を行った、山梨県南アルプス市上宮地に所在する曾根遺跡（第2地点）の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は都市計画道路「ド市之瀬上宮地線」建設に伴うもので、事業主体は南アルプス市である。
- 試掘・発掘調査は南アルプス市教育委員会が実施し、本調査では財団法人山梨文化財研究所が調査支援を行った。本調査は1次調査を平成20年12月4日から平成21年3月25日、2次調査を平成22年1月9日から3月24日に実施した。
- 本書の執筆分担は以下のとおりである。なお、編集は南アルプス市教育委員会の監修のもと、樋原功一が担当した。  
第4章第1節 河西学（財団法人山梨文化財研究所）  
第4章第2節 高橋教（パリノ・サーヴェイ株式会社）  
第1章第1節・第2節1・2 保阪太一（南アルプス市教育委員会）その他 樋原功一（財団法人山梨文化財研究所）
- 遺物の写真撮影は中川英治が行った。
- 発掘調査から報告書作成までの間、次の諸氏、諸機関にご協力、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい（順不同、敬称略）。  
宮澤公雄・野野修・河西学・鈴木稔・畠大介・望月秀和（財団法人山梨文化財研究所）、長谷川豊・稻垣白山（大月市教育委員会）、中山誠二（山梨県立博物館）
- 本書に関わる出土品および記録図面、写真等は南アルプス市教育委員会で保管している。

## 凡　　例

- 遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系）。各平面図における北は座標北で、真北の方向角は+0°1'48"。
- 遺構・遺物の縮尺は次のとおり。  
竪穴・掘立柱建物 1:60  
炉 1:30 土坑 1:40  
溝 1:100  
縄文土器 1:4  
土師器・縄文土器（早～前期初頃） 1:3  
石器 1:3（大形石器を除く）

金属製品・土製品 1:2

石鏡・ナイフ形石器ほか小形石器 2:3

- 上器断面の黒塗りは須恵器、ドット網掛けは陶磁器を表す。
- 竪穴住居平面図における細かな破線は、床面の硬化面を示す。また焼土分布範囲は1点鎮線を表す。断面図の1点鎮線は床下掘り方を示す。平面図における遺物の種別は以下の通りである。
  - 純文 ▲弥生・土師器 □陶器 △金属器
  - ◆十製品 △石器
- 上層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色板」を使用した。
- 平面図における遺物番号は、遺物図版、遺物観察表と一致する。
- 図1の地図は20万分の1地勢図「甲府」、図2の地図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「小笠原」を使用した。

## 目　　次

第1章 総　　過	1
第1節　　調査の経過	1
第2節　　発掘作業の経過	4
第3節　　整理等作業の経過	8
第2章　　遺跡の位置と環境	9
第1節　　地理的環境	9
第2節　　歴史的環境	9
第3章　　調査の方法と成果	11
第1節　　調査の方法	11
第2節　　層　序	11
第3節　　遺　構	11
第4節　　遺　物	30
第4章　　自然科学的分析	39
第1節　　曾根遺跡出土縄文土器押型文土器の 胎土分析	39
第2節　　曾根遺跡の炭化材・炭化種々分析	44
第3章　　総　括	50
第1節　　集落の変遷	50
第2節　　縄文時代の諸課題	53

報告書抄録

## 挿図目次

図1　遺跡の位置	2
図2　周辺の遺跡	2
図3　試掘坑および調査区配置図	5
図4　調査区の位置	10
図5　4区上層図	11
図6　全体図	12
図7　全体図(1)	13
図8　全体図(2)	14
図9　全体図(3)	15
図10　全体図(4)	16
図11　全体図(5)	17
図12　上器試料拓影図	40
図13　土器胎土の岩石鉱物組成	41
図14　上器岩石組成折れ線グラフ	41

図15	土器と関東地域河川砂とのクレスタ 分析樹形図	42
図16	集落の変遷	50
図17	各地の初期層内埋蔵物(1)	53
図18	各地の初期層内埋蔵物(2)	54
図19	各地の多角形窓穴	55

## 表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	3
第2表	土器の試表	39
第3表	上器胎土中の岩石鉱物	40
第4表	岩石組成折れ線グラフによる土器分類	41
第5表	樹種同定結果	46
第6表	炭化椎実同定結果	47
第7表	上器・陶磁器類觀察表	58
第8表	土製品觀察表	69
第9表	石製品觀察表	70
第10表	金属製品觀察表	72

## 図版目次

第1図	1・6号竪穴	73
第2図	1・6号竪穴	74
第3図	2号竪穴	75
第4図	2・3号竪穴	76
第5図	4・5号竪穴	77
第6図	4・5号竪穴	78
第7図	7号竪穴	79
第8図	7号竪穴	80
第9図	8号竪穴	81
第10図	9・10号竪穴	82
第11図	9・10号竪穴	83
第12図	9・10号竪穴	84
第13図	11・12号竪穴	85
第14図	11・12号竪穴	86
第15図	11・12号竪穴	87
第16図	13・15号竪穴	88
第17図	13・15号竪穴	89
第18図	13・15号竪穴	90
第19図	13・15号竪穴	91
第20図	13・15号竪穴	92
第21図	16号竪穴	93
第22図	16号竪穴	94
第23図	17号竪穴	95
第24図	18号竪穴	96
第25図	19号竪穴	97
第26図	19号竪穴	98
第27図	20・38号竪穴	99
第28図	20・38号竪穴	100
第29図	21号竪穴	101
第30図	22・23号竪穴	102
第31図	24号竪穴	103
第32図	25号竪穴	104
第33図	26号竪穴	105
第34図	27号竪穴	106
第35図	28号竪穴	107
第36図	29号竪穴	108

第37図	29号竪穴	109
第38図	30・33・35号竪穴	110
第39図	30・33・35号竪穴	111
第40図	30・33・35号竪穴	112
第41図	31号竪穴	113
第42図	32号竪穴	114
第43図	36号竪穴	115
第44図	36・37号竪穴	116
第45図	1・2号掘立	117
第46図	1～11号土坑	118
第47図	12～20号土坑	119
第48図	21～29号土坑	120
第49図	30～40号土坑	121
第50図	41～48号土坑	122
第51図	50～58号土坑	123
第52図	60～68号土坑	124
第53図	69～78号土坑	125
第54図	79～88号土坑	126
第55図	90号土坑、1号埋甕、1号埋甕、 1～8号集石	127
第56図	9～11号集石、3号溝	128
第57図	1・2号竪穴遺物	129
第58図	2号竪穴遺物	130
第59図	2～6号竪穴遺物	131
第60図	7・8号竪穴遺物	132
第61図	9～12号竪穴遺物	133
第62図	12号竪穴遺物	134
第63図	13号竪穴遺物	135
第64図	15号竪穴遺物	136
第65図	15号竪穴遺物	137
第66図	15号竪穴遺物	138
第67図	15号竪穴遺物	139
第68図	15号竪穴遺物	140
第69図	16・17号竪穴遺物	141
第70図	18号竪穴遺物	142
第71図	18・19号竪穴遺物	143
第72図	19号竪穴遺物	144
第73図	20号竪穴遺物	145
第74図	20号竪穴遺物	146
第75図	20号竪穴遺物	147
第76図	20号竪穴遺物	148
第77図	20・22・23号竪穴遺物	149
第78図	24・26号竪穴遺物	150
第79図	26～28号竪穴遺物	151
第80図	29号竪穴遺物	152
第81図	29号竪穴遺物	153
第82図	29・30号竪穴遺物	154
第83図	30・31号竪穴遺物	155
第84図	31～33号竪穴遺物	156
第85図	33号竪穴遺物	157
第86図	36号竪穴遺物	158
第87図	36・37号竪穴遺物	159
第88図	38号竪穴、1号埋甕、1～33号土坑遺物	160
第89図	49～71号土坑遺物	161
第90図	71～90号土坑遺物	162
第91図	47～174号ピット、十器集中区、1号周溝遺物	163
第92図	3～5号風洞木板、1号谷、遺構外遺物	164
第93図	遺構外遺物	165
第94図	遺構外遺物	166

- 第95回 造縁外遺物 ..... 167  
 第96回 造縁外遺物 ..... 168

## 写真図版目次

- 図版1 1 調査区全体写真  
 図版2 1・2 2区範囲写真  
 図版3 1・2 4区範囲写真  
 図版4 1・2 5区範囲写真  
 図版5 1・1・6号竪穴遺物出土状況 2 1号竪穴完掘状況  
 3 1・6号竪穴完掘状況 4 1号竪穴炉 5  
 6号竪穴炉 6 1・6号竪穴掘り方 7 6号竪穴  
 掘り方 8 2号竪穴遺物・炭化材出土状況 9 2  
 号竪穴炭化材  
 図版6 1 2号竪穴炭化材(ササ) 2 2号竪穴北側発見石  
 3 2号竪穴完掘状況 4 2号竪穴掘り方 5 3  
 号竪穴遺物出土状況 6 3号竪穴掘り方 7 4・  
 5号竪穴遺物出土状況 8 4号竪穴炉  
 図版7 1 4・5号竪穴完掘状況 2 4・5号竪穴掘り方  
 3 4号竪穴掘り方 4 6号竪穴完掘状況 5・6  
 7号竪穴遺物出土状況 7 7号竪穴掘り方 8 7  
 号竪穴炉 9 7号竪穴出入り口部ピット  
 図版8 1 8号竪穴遺物出土状況 2 8号竪穴完掘状況  
 3 8号竪穴炉 4 9・10号竪穴調査風景 5 9・  
 10号竪穴遺物出土状況 6 9号竪穴遺物出土状況  
 7 9・10号竪穴完掘状況 8～10 9・10号竪穴掘  
 り方  
 図版9 1 12号竪穴遺物出土状況 2 12号竪穴調査風景  
 3 12号竪穴鉄製品出土状況 4・5 12号竪穴遺  
 物出土状況 6 12号竪穴完掘状況 7 12号竪穴炉  
 8 12号竪穴掘り方調査風景  
 図版10 1 13・15号竪穴堆積状況 2 13・15号竪穴遺物出  
 土状況 3 15号竪穴下層遺物出土状況 4 15号竪  
 穴遺物出土状況 5 15号竪穴炉内出土器 6  
 15号竪穴出入り口部配石およびピット 7 13・15号  
 竪穴完掘状況 8 15号竪穴奥壁ピット 9 15号竪  
 穴完掘状況  
 図版11 1 13・15号竪穴完掘状況 2 16号竪穴遺物出土状  
 況 3・4 16号竪穴完掘状況 5 16号竪穴炉 6  
 16号竪穴出入り口施設 7 16号竪穴掘り方 8 17  
 号竪穴遺物出土状況 9 17号竪穴完掘状況 10 17  
 号竪穴炉周辺炭化物出土状況  
 図版12 1 17号竪穴掘り方 2 18号竪穴遺物出土状況 3  
 ～5 18号竪穴埋甃 6 18号竪穴炉 7 18号竪穴  
 完掘状況 8 19号竪穴遺物出土状況 9 19号竪穴  
 壁上層甃出土状況 10 19号竪穴周辺焼土状況  
 図版13 1 19号竪穴炉上層遺物出土状況 2・4 19号竪穴  
 埋甃出土状況 3・5 19号竪穴炉内土器出土状況  
 6 19号竪穴埋甃 7 19号竪穴炉と奥壁集石 8  
 19号竪穴完掘状況  
 図版14 1 19号竪穴内完掘状況 2・3 20号竪穴内遺物  
 出土状況 3・5 20号竪穴炉内土器出土状況  
 6 20号竪穴内遺物出土状況 7 20号竪穴  
 完掘状況 8 20号竪穴炉 9 20号竪穴完掘状況  
 図版15 1 21号竪穴遺物出土状況 2 21号竪穴炭化材出土  
 状況 3 21号竪穴完掘状況 4 21号竪穴掘り方  
 5・6 22号竪穴遺物出土状況 7 22号竪穴完掘状  
 況 8 22号竪穴掘り方 9 22号竪穴炉  
 図版16 1 23号竪穴完掘状況 2 23号竪穴掘り方 3・4・  
 6・9 24号竪穴遺物出土状況 5 24号竪穴炭化材  
 出土状況 7 24号竪穴調査風景 8 24号竪穴出土  
 器 10 24号竪穴完掘状況  
 図版17 1 25号竪穴遺物出土状況 2 25号竪穴完掘状況  
 3 26号竪穴炉 4 26号竪穴完掘状況 5 27号  
 竪穴炭化材出土状況 6 27号竪穴調査風景 7 28  
 号竪穴完掘状況 8～10 28号竪穴内71号土坑遺物出  
 土状況  
 図版18 1・2 29号竪穴遺物出土状況 3 29号竪穴完掘  
 状況 4 29号竪穴炉および78号土坑 5 30号竪  
 穴遺物出土状況 6 30号竪穴炉上層 7 30・33号  
 竪穴完掘状況 8 30号竪穴炉 9 33号竪穴炉 10  
 33号竪穴調査風景  
 図版19 1 31号竪穴遺物出土状況 2 31号竪穴完掘状況  
 3 31号竪穴炉 4 32号竪穴完掘状況 5 32号竪  
 穴完掘状況 6 32号竪穴炉 7 33号竪穴炉内集  
 石状況 8 33号竪穴完掘状況 9 35号竪穴炉  
 10 30・33号竪穴完掘状況  
 図版20 1 5区完掘状況 2 36号竪穴遺物出土状況 3～  
 5・7 36号竪穴石匂跡 6 36号竪穴完掘状況 8  
 36号竪穴周辺遺物出土状況 9 36号竪穴内集石山  
 土状況 10 36号竪穴炉内遺物出土状況  
 図版21 1 36号竪穴完掘状況 2 36号竪穴周辺上層焼土  
 状況 3 37号竪穴遺物出土状況 4 37号竪穴完掘  
 状況 5 38号竪穴遺物出土状況 6～10 5区完掘状  
 況  
 国版22 1 1号掘立柱建物跡 2 2号掘立柱建物跡 3  
 遺構外單独出土器 4 1号堀裏 5 1分集石  
 6 2号集石 7 3号集石 8 4号集石 9 9  
 集石群  
 国版23 1 1号溝 2 2号溝 3 1号土坑 4 2号土  
 坑 5 3号土坑 6 12号土坑 7 13・16号土坑  
 8 17号土坑 9 18号土坑 10 25号土坑 11 27  
 号土坑 12 28号土坑 13 29号土坑 14 30号土  
 坑 15 31号土坑 16 34号土坑 17 35号土坑 18  
 38号土坑 19 40号土坑  
 国版24 1 42号土坑 2 45号土坑 3 52号土坑 4 53  
 号土坑 5 54号土坑 6 55号土坑 7 57号土  
 坑 8 59号土坑 9 60号土坑 10 62号土坑 11  
 63号土坑 12 66号土坑 13 67号土坑 14 68号土  
 坑 15 70号土坑 16・17 調査風景  
 国版25 1 73号土坑 2 74号土坑 3 80号土坑 4 81  
 号土坑 5 82号土坑 6 83号土坑 7 84号土  
 坑 8 85号土坑 9 86号土坑 10 29号竪穴246  
 ピット 11 90号土坑 12 90号土坑上層出土器  
 13 90号土坑下層出土器 14 90号土坑下層出土  
 状況 15 7・8号集石 16 7号集石半載 17 8  
 号集石半載 18 7・8号集石下層 19 9号集石  
 20 10号集石 21 11号集石  
 国版26 1 集石群 2 6号風洞木直 3 2区空掘写真  
 4 1区南側空掘写真 5 1区北側空掘写真 6  
 3区空掘写真 7 4区空掘写真 8 5区空掘写真  
 9 見学会の展示室 10 見学会の様子  
 国版27 1～7号竪穴遺物  
 国版28 8～12号竪穴遺物  
 国版29 12～15号竪穴遺物  
 国版30 15号竪穴遺物

- 図版31 15・16号竖穴遺物  
図版32 17～19号竖穴遺物  
図版33 19・20号竖穴遺物  
図版34 20号竖穴遺物  
図版35 20～26号竖穴遺物  
図版36 26～29号竖穴遺物  
図版37 29号竖穴遺物  
図版38 30～32号竖穴遺物  
図版39 33～36号竖穴遺物  
図版40 36号竖穴～59号十坑遺物  
図版41 63号土坑～3号溝遺物  
図版42 3号溝～遺構外遺物  
図版43 遺構外遺物  
図版44 遺構外遺物、植穴遺体  
図版45 炭化材(1)  
図版46 炭化材(2)  
図版47 1 側面に象嵌をもつ鉢 2 象嵌(部分)

# 第1章 経過

## 第1節 調査の経過

甲府盆地の西縁に位置する南アルプス市では、都市計画道路「下市之瀬上宮地線」建設に関し、平成18年、まちづくり交付金事業として建設推進を図ることになった。この件について、南アルプス市教育委員会は、工事主体者の南アルプス市建設部都市整備課（現都市計画課）より埋蔵文化財包蔵地の照会を受けた。この下市之瀬上宮地線は、南アルプス東麓にあたる市之瀬台地の縁辺部に沿うように台地末端部から深沢川扇状地に計画された総延長550mの道路で、計画地の大部分は文化財保護法にいう「周知の埋蔵文化財包蔵地」の「曾根遺跡（遺跡番号 KG-123）」に該当する。この計画路線と並行する農道では、昭和58年度に農地侵食防止事業に伴い本調査が実施されている（曾根遺跡第1地点）。

T.事主主体者と協議を重ねるなかで平成19年度には事業計画もほぼ整い、翌20年度からの事業着手の意向が示されたことから平成19年10月3日付けで南アルプス市長より文化財保護法94条に基づく通知が提出され、同5日付で山梨県教育委員会へと送達した。

これまでの周囲における調査実績から遺跡の存在は確実とみられたが、満査可能な土地から隨時試掘調査を実施することとなり、先行して工事着手する予定であった計画地内の北部を中心で26箇所の試掘坑を設定し、平成19年10月23日から12月26日にかけて試掘調査を実施した。一部のトレンチで遺物・遺構が検出されたため、全体の状況は把握されていない段階ではあったが翌20年度から事前調査の実施ができるよう協議し、予算措置を施した。翌20年6月4日～17日にかけて残りの範囲に計13箇所の試掘溝を設定して調査を実施し、計画路線内の中央部分で縄文時代前期から中世までの土器片や石器、縄文時代中期・古墳時代初頭の住居跡などを検出した。

以上の試掘調査の結果、工事面積約11000m<sup>2</sup>に対し、約4300m<sup>2</sup>の範囲で本調査の必要性が確認された。市教育委員会では、今回の計画は恒久の建造物とみなされることから工事着手に先立って記録保存を目的とした埋蔵文化財の事前調査が必要であると判断し、工事主体者との協議を重ね、平成20年12月4日より発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成20年度には調査主体者を南アルプス市教育委員会、（財）山梨文化財研究所が調査支援を行なう形で第1次調査を実施した（曾根遺跡1次発掘調

査支援業務）。調査予定面積は1区（2414m<sup>2</sup>）、2区（510m<sup>2</sup>）、計2924m<sup>2</sup>である。平成21年度には、1次調査で着手できなかった部分を中心に調査を行うとともに、2次調査とあわせて1次調査分の基礎整理（出土遺物の洗浄・注記・接合）を実施した（曾根遺跡2次発掘調査支援業務）。調査予定面積は3区（220m<sup>2</sup>）、4区（994m<sup>2</sup>）、5区（180m<sup>2</sup>）、計1394m<sup>2</sup>である。さらに平成22年度には報告書刊行に向けた整理、図版作成、原稿執筆を行った（曾根遺跡3次発掘調査支援業務）。南アルプス市と（財）山梨文化財研究所との業務委託名、契約番号および調査期間、面積、遺物出土量等は以下の通り。

### 平成20年度

契約番号 建20-7-20

業務名 曾根遺跡埋蔵文化財発掘調査支援事業委託

発掘調査期間 平成20年12月4日～平成21年3月25日

調査面積 1・2区 計2925m<sup>2</sup>

調査担当 保阪太一（南アルプス市教育委員会）

現場担当 柳原功一（山梨文化財研究所）

出土遺物量 コンテナ（30×40×25cm）55箱

検出遺構数 縄文時代中期堅穴住居跡8、古墳時代

堅穴住居跡18、掘立柱建物跡2、上坑

71、ピット221、溝2

### 平成21年度

契約番号 建21-2-86

事業名 下市之瀬上宮地線建設に伴う曾根遺跡（2次）発掘調査支援業務

所在地 南アルプス市上宮地内

発掘調査期間 平成22年1月9日～3月24日

出土遺物量 コンテナ42箱

調査面積 3区 367m<sup>2</sup>、4区 739m<sup>2</sup>、5区 460m<sup>2</sup> 合計 1566m<sup>2</sup>

調査担当 保阪太一（南アルプス市教育委員会）

柳原功一（山梨文化財研究所）

検出遺構数 縄文時代中期堅穴住居跡8、古墳時代

堅穴住居跡1、土坑19、ピット56、河

道

### 平成22年度

契約番号 建22-2-83

業務委託名 下市之瀬上宮地線建設に伴う曾根遺跡（3次）発掘調査支援業務



図1 遺跡の位置



図2 周辺の遺跡（1が曾根遺跡）

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	名 称	種別	古名	序号
1	曾根原遺跡	墳丘墓	御所山	123
2	北条 A 直轄	政治地	御所山	71
3	七澤 A 遺跡	散居地	御所山	72
4	北条 C 遺跡	散居地	御所山	73
5	北条 D 遺跡	散居地	御所山	74
6	井掛 A 直轄	政治地	御所山	75
7	大塔 A 遺跡	散居地	御所山	86
8	丸岡形 B 遺跡	散居地	御所山	87
9	入野川 C 遺跡	散居地	御所山	88
10	西原 A 遺跡	散居地	御所山	89
11	西原 B 遺跡	散居地	御所山	90
12	井掛 C 遺跡	散居地	御所山	91
13	曾根山形 C 遺跡	散居地	御所山	92
14	西原 D 遺跡	散居地	御所山	93
15	西原 E 遺跡	散居地	御所山	94
16	西原 F 遺跡	散居地	御所山	95
17	西原 G 遺跡	散居地	御所山	96
18	井掛 G 遺跡	散居地	御所山	97
19	大塔 D 遺跡	散居地	御所山	98
20	井掛 H 遺跡	散居地	御所山	99
21	森吉川 A 遺跡	散居地	御所山	100
22	上平原 C 遺跡	散居地	御所山	101
23	上平原 D 遺跡	散居地	御所山	102
24	真野川 E 遺跡	散居地	御所山	103
25	上平原 F 遺跡	散居地	御所山	104
26	上平原 G 遺跡	散居地	御所山	105
27	上平原 H 遺跡	散居地	御所山	106
28	丸山 A 遺跡	散居地	御所山	107
29	丸山 B 遺跡	散居地	御所山	108
30	丸山 C 遺跡	散居地	御所山	109
31	北条 A 遺跡	散居地	御所山	110
32	北条 B 遺跡	散居地	御所山	111
33	北条 C 遺跡	散居地	御所山	112
34	神代 A 遺跡	散居地	御所山	113
35	北条 D 遺跡	散居地	御所山	114
36	丸山 E 遺跡	散居地	御所山	115
37	丸山 F 遺跡	散居地	御所山	116
38	北条 G 遺跡	散居地	御所山	117
39	化岡町 A 遺跡	散居地	御所山	118
40	神代 B 遺跡	散居地	御所山	119
41	上平原 I 遺跡	散居地	御所山	120
42	手取川 J 遺跡	散居地	御所山	121
43	名寄場	古墳	御所山	112
44	駒ヶ塚	古墳	御所山	113
45	西原村松林跡	散居地	御所山	114
46	神代	古墳	御所山	115
47	御所原 C 遺跡	散居地	御所山	116
48	田舎道跡	散居地	御所山	117
49	小原山 A 遺跡	散居地	御所山	118
50	北条村下井遺跡	散居地	御所山	119
51	早野川 K 遺跡	散居地	御所山	120
52	打越跡	散居地	御所山	121
53	打越跡	散居地	御所山	122
54	北条山聚落跡	散居地	御所山	123
55	平岡町高岡山遺跡	城跡	御所山	163
56	高岡町高岡山遺跡	散居地	御所山	163
57	東原 A 遺跡	散居地	御所山	167
58	小原山 B 遺跡	散居地	御所山	168
59	小原山 C 遺跡	散居地	御所山	169
60	北条 A 遺跡	散居地	御所山	170
61	東原山 D 遺跡	散居地	御所山	171
62	東原 C 遺跡	散居地	御所山	173
63	新宿町 A 遺跡	散居地	御所山	170
64	日吉 B 遺跡	散居地	御所山	171
65	六呂戸山 C 遺跡	古墳	御所山	172
66	六呂戸 D 遺跡	散居地	御所山	174
67	山本遺跡	散居地	御所山	162
68	久保田 A 遺跡	散居地	御所山	165
69	久保田 B 遺跡	散居地	御所山	166
70	新宿町 B 遺跡	散居地	御所山	173
71	新宿町 C 遺跡	散居地	御所山	176

番号	名 称	種別	地名	古名	序号
72	清水山 D 遺跡	散居地	御所山	177	125
73	清水山 E 遺跡	散居地	御所山	179	126
74	清水山 F 遺跡	散居地	御所山	178	127
75	大村山 G 遺跡	散居地	御所山	179	128
76	大村山 H 遺跡	散居地	御所山	180	129
77	大村山 I 遺跡	散居地	御所山	181	130
78	高畠山 G 遺跡	散居地	御所山	182	131
79	高畠山 H 遺跡	散居地	御所山	183	132
80	高畠山 I 遺跡	散居地	御所山	184	133
81	南原山 G 遺跡	散居地	御所山	185	134
82	南原山 H 遺跡	散居地	御所山	186	135
83	浜川町 A 遺跡	散居地	御所山	187	136
84	浜川町 B 遺跡	散居地	御所山	188	137
85	浜川町 C 遺跡	散居地	御所山	189	138
86	浜川町 D 遺跡	散居地	御所山	190	139
87	浜川町 E 遺跡	散居地	御所山	191	140
88	浜川町 F 遺跡	散居地	御所山	192	141
89	浜川町 G 遺跡	散居地	御所山	193	142
90	浜川町 H 遺跡	散居地	御所山	194	143
91	浜川町 I 遺跡	散居地	御所山	195	144
92	大村山 A 遺跡	散居地	御所山	196	145
93	大村山 B 遺跡	散居地	御所山	197	146
94	中村山 A 遺跡	散居地	御所山	198	147
95	大村山 B 遺跡	散居地	御所山	199	148
96	大村山 C 遺跡	散居地	御所山	200	149
97	大村山 D 遺跡	散居地	御所山	201	150
98	大村山 E 遺跡	散居地	御所山	202	151
99	大村山 F 遺跡	散居地	御所山	203	152
100	大村山 G 遺跡	散居地	御所山	204	153
101	大村山 H 遺跡	散居地	御所山	205	154
102	大村山 I 遺跡	散居地	御所山	206	155
103	浜川町 A 遺跡	散居地	御所山	207	156
104	浜川町 B 遺跡	散居地	御所山	208	157
105	浜川町 C 遺跡	散居地	御所山	209	158
106	浜川町 D 遺跡	散居地	御所山	210	159
107	浜川町 E 遺跡	散居地	御所山	211	160
108	浜川町 F 遺跡	散居地	御所山	212	161
109	浜川町 G 遺跡	散居地	御所山	213	162
110	浜川町 H 遺跡	散居地	御所山	214	163
111	浜川町 I 遺跡	散居地	御所山	215	164
112	大村山 A 遺跡	散居地	御所山	216	165
113	大村山 B 遺跡	散居地	御所山	217	166
114	大村山 C 遺跡	散居地	御所山	218	167
115	大村山 D 遺跡	散居地	御所山	219	168
116	大村山 E 遺跡	散居地	御所山	220	169
117	大村山 F 遺跡	散居地	御所山	221	170
118	大村山 G 遺跡	散居地	御所山	222	171
119	御所山 A 遺跡	散居地	御所山	223	172
120	御所山 B 遺跡	散居地	御所山	224	173
121	御所山 C 遺跡	散居地	御所山	225	174
122	御所山 D 遺跡	散居地	御所山	226	175
123	吉田山 A 遺跡	散居地	御所山	227	176
124	吉田山 B 遺跡	散居地	御所山	228	177
125	吉田山 C 遺跡	散居地	御所山	229	178
126	水上遺跡	散居地	御所山	230	179
127	南原山 A 遺跡	散居地	御所山	231	180
128	大河原 A 遺跡	散居地	御所山	232	181
129	大河原 B 遺跡	散居地	御所山	233	182
130	コウモリ塚古墳	古墳	御所山	234	183
131	下南原 A 遺跡	散居地	御所山	235	184
132	下南原 B 遺跡	散居地	御所山	236	185
133	八幡山 A 遺跡	散居地	御所山	237	186
134	小笠原山 B 遺跡	散居地	御所山	238	187
135	八幡山 C 遺跡	散居地	御所山	239	188
136	八幡山 D 遺跡	散居地	御所山	240	189
137	下南原 E 遺跡	散居地	御所山	241	190
138	東山山頂遺跡	散居地	御所山	242	191
139	東山山頂遺跡	散居地	御所山	243	192
140	東山 A 遺跡	散居地	御所山	244	193
141	東山 B 遺跡	散居地	御所山	245	194
142	今井山遺跡	散居地	御所山	246	195

番号	名 称	種別	地名	古名	序号
143	大村山 遺跡	散居地	御所山	19	143
144	赤坂山 遺跡	散居地	御所山	21	144
145	赤坂山 遺跡	散居地	御所山	22	145
146	七ツ打山 遺跡	散居地	御所山	23	146
147	七ツ打山 遺跡	散居地	御所山	24	147
148	七ツ打山 遺跡	散居地	御所山	25	148
149	吉田山 A 遺跡	散居地	御所山	26	149
150	吉田山 B 遺跡	散居地	御所山	27	150
151	吉田山 C 遺跡	散居地	御所山	28	151
152	七ツ打山 遺跡	散居地	御所山	29	152
153	吉田山 D 遺跡	散居地	御所山	30	153
154	十石山 遺跡	散居地	御所山	31	154
155	東山小学校跡	散居地	御所山	32	155
156	吉田山中腹 A 遺跡	散居地	御所山	33	156
157	吉田山中腹 B 遺跡	散居地	御所山	34	157
158	吉田山中腹 C 遺跡	散居地	御所山	35	158
159	吉田山中腹 D 遺跡	散居地	御所山	36	159
160	吉田山中腹 E 遺跡	散居地	御所山	37	160
161	吉田山中腹 F 遺跡	散居地	御所山	38	161
162	吉田山中腹 G 遺跡	散居地	御所山	39	162
163	吉田山中腹 H 遺跡	散居地	御所山	40	163
164	吉田山中腹 I 遺跡	散居地	御所山	41	164
165	北林寺 D 遺跡	散居地	御所山	42	165
166	北林寺 E 遺跡	散居地	御所山	43	166
167	北林寺 F 遺跡	散居地	御所山	44	167
168	北林寺 G 遺跡	散居地	御所山	45	168
169	北林寺 H 遺跡	散居地	御所山	46	169
170	北林寺 I 遺跡	散居地	御所山	47	170
171	北林寺 D 遺跡	散居地	御所山	48	171
172	北林寺 E 遺跡	散居地	御所山	49	172
173	北林寺 F 遺跡	散居地	御所山	50	173
174	北林寺 G 遺跡	散居地	御所山	51	174
175	北林寺 H 遺跡	散居地	御所山	52	175
176	北林寺 I 遺跡	散居地	御所山	53	176
177	北林寺 D 遺跡	散居地	御所山	54	177
178	北林寺 E 遺跡	散居地	御所山	55	178
179	北林寺 F 遺跡	散居地	御所山	56	179
180	北林寺 G 遺跡	散居地	御所山	57	180
181	北林寺 H 遺跡	散居地	御所山	58	181
182	北林寺 I 遺跡	散居地	御所山	59	182
183	新宿山 A 遺跡	散居地	御所山	60	183
184	新宿山 B 遺跡	散居地	御所山	61	184
185	新宿山 C 遺跡	散居地	御所山	62	185
186	新宿山 D 遺跡	散居地	御所山	63	186
187	新宿山 E 遺跡	散居地	御所山	64	187
188	新宿山 F 遺跡	散居地	御所山	65	188
189	新宿山 G 遺跡	散居地	御所山	66	189
190	新宿山 H 遺跡	散居地	御所山	67	190
191	新宿山 I 遺跡	散居地	御所山	68	191
192	内野山 A 遺跡	散居地	御所山	69	192
193	内野山 B 遺跡	散居地	御所山	70	193
194	内野山 C 遺跡	散居地	御所山	71	194
195	内野山 D 遺跡	散居地	御所山	72	195
196	内野山 E 遺跡	散居地	御所山	73	196
197	内野山 F 遺跡	散居地	御所山	74	197
198	内野山 G 遺跡	散居地	御所山	75	198
199	内野山 H 遺跡	散居地	御所山	76	199
200	内野山 I 遺跡	散居地	御所山	77	200
201	宮原山 遺跡	散居地	御所山	78	201
202	新潟市立利根川上戸山遺跡	散居地	御所山	79	202
203	新潟市立利根川下戸山遺跡	散居地	御所山	80	203
204	新潟市立利根川中戸山遺跡	散居地	御所山	81	204
205	二本柳山 遺跡	散居地	御所山	82	205
206	西田山 遺跡	散居地	御所山	83	206
207	内野山 2 連跡	散居地	御所山	84	207
208	東川口利根川上戸山遺跡	散居地	御所山	85	208
209	東川口利根川下戸山遺跡	散居地	御所山	86	209
210	内野山 3 連跡	散居地	御所山	87	210
211	伏波山 遺跡	散居地	御所山	88	211
212	作ノ木山 遺跡	散居地	御所山	89	212

履行期間 平成22年7月5日～平成23年3月3日  
調査担当 保阪太一（南アルプス市教育委員会）  
現場代理人 中山千恵（山梨文化財研究所）  
主任技術者 柳原功一（山梨文化財研究所）  
実際に調査を行った1次・2次の調査面積の合計は4491m<sup>2</sup>である。

## 第2節 発掘作業の経過

### 1 試掘調査

当初先行して工事着手する予定とされていた工事計画地内の北半分を中心に、平成19年10月23日から12月26日まで計26箇所の試掘坑を設定して試掘調査を実施したところ、第8トレンチから第20トレンチにかけて遺物・遺構共に検出された。それより北側の一部は旧字名を久保と呼び、若干の遺物は検出されるものの安定した地盤は確認できず、遺構は検出されなかった。

翌平成20年6月4日～17日にかけて残りの範囲において13箇所の試掘坑を設定し、試掘調査を実施した。耕作の合い間、補償立ち木の隙間を縫っての試掘調査の実施となつたためトレンチの規模に限界があつたものの、計39箇所の試掘坑を設定し調査を終えることができた。

計画路線内における中央部分では、縄文時代前期から中世までの土器片や石器、縄文時代中期・古墳出現期の住居跡などを確認した。遺構確認面までの掘削深度は概ね0.6m～1.2mで、浅いところでは0.2mという箇所もあった。

南側には深沢川が東流し、深沢川が運びこんだ七砂により計画路線南端付近は扇状地扇頂部付近となる。第24トレンチより南側には流路跡とみられる砂礫層が検出され、また深沢川によって形成される扇状地形を成すことから地表面下2mを越えても遺構確認面は検出できず、旧流路内に該当することによる浸食および堆積であると判断した。

よってその間の約4200m<sup>2</sup>の範囲に埋蔵文化財が遺存することが確認され、工事着手に先立って記録保存を目的とした埋蔵文化財の事前調査が必要であると判断した。

調査対象範囲とした南限では、地表面から遺構確認面まで2.3mを測り、また台地上部より流れ出る流路によって砂礫層が厚く堆積していたため試掘時点では本調査対象外としたが、後に報告するように本調査により砂礫層の上に遺構が続くことが判明した。堆積内容が砂礫層主体であり、さらに南へ続くに従って層厚が増すことにより安全な調査環境の確保が難しいと考え、工事主体との協議により遺構は現地保存することとした。

としたが、本調査終了後の平成22年3月、遺構の遺存状況を確認することを目的とした国庫補助事業による試掘調査（第40トレンチ）を再度実施することで、本調査を終えることとした。

### 2 第40トレンチについて

本調査において調査区の南端で検出された36号竪穴からさらに南へトレンチを追加し、集落の範囲確認を目的とした調査を実施した。調査は遺構の分布状況の確認のみとして埋土の掘削は行わなかった。地表面下約2.3m～3.2mで遺構確認面となり、竪穴の南にも流路跡とみられる砂礫層の下に遺構が続いていることを確認している。南へいくほど層厚はいっそう増すため、建設計画範囲内でのそれ以上の安全な掘削及び調査作業を行うことは不可能と判断し、本線計画に伴う埋蔵文化財の調査はすべて終了とした。よって、この遺跡で検出された集落の南限は確認できず、深沢川によって形成された扇状地形の下に縄文時代中期の集落跡の広がりがさらに続いているとみられる。

試掘調査では、河川付近の厚い砂礫層の下について事前に遺構を把握することはできなかった。周辺地域での井戸の掘削などにおいて土器が出土したとの証言もあったため、かなり深い箇所からの遺物の出土も想定してはいたが、現実問題として、事業計画段階において耕作と平行しての試掘調査を実施するにはトレンチの規模に限界があるといえる。文化財保護の観点ではすべての耕作が終了してからの大規模な試掘調査の実施が本来なのかもしれないが、道路建設と埋蔵文化財保護の円滑な調整を進めるにおいては現実的には不可能なケースの方が多いだろう。砂礫を主体とする堆積地域において3mを超す試掘調査を行うにはそれ相応の作業スペースの確保が必要となり、耕作の隙間を縫っての調査では事実上不可能といえる。厚い砂礫層の下にも遺跡が遺存することを再認識することができ、良い教訓となったと同時に、恒久的建造物に対する取り扱いや調査前の円滑な調整についての課題が浮き彫りにされたといえる。

### 3 1次調査

本調査にあたり、南北に細長く伸びる調査区を東西に横切る農道、地境により1～5区に分け、1・2区の本調査を平成20年度（1次調査）に、3～5区の本調査を平成21年度（2次調査）に実施した。調査にあたっては、調査区の名称をそれぞれ別に付けて一括遺物の取り上げなど行っていたので、対応関係を整理しておく。なお、本書では1～5区の名称を用いる。

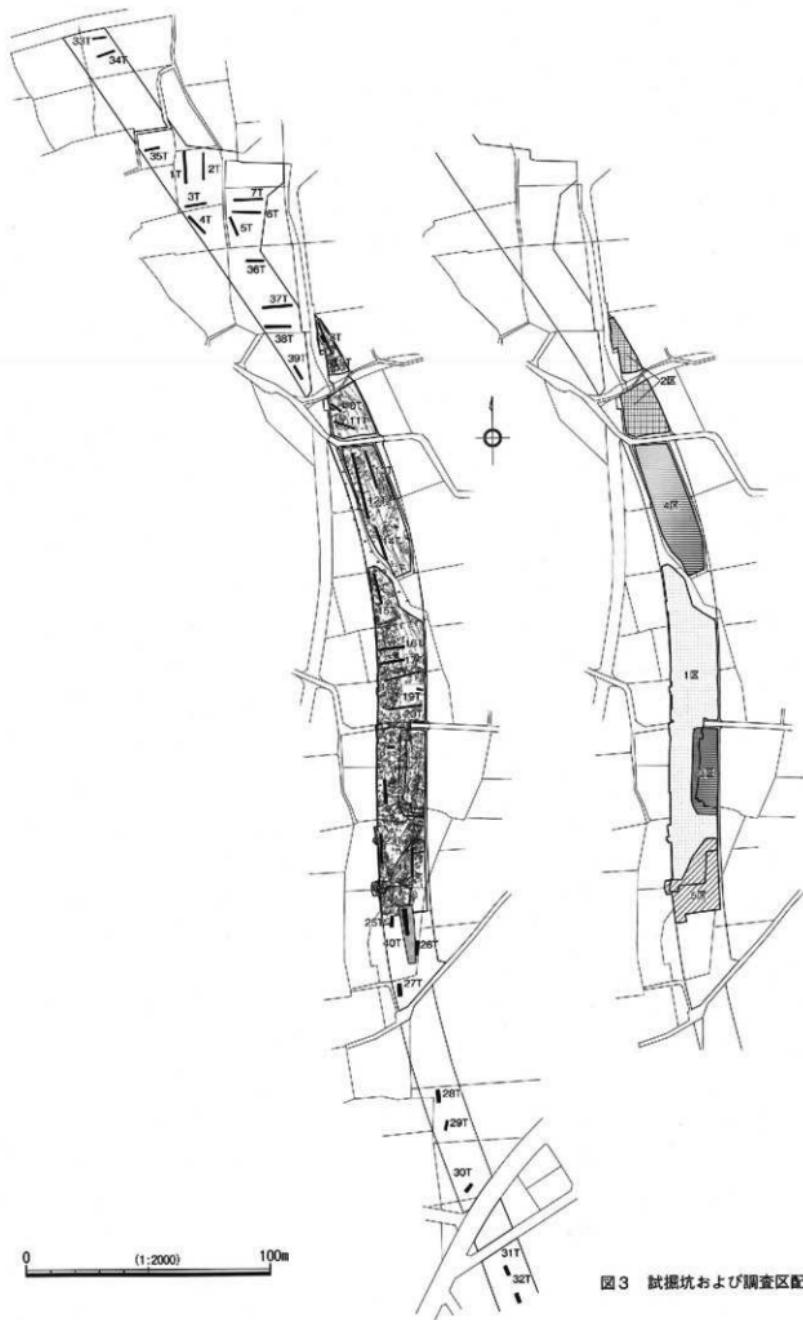


図3 試掘坑および調査区配置図

- 1区 - 農道および農道南側をⅠ区(1号竪穴以南)、  
農道北側をⅡ区  
2区 - 農道をはさんで南側をⅢ区、北側をⅣ区  
3区 - B区  
4区 - A区  
5区 - C区

1次調査は平成20年12月4日より開始した。12月23日まで重機による表土剥ぎを行い、並行して12月10日より作業員による鶴巣がけ、遺構確認を行い、順次遺構の調査を実施していった。調査は最も遺構の密度が濃いとされた1区より開始し、竪穴の調査とともに周辺の土坑・ピット・溝等の調査を行った。その結果、弥生時代末から古墳時代初頭の20軒以上の集落が台地面から見つかったほか、1区南側の低い地区からは縄文時代中期後半の集落の一部が見つかった。遺構の少ない2区を2月以降に実施し、3月14日にはカメラを搭載したラジヘリを用いて空撮を実施した。同日、山梨日日新聞に縄文時代の六角形の竪穴住居についての報道があり、翌15日には地域住民を対象とした見学会を実施したところ、九州・東京など遠方からの見学者を含む約250名の参加があった。その後、旧河川の漫食により遺構はないだろうとみなされていた砂利層下で縄文時代中期中葉、古墳初頭の竪穴を確認、調査したが、さらに南に向かって遺構跡が続くと推測され、2次調査で再確認することとした。最後に調査終了した箇所から重機による埋め戻しを行い、1次調査を終了した。

#### 【1次 発掘作業員】

秋山高之助・石川千手・飯野金雄・市ノ瀬政次・大越すず子・大森隼・小澤正臣・榎内律子・河西久洋・河西元彦・加藤由利子・岸本美苗・窪田信一・河野敏彦・小林森雄・奥石邦次・坂本行臣・駿田勝大・清水征二・清水泰子・真藤みゆき・杉山英俊・醍醐三郎・高砂稔・鷹野義朗・角田勇雄・清水征二・筒井聰・手塚松雄・中澤保・中澤健二・名取茂・能登瑛志・長谷川規愛・早川栄蔵・早川聖子・早川万代・古郡フミ子・古郡明・野田忠・翠月勝子・山村隼人・横内清次【写真測量・航空写真】テクノプラニング株式会社

#### 【1次 調査日誌】

平成20年12月4日(木)曇 調査範囲の確認、重機による雑草の草刈り、切り株の除去など。  
12月5日(金)雨 重機による表土剥ぎ。試掘坑の掘り直し。  
12月6日(土)晴 重機による表土剥ぎ。  
12月7日(日)晴 重機による表土剥ぎ。  
12月8日(月)晴 重機による表土剥ぎ。機材搬入。  
12月9日(火)曇 のち雨 重機稼働。機材搬入。環境整備。  
12月10日(水)晴 重機。基準杭打設。本日より本格的に作

		発掘開始。プレハブ等設置。
12月11日(木)晴	重機。機材搬入。遺構確認。住居6軒は と確認し、ベルト設定、掘り始める。	
12月12日(金)晴	重機稼働。シート搬入。1・3号竪穴調 査。	
12月13日(土)晴	重機のみ稼働。	
12月15日(月)晴	1~3号竪穴調査。2号竪穴で炭化材検 出。農道下拡張。	
12月16日(火)晴	1~6号竪穴調査。乱戻掘り下げ。重機 後撤。	
12月17日(水)雨	重機による表土剥ぎ。	
12月18日(木)曇	1~6号竪穴調査。2号竪穴ポール撮影。 重機稼働。	
12月19日(金)曇	1~6号竪穴調査。	
12月20日(土)晴	重機のみ稼働。	
12月22日(月)雨のち曇	1・6・7号竪穴調査。	
12月23日(火)晴	重機のみ稼働。本日にて重機は終了。	
12月24日(水)晴	1・6・7号竪穴調査。周辺状況調査。	
12月25日(木)曇のち小雨	1・6号竪穴調査。鶴巣がけ、 遺構確認。	
12月26日(金)晴	8~10号竪穴確認、調査。	
平成21年1月6日(火)晴	8~10号竪穴調査。	
1月7日(水)晴	1・8~10号竪穴調査。乱戻掘り下げ。	
1月8日(木)晴	1・6・8~10号竪穴、ピット、土坑調 査。	
1月13日(火)晴	土坑、ピット調査。遺構確認。	
1月15日(木)晴	11・12号竪穴設定、調査。7・9・10号 竪穴、土坑、ピット調査。	
1月16日(金)晴	11・12号竪穴、16・17号土坑調査。	
1月19日(月)晴	7・11・12号竪穴、11・12・17号土坑調 査。	
1月20日(火)晴	遺構外精査、遺構確認。	
1月21日(水)晴	11・12号竪穴調査。区内清掃、ポール撮影。18号 土坑調査。	
1月22日(木)晴	遺構確認。13号竪穴設定、掘り下げ。土 坑、ピット等調査。	
1月23日(金)晴	12~15号竪穴調査。13・15号竪穴は重複 する。	
1月26日(月)曇	13・15号竪穴調査。	
1月27日(火)晴	19・20号土坑、13・15号竪穴調査。遺構 確認。	
1月28日(水)晴	13・15号竪穴調査。耕作痕など掘り下げ。	
1月29日(木)晴	13・15号竪穴調査。单独埋葬検出。	
1月30日(金)曇のち雨	13・15号竪穴調査。16号竪穴掘り 下げ。18号土坑調査。	
2月2日(月)晴	15・16号竪穴、18号土坑調査。16号竪穴 南側で住居確認。	
2月3日(火)晴	13・15・16号竪穴調査。	
2月4日(水)晴	13~17号竪穴調査。	
2月5日(木)晴	13~18号竪穴調査。	
2月6日(金)晴	拡張区掘り下げ。土器多数出土。20号竪 穴とする。17~19号竪穴調査。遺構外精 査。	
2月9日(月)晴	19号竪穴内で埋甕2基発見。19号竪穴の かが磚にかかって存在したことから、拡 張。17・20号竪穴調査。	

2月10日(火)晴 17~20号竪穴調査。20号竪穴南側は、遺構がまだ続くものと判明。次回の調査に委ねる。  
 2月12日(木)晴 17・19・20号竪穴、28~31号土坑調査。  
 2月13日(金)曇一時雨 19~21号竪穴調査。遺構確認、21号竪穴設定。  
 2月16日(月)晴 12・15号竪穴掘り方調査。19~21号竪穴調査。ボール撮影。  
 2月17日(火)晴 遺構外搜査掘り下げ。12~15号竪穴完掘。19号竪穴炉内完掘。  
 2月18日(水)晴 挖削掘り下げ。発達がけ。22・23号竪穴調査。1号溝完掘。2号竪穴炭化材取り上げ。  
 2月19日(木)晴 16号竪穴西側拡張。22・23号竪穴調査。  
 2月24日(火)曇のち雨 24号竪穴内より壺等出土。16号竪穴擴張。19号竪穴炉裏ピット調査。室内整理。  
 2月25日(水)曇 24号竪穴等の調査。  
 2月26日(木)晴 2号掘立柱確認。24号竪穴調査。  
 2月27日(金)雨 室内作業。  
 3月2日(月)晴 19号竪穴炉裏炭石? 積荷。24・25号竪穴調査。ボール撮影。  
 3月3日(火)曇のち雨 45~47号土坑調査。遺構確認。  
 3月4日(水)小雨 18・24号竪穴、45号土坑調査。  
 3月5日(木)晴のち曇 25・26号竪穴調査。1区南側の谷状落ち込みを1河とす。  
 3月7日(土)晴 風倒木痕など調査。ボール撮影。  
 3月9日(月)晴 風倒木痕調査。遺構確認。22・23号竪穴調査。  
 3月10日(火)晴 25号竪穴調査。  
 3月11日(木)晴 62号土坑の調査ほか、見学会の打ち合わせなど。  
 3月12日(木)晴 集石調査ほか。20号竪穴一部拡張。  
 3月13日(金)曇のち雨 20号竪穴で壺等2基確認。学生見学。  
 3月14日(土)雨のち晴 空撤のための清掃のうち、空撮。その後、見学会のための準備。  
 3月15日(日)晴 見学会実施。午前約140名、午後約110名見学。  
 3月16日(月)晴 16号竪穴掘り方調査。  
 3月17日(火)晴 20号竪穴埋め取り上げ。26号竪穴炉調査。27号竪穴炭化材検出。本日より埋め戻し開始。  
 3月18日(水)晴 竪穴掘り方調査。ボール撮影。26・27号竪穴調査。重機稼働。  
 3月19日(木)晴 掘り方調査。ボール撮影。見学者あり。重機稼働。  
 3月20日(金)雨のち晴 19号竪穴炉石を取り上げ。26・27号竪穴調査。長谷川豊氏来跡。重機稼働。  
 3月22日(日)雨のち晴 28号竪穴ピット調査。71号土坑から土器多数出土。土坑充填。重機稼働。  
 3月23日(月)晴 26~28号竪穴調査。重機稼働。  
 3月24日(火)晴 26~28号竪穴調査。ボール撮影。機材撤収。重機稼働。  
 3月25日(水)晴 重機による埋め戻し。片付け。書類整理。

#### 4 2次調査

2次調査は、1次調査での未調査部分を対象に調査を実施した。平成22年1月9日に調査を開始し、重機による表土剥ぎを2月5日まで実施したのち、3区、4区、5区の順で調査を行った。3区では風倒木痕がいくつかあったほか、縄文時代の集石群、土器集中区のほか、旧石器時代のナイフ形石器の単独出土があり、土層確認のための試掘坑を設定した。4区は包含層がなく、遺構も削平されて存在していない。5区は1区の南側、深沢川扇状地の砂礫層下層に広がる縄文中期を主体とする面で、まず南に向かってどこまで遺構群が広がるのか、その限界を見極める必要があったため、重機で可能な限り追いながら調査区南側を拡張していった。自然流路により確認面がえぐられていたが、中洲状の部分から竪穴等が見つかり、調査区としたラインよりもさらに数十m以上南方への広がりが想定されたが、深さも3m以上に及び土砂の掘削、仮置きが難しく、遺構面への開発による影響はないと考えられたことから、市教育委員会の判断でそれ以上の調査は断念した。なお、本調査のうち市教育委員会が試掘調査を行い、南側にトレッチを入れた状況については本章第2節2を参照。3月12日に全景を空撮し、3月23日には埋め戻しを完了、24日に埋め戻し状況を確認して現地調査を終了した。

#### 【2次 発掘作業員】

飯野金雄・伊井實・市ノ瀬政次・小沢正臣・大森隼・河西元彦・加藤雄一郎・加藤山利子・岸本美苗・窟田信一・坂本行臣・鮫田勝夫・真藤みゆき・醍醐三郎・東條幹雄・中澤保・名取茂・長谷川規愛・早川栄蔵・福井光幸・古郡明・山村隼人・横内清次

【写真測量、航空写真】テクノプランニング株式会社

#### 【第2次 調査日誌】

平成22年1月9日(土)晴 4区より重機により表土剥ぎ開始。  
 1月11日(月)晴 重機稼働。  
 1月12日(火)雪 重機稼働。  
 1月13日(水)晴 重機稼働。  
 1月15日(金)晴 本日より作業員。機材運搬。プレハブ設置。基礎杭打設。  
 1月16日(土)晴 4区重機。  
 1月18日(月)晴 4区試掘査。進入路を作る。搅乱を掘り抜く。重機は一旦引き揚げ。遺構外遺物の取り上げ。  
 1月19日(火)晴 搅乱の掘り下げ。  
 1月20日(水)晴 搅乱削り下げ。  
 1月21日(木)曇のち雨 4区掘り下げ。  
 1月22日(金)晴 4区北半分の遺構確認面の精査。搅乱、ピット、1号土器集中区調査。

1月23日(土)暴 重機のみ稼働。3区表土剥ぎをほぼ終える。  
1月25日(月)暴 4区箇跡がけ。遺物上げ。C区の調査範囲を確認し、重機により掘削。73号土坑半裁。  
1月26日(火)晴 4区箇跡がけ。73号土坑完掘。集石精査。写真撮影。5区重機により表土剥ぎ。調査区周囲に柵を設置。  
1月27日(水)晴 4区掘り下げ。4号風倒木痕調査。7~10号集石ポール撮影。土坑など確認。  
1月28日(木)晴 4区掘り下げ。集石半裁。5区を重機で表土剥ぎ。  
1月29日(金)晴 4区掘り下げ。  
2月1日(月)暴 のち雨 4区調査。風倒木痕などを掘り下げる。  
2月2日(火)晴 重機稼働。  
2月3日(水)晴 5区精査。壁にブルーシートをかける。  
2月4日(木)晴 5区溝内精査。重機稼働。壁にブルーシートを止め。3区精査。  
2月5日(金)晴 重機は本日終了。3区の荒掘り。  
2月8日(月)晴 3区北半分の精査。  
2月9日(火)晴 時々暴 3区南側半分の精査。ピット、掩乱を掘り抜く。  
2月10日(水)暴 のち小雨 3区南端の精査終了。4区掘り下げ。風倒木痕、小ピット調査。ナイフ形石器出土。  
2月16日(火)暴 のち小雨 5号風倒木痕遺物上げ。8~10号集石調査。  
2月17日(水)暴 ナイフ形石器が出土した脇の測定区壁面に沿って深掘りを行い、土層確認。風倒木痕調査。  
2月19日(金)晴 4区の略完掘状況で全体写真を撮影。  
2月22日(月)晴 4区南端の精査。集石下層のポール撮影。11号集石半裁。写真・断面図作成。刀鎧を表す。  
2月23日(火)晴 4区11号集石完掘。5区1号河道調査。  
2月24日(水)晴 5区調査。20・29号堅穴調査。土偶1点出土。  
2月25日(木)晴 南西隅を1サガと命名し掘り下げる。29~31号堅穴調査。  
2月26日(金)暴 29~31号堅穴掘り下げ。1号河道完済。  
3月1日(月)暴 29~31号堅穴調査。  
3月2日(火)暴 29~32号堅穴調査。  
3月3日(水)暴 のち晴 29号堅穴除去、下層掘り下げ。30~32号堅穴調査。  
3月5日(金)晴 29~34号堅穴調査。  
3月8日(月)暴 4区崩落土の復旧。29~34号堅穴調査。33号堅穴(井)「尻期」の埴輪検出。  
3月9日(火)暴 のち雨、雪 29~34号堅穴調査。  
3月11日(木)晴 4区溝内区壁の崩落側所復旧。20号堅穴脇の一部拡張。29・30・33号堅穴調査。  
3月12日(金)晴 のち暴 土糞・シートの片付け。調査区内の清掃ののち、ラジコンヘリにより空撮。36号堅穴調査。  
3月13日(土)晴 4区より重機による埋め戻し開始。  
3月14日(日)晴 重機による埋め戻し。  
3月15日(月)暴 20・30・33・36号堅穴調査。36号堅穴では、隅に石棒を立てた方形石四いがを検出。重機による埋め戻し。

3月16日(火)晴 20・29・33・36号堅穴調査。重機による埋め戻し。  
3月17日(水)晴 重機による埋め戻し。36・37号堅穴調査。38号堅穴設定。  
3月18日(木)暴 時々晴 土坑確認、半裁。26・36号堅穴調査。2時頃、重機による埋め戻し。教育委員会視察。  
3月19日(金)晴 ブレハブ撤収。90号土坑から2個体の曾利式土器出土。下部に配石あり。機材撤収。5区のポール撮影。重機による埋め戻し。  
3月20日(土)晴 90号土坑測定。補足調査。重機による5区の埋め戻し開始。  
3月21日(日)晴 重機による埋め戻し。  
3月22日(月)晴 重機による埋め戻し。  
3月23日(火)暴 のち小雨 重機埋め戻しは本日終了。機材洗浄など。  
3月24日(水)雨 室内にて図面整理。

### 第3節 整理等作業の経過

整理作業は平成21年度の支援業務の中で、1次調査出土遺物に関して洗浄、注記、接合、報告資料の選別、遺物台帳作成までの基礎的整理を(財)山梨文化財研究所にて行った。平成22年度支援業務では、1次出土遺物の実測以降の作業工程および2次調査での出土遺物に関する遺物整理とともに図面整理を行い、報告書作成に向けた一連の作業を(財)山梨文化財研究所で実施した。

遺構図については「遺構くん」により現場で作成したものと、空撮による航空測量図、ポール撮影による測量図を合成し、デジカメ写真を参考に細部を修整したものもとにデータで図版作成した。断面図については手取りで作成した図面をスキャナーで読み込み、図版に組んだ。注記に際しては、注記マシーンで大半の遺物の注記を行っている。

棍文土器の実測図作成に際し、復元、完形資料については約15m離れた位置から400mmの望遠レンズにより撮影したデジタル写真を補正したものを原寸大でプリントし、鉛筆トレースして原図を作成した。その他の遺物については從来どおりの方法で図化している。

#### 【整理作業参加者】

伊藤美香、岩崎満佐子、大村明子、角屋さえ子、梶原真、川崎二美、岸木美苗、柳原ゆかり、河野さおり、小林典子、一枝千穂美、斉藤ひろみ、崎田貴子、佐野眞雪、須山泰美、竜沢みち子、田中真紀美、中川美治、中川美千子、永沢淳子、永田忠、林紀子、原野ゆかり、藤井多恵子、藤原五月、古郡明、柳本千恵子、横田杏子

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

曾根遺跡は甲府盆地の西縁、南アルプスの東麓にある山梨県南アルプス市（旧中巨摩郡檜形町）上宮地に位置する。平信の境となる南アルプスの東麓、甲府盆地側には檜形山を主峰とする南北に連なる巨摩山地があり、山麓には甲府盆地に接する釜無川右岸に比高差120m程度の市之瀬台地を形成している。その台地端から低地に移行する東向きの傾斜面に遺跡が所在し、測量地区での標高は322～330mを測る。遺跡は釜無川支流の深沢川右岸、市之瀬台地から東へ流下する深沢川の左岸にあり、深沢川が形成した扇状地面から台地斜面にかけて南北に広がる。遺跡付近は東側に開け、西側が台地斜面のため閉ざされた地形であり、山沿いの南北方向（長野・静岡方面）に交流ルートを持つ釜無川右岸に一般的な集落立地といえる。

調査結果によれば、深沢川扇状地の砂利層の下に遺跡の一部が埋没し、現況とは大きく異なる周辺地形を想定する必要も生じている。現状では扇状地表面に砂利層が旧地形を厚く被覆しているが、それらは中世以降の形成とみられ、古代以前の地形は流路による浸食を相当受けているが、浸食を受けていない部分では逆に遺存状況が良好な状態を保っている。

現在、遺跡周辺は畑地を主とし、一部スモモ・梅等の果樹としての土地利用が行われているが、かつては一面の桑園であったという。近年、周辺地域、とくに遺跡南側一帯は住宅分譲地として開発され、新興住宅街が広がる郊外型の景観になりつつあるが、古くからの集落と新たな住宅街の接点にあたる本遺跡付近は、農村風景や自然景観を残す地域である。盆地底部よりもやや標高が高いことから眺望がよく、南には秀麗な富士山を望むことから、朝夕の散策を楽しむ姿が多くみられる。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡の西南、市之瀬台地には、台地の東端部に前期古墳の物見塚古墳、六科山古墳があり、また台地面には弥生時代末から古墳時代前期の集落遺跡、六科丘遺跡が広範囲にわたって存在する。六科丘遺跡では昭和58年に宅地造成に伴う調査が行われ、竪穴住居33軒、掘立柱建物4棟が検出された。また平成14年度の長田口・中畠遺跡の調査では縄文時代前期16軒、中期11軒、後期敷石住居3軒、弥生時代末～古墳時代初頭38軒が検出されている。このように台地上は縄文時代前～後晩期、弥生末～古墳時代初頭の濃密な遺跡分布を示すのに対し、釜無川右岸、盆地の低地側では遺跡密度は比較的希薄である。低地の氾濫原にあたる地域では、農土に覆われているため遺跡の有無が確認できにくい状況にあることが多いが、近年の中部横断道関連の調査等により未知の遺跡の存在が明らかになりつつあり、注目すべき地域といえる。

崖下斜面にあたる曾根遺跡は、「全国遺跡地図－山梨県」に「曾根遺跡（散布地）」として掲載され、檜形町遺跡分布図には「123 曾根遺跡 縄文（中）・弥生・古墳」の記載がある。また昭和58年（1983）9月に農地侵食防止事業の道路建設とともに約400m<sup>2</sup>の調査により、4軒の弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居が調査され、翌年檜形町教育委員会より「曾根遺跡」が刊行されている。報告によれば、竪穴住居のほか縄文早期前半から後期初頭の縄文土器も多数見つかっていて、斜面上段からの流入だろうと推測されている。昭和58年度調査地点は、今回調査した1区北側と4区の西側に位置する農道部分に相当し、同一遺跡の広がりとして理解することができる。周辺遺跡に関しては図2、第1表を参照されたい。



図4 調査区の位置

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査は2年に分けて実施することとなり、長い調査区内に交差する農道や畠の区画によって1～5区を設定し、1・2区を1次、3～5区を2次に調査した。調査予定地内に発土置き場を確保し、調査終了時点で埋め戻して現状に戻すこととした。

市教育委員会の試掘データをもとに重機により造構確認面まで表土剥ぎを行い、測量のための国家座標に基づく基準杭を設置し調査を行った。造構確認面の精査、造構の削削は人力で行い、廃土のため軽ダンプを用いた。鍛錬による精査で豊穴、溝などの掘り込みを確認した後、土層観察用ベルトを残して掘り下げ、断面図を作成した。ベルト除去後、遺物出土状況を写真撮影し、遺物を光波測量機およびノートパソコンによるトータルステーションシステム（「造構くん」、アイシン精機製）を用いて取り上げた。造構を掘り上げたのち、写真撮影を行い、豊穴住居であれば完掘状況、砾や炭化材の出土状況、掘り方方面図、炉セクション図などは手取りによって作成した。各造構の調査がおおむね終わった段階で、カメラを搭載したラジコンヘリにより空撮を行い、造構図、等高線などの平面図化を行い、ボーラ撮影、「造構くん」データとの統合を行った。

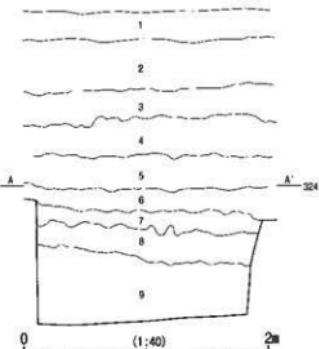
豊穴住居の覆土、貼り床面、炉内覆土については、炭化種実分析を目的とした土壤サンプリングを条件の良い豊穴住居を選んで実施したほか、焼失家庭（火災住居）の炭化材に関しては、樹種同定のために主要炭化材を取り上げた。

### 第2節 層序

今回の調査区は台地上の傾斜面にあたり、畠地造成により斜面の高い方を切り、低い方に盛るなどの段切りが各所で行われているほか、土砂の流入による2次堆積も認められる。したがって、基本層序を設定してもすべての調査地点に応用できる状況にはなったが、團粒状黒色土層を鍵層として各地点の包含層を比較することが可能であった。團粒状黒色土とは、その成因は定かではないが径2～3mm程度の團粒化した黒色粒を多数含む土壤で、黒味が強く粘性があり、弥生末～古墳時代初頭の包含層となっている。

表上からの上層断面は、いくつかの豊穴住居で断面図を作成したほか、4区ではナイフ形石器の出土地点脇に試掘坑を設け、2.5m程度の断面を観察した（図5）。また本報告にはすべてを掲載していないが、1区南側でも西側壁面の土層断面図を作成している。

4区試掘坑（図5）では、盛り土（2層）下の3層が表土とみられるが、その直下の4層が團粒状黒色土で、5層の暗褐色土層（縄文時代の包含層）を挟み、その下がローム粒を主とする褐色土の確認面となっている。この團粒状黒色土層（弥生末～古墳）、暗褐色土層（縄文）、褐色土層（無遺物）という層序はおおむね各地点でも共通している。16号豊穴（弥生末）断面では、豊穴覆土の中央に團粒状黒色土を含む層が位置し（6層）、豊穴の埋没過程で堆積した状況がわかる。



- 1 黒色土(10P2/1) 表土 粘土質、しづら質、粗。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 小粒、粘土質、残土封入、硬いブロック状の暗褐色土多。やや粗、旧塙土。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) やや粗、堅密、旧塙土面から、焼土封入。
- 4 黑色土(10P2/1) 粘土質、細粒、褐色土層、燒土封入、しづら質。
- 5 暗褐色土(10YR3/2) 壓密、硬い、褐色、焼土封入、葉隕は認め。
- 6 暗褐色土(10YR3/3) 硬密、燒土封入、径5cmの大い小葉隕少。
- 7 黑色土(10YR4/4) ローム性、燒土封入、上部でナイフ形石器出土。2度底ローム。
- 8 黑色土(10YR3/3) 硬いしづら質、褐色土。
- 9 黑色土(10YR4/6) ハードローム、径0.5～1cm大の具化塊入。

図5 4区土層図

### 第3節 造構

#### 1 検出した造構数

検出した造構は次のとおり。

縄文時代の豊穴住居 8軒

古墳時代初頭の豊穴住居 18軒

掘立柱建物（古墳時代初頭か）2棟

土坑 71基（袋土坑を含む）

ピット（豊穴の柱穴を含む）221本

溝（近世以降の地境溝ほか）3本

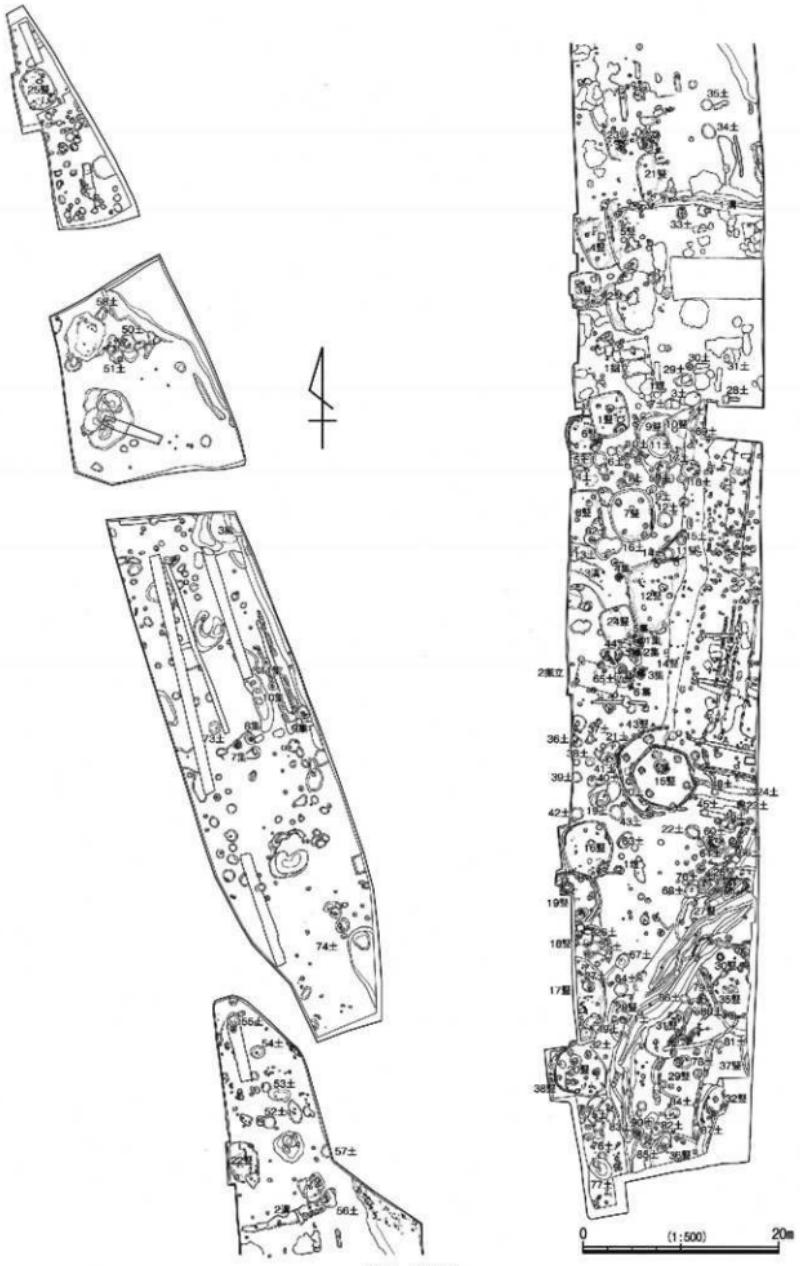


図6 沖縄島

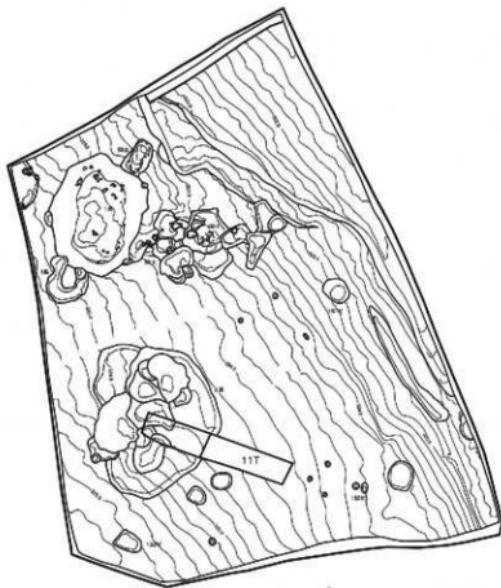
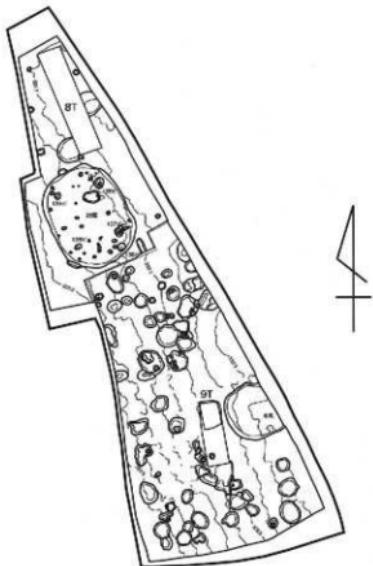
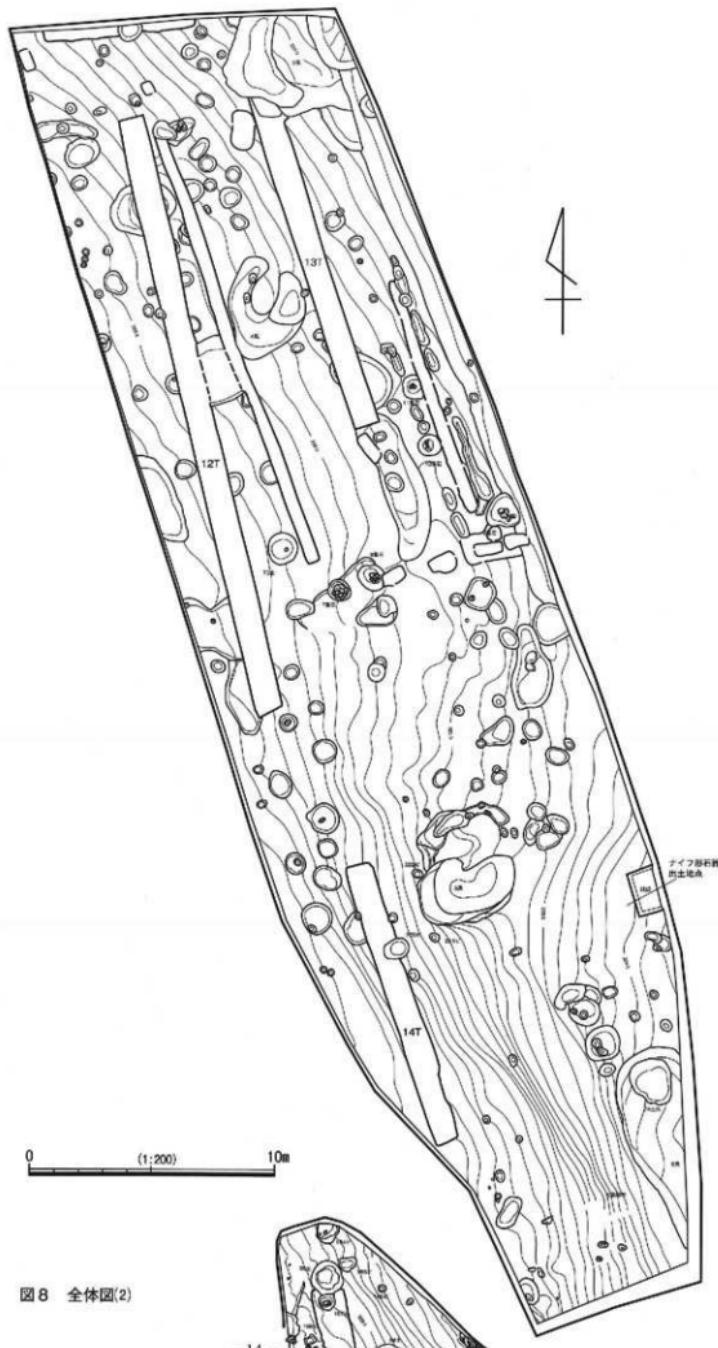


図7 全体図(1)



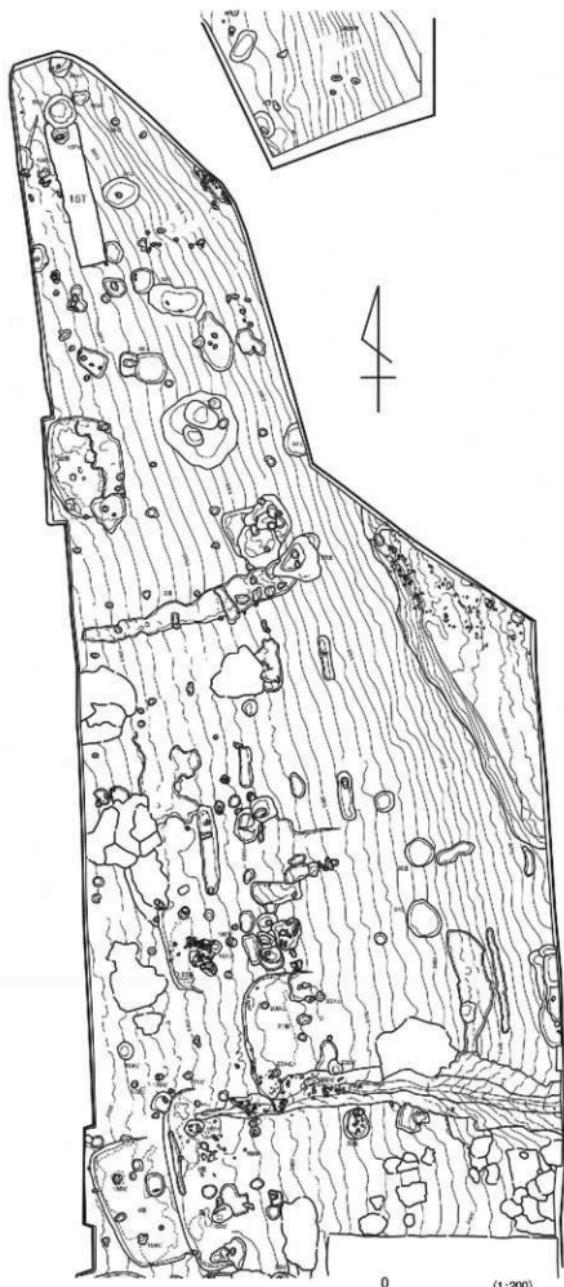


図9 全体図(3)

0 (1:200) 10m

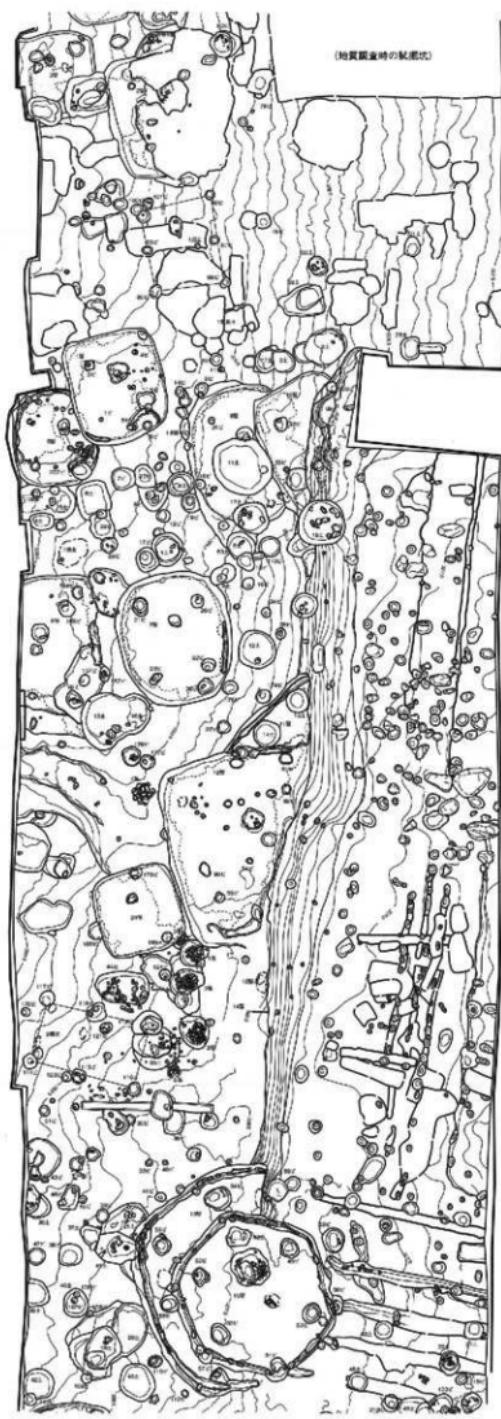
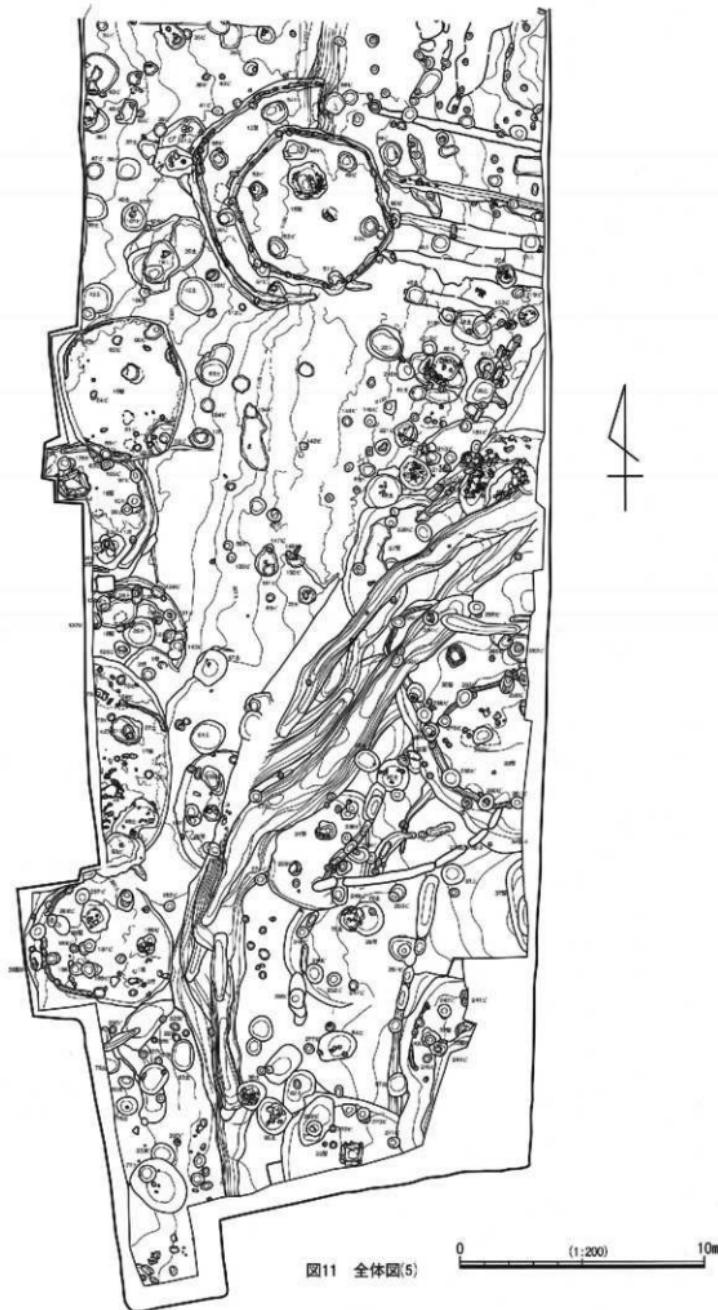


図10 全体図(4)  
0 (1:200) 10m



## 2 各地区的概要（地区名については図3を参照）

**【1区】** 台地面から南側の台地斜面にかけてで、縄文時代中期後半、弥生時代末～古墳時代初の竪穴住居が分布する。中央に東西方向の農道が横切り、調査では農道南側（1号竪穴以前）をI区、北側をII区と呼称した。II区では覆土が薄く、調査区西側の高い方にのみ竪穴が遺存し、東側の低い方にはほとんど遺構がない状態であった。また農道北側、2号竪穴東側には地質調査所がフォッサマグナを満喫した際のトレントンが東西に入っている。I区では弥生末～古墳時代に加えて縄文中期の竪穴住居群が重複し、遺構の密度が高い。包含層の黒色土が厚く、確認面が2面以上のところがあった。

**【2区】** 調査区北端で、農道により区分される。調査では農道南側をIII区、北側の狭い部分をIV区とした。III区は急斜面で、北東隅に深い落ち込みがあり、風倒木痕などがあるが、竪穴はない。IV区は道際の低い部分で、試掘時に確認されていた弥生末の竪穴1軒のほか風倒木痕、擾乱状のビットが多数するのみで、集落としての広がりは明確ではない。

**【3区】** 調査ではB区と呼称。畑の段切りにより遺構面が消失しているため、覆土は浅く、確定な遺構はない。円形のビットが西側に列をなすのは、キウイあるいはブドウの棚にともなう支線の埋め込みで、長方形のセメントのベースが埋められていた。また北半分では幅広のトレントン状耕作痕が3列以上存在し、ミニユンボによる搅乱も各所にある。弥生末土器、縄文土器、近世陶磁器の小片があるが、遺構はない。東西方向には、耕作痕の類とみられる幅広の擾乱溝が2本平行して存在する。

**【4区】** 調査ではA区と呼称。段切りによって西側を削土し、東側を深く盛り土した畑地で、中央には南北方向の石垣で分断的に2段の畑として区切っている。遺構は中央付近に集石石炉があるほか、土坑が存在した。各所に風倒木痕が存在するほか、南端は谷状に落ち込む。また調査区南半は黄褐色土の2次堆積土が広く覆い、上層の黄褐色土上面から遺物が多く出土し、中央の集石石炉もそのレベルでの確認であった。調査区壁に近い地点で旧石器のナイフ形石器が1点出土したが、黄褐色土面の遺構確認面での出土である。ナイフ形石器の出土地点に近い東壁で深掘りを行い、基本層序の確認、遺物の有無を調べ、下層および周辺からは遺物が出土しないことを確認した。

**【5区】** 南端の調査区で、調査ではC区と呼称。1区では調査区南側の1号河道ラインで調査を止めたが、河道の砂層を全面的に掘り下げたところ、筋状の沢跡

が数条あり、中州状の部分で縄文～弥生の竪穴住居、土坑等が検出された。南端では深さが2mを越えたことから、さらに調査範囲を南へ拡張することは期間的に無理であり、開発による遺構面への影響はないとの判断で調査区を区切ることとした。本地点から南側にかけては深沢川の扇状地にあたり、深沢川に向けて自然堤防状に高くなっている、現状では地表面を砂層が厚く覆っているが、下層に縄文時代を主とした遺構が残っていることが明確になった。

## 3 検出した遺構

### 【竪穴住居】

**(1号竪穴)** (第1・2図、図版5) 1区中央、農道直下にあり、西側の6号竪穴を切る。東西3.75m、南北4.4mの隅九方形で、北側の壁が直線的、南側が丸く膨らんでいる。主軸方向はN-12°-W。壁の高さは約30cmで、南北隅付近に周溝をもつ。南東隅に半円形の土手状出入り口施設がある。1.2×0.7mで、土手は幅24cm、高さ4cm。土手の内側には壁際に6号ビットがある。ビットは直徑35cm、深さ41cmで、一般的には貯蔵穴とされるが、貯蔵穴にしては小さい。内部より台付甕脚部が出土した(第57図5)。竪穴の覆土中からは南壁、西壁際を中心に礫が出土し、並んだように見えるが、意味のある配置ではないと考えておく。また廻周辺からは竪穴中心部を中心に遺物が出土しているが、量は多くない。やや大きめの炭化物が床面よりも浮上した覆土中より出土しているが、火災住居ではなく、床面も焼けていない。柱穴は4本(1～4号ビット)で、床面での柱穴径は15～25cm、掘り方面では直徑40～55cm、深さ30～35cm程度とやや浅い。床面は南北東隅および出入り口施設を除き全体的に硬化する。炉は中央輪線上、奥壁寄りに存在し、80×80cm、深さ10cmの浅い不整形の掘り方内に炉石を置く。配石はやや乱れているので本来の姿は定かではないが、礫4個をコの字形に配置したものと思われる。床下の掘り方をみたが、とくに床下施設として取り上げるものはない。時期は古墳時代初期。

**(2号竪穴)** (第3・4図、図版5・6) 1区中央、1号竪穴北側に存在する。東西推定4.9×南北4.9mの隅九方形、主軸方向はN-10°-Wで、火災住居である。東壁は耕作により消失し、また東側では耕作や搅乱が床下にまで及んでいたため、床面、壁は西側を中心にして遺存する。床面は西壁付近に硬化面が存在する。炉は中央奥壁寄りにあり、50×35cmの焼土範囲周辺に礫が4つ存在するが、もとは枕石、あるいは炉石として配置していたのであろう。炉の掘り方はない。炉から北

側と西側に向かって放射状に3本の垂木状の炭化材が床面から5~15cm浮上して遺存した。これらは樹種分析によりヤマグリ、コナラ節と判明している。また炭化材の周囲にはカヤに似た管状の炭化物がまとまっており、屋根材とみられる。分析の結果、すべてタケ・ササ類であった。炭化材の上下には焼土が存在した。柱穴は4本中3本を確認できたが、南東の1本については搅乱中に想定され、位置が不明である。柱穴は直径30~40cm、深さ約30cmで、浅い。壁は25~35cmで、周溝はない。遺物は非常に少ない。北側には重複する縫穴状遺構があり、遮蔽み石器が集中して出土している。壁よりも1×1.7m突出しているので2号縫穴とは別遺構とすべきだが、付箇施設としての可能性も想定し、本縫穴で扱う。

〈3号縫穴〉(第4図、図版6)1区北側、2号縫穴西、4号縫穴南に位置する。地表からの確認面の深さがごく浅く、耕作による覆土への搅乱が及ぶ。南側に搅乱坑があり縫穴の範囲は不明確で、西側が調査区外にのびるため一部拡張を行って全形把握に努めた。その結果、北、東の壁はおおむね判明したが、西・南壁はよくわからなかったものの、東西2.7×南北3.5mの小形隅丸方形の縫穴住居で、主軸方向はN-5°-Wと考えられる。炉は奥壁寄り、中央わずかに東寄りに存在し、焼土のみの地床炉である。35×26cmの楕円形の範囲に焼土が堆積し、掘り方は明瞭ではない。床面の硬化面は炉から西側に分布し、硬化面の切れるあたりが西壁だろうと推定できる。ピットはいくつかあるものの柱穴は未確認である。周溝はなく、壁の立ち上がりは約10cmと低い。覆土中の遺物は少ない。また床下の掘り方を調査した際に縄文土器の埋疊とみられる土器が正位で出土している。縄文中期の縫穴が調査区外に存在するのであろう。

〈4号縫穴〉(第5・6図、図版6・7)1区北側、3号縫穴東側に位置し、5号縫穴と重複する。東壁が5号縫穴に切られているため存在していないが、東西推定4×南北5.2mの隅丸方形で、地形が東傾斜のため、覆土は西側の残りが良く、東側は薄い。西壁は35cmを測る。床面には硬化面が炉西側のほぼ全面に残る。炉は縫穴の中心軸線上、やや奥壁寄りとみられ、90×70cmの楕円形のごく浅い掘り方に枕石として南寄りに2個の礫を直線的に置く。柱穴は158・159号ピットの2本が確認されたが、本来は床面を欠失した5号縫穴内に残る2本があって計4本であろう。径40~45cm、深さ約24cmでやや浅い。周溝はないが、掘り方面で西壁沿いに溝が出ている。出土遺物は少ない。

〈5号縫穴〉(第5・6図、図版6・7)1区北側、4

号縫穴東に位置し、4号縫穴を切る。東傾斜のため、西壁側がよく残るもの、床面中央付近から東側は耕作により搅乱を受け、東壁のすべてと北・南壁の大半は遺存していない。東西推定5.3m、南北7.2mの隅丸方形とみられ、主軸方向はN-16°-W。床面は西壁際に硬化面が残る。柱穴は162・163号ピットを含む4本があり、直径55~75cm、深さ30~45cmを測る。遺物は西壁際よりごくわずかな出上がったにすぎない。炉は中心軸線上、奥壁寄りに径45cm程度の不整形の掘り方をもつ地床炉があり、炉石はない。周溝は西壁に部分的に存在する。

〈6号縫穴〉(第1・2図、図版5・7)1区中央、西壁にかかるようにして検出されたため、調査区壁を一部拡張して縫穴全体を把握することができた。東西3.4×南北3.9mの小判形で、全体に丸味がある。東壁を1号縫穴に切られる。西壁で高さ40cmあり、南壁を除き壁際には周溝が巡る。床面は炉の西側を中心に硬化面が存在する。東側に関しては、斜面の傾斜が低い方なので、耕作等により削られたのであろう。南東隅に出入り口施設があり、直径70×80cm、深さ15cmの浅いピットの脇に長さ80cm、幅25cmの土手がある。覆土には礫がわずかに分布し、また壁際寄りの地点からわずかな遺物が出土している。柱穴は明確ではなく、いくつか存在するピットはいずれも浅い。炉は中心軸よりも奥壁側、東寄りに楕円形の掘り方があり、2個の礫を南寄りに枕石として設置した炉である。炉が東寄りにある点に注目しておきたい。

〈7号縫穴〉(第7図、図版7)1区中央、南側で、1号縫穴南に位置する。8号縫穴が西側にあり、壁の一部が重複するとみられる。東西3.95m、南北5.2mの小判形で、主軸方向はN-7°-W。主軸を南北に向け、南側がやや狭くなっている。壁は北側がより深く、北壁で35cmを測る。柱穴は20~23号ピットの4本、径30~60cm、深さ30~47cmで、断面観察では柱痕は明瞭でない。床面は全体に硬く、硬化面は南壁際の出入り口施設付近を除きほぼ全面に分布する。周溝は東壁際で一部存在する。炉は主軸線上、奥壁寄りに位置し、47×58cmの円形の浅い掘り方に焼土があり、炉石はない。出入り口施設とみられる30号ピットは南東隅に位置し、63×57cm、深さ23cmで、土手状遺構は伴っていない。遺物は中央から南側にかけて分布する。

〈8号縫穴〉(第9図、図版8)1区南側、7号縫穴の西側にあり、調査区外に遺構がのびるため、全貌は明らかではないが、北壁が残る。推定では南北5.5m、東西4.6mの隅丸方形であろうか。壁高は20cm。南側

の掘り方はごく浅い立ち上がりが認められ、南壁の可能性が高いが、床面の硬化面の広がりが立ち上がりを越えたあたりに一部伸びている。東壁については消失しているが、7号竪穴と重複するか、あるいは手前に想定できそうである。床面の硬化面は竪穴として想定しうる範囲内にはほぼ収まっている。柱穴は155・157号ピットを含む4本とみられ、調査区外にあと2本が想定できる。炉は想定主軸線上、やや奥壁寄りにあり、75×70cmの不整円形で、深さ10cmの掘り方内南辺に棒状の角蹠1個を据え、枕石としている。炉石の向き、柱穴配置からすれば、住居の主軸方向はN-7°-Wということになる。東南隅には62号土坑が存在するが、位置的に出入り口施設にあたり、貯蔵穴とされる土坑と考えられる。後でも説明するが、70×55cm、深さ40cmの楕円形の掘り方で、中から小形壺などがまとまって出土している。祭祀坑的なあり方を示す可能性があり、竪穴住店の時期を示す資料とみたい。

(9号竪穴) (第10~12図、図版8) 1区中央、農道直下に位置し、1号竪穴の東側に所在する。10号竪穴に東側の床面1/3を切られている。断面をみると10号竪穴が9号竪穴の覆土を切り込んでいる様子がわかる。南北5.7m、東西推定4.1mの小判形で、主軸方向はN-8°-W。南壁が北壁よりも丸く突き出しているらしい。壁は西壁で深さ約50cmあり、周溝はない。床面には11・17号土坑が重複するが、11号土坑は竪穴以前、17号土坑は以後とみられる。ほぼ全面的に硬化面が広がる。また西壁、南壁寄りに焼土ブロックが存在する。柱穴は31・32号ピットを含む4本とみられ、径25cm、掘り方での径50cm、深さ20~40cm程度である。炉は主軸線上、奥壁寄りに存在し、70×50cmの円形の掘り方をもつ地床炉である。遺物は覆土上、床面より30cmほど浮いて西壁寄りに甕等のまとまりがある。

(10号竪穴) (第10~12図、図版8) 1区中央、9号竪穴東側にあり、9号竪穴を切る。東側(3区)の烟段切りにより東南半を大きく欠失し、全体の1/2が遺存する。竪穴の全貌は南壁を欠失するため南北長が定かではないが推定5.2m、東西は推定4.1m。床面は西壁際を中心に硬化面が残り、周溝はない。炉は確認されていない。柱穴は206・32・33号ピットの3本が存在することから4本柱穴とみられ、残る1本は段切りで消失している。袋状を呈する18・69号土坑が重複するが、いずれも竪穴以前の構築である。遺物は少ない。

(11号竪穴) (第13~15図、図版9) 1区南側、7号竪穴南に位置し、12号竪穴と重複する。12号竪穴により南側を大きく切られ、また東側は煙(3区)の段切りにより欠失している。12号竪穴との段差は数cm程度

で、セクション観察により12号竪穴が切る状況がわかる。確認面からの深さは25cmで、西壁にあたる壁ラインが直線的に残り、周溝を伴っている。床面は遺存した範囲すべてが硬化面となっている。12号竪穴の北壁に切られるように半分欠失した炉が存在する。ごく浅い掘り込みを伴う地床炉である。床面には2つの十坑(14・15号土坑)が床面をえぐって存在するが、竪穴以前の構築と考えておく。住居の主軸方向は不明であるが、遺存した壁ラインを1辺とする隅丸方形プランではないかとみられ、壁ライン方向が主軸方向の可能性が高く、N-44°。遺物はごくわずかにあるのみ。

(12号竪穴) (第13~15図、図版9) 1区南側、11号竪穴南、24号竪穴東側に位置する。11号竪穴南側を切り、東側は煙の段切りにより1/3程度を欠失する。完掘図では縁を多數描いているが、石垣を伴う畑境があり、その裏込め石が露出している状況を示したものである。竪穴プランは東壁を欠くが南北7.4m、東西推定6.5mの隅丸方形で、方形の度合いが強いプランとなっている。主軸方向はN-13°-W。この遺跡では弥生・古墳時代での最大級の竪穴住店である。壁の高さは西側で65cm。覆土は断面図でわかるように西壁側が厚く、東側段切り付近では床面をえぐっている。床硬化面は壁際にごく近い部分を除きほぼ全面的に残る。周溝は北壁中央に部分的に存在する。柱穴は92・93号ピットを含む3本が存在し、東南に想定される1本を加えて計4本となる。掘り方面で径60~65cm、深さ35cmと浅い。炉は主軸線上奥壁寄りに浅い掘り方をもつ地床炉があり、掘り方は78×88cmを測る。遺物は覆土の残りが良い北西隅を中心にやや多くの出土があるが、いずれも床面より浮上している。

(13号竪穴) (第16~20図、図版10・11) 1区南側にあり、3区の烟段切りにより竪穴東壁を欠失する。また15号竪穴とは入れ子状に重複する。隅丸の五角形、もしくは六角形プランとみられ、壁が15号竪穴ほどではないが直線的になっている。東西推定9.2m、南北8.8mの大形住居である。主軸方向は54号ピットを主軸線上に配置するN-19°-Wで、15号竪穴の主軸線の延長線にあたる。柱穴は51~57・88~90号ピットの7本で、柱穴配置とプランは相似的に対応している。柱穴は直径60~100cm、深さ90cmといずれも大形で深い。南壁付近は壁を欠失し、また東側も壁がほとんど存在しない。壁際には幅20~30cm、深さ10cm程度の周溝が全周する。炉は15号竪穴に切られて存在しない。床面には56号ピット北側と54号ピット東側に焼土ブロックが分布するが、炭化材ではなく、火災住居とはいよい。床面にはとくに硬化面はなかったが、全体にしま

りはよい。

（15号竪穴）（第16～20図、図版10・11）1区南側中央、13号竪穴と入れ子状に重複する竪穴住居で、柱穴は5本、壁は6辺からなる六角形の住居である。主軸方向は48°・51号ピット、炉を結ぶ直線で、N-17°-W。これは13号竪穴とほぼ同一であり、その位置もほぼ一致することから、13号竪穴を縮小するように15号竪穴を構築していることが推測される。両者は上層構造の構築思想、技術を全く同じように保持していたことが考えられ、同一居住者による建替えとみることが可能であろう。その際に、先端にある51号ピットの位置を基準点として主軸方向にプランを縮小するとともに、柱穴本数を7本から5本に減じている。柱穴は48°・50°・52°・53号ピットの5本で、径60～90cm、深さ70～115cmであり、奥壁側の48号ピットは特に深い。主軸方向の両端となる51号ピットと48号ピットの裏側にあるコーナー部では、床面が張り出したようになっていて、周溝は全周し、幅25～30cm、深さ10～20cmを測る。周溝中には小ピットがあるほか、北側では幅80～100cmの板を差し込んだように周溝中に一定の長さの溝があり、溝の途中に境がある点が注目される。埋甕はないが、出入り口部と考えられる主軸正面には径50×60cm、深さ10cmの51号ピットがあり、左右に扉を立てるように据え、両脇に小ピットが存在する。深さの点から柱穴ではなく、また埋甕に代わるピットとも考えられないが、出入り口に関係した施設として理解したい。遺物は、特に西側半分の覆土上位から床面にかけて多くの土器等が出土し、炉裏を中心に小ぶりの礫が多数存在する。炉は1.4×1.4m、深さ55cmの掘り方をもち、主軸上奥壁寄りに存在する。炉石に用いられたと考えられる横長の平石が1枚、南北方向に伏せたようにして炉内より見つかった。おそらく4枚の炉石による掘り炬ыш状の方形石圓い炉であったとみられるが、再利用の目的で3枚の石を持ち出し、1枚のみ残したのには何らかの理由があったのであろうか。炉内からは曾利三式の口縁部を欠く深鉢が横位で出土した（第64図2）。

（16号竪穴）（第21・22図、図版11）1区南側にあり、15号竪穴西南の調査区西壁にかかるようにして確認されたため、一部拡張して住居の全体像を出した。梢円形に近い隅丸方形プランで、南北5.65m、東西4.9mを測る。主軸方向はN-11°-W。東壁がやや明確さを欠き、歪んだようになっているのはそのせいである。床面はほぼ全体に硬化面が確認でき、壁際には西南、西北隅、東壁の一部に周溝をもつ。炉は主軸線上奥壁寄りにあり、63×60cmの不整形の浅い掘り方付近に焼

土が分布する。そのほかに主軸線上には床面より40cm浮上した覆土中に2箇所の焼土分布がある。ピットはいくつか存在するが、主柱穴ははっきりしない。奥壁、壁に接して存在する2本（60・120号ピット）を候補とするが、対応する手前の2本は明らかではない。南東隅には出入り口施設がある。径40cm、深さ40cmの58号ピットの周囲に、長さ1.6m、高さ6cm、幅30cmの半円形の土手が巡る。遺物の出土量は少なく、また住居の時期を示唆する遺物がない。

（17号竪穴）（第23図、図版11・12）1区南、調査区西壁にかかるようにして検出された。西側半分が調査区外にのびるため、梢円形プランの半分を調査したが、現状で東西2.9m、南北8.5mを測る。床面の硬化面の範囲が北側で途切れ、周溝ははさんで重複、あるいは拡張したように北側にプランが広がっている。北側部分では床面はくぼみ、硬化していないが、壁の延長線上に存在することから、竪穴住居の付帯施設の可能性があり、一応竪穴と一体化した施設とみなしておきたい。南側には床下に32・49号土坑があり、竪穴の南壁を不鮮明にしている。炉は南北方向を主軸線とすると南寄りに位置する場所に地床炉がある。南側に礫2個を枕石とする径50cmの円形の焼土範囲があり、円形の掘り方をもつ。炉周辺に炭化材があり、火災住居といえる。柱穴は81号ピットがあるが、そのほかは不明である。遺物は少ない。

（18号竪穴）（第24図、図版12）1区南側、調査区西壁にかかるようにして確認された。南側が17号竪穴に切られ、全体像は明らかでないが、南北4.7m程度の円形プランとみられる。中央付近に板状の炉石が据えられているが、方形石圓い炉の正面にあたる炉石のみを残した状態とみられ、ほかの3枚の炉石はない。炉石裏側の1×1.5mの掘り方が炉で、その中に焼土が残る。炉石の正面方向に埋甕が2箇所存在する。1号埋甕（第70図1）は逆位、2号埋甕（第70図6）は正位での出土だが、床の硬化面がなく、床の本来の高さが不明で、2分埋甕については遺存状態も悪いことから、埋甕かどうか検討を要する。柱穴配置はわかりにくいか、130・127号ピットなどがあり、炉裏に1本をもつ5本柱穴とみられる。周溝は北壁付近に存在する。遺物は竪穴中央付近、床面よりわずかに浮いて存在する。

（19号竪穴）（第25・26図、図版12～14）1区南側、調査区西壁にかかるようにして検出された。炉石の一部が調査区壁に確認されたため、調査区外を一部拡張して、炉周辺から奥壁付近を調査することができた。全体像は把握できなかったが、円形プランで、南北5.5

m、東西は推定5.2m、主軸方向はN-26°-Wである。幅25~35cmの幅広の周溝がほぼ全周する。柱穴は96・104・105・63・125号ピットで炉裏に1本をもつ5本柱穴だが、東側2本については2本ずつ接近し、建替えに伴う柱穴の変更が認められた。柱穴は径45~50cm、深さ50~55cm、炉は1.05×0.95mの方形石囲い炉で、深さ30cmと全体に大形である。板状の礫を立てて組み合わせ、隅に小礫を配置する。炉内には炉石直上から内部にかけて数個体の土器が存在した。なお、炉石については南アルプス市の文化財保存施設、伝承館へ移動して保管している。炉裏には集石状に礫がまとまって存在した。それらは炉裏の配石のように見えたが、柱穴の上に重なるため、配石後の流入と判断した。出入り口には埋甕が2つあり、北側の1号埋甕(第71図3)は逆位、南側の2号埋甕(第72図8)は正位で埋設されていた。両者は近接し、1号埋設のうち2号を埋めただようにみえるが、土器型式的には1号が曾利IV式、2号が曾利II式と逆の順となっていた、解釈が難しい。また十器の高さでは、1号の方が高く、2号が低いこと、断面観察によると2号埋甕が新しいと判断できることから、2号から1分の順に埋設し、2号埋設の段階での床面レベルは埋甕底部付近の高さと考えられる。1号埋甕の底部直上には平たい礫が2個あり、埋甕の石蓋の可能性がある。遺物は炉内、埋甕以外には少ない。

(20号竪穴) (第28図、図版14) 1区南端、5区との境に存在する竪穴住居で、1次調査で調査区南西隅より多量の土器群が出土し、炉、埋甕2基、柱穴の一部を調査したが、竪穴の壁については確認できなかった。2次調査の時点で再調査を行うとともに、調査区西壁を拡張し、全体像を出すことができ、北から西壁については明らかになった。東から南壁については不明瞭ながら浅い立ち上がりを見出すことができた。プランは円形で、東西5m、南北5.5mを測り、西側に周溝が存在する。柱穴は炉裏の1本(267号ピット)を含めて計5本で、炉裏以外のピットは2本ずつの建替えを示している。径50~80cm、深さ65~70cmと深い。炉は奥壁寄りにあり、1.2×1.1mの円形の掘り方を残すのみであるが、本来は方形石囲い炉であったとみられる。竪穴の主軸線は炉裏ピットと炉を結ぶN-32°-Wで、その軸線上の出入り口付近に埋甕が2基存在する。埋甕(第73図1・2)は2基とも正位埋設である。埋甕のそばに礫が存在するが、蓋石ではない。遺物は中央から西側で多量に出土し、床面よりも浮上した覆土中位での出土が多い。ただ、床面の高さが不明確で、下層のローム面まで下げた段階で柱穴を確認した

ため、床面と遺物出土レベルの位置関係がややあいまいになっているのは事実である。西壁にはひとつつの炉石があり、周辺に遺物が存在したことから、竪穴住居と判断した(38号竪穴)。38号竪穴が20号竪穴により切られた状態といえる。

(21号竪穴) (第29図、図版15) 1区北、5号竪穴北側で、1号溝に南壁を切られ、南壁は不明。また東傾斜の地形により東壁を欠失する。西壁側の遺存状況が良好であるが、西壁高は18cmで、全体的に覆土は薄い。隅丸方形プランとみられ、直線的な西壁と北壁の一部が残る。周溝はない。東西推定4.2m、南北推定4.9mで、主軸方向はN-7°-W。床面の遺存状況は悪く、西壁周辺に硬化面が残る。西北隅、西壁中央付近の壁際に炭化材が遺存する火災住居で、北西隅の炭化材は一部放射状を呈し、垂木材と推定される。炭化材は實際では若干床から浮上するものがあるが、垂木材は床直上で出土している。柱穴は200~203号ピットの4本で、掘り方面での径25~40cm、深さ20cmと浅い。203・204号ピットでは掘り方内に径17cmの柱痕が確認されている。炉は主軸線上奥壁寄りにあり、60×40cmの浅い掘り方をもつ地床炉である。遺物はきわめて少ない。床下は約5cmの厚さの貼り床をもち、約10cmで掘り方方面に達する。

(22号竪穴) (第30図、図版15) 1区北端、調査区西壁際にあり、当初西壁にかかるようにして検出されたため、調査区を拡張して全体像を把握した。確認面からごく浅く、西壁で10cmを測り、東側は床下まで搅乱が及んでいる。プランは掘り方の範囲を参考にする東西推定2.95m、南北4mの隅丸方形とみられ、硬化した床面が1.8×2.5mの範囲で炉南西付近に残る。炉は主軸線上やや奥壁寄りに40×50cmの焼土範囲があり、浅い掘り方を伴っている。柱穴は1本と思われ、西側2本については掘り方のピットとしておむね把握できたが、東側は不明。床下は掘り方まで約20cmの深さがある。遺物は床面中央、炉南側で台付甕(第77図1)が出土している。

(23号竪穴) (第30図、図版16) 1区北側、21号竪穴北に位置し、西壁と南壁の一部が遺存するが、北・東壁は欠失し、全体像は把握できない。推定ではあるが南北4.3m、東西3.4mの隅丸方形プランだろう。主軸方向はN-16°-W。床面は西壁寄りに0.8×2.5mの範囲で残るのみで、耕作による搅乱が広く及んでいる。周溝はなく、炉も欠失して痕跡をとどめている。南側では地山の礫層が露出している。ピットはいくつか存在するが、柱穴配置がわかる状態ではない。遺物は床直で小形台付甕(第77図1)が出土したのみである。

〈24号竪穴〉(第31図、図版16)1区南側、12号竪穴西側に位置する。当初の遺構確認では把握できなかつたが、包含層を数cm下げるようやく確認できた。竪穴は隅丸方形で、東西3.25m、南北3.35mを測り、壁の高さは30cm、主軸方向はN-16°-Wである。床面は東壁寄りを除きほぼ全面的に硬化面が広がり、床面には壁寄りの位置に床底の状態で炭化材が放射状に検出された。垂木の焼失を示す火災住居である。炉は奥壁寄りにあり、36×42cmの不整形のごく浅い掘り方をもち、焼土が存在する。遺物はほぼ床底状態で5個体程度が完形もしくはそれに近い状態で出土し、当時の上器のセットを考える上で良好な資料といえる。

〈25号竪穴〉(第32図、図版17)2区北端で単独に検出された。1区の台地の下面にあたる低地面に存在し、試掘調査で確認された竪穴である。小形の小判形プランで、東西3.1m、南北4.0mを測り、主軸方向はN-25°-W。壁の高さは西側が高く22cmで、東壁では10cmと浅くなっている。周溝はない。柱穴は134~137号ピットの4本があり、径30~40cm、深さ25~35cmとやや深い。炉は奥壁寄り、主軸よりも東側に寄った位置に65×50cmの不整形のごく浅い掘り方があり、弱く被熱している。遺物はほとんどない。床面はやや軟質で、硬化面として記録した範囲はない。床下は貼り床が厚さ3cm、掘り方面までは床面から8cmを測る。出入り口施設が想定される南東隅には径33cmの138号ピットがあるが、土手状遺構は存在しない。

〈26号竪穴〉(第33図、図版17)1区南、15分号竪穴南側の河道に切られて存在する。北西側の壁が一部残り、他は河道のために欠失するが、円形プランと考えられ、竪穴の規模は東西推定4m、南北推定5mと考えられる。周溝はない。柱穴は181・212・217号ピットなどがあり、炉を囲む4~5本程度の主柱穴配置とみられる。炉は径50cmの掘り方に径20cmの深鉢(第79図4)を埋設した石圓い埋甕炉で、北西の礫2個は遺存したが、南東側は河道の浸食で欠失している。炉石は5枚組み程度と推測される。炉体上器が深いのが特徴だが、炉体土器内には焼土は遺存していない。なお、図では炉東側に礫を多数描いているが、河道内に露出した礫層である。炉体上器の型式から竪穴の時期は藤内式期新段階とみられる。遺物は覆土中出土で、量は少ない。

〈27号竪穴〉(第34図、図版17)1区南、26号竪穴西側に位置する。河道に半分を削られた竪穴で、炭化した木7本程度が放射状に壁から床面に向かって遺存する火災住居。主軸方向はN-16°-Eと思われ、楕円形のみの隅丸方形プランとみられる。南・東壁を欠失す

るため、規模は定かではないが、南北推定5.5m、東西推定4.3m程度か。炭化材は北壁に6本、西壁に1本があり、中央床面に向かって壁の上端から斜めに残る。垂木下に土砂が堆積する状況に関して明快な解釈はできないが、斜めに垂木材が焼け落ちたのち隙間に周溝の盛り土が流入した、あるいは屋根の土葺きに用いられた土が床面に落ちて隙間の三角堆を形成したのち、上屋の火災により炭化材が焼け落ちたとみられる。あるいは両者の要因が重なって形成された、とみることができよう。ただし、後者の想定であるば炭化材周辺の土も被熱赤変するはずだが、焼土形成はほとんど認められていない。なお、炭化材の樹種同定に関しては第1章第2節を参照。ヤマグワを主体としてアサダ、クリ、カツラ、カエデ属が混じる。周溝は北壁に一部存在する。炉は主軸線上に中央付近にあり、1号河道に切られてわずかに残り、推定径60cmの円形と思われる浅い掘り方に焼土が堆積する。ピットは3ヶ所存在し、4本柱穴のうちの3本の可能性があるが、確定的ではない。出土遺物はほとんどない。

〈28号竪穴〉(第35図、図版17)1区南、17号竪穴東に位置し、河道に切られる。1次調査で竪穴および屋内の袋状土坑(71号土坑)を調査し、2次調査ではその続きの河沿内土砂を除去して柱穴の痕跡を探査した結果、273~275号ピットの3本を確認できた。竪穴は西壁が残るのみで、東側半分以上を浸食により失っているが、柱穴の配置から推測すると6本柱穴の楕円形プランと考えられ、南北推定5.7m、東西推定4.5mで、主軸方向は推定N-32°-W。柱穴は197・198・273~275号ピットで、南東隅にもう1本の柱穴を想定したい。柱穴は径55~95m、深さ65m。炉はない。主軸線の中央左側、197号ピット脇に貯蔵穴(71号土坑)をもつ。竪穴と同時期の所産と考えられ、内部から出土した土器により本竪穴が藤内新段階の時期とわかる。周溝はない。壁の立ち上がりは明瞭ではないが、壁高は20cmを測る。

〈29号竪穴〉(第36・37図、図版18)5区中央付近、31号竪穴南に位置する。曾利式土器の集中地点を仮に29号竪穴として調査開始し、壁の立ち上がりが確認面ではわからなかったことから、サブトレレンチを入れて断面を観察し、西壁の位置を確定したが、南・東に関しては欠失するらしく、最後まで見出すことができなかつた。また北壁については31号竪穴との重複や溝状の自然流路により確認が難しく、検出されなかつた。床面にも硬化面ではなく、かなり強めに床面を下げた段階で柱穴などを確認した。柱穴、炉の位置から推測するならば、竪穴住居はやや横長の楕円形、もしくは円

形で、南北5.1m、東西6.1mを測る。柱穴は炉裏に1本をもつ5本で、径45~70cm、深さ50cm、主軸方向はN-20°-W。炉は主軸上奥壁寄りにあり、炉石の礫が東・北側に残る石囲い炉である。90×75cmの掘り方をもち、方形石囲い炉とみられ、炉底には焼土層が良好に残る。78号土坑と重複し、78号土坑を切る。覆土中位から多量の遺物が出土したが、土器片は細かいものが多く、床面近くから数個体のやや小形の深鉢が出土した。土器の出土レベルからすると、本来の床面はかなり上にあったことが推測される。埋甕はない。南西隅に袋状土坑（246号ピット）がある。竪穴と同時期の貯蔵穴と考えられ、口径70~78cm、深さ56、底径78cmを測る。底は平らで、底近くに焼土が堆積した。

（30号竪穴）（第38~40図、図版18）5区東壁側、33・35号竪穴と重複する。33号竪穴の炉に30号竪穴の柱穴が掘り抜いていることから、33号竪穴が古く、30号竪穴が新しい。30・33号竪穴附近は当初、北側の自然流路を完掘した段階で、側壁に豊富土および柱穴2本（253・254号ピット）が確認されたことから、3軒程度のまとまりがあるものと想定した。サブトレーナを2本設定したところ、床面の硬面面が炉周辺から西側にかけて存在し、南側では上層の30号竪穴の貼り床が確認され（C-C'断面2層）、1段下がった下層に別の床面（33号竪穴）が確認された。炉は五角形の石囲い炉で完存する。石回りは70×60cmを測り、細長い礫を立てて組んだもので、内部には焼土・炭化物とともにほとんどなく、被熟面もない。柱穴は253~257・265号ピットで、7本柱穴と考えられるが、265号ピット横には262号ピットがあり、柱穴の建設も想定される。プランは精円形で、東西推定6.3m、南北推定7.0mである。主軸方向はN-25°-W。出土遺物は床面よりも30~50cm浮上し、床直遺物はほとんどなく、土器は小破片が多い。

（31号竪穴）（第41図、図版19）5区、29号竪穴北側に位置し、29号竪穴と一部重複する。竪穴北側および東側には自然流路が浸食する。床面は非常に堅い貼り床となる。火災住居で、南東、北東付近の床面に炭化材が分布する。炭は細かく、ほとんどが炭化材としての形は保っていないが、一部50cm程度の長さを示すものがある。北西側を自然流路により欠失するが、他の壁は検出でき、南北4.8cm、東西3.75mを測る。プランは隅丸方形で、北壁は直線的、南壁はやや丸い。主軸線はN-12°-E。炉は主軸線上、奥壁寄りにあり、80×65cmの不整円形の掘り方に内に鉄平石の平石を置き、棒状礫2つを配した枕石があり、礫は炉の南辺を画している。炉内には焼土がほとんどない。ピットが6か

所あるが、うち3本が柱穴で、本来4本柱穴だろうと思われる。

（32号竪穴）（第42図、図版19）5区南東隅に位置し、自然流路に浸食される。自然流路内の砂利層を除去していったところ、底に平らな硬化面が検出され、南側には壁の立ち上がりが確認できたため、住居として調査した。南北5m、東西現状で2.8m、推定4.8mで、円形プランか。主軸方向はN-18°-E。現地表面から2mに確認面があり、さらに約1mで床面となる。柱穴は数本存在し、4本柱穴または5本の住居と考えられる。周溝が断続的に巡る。炉は河道との境に落ち込みがあり、直上に砂利・礫が載る。炉の部分のみ拡張したが、炉の掘り方は半分が流失した状況であった。炉脇には接地面に焼土が付着した土器底部が遺存したが、炉体土器ではないと思われる。埋甕はなく、出入り口付近は流失している。遺物は中央、西壁付近の覆土中位に主として出土している。

（33号竪穴）（第38~40図、図版18）5区、30号竪穴南側に位置し、重複する。33号竪穴が古く、30号竪穴が新しい。30号竪穴より15cmほど床面が下がり、30号竪穴の貼り床面がある。柱穴は258~261・263・264号ピットで、9本柱穴とみられる。東側は調査区外にかかり全体像を見るすることはできなかった。主軸方向は炉と263号ピットをつなぐラインで、N-28°-W。柱穴間を直線的につなぐように周溝があり、その外側、壁際はわずかにベッド状に高い。壁はその外側にあるが、当初ベッド状造構の高まりを別の竪穴と認識して34号竪穴とし、のちに抹消した。竪穴のプランは精円形で、東西推定6.5m、南北推定7m。本竪穴で特筆されるのが西南の壁際にある埋甕（第85図5）で、藤内式新段階の円筒形土器を正位に埋設する。埋設位置は主軸線上ではなく、西南側、259と260号ピット間である。口縁部は欠損し、割れ口がベッド状造構の床面から飛び出ないように埋設する。底部は完存し、底部近くには磨石と大形礫が入り込んでいる。埋甕埋設位置が出入り口であった可能性も考えられる。炉は主軸線上、奥壁寄りにある地床炉で、焼土範囲が1.1×0.8mに広がっているが、30号竪穴の柱穴（257号ピット）が中心に掘り込んでいる。

（35号竪穴）（第39図、図版19）5区、33号竪穴の西壁に礫が存在し、形態から判断して曾利式期の竪穴の炉石と考えられる。周辺に小さな礫を伴い、炉底には焼土層が薄く残り、炉の掘り方が存在する。33号竪穴より時期が新しいため、33号竪穴覆土上層に35号竪穴炉や床面、柱穴が存在したはずだが、調査の過程で認識することはできず、結果的に炉の一部を確認したにす

がない。ただ周辺のピットのうちいくつかが本竪穴に伴う柱穴の可能性がある。

(36号竪穴) (第43・44図、図版20・21) 5区南端。調査区内に竪穴の半分がかかる。表土の堆積状況については写真図版21-2を参照されたいが、地表下2.8mで、深沢川扇状地の砂利層が2.1mにおよぶ。当初、プランは全く認識できなかつたため、南壁にT字形トレーナーを入れたところ、多量の土器、礫が出土し、住居と判断した。推定住居ラインを引き、調査を開始するとともなく石突き炉を検出し、竪穴と確定できた。竪穴は東壁を流路の浸食で欠失し、南側も3m近くの表土に覆われ、それ以上の調査は不可能であった。東西推定5.5m、南北推定5.7mで、炉は主軸線上、奥壁寄りに90cm四方、深さ30cmの四隅に角石をもつ大形方形石突き炉があり、北東隅には長さ24cmの無頭石棒がやや傾斜して立つ。西壁際には40~50cmの大礫が20~30cm浮上して多数まとまり、何らかの目的で集められた可能性がある。柱穴は炉裏に1本をもつ5本柱穴とみられるが、そのうち3本を検出した(269~271号ピット)。径40~50cm、深さ60~74cm。床面に硬化面ではなく、壁際に周溝はない。遺物は覆土中位、炉石の頭よりも高い位置で多くが出土している。なお本竪穴に関しては本調査終了後に市教育委員会が続きを試掘し、竪穴住居の範囲等を確認した(第1章第2節2参照)。

(37号竪穴) (第44図、図版21) 5区西側、33号竪穴南に位置する。溝柵区東壁際に南北3.8m、東西0.8mの竪穴状の落ち込みがあり、掘り下げたところ、南側にはさらに深い土坑状の落ち込みがあり、確認面から75cmを測る。床面らしき硬化面ではなく、また部分的な溝柵にとどまつたため、竪穴住居かどうか定かではないが、出土遺物からすると縄文中期後半の竪穴住居の可能性がある。

(38号竪穴) (第28図、図版21) 5区と1区の境にある20号竪穴西壁に切られるようにして炉の一部を確認した。炉石はひとつで、炉の底面が被熱する。20号竪穴の西側に重複する竪穴の炉だが、調査区内では竪穴の規模、形態に関する情報を得ることはできなかつた。炉は80×45cmの掘り方をもつ。

#### 【掘立柱建物跡】

(1号掘立) (第45図、図版22) 1区北、1号竪穴北側にあり、南北3本(2間、3.5m)、東西2本(1間、2.9m)、計6本柱の高床式建物。主軸方向はN-9°W。柱穴は径32~50cm、深さ20~40cm。

(2号掘立) (第45図、図版22) 1区南、24号竪穴南側にある6本柱の高床式建物で、東西2間(4.3m)、南

北1間(2.6m)で、主軸方向はE-14°-S。柱穴は径50~60cm、深さ10~30cmを測る。

#### 【埋甕】

(1号埋甕) (第55図、図版22) 1区南、16号竪穴南東脇に位置する。1×0.8mの土坑中に曾利IV式期の胴下半を欠く深鉢形十器を逆位に置いている。竪穴住居の出入口に伴う埋甕の可能性が高いが、周辺に縄文中期の竪穴に関連した遺構はない。

#### 【焼土】

(1号焼土) (第55図) 1区中央、8号竪穴北側に存在する。1×1.4mの不整形の範囲に焼土層が分布する。遺構確認面より上層にあり、掘り方はなく、遺物は伴っていない。

#### 【土坑】

(1号土坑) (第46図、図版23) 1区南、7号竪穴北側にあり、17号ピットと接する。口径1.2m、底径1m、深さ92cmの袋状土坑。底は平らとなる。

(2号土坑) (第46図、図版23) 1区北、10号竪穴北側にある袋状(フラスコ状)土坑で、西側にピットが切り込む。口径1.4~1.7m、底径1.8cm、深さ67cmを測る。底は平ら。図示していないが9片の土器片が出土していて、縄文前期の織維土器片、中期中葉、後半のほか、弥生前期とみられる条纹土器片が4片ある。土坑の形状からも弥生前期の所産とみることができよう。

(3号土坑) (第46図、図版23) 1区北、10号竪穴北側で、2号土坑の西に位置する。径90×100cm、深さ17cmの不整形で、断面は鍋底状。7号土坑を切る。

(4号土坑) (第46図、図版23) 1区南、6号竪穴南側にあり、72×100cm、深さ15cmの梢円形で、断面鍋底状。弥生末と見られる土器片5点が出土している。

(5号土坑) (第46図) 4号土坑北側にあり、4号土坑に切られ、6号土坑と接する。1.4×2.25cmの梢円形で、断面皿状。

(6号土坑) (第46図) 1区南、6号竪穴南にあり、1.35×1.48cmの隅丸方形で、深さ14cmを測る。断面は皿状。縄文前期?土器片1、貝岩の石錐あるいは石錐が1点出土している。

(7号土坑) (第46図、図版23) 10号竪穴北側で、3号土坑に切られる。0.9×1m、深さ12cmの断面鍋底状。

(9号土坑) (第46図) 7号竪穴北東に接する。1.1×0.72m、深さ40cmの梢円形で、弥生末~古墳初頭の土器片11片が出土。

(10号土坑) 1区南、9号竪穴西壁に接して存在する円形土坑で、径1×1.14m、深さ72cm。断面ボール状。縄文中期中葉から古墳初頭の土器小片5点あり。

（11号土坑）（第46図、写真図版8）9号竪穴内、床面中央に位置し、床面を切る。径 $2.6 \times 2.2$ cm、深さ62cmの大形土坑で、断面錫底状。底は平ら。覆土断面には褐色土と暗褐色土の互層堆積が認められた。縄文～古墳初頭の土器片が12あり、古墳初頭と思われる上器片がやや多い。

（12号土坑）（第47図、図版23）1区南、7号竪穴東に位置する円形土坑で、径 $1.6 \times 1.65$ m、深さ18cm。断面錫底状。黒曜石片のほか、藤内～中期後半の土器片3点出土。

（13号土坑）（第47図、図版23）1区南、7号竪穴南西に位置する不整円形の土坑で、16号土坑と重複する。1.9×2.3m、深さ30cmで、断面錫底状。縄文中期後半らしき土器片4点出土。

（14号土坑）（第47図）1区南、11号竪穴床面にあり、1.1×1.13m、深さ23cmの円形土坑で、断面錫底状。11号竪穴との重複関係は明確でない。

（15号土坑）（第47図）11号竪穴床面、14号土坑の東側にあり、92×97cm、深さ28cmの断面錫底状。縄文前期土器片のほか、弥生末～古墳初頭の土器片が数点出土している。

（16号土坑）（第47図、図版23）1区南、7号竪穴南西にあり、13号土坑と重複する。1.1×1.6m、深さ20cmの円形土坑とみられる。断面観察では13号土坑との切り合い関係は不明。諸磯b式土器片1のほか、古墳初頭にかけての土器片がやや多く出土。

（17号土坑）（第47図、図版23）9号竪穴内、南側に重複する。9号竪穴床面の硬化面が17号土坑に及んでいないことから、床を切る状況ではなく、住居に伴う出入り口施設のビットの可能性もある。径 $1.2 \times 1.45$ m、深さ46cmの円形土坑で、断面は錫底状。縄文後期？土器片1出土。

（18号土坑）（第47図、図版23）10号竪穴南に位置し、10号竪穴との切り合い関係に関する観察は不充分であった。径 $1.8 \times 1.9$ m、深さ1.3mの円筒形もしくは一部袋状を呈する大形の円形土坑で、底面は平ら。礫層面が露出する。曾利IV式土器片1出土。

（19号土坑）（第47図）1区南、13号竪穴西側に位置し、20号土坑と重複する。1.95×2.05m、深さ45cmの不整円形で、断面ボール状。

（20号土坑）（第47図）1区南、19号土坑東側に重複する。1.42×2.1m、深さ27cmの隅丸方形で、19号土坑との重複関係は不明瞭だが、19号土坑以前とみられる。

（21号土坑）（第48図）1区南、13号竪穴北西にあり、13号竪穴に切られる。1.45×1.9m、深さ27cmの不整

形で、断面ボール状。

（22号土坑）（第48図）1区南、15号竪穴南に位置する楕円形土坑で、 $1.4 \times 1.55$ m、深さ57cm。断面形は箱状。

（23号土坑）（第48図）1区南、15号竪穴東に位置する円形土坑で、 $80 \times 92$ cm、深さ26cm。断面錫底状。周辺の45・46・48号土坑の4本、さらに22・60号土坑を加えた6本で竪穴住居、あるいは掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

（24号土坑）1区南、15号竪穴東側で、調査区東壁寄りにある。耕作溝中に位置し、 $72 \times 75$ cm、深さ30cmの隅丸方形で、柱穴状を呈す。無文の大形土器片1（未図化）のほか、曾利V式土器1片が出土。

（25号土坑）（第48図、図版23）1区南側、調査区西側の18号竪穴内に位置し、炉と重複する。18号竪穴以前の構築である。 $1.22 \times 1.24$ m、深さ30cmの円形土坑で、断面錫底状。曾利III式土器片あり。

（26号土坑）（第48図）1区南、18号竪穴内、北側にあり、 $52 \times 80$ cm、深さ10cmの不整形土坑。断面皿状。時期不明ながら深鉢が横位で出土した（18号竪穴12）。

（27号土坑）（第48図、図版23）1区南、17号竪穴内にあり、17号竪穴との切り合い関係は不明。 $1.05 \times 1.25$ m、深さ30cmの隅丸方形で、断面錫底状。台石のほか、曾利III式土器片、五領ヶ台式土器が出土している。

（28号土坑）（第48図、図版23）1区北、10号竪穴東にあり、 $0.7 \times 1$ m、深さ30cmで、断面錫底状。

（29号土坑）（第48図、図版23）1区北、10号竪穴北側にあり、 $1.34 \times 1.85$ m、深さ60cmの不整形を呈す。上坑の中心部分には袋状土坑があり、 $0.8 \times 1.16$ m、深さ60cmを測る。

（30号土坑）（第49図、図版23）1区北、10号竪穴北側にあり、 $0.7 \times 0.8$ m、深さ42cmの円形土坑で、断面ボール状。

（31号土坑）（第49図、図版23）1区北、2号竪穴東にあり、 $0.65 \times 0.8$ m、深さ36cmの楕円形土坑で、断面は錫底状。

（32号土坑）（第49図）1区南、17号竪穴南に重複し、49号土坑に切られる。断面観察では17号竪穴・49号土坑よりも古い。 $1.6 \times 2.3$ m、深さ45cmの不整形で、断面は播鉢状。曾利II～III式期土器3片が出土している。

（33号土坑）（第49図）1区北、21号竪穴と1号溝南に位置する。 $1 \times 1.2$ mの楕円形土坑で、深さ26cm。断面は錫底状か。

（34号土坑）（第49図、図版23）1区北、23号竪穴東に

ある。1.4×1.5mの不整楕円形で、深さ15cm。断面形は鍋底状。

《35号土坑》(第49図、図版23)1区北、23号竖穴東、34号土坑の北に位置する。1.1×1.18m、深さ22cmの円形土坑で、断面皿状。

《36号土坑》(第49図)1区南、13号竖穴北西に位置し、調査区西壁にかかる。円形土坑が2基重複した状況を示すが、現状では東西1.05m、南北1.3mの不整形で、深さ28cm。

《37号土坑》(第49図)1区南、13号竖穴北西で21・41号土坑と重複する。0.8×0.9m、深さ26cmの不整形で、断面鍋底状。

《38号土坑》(第49図、図版23)1区南、13号竖穴西側にある。0.9×0.9m、深さ20cmの円形土坑で、断面は鍋底状。

《39号土坑》(第49図)1区南、13号竖穴西側で、調査区西壁にかかる。0.9×1.1m、深さ18cmの円形で、断面形は鍋底状。曾利II～III式土器1片出土。

《40号土坑》(第49図、図版23)1区南、13号竖穴西側にある。1×1.18m、深さ13cmの円形土坑で、断面は鍋底状。ピットが2本重複する(106・107号ピット)。

《41号土坑》(第50図)1区南、13号竖穴北西に位置し、21・37号土坑と重複する。1.3×1.7m、深さ77cmの不整円形で、断面はポール状。

《42号土坑》(第50図、図版24)1区南、16号竖穴北側にあり、1.2×1.25m、深さ20cmの円形土坑で、断面鍋底状。

《43号土坑》(第50図)1区南、13号竖穴西側にあり、1.4×1.55m、深さ27cmの不整円形で、断面皿状。

《44号土坑》(第50図)1区南、24号竖穴南。1.3×2.2m、深さ30cmの楕円形で、断面鍋底状。覆土中に砾を多數含む。

《45号土坑》(第50図、図版24)1区南、15号竖穴東に位置する円形土坑。0.7×0.74m、深さ42cmで、断面鍋底状。

《46号土坑》(第50図)1区南、15号竖穴南東に位置し、径70cmの円形土坑と不整形土坑が重複し、133号ピットとともに重複する。全体では1.6×1.38m、深さ44cmで、断面観察によれば円形土坑が新しい。

《47号土坑》(第50図)1区南、15号竖穴南東に位置する円形土坑で、0.65×0.7m、深さ34cm。断面鍋底状。曾利III式土器片を含む9片が出土。

《48号土坑》(第50図)1区南、15号竖穴東に位置する円形土坑で、0.7×0.75m、深さ45cm。断面鍋底状。

《49号土坑》(第23図)1区南、17号竖穴内南にあり、32号土坑と重複する。17号竖穴より古く、32号土坑よ

りも新しい。1.3×1.6m、深さ25cmの不整形で、断面皿状。縄文中期初頭の上器がまとまって出土した。

《50号土坑》(第51図)2区南、1号風倒木痕東側にあり、1.8×1.8m、深さ40cmの不整形で、断面鍋底状。土坑中央に焼土が堆積する。

《51号土坑》(第51図)2区南、1号風倒木痕東側にあり、50号土坑と接する。1.5×2m、深さ50cmの不整形で、断面ポール状。

《52号土坑》(第51図、図版24)1区北、調査区北端にある。径1.18×1.26m、深さ17cmの円形土坑に浅いピットが重複するもので、全体では1.26×1.9mを測る。断面は皿状。

《53号土坑》(第51図、図版24)1区北端、22号竖穴北東にあり、1.15×2.2m、深さ25cmの不整楕円形を呈す。断面は皿状。縄文中期後半～末の土器片が4点出土。

《54号土坑》(第51図、図版24)1区北、調査区北端にある。1.26×1.5m、深さ38cmの楕円形で、断面ポール状。

《55号土坑》(第51図、図版24)1区北端、167号ピットと接するようにして存在する。1.3×1.4m、深さ26cmの円形で、断面皿状。

《56号土坑》(第51図)1区北、2号溝東端に位置する。1.7×2.3m、深さ55cmの不整形で、断面は鍋底状か。

《57号土坑》(第51図、図版24)1区北、調査区東壁にかかるようにして検出。0.8×1.35m、深さ18cmの不整円形土坑で、断面は鍋底状。

《58号土坑》(第51図)2区南、1号風倒木痕に接する。0.9×1.45m、深さ34cmの楕円形で、断面ポール状。覆土中に焼土を多く含んだ層が堆積する。

《59号土坑》(第47図、図版23)1区南、9号竖穴南にあり、竖穴の壁に重複する。1.05×1.15m、深さ70cmの円形で、断面鍋底状。図示した縄文中期後半の鉢が出土したほか、古墳初頭の壺数片が出土している。

《60号土坑》(第52図、図版24)1区南、15号竖穴南東に位置する。径1.1mの円形土坑を中心に2つの土坑が重複したものとみられる。全体では1.3×1.9m、深さ60cmの不整形土坑で、断面はポール状。砾が西側から北側に多数入っている。抑壓文土器出土。

《61号土坑》(第52図)1区南、15号竖穴南東にあり、径0.58×0.67m、深さ44cmの円形土坑で、断面形は桶状。断面に柱状の土層が観察され、213号ピット、47号土坑とともに掘立柱建物あるいは竖穴の柱穴を構成する可能性がある。曾利III～IV式土器1片出土。

《62号土坑》(第52図、図版24)1区南、8号竖穴内、南東隅に位置する。0.56×0.7m、深さ58cmの楕円形

上坑で、土坑上部に礫があり、周辺から小壺、台付壺脚部などが出土している。8号竪穴に伴う出入り口施設のピットで、いわゆる貯藏穴とみられる。

(63号土坑) (第52図、図版24) 1区南、16号竪穴東にあり、径1mの円形土坑に土坑状の掘り方が重複した土坑で、全体では $1.2 \times 1.8$ m、深さ37cmの不整形土坑である。図示した曾利IV式土器片のほか、曾利II式土器、山形押型文土器1片などが出土している。

(64号土坑) (第52図) 1区南、南端、28号竪穴北側に接する。 $1.2 \times 1.4$ m、深さ20cmの円形で、底は平らな鍋底状を呈する。

(65号土坑) (第52図) 1区南、24号竪穴南に位置し、大小の円形土坑が重複する。全体では $1.7 \times 2.3$ m、深さ30cmの皿状を呈す。前期末と思われる土器4片が出土した。

(66号土坑) (第52図、図版24) 1区、26号竪穴北側にあり、47号土坑に接する。河道の砂利層に浸食されるようにして検出された。 $1 \times 1$ m、深さ70cmの不整形土坑で、覆土上層に礫とともに縄文中期後半の曾利式土器深鉢の大形片が横位で出土した。

(67号土坑) (第52図、図版24) 1区南、18号竪穴東側にあり、 $1.2 \times 1.4$ m、深さ43cmの格円形で、断面鍋底状を呈す。時期不明土器片1件出土。

(68号土坑) (第52図、図版24) 1区南、27号竪穴北壁に接する。 $1.3 \times 1.55$ m、深さ56cmの円形土坑で、底は平ら。断面円筒形で、覆土中から図示した縄文中期後半の土器片のほか、曾利III式土器片2件、台付壺脚部1件が出土。

(69号土坑) (第53図) 1区中央、10号土坑東側の段切りによる傾斜面にある。円形土坑だが、東側を削られて欠失する。 $0.8 \times 1.4$ m、深さ15cmの鍋底状断面で、本来は袋状土坑だった可能性がある。

(70号土坑) (第53図、図版24) 1区南、26号竪穴北西壁に重複する。 $1.2 \times 1.22$ mの円形土坑で、深さ20cm。断面は鍋底状。曾利式土器片2点出土。

(71号土坑) (第53図、図版17) 1区南、28号竪穴内の屋内貯藏穴。口径0.6m、底径0.68m、深さ83cmで、底面に礫を複数配し、その上に縄文中期の深鉢2個体と浅鉢1個体が折り重なって出土した。

(72号土坑) (第53図) 4区調査区東壁の精査中に確認。径0.95m、深さ35cmの推定円形の土坑で、断面は鍋底状。遺物は全くなし。

(73号土坑) (第53図、図版25) 4区中央に位置し、径 $1.15 \times 1.24$ mの円形土坑で、深さ80cm。断面桶状で底面は平ら。底面近くから細かな炭化物が出土したが、遺物はない。

(74号土坑) (第53図、図版25) 4区、5号風倒木痕内で検出。 $1.4 \times 1.3$ m、深さ30cmの不整形であるが、風倒木痕上層からの掘りこみと考えられ、本米の深さは1m程度か。底は中央がやや窪んだ皿状。弥生末～古墳初頭の壺片が覆土中より出土した。フラスコ状土坑の可能性がある。

(75号土坑) (第53図) 5区南西隅、調査区西壁にかかるようにして存在する径 $0.5 \times 0.9$ m、深さ30cmの円形土坑。覆土は同粒状の黒褐色土。土器片は出土。

(76号土坑) (第53図) 5区南西隅にあり、径 $0.85 \times 0.72$ m、深さ36cmの円形土坑で、断面ボール状。

(77号土坑) (第53図) 5区南西隅にある $0.65 \times 0.7$ m、深さ32cmの円形土坑で、断面鍋底状。88号土坑と重複する。

(78号土坑) (第53図) 5区、29号竪穴内、炉の東側に重複し、炉に切られる。径 $1.3 \times 1.36$ m、深さ20cmの円形土坑で、断面は鍋底状。藤内式土器1片が出土している。

(79号土坑) (第54図) 5区、31号竪穴の北東、35号竪穴炉の南側にある。径 $1.25 \times 1.25$ m、深さ35cmの円形土坑で、断面は皿状。井戸尻式土器片のほか、前期初頭の織維土器片出土。

(80号土坑) (第54図、図版25) 5区、31号竪穴内東側にあり、自然流路に切られる。 $0.65 \times 0.8$ m、深さ24cmの楕円形で、断面皿状。

(81号土坑) (第54図、図版25) 5区、31号竪穴東、調査区東壁寄りにあり、 $0.8 \times 0.9$ m、深さ20cmの円形土坑で、断面鍋底状。

(82号土坑) (第54図、図版25) 5区、36号竪穴北側に接して存在する。 $1.1 \times 1.8$ m、深さ47cmの不整形土坑で、断面はボール状。

(83号土坑) (第54図、図版25) 5区、20号竪穴南にあり、径 $0.88 \times 1.27$ m、深さ22cmの格円形土坑で、断面は皿状。

(84号土坑) (第54図、図版25) 5区、36号竪穴北側にあり、径 $1.1 \times 1.55$ m、深さ20cmの格円形土坑で、断面は皿状。

(85号土坑) (第54図、図版25) 5区、36号竪穴の北西隅、82号土坑西側にある。焼土層が上面にあり、上層には礫が分布する。円筒形の土坑で、径 $1.36 \times 1.5$ m、深さ40cmの円形で断面桶状。底は平らとなる。曾利II式土器片がやや多く出土。

(86号土坑) (第54図、図版25) 5区、31号竪穴北側に位置する。径 $0.82 \times 1$ m、深さ50cmの格円形土坑で、断面は鍋底形。覆土中から押型文土器片が出土した。

(87号土坑) (第54図) 5区南東、32号竪穴西側にあり、

0.8×0.98m、深さ16cmの円形土坑で、断面形はボル状。

〈8号土坑〉(第54図)5区南西にあり、77号土坑と重複する。1.76×2.4m、深さ38cmの楕円形土坑で、断面皿状を呈すが上坑ではなく、自然の落ち込みの可能性が高い。

〈90号土坑〉(第55図、図版25)5区、36号竪穴北西に位置し、径1.14×1.15cm、深さ45cmの円形土坑で、断面形は桶状。上層から曾利Ⅲ式期の深鉢が横位で出土し、その下、覆土中位には碟を多数配し、碟直上から曾利Ⅲ式期の小形深鉢が横位で出土した。ほかにX把手の無文口縁部片など出土している。

### 【集石】

〈1号集石〉(第55図、図版22)1区南、24号竪穴南に位置する。1×1.15cm、深さ12cmの円形土坑中に径70cmの集石をもつ。集石は1面のみで、碟は面的で平らである。炭化物は覆土中にない。

〈2号集石〉(第55図、図版22)1区南、24号竪穴南に位置し、1×1.4m、深さ10cmの楕円形土坑中に径90cmの集石をもつ。碟は1面のみで、平らに広がる。覆土は黒褐色土で黒味があるが、炭化物はない。

〈3号集石〉(第55図、図版33)1区南、24号竪穴南に位置し、1.1×1.3mの円形土坑中に径90cmの集石をもつ。碟層は約40cmの厚みがあるが、石組はない。炭化物、焼土粒を微量含む。

〈4号集石〉(第55図、図版22)1区南、24号竪穴北側に位置する。掘り方はなく、集石が径90cmの範囲で平面的、円形に広がっている。碟は1面のみで、集石というよりは配石と呼ぶべきかもしれない。

〈5号集石〉(第55図、図版22)1区南、1号集石の掘り方と24号竪穴南東隅にはさまれたところにある。径0.6mの範囲に碟が7個ほど集まつたもので、掘り方は伴わないようである。团粒状の覆土中に存在する。

〈6号集石〉(第55図、図版22)1区南、24号竪穴南側、65号土坑南にあり、掘り方をもたない。径0.65mの碟の集まりで、碟は1面のみ。团粒状の覆土中に存在する。

〈7号集石〉(第55図、図版25)4区中央に位置し、直径85cm、深さ15cmの掘り方をもつ。内部の集石は直径約70cmで、南側半分を失する。上部に5~13cm人の角碟を主とした碟群があり、藤内~井戸尻式期の縄文土器片を1点伴う。下部には花弁状配石があり、10個のやや平たい碟を直径60cm程度の円形に配したもので、角碟を用いる。碟の大きさは14~30cm、厚さ10cm程度で、被熱によるヒビが見られ、全面的に被熱して赤変する。ほほ碟の直上から3cm程度の炭化材が出土。

している。覆土は黒色で、径2mm程度の炭化材片がやや多く含まれ、焼土粒も存在し、西側に4×6cm大の炭化材も出土した。

〈8号集石〉(第56図、図版25)4区中央、7号集石の東側に位置する。径110cm、深さ40cmの円形の掘り方に、径1mの円形を呈した碟群が分布するが、攪乱により集石の一部を欠損する。碟は赤変したものが日立ち、円碟、角碟が半々存在する。底近くに炭化材が出土し、覆土中には炭化粒、焼土粒がやや日立つ。下部にはやや小形の配石がある。40×50cmの範囲に方形に組んだ配石があり、棒状の角碟を用いる。碟の被熱はやや弱く、赤味が少ない。

〈9号集石〉(第56図、図版25)4区中央、調査区東壁寄りにある径1.1mの碟群。径140cm程度の不整形の掘り方に配石をもち、15~30cm大の角碟を6個用いる。斜面の傾斜面にあらため、配石の一部は欠失する。一部被熱、赤変するが顕著ではない。碟の脇に炭化材がある。

〈10号集石〉(第56図、図版25)4区中央付近にあり、覆土中に炭化粒はやや多い。焼土粒もあり。碟はあるまい被熱していない。下層には明確な配石はない。穴の直径は約80cm、深さ30cm。遺物はない。

直径0.8mの碟群。覆土中に炭化粒はやや多い。焼土粒もあり。碟はあるまい被熱していない。下層には明確な配石はないものの、2個のやや大型碟を配置した構造があり、他にも数個のやや大型の碟が存在した。覆土には焼土粒、炭化粒がやや日立つ。穴の直径は約80cm、深さ30cm。遺物はない。

〈11号集石〉(第56図、図版25)4区中央付近にあり、耕作溝で切られる。直径75cmの碟群で、碟の下層に配石はない。

### 【溝】

〈1号溝〉(図8、図版23)1区北側、5号竪穴東、21号竪穴南にある東西方向の地境溝で、現況の畑の境と一致する。幅1.5m、長さ14.5mの溝で、近現代の所産とみなす。

〈2号溝〉(図8、図版23)1区北側、22号竪穴南側にある東西方向の地境溝で、現況の畑の境とほぼ一致する。幅1.5m、長さ9mの溝で、東端には56号土坑がある。

〈3号溝〉(第56図)1区南、8号竪穴南から24号竪穴に向かうように弓なりになる。幅3m、長さ6.5mで、8号竪穴南付近では多量の碟が溝中央付近、覆土中位にまとまって存在した。溝は碟集中部分付近では断面V字状に近いが、その南側では皿状で、立ち上がりが不明瞭となる。24号竪穴上層では溝の立ち上がり

りがなく、溝と判断できる状況にはなかったが、礫が弧を描くように分布していることから、当初、円墳または円形周溝墓の周溝ではないか、と判断して「1号周溝」という名称を付けた。また調査区西壁にはやや大きめの礫を含む礫層が南北にわたり露出し、円墳の石室に関する配行ではないか、とも考えたが、結論的には円墳という推定は撤回した。遺物には弥生末～古墳の土器・土師器、須恵器がある。

#### 【河道】(図10)

1区南端、5区との境から5区にかけて南端から北東へ向かって緩いカーブを描きながら深く造構面を抉る自然河道がいく筋も認められる。1次調査では、26・27・28号竪穴を切る河道を1号河道と名付け、2次調査では各筋に対して仮の河道番号を与えたが、ここでは5区付近にある自然河道に関する溝状造構を一括して河道と呼んでおく。河道は砂利を覆土とし、下層に大形礫（直径50cm程度）を多く含むものがある。深沢川旧流路とみられ、扇状地の形成にともない流下した水流が形成したものとみられる。縄文時代中期の28号竪穴、弥生末～古墳初の27号竪穴を切ることから、それ以降の氾濫と考えられるが、砂利中から火打ち金、中国鏡が出土し、推定ではあるが中世以前の形成ではないかと考えておく。なお造構面に形成した溝状河道のほか、造構確認面より上層の覆土中に砂利層が認められ、20号竪穴中央附近から26号竪穴北側へ向かう斜め方向に、砂利層が厚く存在した。現状の地表面にも砂利が露出し、旧地表を厚く覆っているが、南に位置する深沢川に近づくにしたがい厚く高さが増している。造構確認面も同時に高くなるのではなく、現状のまま南へ移行していくようである。36号竪穴、31号竪穴付近にも溝状河道があり、方向的にはほかの河道と同じく北東に向かって引なりにカーブしているが、幅が40cmと狭く、深さが約1mと非常に深いのが特徴で、まるで人工的な耕作溝のようにも見える。またその中には筋のように深いところ、浅いところがあるが、どのようにして形成されたのか不明。扇状地にともなう自然流路を遺跡の調査で掘ることはなく、比較事例がないが、本遺跡のような比較的新しい段階での扇状地形成の場合、造構面がすべて流失するではなく、溝状に浸食されているというパターンをつかむことができ、今後の周辺調査に役立つものと思われる。

#### 【土器集中区】

〈4区土器集中区〉△区中央、10・11号集石問付近に南北方向の溝状に落ち込みが存在し、同様の黒色土直下の黒褐色土中に弥生末の土器類がまとめて出土し

た。平坦面、硬化面ではなく、堅穴ではない。

#### 【風倒木痕】

2区、4区の斜面、低面に風倒木痕が計7つほど存在する。それらにも番号を与え、出土遺物を上げている。直径3m～6mのドーナツ状を呈した溝状の落ち込みを呈し、中央に地山土をブロック状に残すものである。非常に深いもの、浅いものがあり、わずかに縄文土器が出土した例があることから、多くは縄文時代の形成ではないかと思われる。なお、1・3・5区内では確認されていない。

#### 第4節 遺 物

##### 【堅穴住居】

〈1号竪穴〉(第57図、図版27)1・2は古墳時代初頭の土師器S字壺で、肩部に横位条線をもつ。ともに内外面が変色する。3・4は球胴状の土師器壺。4は内外面のヘラナデ(磨き)溝整が良好で、内外面が一部薄く黒変する。5～7は土師器台付壺脚部。8～10は小形壺(甌)。8は全体に調整が粗く、底部は中央付近が丸く窪んでいる。外面が薄く黒変する。9は内面のナデが良好で、見込み部が黒変する。11は土師器高杯(器台)脚部で低く広がる。内外面に薄く黒変がある。

〈2号竪穴〉(第57～59図、図版27)1は土師器S字壺。2は打斧。3は磨り石で、刃の右側面および刃下面を磨り面とした後磨り石。縄文早・前期の所産か。4～22は2号竪穴北側の床面に伴う縄編み石器。いずれも断面三角あるいは四角形の自然縄で、加工痕はほとんどないが、12・14・16・17の中程の縄に使用痕とみられる欠けが生じている。長さは12～13cm程度の縄で、端部が割れたものもいくつかある。縄を巻きやすいうように棒状のもの、中程が済んだものがある。

〈3号竪穴〉(第59図、図版27)1は土師器S字壺で、肩部に横位ハケメをもつ。口縁部は端部が平らに欠損し、内外面が薄く黒変する。2は床下掘り方調査中に正位で出土した曾利式土器の底部付近で、埋甌の可能性がある。胴部上半を欠き、また底部は打ち抜かれたよう貫通する。3～4本単位の沈線により区画された中に蛇行沈線を示す。

〈4号竪穴〉(第59図、図版27)1は折返し口縁をもつ壺。2は小形壺で、口縁部が中折れした形態をなし、外側は横位ハケメとする。内外面の煮沸による黒変が著しく、外側は被熱により剥離している。3は高杯で、外側は縦位ナデ(磨き)が顕著である。直径1.4cmの孔を推定3孔もつ。4は石鏃。5は使用痕のある剥片で、石匙あるいは搔器か。

〈5号竪穴〉(第59図、図版27)1は磨斧で尻部は細く尖り、側面形は薄く反る。刃部を欠損する。

〈6号竪穴〉(第59図、図版27)1は折返し口縁の壺。2~4は刻みをもつハケメ甕。2・3は外面が薄く変色する。4は胴部下半を欠き、上半は一層する小形甕で、外面上半と内面が黒変する。5・6は台付甕脚部で、5は内面が著しく黒変する。

〈7号竪穴〉(第60図、図版27)1は壺底部。2は壺あるいは鉢で、内外面、底部外面も磨きが良好な点から鉢とみられる。全体に黒味があり、黒色化された可能性がある。3~7は墨曜石の石鎚で、8は石鎚の可能性のあるチャート製石器。9・10は打斧で、9の裏面は自然面となる。10はやや脆く、刃部は鈍化している。

〈8号竪穴〉(第60図、図版28)1は単純口縁の球削壺で、胴部外面、内面下半が薄く黒変する。また外面には褐色味の強い部分があるほか、黒斑も見られる。2は直立気味の口縁をもつ小形甕で、外面上に使用痕は認められない。3は底部中央に1孔をもつ瓶で、孔の直径は1.6cmを測る。外面に黒斑があるが、煮沸痕はない。4は甕。5は小形甕で、折返し口縁をもち、指頭痕が残る。外面は薄く変色する。6は小形壺。7は刻みをもつハケメ甕。8は高坏口縁部か。外面にわずかに赤味があり、赤彩の可能性がある。内面は変色する。9は高坏脚部で、外面のナデは丁寧だが、内面の調整は粗く、胎十中に人粒の跡が多数見られる。10は台付甕脚部で、内面は黒変する。11は石鎚、12は墨曜石核。

〈9号竪穴〉(第61図、図版28)1は球削壺で、台付か。内外面胴部下半が煮沸により黒変する。2は壺口縁部。3は肩部繩文帶上に粘土円文を貼付した弥生壺。繩文帶は疑似繩文の可能性があり、上下端を粘結繩文で区画する。磨かれた無文部は赤味があり、赤彩かもしれない。4は器台で、外面を放射状に磨く。5は台付甕脚部で、内面黒変する。接合面で平らに破損している。6は壺底部で網代痕をもつ。7は押圧縫文をもつ壺口縁部で、口縁部にも押圧を加える。8は石鎚。9は石匙で貝岩製。10は打斧。

〈10号竪穴〉(第61図、図版28)1は小形甕で、外面の磨きは良好である。2は台付甕脚部。3は小形台付甕脚部で、内面は著しく黒変する。

〈11号竪穴〉(第61図、図版28)1は刻みをもつハケメ甕。2は壺底部。

〈12号竪穴〉(第61・62図、図版28・29)1は折返し口縁の壺。2は単純口縁の壺で、表面の調整はやや粗である。3は壺胴部で、外面のナデ(磨き)は良好。4

は複合口縁の大形壺。全体に脆弱で、胎上には褐色の砂岩質角礫を多量に含む。東海系の大崩式か。5は複合口縁壺で、口縁部に8本の縦位沈線文を描く。6も複合口縁壺で、3本以上の縦位沈線文を描く。内面にごく薄く赤彩の痕跡があり、外面にも赤味があることから、内外面赤彩された壺であった可能性がある。7は複合口縁に縦位粘土隆線を2本貼付した壺で、胎土は褐色の大粒角礫砂岩を多量に含み、色調は黄色で極めて特徴的である。東海系、大崩式の搬入品であろう。8~11はハケメ甕で、8・9は刻みをもつ。9は口縁部外面が黒変する。10は頸部の脇曲がやや強いハケメ甕で、外面にススが薄く付着する。11は全体的に脆弱で、表面の溝整痕がわかりにくい。12~14・18・19は台付壺底部～脚部。12は内面が黒変する。15・16は高坏。15は脚部に径0.7cmの孔を3つもつ。内面は薄く黒変する。16はやや脆弱な高坏で、脚部に径1.3cmの孔を3つもつ。外面には薄くススが付着する。17は木葉痕をもつ甕底部で、使用痕はとくにない。20・21は高坏。20は中央に貫通孔をもつ高坏(器台)で、脚部には径1.1cmの孔が3つ貫通する。21は内面が黒変した高坏で、脚部には0.9cmの孔が4つ開く。22・23は小形台付土器。22は器台、あるいはミニチュア土器か。23も台付甕のミニチュア土器とも考えられる。24は小形壺口縁で、直立する。25は甕で、極細の無筋繩文帯を結節繩文で区画し、円文3個を貼付する。外面にはかすかに赤味があり、赤彩の可能性もある。26は半たい棒状鉄製品。27は石鎚。28は打斧で刃部側を欠損する。

〈13号竪穴〉(第63図、図版29)1~8は繩文中期の深鉢で、曾利Ⅲ~IV式を中心とする。1は頸部無文帯と思われる大形深鉢で、低隆帯によるモチーフ周囲に縦位竹管文を施文する。2は区画内を4~5本単位の櫛齒条線でハの字状に施文し、蛇行沈線文を垂下する。外面薄く変色。3は竹管文で斜行条線を描く土器で、内外面黒変する。4は2本単位の区画内を縦位基調の8本程度の櫛齒条線で埋める。5は曾利V新段階。6は縦位の櫛齒条線地文に蛇行沈線を垂下する。同一個体破片が胴部の括れ付近まで存在する。7は唐草文土器で頸部には渦巻文沈線内に刺突文列を描き、胴部には条縞地文に沈線文で施文する。胎土はさほど違和感がない。8は打斧で、やや細身である。9は稜磨り石で、図の右側縁が平らに潰れるほか、表裏面、そのほかの側縁も摩耗する。10は凹み石としたが、大形で台石の部類であろう。11は磨斧で、刃部片。硬質、緻密である。12は石鎚で、裏面を剥離面とする剥片鎚。

〈15号竪穴〉(第64~66図、図版29~31)1~39は繩文

中期後半の深鉢。1は推定4単位の把手をもつ土器で、胴部文様帯は横S字文を3単位構成とするらしい。胴部上半が薄く変色する。2は4単位の腕骨文をもつ深鉢で、区画内には横位櫛歯条線の中心に波長の短い蛇行沈線文を垂下する。底部外面には網代痕が付く、灰が付着する。内面はナデ（磨き）が良好で、一部黒変する。3は肥厚帯口縁の深鉢で、胴部には竹管条線文を斜位に施文する。内面底部付近は黒変する。4は頸部無文帯をもつ肥厚帯口縁の深鉢で、内外面が薄く黒変する。5は縦位条線を基調とする深鉢で、口縁部のつなぎ弧文が5単位で、胴部は単位数不明である。外面は薄く変色する。6はつなぎ弧文の深鉢で、胴部は3本線の区画内に竹管文で羽状条線文を施文する。内面には部分的に赤味があるが、赤彩ではないらしい。7は胴部区画内に羽状の竹管条線とするつなぎ弧文の深鉢。8は肥厚帯口縁の深鉢で、肥厚帯部が厚く古手である。9は曾利IV式の大形深鉢で、区画内は羽状の櫛歯条線文とする。10は胴部区画の単位数が不明ではあるが、5～6程度とみられ、各区画は細長くなっている。その中の櫛歯条線は斜位に施文する。12の底部は網代痕にナデを加えている。13は一対の突起をもつ小形深鉢で、片方は大きく、反対側は小さい。低隆帯による区角内は縦位条線文を基本とするが、一部斜行している。14は胴部上半が薄く黒変し、内面が黒変した深鉢で、胎土中に褐色の砂粒を多量に含む。15は縦区角を示す沈線施文後、櫛歯条線を引き、さらに粘土紐を貼付するもので、粘土紐には押圧を加え、蛇行粘土紐を意識した施文とする。内面オコゲ付着。16はやや脆弱な土器で、4単位の波状口縁をもち、2本単位の沈線で胴部区画を行う。内外面の一部に黒変がある。櫛歯条線は弱く、横位、あるいは斜位に施文する。21は条線地文上に蛇行粘土紐を多数垂下した土器。25～28は区画内にハの字沈線を施文した曾利V式土器。26は外面上半が薄く黒変する。25は波状口縁の深鉢で、区画文の構成は26と類似する。外面上半が薄く黒変し、長石粒を多量に含む胎土である。27は小形台付深鉢で、脚部は孔が5ヶ所あり、胴部は7単位の区画文となる。そのうち正面にあたる縦区画上端の口縁部には角状突起が2つあり、突起上部には穴が開く。内面は黒変し、外面は赤変している。28は砂粒・安山岩粒と思われる礫を多量に含む特徴的な胎土を示す。内外面薄く黒変する。29は区画文と渦巻文のみで、区画内は無文とし、口縁部はわずかに波状をなす。31～33は口縁部に横位の沈線文をもち、ほかは無文とする深鉢で、在地的な土器といえる。30の外面はスヌで黒変する。31は外面上半、内面下半が黒

変した深鉢。34は2本単位の区画の沈線文のみが残る深鉢で、内面は煮沸により黒変する。36は口縁部に竹管文で重弧文を描く。37は地文を短沈線の刺突文とするつなぎ弧文土器。38は地文を縦位の無節縄文とし、上に蛇行沈線文を描くつなぎ弧文土器。39は縄文地文に細い半截竹管文で連弧文を口縁部に描いた土器で、東海系の咲焼式に類似するが、胎土は在地であろう。40は中期初頭、五領ケ台式土器。41は壺底部で、44のような有孔鉢付土器の底かもしれない。42～48は鉢で、42は内面にオコゲ痕をもつ。胎土には丸味のある砂粒を多く含む。44～46は鉢付土器で、44は内外面をよく研磨した有孔鉢付壺。45・46には飼に孔がない。47は底部に渦巻文をもつ特殊な土器である。器種は飼付壺であろうか。内外面変色する。49・50は鉢で、49はL口縁部に沈線を1条もち、31～33の深鉢とセット関係を示す。50の底部角は丸く擦り減っている。51は土製円板、52～58は打斧で、56の刃部にはスレによる摩耗がある。58は表面が風化した真岩で、打斧ではなく搔器かもしれない。59は磨斧で、刃部は欠失する。60～62は凹み石、63・64は磨り石。60は表裏面のほかに左右、上下側面も使用している。とくに団の表面側は磨きが顕著で、裏面には磨り痕は弱いが凹みがある。全体的に薄く黒変する。61は表裏面に凹みをもつが、片手で持てる大きさ、重さではなく、台石として利用したのではないか。62は割れた凹み石で、両面のほか側縁を使用面としている。薄く黒変する。63は全体的に磨り面となるが、とくに団の右側縁が平らに磨り減り、稜磨り石的に使用されたらしい。65は石棒だが、団の裏面側がやや磨り減っていて、磨り石となる可能性が高い。66は石皿で、皿面は浅いが全体に厚みがあり、裏面には凹みが多数ある。67～72は黒曜石製の石鏃で、72は薄い剥片鏃。73は剥離痕のある剥片。74は黒曜石の石核で、三角錐状を呈し、裏面は平らで自然面をなす。

〈16号堅穴〉(第69図、図版31)1・2は縄文中期末、3は中期初頭の土器片。4は打斧刃部。5～7は黒曜石製石鏃で、6は剥片を利用した剥片鏃。

〈17号堅穴〉(第69図、図版32)1・2は中期後半の深鉢。3は後期注口土器胴部か。1は2本単位の低隆帯でモチーフを描き、縦位の櫛歯条線を埋める。4はX把手壺で、2本単位の低隆帯周辺を縦位沈線で埋める。5～7は押型文土器。5は山形文で、内面は黒変する。6は無文帯を挟む横位の山形文。7は横円文の底部で、内面は黒変する。8は凹み石で、浅く緩やかで径の大きな凹みが表裏両面にある。側面の一部に敲打痕がある。9は打斧刃部。10は風化した真岩製で

石器形石器としたが、おそらく左側をつまみとする石匙であろう。11は石鍬。

〈18号竪穴〉(第70・71図、図版32)1～7・14・15は縄文中期後半、深鉢。1は1号埋甕で、胴部下半と口縁部の一部を欠損する深鉢。口縁部のつなぎ弧文は6単位、胴部の横S字文は横幅が不均一だが3単位となる。櫛歯条線は縦位を基調とする。2は斜行文土器で、口縁部は斜行文、胴部は7本の蛇行沈線文を垂下し、間に羽状の竹管条線を施文する。内面下半は黒変する。3は横S字文をモチーフとする深鉢で、低隆帯は1本と2本が混在する。櫛歯条線は縦位。胴下半が赤変し、上半と内面が黒変する。底部は網代裏。4は羽状条線をもつ胴部で、隆帯で区画する。内面変色する。5は肥厚帯口縁をもつ深鉢で、口縁部には渦巻文が並ぶ。胴部には縦位条線文を地文とし、沈線文によるモチーフを施文する。15号竪穴内より接合はしないが同一個体片が2点出土している。4は縦位条線文上に蛇行沈線を垂下する。焼成不良で軟質。15は1号埋甕内出土の底部で、1号埋甕とは別個体である。内面黒変する。8～11は押型文土器。8は山形文で、横位に無文帶を挟んで施文する。10は丸味のある捺円文。12は18号竪穴内、26号土坑から横位で出土した土器。時期不詳の深鉢で縄文を縦位に施し、被熱により脆く変色している。胎土から推測すると早期撲紋期とも思えるが、平底であることからおそらく中期後半だろうと思われる。13は台石で、使用面の表面が摩耗している。16は石鍬。

〈19号竪穴〉(第71・72図、図版32・33)1～8・10・11は縄文中期後半、深鉢。1は肥厚帯口縁の土器で、口縁部は推定4単位の突起をもち、胴部には一部連結した渦巻文を4単位もつ。区画内は斜位の竹管条線文で埋める。内面の黒変が著しい。2は低隆帯によるモチーフをもち、周辺を縦位条線で埋める。3は1号埋甕で、底部を欠損する。現状高は45cm。9単位の文様帯で、各区画は羽状竹管条線文内に蛇行沈線文を垂下する。外面胴部が黒変、底部付近が赤変、内面底部付近が黒変する。4は肥厚帯口縁、頸部無文帯をもつ深鉢。6は炉内出土の破片を主とし、大柄な横S字文とみられるモチーフが展開し、縦位の櫛歯条線で埋める。低隆帯上や一部の区画内には刺突文を施文する。8は斜行文土器で、竹管による斜行文、胴部縦位条線文を施文し、蛇行粘土紐を20本垂下する。頸部にはいくつかの単位文があるが、単位数は不明。外面胴部付近、内面下半が薄く変色する。9は炉内出土の小形深鉢で、推定2単位の横S字文をモチーフとする。低隆帯は1本で、縦位条線となる。底部外面には灰が

付着し、外面上半が黒変、下半が赤変、内面は下半を中心に強く黒変する。11は4単位の胴部文様をもつ深鉢で、区画内には縦位櫛歯条線地文の中央に蛇行沈線文が垂下する。内面は薄く変色する。10は壺形土器で、口縁部が長く直線的に立ち上がる。13は浅鉢。14・16は土製円板。15は押型文土器。17は磨り石で、磨り面はあまり顯著ではない。18は凹み石で、半円球状をなし、表裏面に凹面がある。裏面は中心軸線上に線状の凹みが形成されている。表面は薄く黒変する。19は棒状自然縫で、両端にかすかに叩き痕があり、側面には磨り面がある。20は磨き石で、縦全体が摩耗するほか、岡下端にやや粗い磨り面が生じている。21は真岩製の剥離痕のある剥片で、裏面は自然面となる。石核か。23～25は石鍬で、いずれも剥片鎌で作りが稚拙である。

〈20号竪穴〉(第73～77図、図版33～35)1～26・31・37～39は縄文中期深鉢。1はつなぎ弧文の深鉢で、口縁部に2条単位の隆線文をもち、胴部には2本単位の沈線で7単位に区画し、各区画内に羽状沈線文を施文したのち蛇行沈線文を垂下する。胴部下半が黒変し、下半は赤変する。2は推定3単位の突起をもつ深鉢で、胴部文様は2単位の横S字文を2条の低隆帯で表現する。条線は縦位竹管条線。外面上半、内面が薄く変色する。3は頸部文様帯として渦巻区画文をもつ珍しい土器で、胴部は低隆帯による渦巻文とする。単位数は不明。地文は頸部文様帯内を縦位条線、胴部を斜位条線とする。5はつなぎ弧文の土器で、口縁部文様帯は太い沈線で、胴部は竹管文で縦位条線を施文する。6は肥厚帯口縁で頸部無文帯をもつ大形深鉢。7はつなぎ弧文土器で、胴部は斜行する竹管文を条線状に施文する。8はつなぎ弧文土器で、低隆帯区画内に縦位の竹管文を施文し、蛇行沈線を垂下する。9は竹管文による重張弧文土器で、蛇行粘土紐を垂下し、頸部は斜位に短い粘土紐を貼付する。10は肥厚帯口縁の土器で、胴部は竹管による縦位条線とする。11は5単位のX把手をもつ甕で、胴部文様は2条単位の低隆帯による横S字文をモチーフとし、縦位の竹管条線を地文とする。外面胴部付近が薄く黒変、内面全体が変色し、煮沸に使われた可能性がある。12は5単位のX把手をもつ甕で、胴部の横S字文は2単位。2条の低隆帯で焼き、縦位櫛歯(竹管)条線による条線地文とする。外面胴部、内面底部付近が薄く黒変する。13は縦位櫛歯条線地文の深鉢で、低隆帯で区画する。17は低隆帯による区画内に縦位の竹管文で条線を施文し、内外面黒変する。18はつなぎ弧文の土器で、胴部区画内は横位条線とする。19は半截竹管を用いた羽状

沈線文を継位に施文した上にX状に隆線文を貼付し、隆線上に半裁竹管で押引きする。地文のあり方は唐草文土器と共通するが、文様構成は異質で、曾利式土器により近い。外面は薄く黒変する。20は4単位のX把手壺で、胴部には4単位の渦巻文を低腹帶で描き、継位の櫛目条線を地文とする。内面は煮沸痕はない。22のX把手壺は地文を短沈線とする。25は波状口縁で、区画内には櫛目条線を斜行、一部羽状に施文する。26は頸部無文帯をもつつなぎ弧文の土器。30はX把手を相対して2ヶ所もつ鉢で、頸部は2本の横位隆帶間を陰帯で7区分したあと、把手を付ける。各区画内は継位の竹管条線とする。内面は赤変、外面は暗褐色に変色する。31はつなぎ弧文の深鉢。2本単位の粘土紐で推定8単位の口縁部文様帯を構成する。弧の部分は、逆の字状の下に逆じ字状の粘土紐を貼付するもので、各弧から竹管文による蛇行沈線文が垂下し、頸部では横位の蛇行沈線文と交差して田の字状文となる。縄文はLRの単節縄文を斜位に施文する。内外面の煮沸痕はほとんどない。32・39は斜行文土器。33は胴部区画内に竹管で継位条線を施し、2本単位の蛇行沈線文を垂下する。34は指円押型文土器口縁部。35は須恵器高环、あるいは壺、27は釣手土器。28は壺形土器、29は器壁が薄い有孔釣付土器。28は1本低降帯によるモチーフで、継位条線で埋める。内面黒変し、底部は角が摩耗する。30は鉢形土器。36は土師器壺か。40は土製円板。41は磨斧尻部で全体に褐色の銹で覆われる。42~44は凹み石。42は表裏面のほか両側面にも凹みがあり、計4面の凹み面をもつ凹み石で、上下両端には敲打痕が著しい。43は凹み石としたが、欠けで生じた凹みらしく、磨り石とすべきか。44は表裏2面のほか、両側縁がわずかにくほんだ凹み石。45・47は磨り石で、45は全体的に磨り面となるが、とくに岡右側縁が半らに磨り減った磨り石で、薄く褐色に変色する。46・48は打斧。47は小さな円鏃で、表面の磨きが顕著であり、さらに上下両端に磨り面が形成されていることから磨き石としておく。49は白石（多孔石）で、表面1面にのみ凹みが数個ある。

(22号竪穴) (第77図、図版35) 1は台付壺で、全体に被熱による赤味があり、外面の文様は薄く剥離している。内面はハケメ調整のように図示されているが、ヘラによるナデである。

(23号竪穴) (第77図、図版35) 1は小形台付壺で、外面は継位を基調としたハケメ調整を施し、外面下半は薄く変色する。

(24号竪穴) (第78図、図版35) 1はS字台付壺で、肩部には右上がりの斜行竹管条線に横位竹管条線を施

する。内外面の黒変は著しい。2は単純口縁の球頭壺で、器壁は薄く脆弱。外面胴部中央が赤変、下半および内面が黒変する。3は折返し口縁の壺で、口縁部に刻みがある。図示されていないが、内面はハケメ調整される。4・5は小形壺。4は折返し口縁の壺で、外面調整は粗く、焼成もやや悪い。また底部外面は摩耗し、内面は薄く黒変する。5はほぼ完存する小形壺で、底部外面はハケメで調整する。6は緻密な砥石で、砥石面は4。

(26号竪穴) (第78・79図、図版35・36) 1~3は中期後半の深鉢。1は胴部に無筋縄文を施し、口縁部はつなぎ弧文内を継位櫛目（竹管？）条線とする加曾利E系土器（曾利加曾利E折衷上器）である。2は腕骨文をもつ深鉢胴部だが、羽状条線文の中央に粘土紐を垂下する点は珍しい。外面はススで黒変する。3は剥離のため文様がわかりにくくなっているが、肥厚帯口縁の小形深鉢で、外面にススが付着し、内面は黒変する。4は炉体土器で、胴部上半を欠く。底部直上の横円区画文は4単位、胴部は垂下隆線をはさんで2単位となるらしいが、サンショウウオ文のようなひとつのモチーフかもしれない。1単位の横円区画文は縄文+横位沈線、縦位沈線、縄文、縦位沈線と、A+B+A'+Bとなる。また横円区画をつなぐ上の隆線は、直径で2分するように縄文と半裁竹管押引文となるなど、文様構成が2大別、4細分となる。地文は継位施文の縄文である。胴部上半は黒変し、内面底部付近にはオコゲが付着する。5はX把手の付く鉢で、内面は薄く変色する。7是有孔釣付壺で、内面は変色する。8は磨り石で、裏裏面の側を凹み石として使用し、稜側縁および表面の2面の計4面を磨り面として使用した磨り石。9は小形の石鎚で、刃部が鎌歎状を呈す。10は横刃形石器で、打ち欠きにより粗い刃部を形成している。

(27号竪穴) (第79図、図版36) 1は土師器壺。2は押型文土器で、表面に粗大楕円文、裏面に斜めの押印文が付く高山寺式土器。表面は網目状捺糸文のようにも見える。

(28号竪穴) (第79図、図版36) 1は縄文後期深鉢。2は前期初頭の横維土器で、推定口縁部には幅広の押圧降帯が巡り、内面調整は非常に粗い。3は凹み石で、凹み面は2。

(29号竪穴) (第80~82図、図版36・37) 1~19・21~27は縄文中期後半の深鉢。1は肥厚帯口縁で頸部無文帯をもつ大形深鉢。2は胴部継位条線とする小形土器で、口縁部は推定3単位の突出をもつ肥厚帯口縁となる。底部は網代灰にナデを加えて擦り消している。内

面底付近が黒変する。3は4単位の胴部文様をもち、把手は4あるとみられるが、2つが環状把手となるらしい。半截竹管による綾杉条線文中央に蛇行沈線文を施文する。内面は著しく黒変する。4はわずかな高まりをもつ低隆帯により胴部に3単位の文様をもつ土器で、各文様は腕骨文の左側が伸びて満巻になる。文様区画の割り付けは均等ではない。条線は竹管状工具による斜行線文である。外面上半と内面下半が煮沸により変色している。5は竹管状工具で区画内に綾杉文を施文した小形土器で、区画数は7である。内外面が薄く黒変する。6は加曾利E系土器で、縄文地面上に蛇行渦文を垂下する。7は3単位の腕骨状降顎文をもつ小形深鉢で、腕骨文の上部に環状把手がそれぞれ付き、上から見ると3単位の把手となる。区画内は綾杉状条線となり、中心に蛇行渦垂沈線文をもつ。内面は磨きが良好で、底部には木葉痕が認められる。23は斜行文土器で、口縁・頸部に斜行線文を半截竹管により施文し、胴部を縦条線文とし、波長の長い蛇行粘土紐を貼付する。内面にオコゲが付着する。26は口縁部に粘土紐による連結渦巻文を施文した在地的な土器で、胴部は縦条線文とする。外面にススが付着する。28・29は浅鉢。28は口縁部に1条の沈線を施文し、底部には網代痕がある。30・31は小形土器鉢。33は折返し口縁の亞。32は山形文の押型文土器。34は五箇台式期の土器把手で、顔面把手状である。35は土偶。左胸・脚部片で、中心の断面には接合帯がみられ、胴部から脚部に相当する棒状粘土2本を接合した分割塊製作技法を示す。正面、正中綫を太い沈線で表現し、脇部周囲の文様を細い沈線で描く。36は石棒状の叩き石で、団裏面側がやや平らになる。表裏面には小さな凹みもあり、凹み石とすべきかもしれない。37は凹み石で、凹み面は2。38・41は磨り石、37・39は凹み石。38は磨り石で、磨り面は薄く黒変し、裏面は欠損する。39は両面および左側面に凹み面がある凹み石。角閃石が浮き上がりてザラザラした手触りである。41は右側縁を使用面とした磨り石で、稜磨り石の部類とみられる。40は棒状自然縁で、両端に叩きをした敲打痕が認められる。42は石礫で裏面は剥離面となる。

(30号竪穴) (第82・83図、図版38) 1~7は中期前葉~中葉、藤内式~井戸尻式深鉢。1は環状把手をもち、口縁部と頸部間の加曲部は、いわゆるシャンブーハット状の張り出しとなる。2は円筒状の上器で、頸部には横円文内に竹管押引文をもつ。6は小形土器で、内面が黒変することから実用品として煮沸に使われたことがわかる。胴部文様帶は2面構成で、垂下文

と逆J字文からなる。口縁部には突起が剥離した痕跡が1か所ある。8は浅鉢。9・10・12~14は磨り石。9は表面を磨り面とした磨り石で、裏面は欠損する。ごく小さな凹みがある。10は右側縁を使用面とした稜磨り石で、表面には浅い凹み面があり、裏面にも使用痕がある。11は凹み石で、凹み面は表面1面のみだが、裏面にも使用痕がある。12は4面を使用痕とした磨り石で、断面形は隅丸方形となる。表裏面には浅い凹みもあり、凹み石としても使われたことがわかる。13は球弾状の磨り石。14は全体に研磨されたような穂で、磨き石としておく。周縁には褐色の錆状付着物がある。15は石鎧。16は打斧で、刃部は使用により鈍化しているが、表面のスレが顯著である。

(31号竪穴) (第83・84図、図版38) 1は縄文中期後半、深鉢。2は小形壺形土器で、ともに混入。3・4は壺形土器。3は高さ推定25cm程度で、外縁部を継位、胴部を横位ハケメとし、その上から縦位ナデ(磨き)を加えている。4は3に類似し、縦位ハケメ上に縦位ナデ(磨き)を加えたもので、3とは大きさ、胎上がりが異なる別個体。5・7~9は壺で、5はハケメというよりはナデで調整する。6は台付壺脚部。7は口縁部を継位、胴部を横位にハケメ調整した球頭の壺。9の外面上には薄くススが付着する。

(32号竪穴) (第84図、図版38) 1は縄文中期・曾利Ⅲ式期のX把手を2単位程度もつと思われる鉢形土器で、外面は薄く変色する。2・3は深鉢。4・5は山形文の押型文土器。6は高坪脚部で、外面に赤彩が残る。内面についてはやや赤味があるが赤彩の有無は不明。7は半球状の磨り石で、表面の平らな面が磨り面として使われたらしいが、半球面も滑らかである。8は石鎧。

(33号竪穴) (第85図、図版39) 1は中期中葉、浅鉢。2~4は押型文土器。2は山形文で、口縁部には横位の施文帯の下を無文帯とする。外面は薄く黒変する。3は梢円文で、埋甕(5)内出土。4は山形文の尖底部で、内外面は変色し、内面には剥離が見られる。5は埋甕に使われた円筒形の深鉢で、口縁部を欠くほかは完存する。胴部には6単位の籠齒状文をもち、区画内は卡抱き三叉文となるが、ひとつはJ字化して正面観を意識している。頸部は2段の梢円区画文で、単位数は推定6。胴部下半は細かな縄文帯で、摩耗が著しい。6は早期末~前期初頭の繊維土器で、口縁部には太い押圧隆帯が巡り、内外面に条痕文が認められる。外面はとくに黒変する。8は極小の石鎧で、先端を欠く。9~12は凹み石。9は凹み面が表裏2面あり、そのほか右側縁を中心に側縁に磨り面としての使用痕がある。

認められる。10は凹み面が2面で、周縁には敲打痕がある。11は浅い凹み面が2面あり、裏面が磨り面としても使用されているらしい。12は表裏2面に凹み面をもち、裏面の凹みはごく浅いが磨り面に併用され、顎者な磨き面が認められ、黒変する。側面はほぼ全周が平らに整形され、何らかの使用面として用いられている。

(36号竪穴) (第86・87図、図版39・40) 1~9・13~16は中期後半の深鉢。1はY字状の低隆帯による区画文をもつ曾利V式土器で、胎上には角の取れた人粒砂岩、褐色粒を多く含む。外面は薄く変色する。2は低隆帯による区画内を継ぎ条線文施する土器で、外面上半が薄く、内面全体が濃厚に黒変する。3は継ぎ条線地文の小形深鉢で、口縁部内面に沈線を1条もつ点が珍しい。内外面は被熱により変色する。4は縄文地文に蛇行沈線文を施する小形の加曾利E系深鉢で、外面は被熱により摩耗するが、内面は継ナデがよく残る。5は脇部羽状条線を半裁竹管文で施す。6は櫛歯条線文を施す深鉢で、内面にはオコゲが付着する。7は無範縄文を横位施し、中央に細かい波長の蛇行沈線文を垂下する土器で、外面は薄く黒変する。9は曾利I式の水煙文土器突起で、中空。10は鉢で薄い。11は把手をもつ壺で、有孔鉗付上器の変形であろう。12は壺とみられ、底部は平らに擦り減り、穴が開いている。13は底部にかすかな網代痕をもち、ナデにより消している。14は底部外面が赤変、内面が黒変する。15は曾利I~II式期の底部で、網代痕をもち、内面は黒変する。17は把手付鉢で、底部は摩耗し、破片周間に被熱痕があり、内面の一部に断定できないが赤彩らしい赤味がある。18は上偶で無文だが、腹部の突出、かかとの表現が見られる。19・20は小形土器。21は炉の北東隅に立てられていた石棒。頭部は平らでやや瘤み、円柱状を呈し、側面は敲打のち研磨により仕上げているとみられるが、幅約3cmで綴に細長く研磨された面がある。下両面は破損面となり、再調整したような形跡はない。側面には一部薄く黒変している。22・23は磨斧。22は刃部片で、蛇紋岩類を用い、23よりは鋭利である。23は上端部が欠失しているが、欠損面を研磨して再調整している。24は磨り石。25・26は凹み石。24は役磨り石で5面の磨り面をもつ。25は表裏面のほか左側面の計3面に凹み面をもち、右側面は敲打面となる。26は2面の凹み面をもつ凹み石。27は横刃形石器で、裏面を自然面とする。28・29は石礫。

(37号竪穴) (第87図、図版40) 1は中期後半の深鉢。2は時期が定かではなく、一応曾利式期の鉢としてお

く。内面は著しく黒変する。3は凹み石で、凹み面は表面1面のみだが、裏面も何らかの使用面に利用している。

(38号竪穴) (第88図、図版40) 1・3~5は縄文中期後半の深鉢。1は曾利I~II式の長胴壺口縁部で、頸部に斜行沈線文を施した上に蛇行粘土紐を貼付する。3は斜行文土器で、口縁部に半裁竹管で斜行沈線を充填する。内外面黒変。4は加曾利式土器で、渦巻文の部分がやや盛り上がる。5は横施文の縄文地文上に粘土紐を貼付した紐縄文系土器。2は鉢で、多縦文を縦位に施し、内面は全面的に黒変する。6は凹み石で、凹み面は2。圓の下面は磨り面として併用され、上端には敲打痕がある。7は磨り石で磨り面は表裏2面。緻密で、よく研磨され、岡下側にあたる側面の一部に赤味があり、赤色顔料などを磨り潰した可能性がある。

#### 【埋甕】

(1号埋甕) (第88図、図版40) 1は縄文中期後半、曾利式土器で、単独、逆位で見つかった。胴部下半を欠き、現状では高さ26cmを測る。口縁部側は完存する。条線は継ぎの竹管文で、低隆帯で描いた大小の横S字文を主モチーフとする。内面薄く黒変。

#### 【土坑・ピット】

(1号土坑) (第88図、図版40) 1~3はいずれも縄文前期、説磯C式土器。やや細い半裁竹管文で施す。

(12号土坑) (第88図) 1は剥離痕のある剥片。

(27号土坑) (第88図、図版40) 1は白石で、表面が摩耗する。

(33号土坑) (第88図、図版40) 1は磨り石で、磨り面は2。左右両側縁も平らに潰れている。

(49号土坑) (第89図、図版40) 1~3は縄文中期初頭の五領ヶ台式土器。1は胴部に矢羽根状の横位文様帶下に継ぐ区画の文様帶があり、いずれも半裁竹管文で施す。外面上半と内面が薄く変色する。2は波状口縁頂部につく突起状の装飾で、外面上ススが付着する。3は大形深鉢で、縄文地文に押庄隆線を貼付し、胎土には雲母を多量に含む。4・5は中期後半深鉢。6は搔器。

(59号土坑) (第89図) 1は無文鉢で、底部は中央がやや丸味を帯び、角が摩耗している。内面中央が黒変する。

(60号土坑) (第89図、図版40) 1は粗大格円文、もしくは斜格子文の押型文土器であるが、網目状撚条文のようにもみえる。裏面には斜めの太い沈線状押庄文の一部があることから、高山寺式土器である。角礫状の

大粒長石粒を多量に含む特徴的な胎土である。

〈62号土坑〉(第89図、図版40)1は台付壺脚部で、内面は薄く黒変する。2・3は小形壺。3の頸部には一部赤彩が残り、内面は褐色に変色する。4は薄手の縄文前期初頭の土器で、表面には条線らしい文様を施し、裏面には指痕痕が残る。右側割れ口近くに補修孔がある。

〈63号土坑〉(第89図、図版41)1は中期後半、深鉢。2は石器で茎のある剥片鐵だが、作りは粗雑。

〈66号土坑〉(第89図、図版41)1・2は中期後半、曾利式土器で、同一の可能性が高い。6~7本単位の櫛歯条線により縦位条線を施し、蛇行沈線を數本垂下する。外面薄く黒変、内面底部付近にオコゲが付着する。

〈67号土坑〉(第89図、図版41)1・2は押型文土器で、1は山形文、2は格子目文とみられるが、刺突文のようにも見える。2は織維土器である。

〈68号土坑〉(第89図、図版41)1は無節縄文を地文とする深鉢。

〈71号土坑〉(第89・90図、図版41)1・2は深鉢。1は口縁部に4単位の環状把手をもつ深鉢で、胴部に4単位のY字状隆線文、底部上に4単位の楕円区画文をもつ。Y字状文脇にはキャタピラ文がつき、蛇行沈線文を伴う。外面上半は褐色に変色し、内面下半が黒変する。2は胴部に2単位の抽象文をもち、隙間にゾウリムシ状の格円文を施す。外面口縁部、内面底部付近が薄く黒変する。3は浅鉢で、口縁部内面がわずかに段状をなして肥厚する。4は凹み石で、2面のほか側縁にも使用痕がある。2面とも中心軸を通るように凹みが列状をなす点が興味深い。薄く黒変する。

〈74号土坑〉(第90図、図版41)1は壺形土器で、外面には赤味があり、赤彩の可能性もある。外腹が一部黒変する。

〈82号土坑〉(第90図、図版41)1は縄文前期初頭、織維土器で、外面は縄文施し、黒変する。

〈86号土坑〉(第90図、図版41)1は楕円文の押型文土器。

〈90号土坑〉(第90図、図版41)1は土坑上層から出土した底部付近を欠損する現状高約30cmの深鉢で、口縁部のつなぎ弧文は5単位、渦巻文から2本単位で垂下する低隆帯はやはり5単位である。胴部外面上半、内面下半はスス等が付着し黒変する。2は下唇より出土した小形深鉢で、底部が抜けている。2は口縁部に4つの突出があるが、うち相対する2つの突出が大きく、円孔をもち、2単位の口縁部となる。胴部文様は

2単位の横S字文で、外面上半および内面は薄く黒変する。

〈47号ピット〉(第91図)1は黒曜石製石鎌で、断面形が対称ではない。

〈117号ピット〉(第91図)1は石鎌で先端を欠く。

〈174号ピット〉(第91図)1は台付壺脚部。

### 【土器集中区】

〈4区土器集中区〉(第91図、図版41)1・2は壺。1は薄手で脆く、外間にススが厚く付着する。3・4は台付壺。3は脚部破損面に磨きを加えた台付壺で、外外面は薄く黒変する。4は内面黒変の台付壺で、脚部内面に一部赤彩が認められる。2と同一の可能性がある。5は関西系土器の鷹島式土器。

### 【溝】

〈3号溝〉(第91図、図版41)1は土器器坏。内面に薄く渦巻状暗文があり、内外面に薄い赤彩が認められる。2は須恵器坏で、外側は底部付近を回転ヘラ削り調整する。3は高坏。4は折返し口縁の壺あるいは高坏。5・6は壺。6は単純口縁、胴部球胴の壺で、内外面が薄く黒変する。7は壺で、内面薄く変色する。8は高坏で、脚部破損部に3つの孔が貫通する。

### 【風倒木痕】

〈3号風倒木痕〉(第92図、図版42)1は打斧で刃部側を欠く。

〈5号風倒木痕〉(第92図、図版42)1は古墳時代初頭のS字壺で、内外面が薄く変色する。2は壺で、緻密な粘土中に角の取れた大粒の砂粒のみを含み、特徴的な胎土を示す。

### 【遺構外】(第92~96図、図版42~44・47)

1~29は縄文早期土器片で、1~7は楕円押型文、8~13は山形押型文、14・17は市松文、18は粗大楕円押型文、19・24は斜格子文の崩れたもので、一見刺突文にも見える。3は口縁部に横位の山形文、下に無文帶をもち、口縁部には縦位の短い粘土紐を貼付する。4は縦位の細かな楕円文。7は上下の破面に内傾(上下逆とすると外傾)した接合面をもつ細かな楕円文の土器。8は横位の人柄な山形文で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部に刻みをもつ。10は無文帶をもつ山形文土器。14は口唇部に刻みをもつ市松文(ネガ楕円文)。15は口縁部に2段の連続刺突文をもつ土器で、織維土器かもしれない。16・20~22は撚糸文、23は網目状撚糸文、17は石英粒を多く含んだ市松文土器。18は高山寺式土器の可能性のある粗大楕円文土器で、胎土は角のある大きな長石粒を多く含んでいる。19は細かな斜格子文で、破片の割れ口の一部を平らに研磨している。20は厚みや胎土から早期ではなく中期初頭の

撫糸文土器であろう。23は斜格子撫糸文で、内面が薄く黒変し、外縁する接合帯がみられる。24は19と類似した施文具による斜格子押型文土器。25は早期、撫糸文の尖底部で、縦位に撫糸文を施し、底部内面に薄い黒変部がある。26～30は前期初頭、織縦土器。26は口縁部の隆線文が剥離した深鉢。27も同時期で、押圧をもつ隆線の一部が残る厚手の土器。28は縄文地文の織維土器で、角へラ状施文具で沈線文を描く。口唇部にも縄文を施す。29は口縁部が段状となり、縄文を全面に施す前期初頭と思われる土器。30は織維の有無がはっきりしないが、竹管押引文をもつ土器で、前期前半、黒浜式期相当だろう。31・32は早期、沈線文系土器か。31は裏面に貝殻らしき条痕文をもち、表面には円頭の棒状工具により3段の刺突文を口縁部に加え、下に同じ施文具で沈線文を描く。32は31と同じ文様で、裏面にも条痕文をもつ同一個体の可能性のある破片。33は縄文前期、諸磲b式土器。34～36は諸磲c式土器で、36は口縁部に円文のほか垂下降線を貼る。37～39は前期末十三菩提式土器で、37は押圧粘土縫を貼付する。38は沈線による渦巻文に沿って竹管による押引文を施文する。39は背を用いた竹管押引文を充填したいわゆるトロフィー形土器で、雲母、長石を多量に含む。40は中期初頭、五領ヶ台式土器。41は諸磲b～c式期の有孔浅鉢。42は薄手の東海系土器（木島式土器）。屈曲部に押圧隆線文を貼付する。43は中期後半初頭の円筒形を呈した大形長胴壺で、曾利I式期の器形、文様構成をなし、頸部の横位蛇行帖土紐は曾利I式の指標とされているが、幅広のキャタピラ文が残存した珍しい土器である。井戸尻式期末か。44は中期初頭、五領ヶ台式深鉢。45は井戸尻式土器。46は中期初頭、五領ヶ台式土器。48は43とほぼ同形の深鉢頸部付近。49～53は中期後半の深鉢で、47は砂岩の凹縫を多量に含む。54～57は中期末深鉢。54は青灰色の砂粒円錐を多量に含み、外面上半が薄くスズで黒変し、内面は黒色化する。54は低錐帶でY字状区画文を施文する。ハの字文は浅く弱い。58～60は後期前半の深鉢。58は口縁部に圧痕降帯をもつ壺之内式期の粗製土器で、横位削りが見られる。61は晩期かと思われる深鉢。62は折返し口縁の大形壺。63は複合口縁の壺。64は壺。65は高壺で、図ではハケメ状の調整痕として描いているが、実際はナデ状の磨き痕である。66・72～74は壺。73は造橋外より單独正位で出土した壺で、薄く、内外面ともに器壁が荒れている。出土土地点は2号掘立115号ビット脇である（第45図、図版22

- 3）。74は底部に縄状圧痕、豆状圧痕をもつ。内面は黒変する。75は脚部模元に直径1cmの孔を3つもつ。67～69はS字窓。70は須恵器壺。71は台付土器脚で、図には表わされていないが、底部直上に縦位条縫文が施文されていることから、曾利式期である。内面は著しく黒変する。75～77は高壺。77は円板状の脚をもつ高壺。78は土製円板。79はミニチュア土器底部とみられる土製品であるが、底部にあたる部分が円形ではなく歪んでいる。80はナイフ形石器で、先端がわずかに欠ける。右側縫と左基部側縫に刃潰しを行う。81～95は石鋤。81は薄手、精巧で、刃部は細かな鋸歯状をなす。85は厚みのある石鋤で、作りは粗拙。88は脚部形態から早期かと思われる。93は脚の長さが左右で異なる。95は有茎歯で、縄文後晩期とみられる。96は錐状。97～103は打斧。97は刃部に摩耗痕をもつ。102は全体に施く、表面は風化している。104は横刃形石器で表面は風化する。105～112は門み石。105は2面の門み面のほか、両側縫も平らに潰れていて、とくに図左側が顕著である。106はやや粗く、凹み面は表裏2面および側縫に1面がある。107は磨り面2のほか左側縫を中心使用痕がある。113～115・117～120は磨り石。108はやや大形の凹み石で、両側縫も凹み状の使用痕がある。表裏面はともに溝状の凹みとなる。109は両面に極浅い凹みをもち、側縫は全周するように面をもつ。110は表裏2面に凹みをもち、側縫（図の左右面）にやや平らになった磨り面が認められる。表面側は一部黒変する。111はやや軟質で、凹み面2。112は表裏2面に凹み面をもつ。両側縫にわずかに敲打痕がある。114は凹み面がほとんどなく、左右両側縫が著しく平らに潰れている。裏面と右側縫が薄く黒変する。115は面としては明瞭ではないが、全体的に摩耗する磨り石。116は砥石。砥石面は表面の1面のみ。117は図の裏面、両側縫に使用面があり、磨り面としてはやや粗い。118は図右側縫が平らに潰れた後磨り石で、他の面に目立った使用痕はない。119は4面の使用面があるが、磨り面としてはやや粗い。120は全体的に摩耗し、断面を含めて全体的に赤味が付着する。121はかすがい状鉄製品。122は鉄製釘。123は不明鉄製品。124は鉄製火打ち金。125は古墳時代の鉄製燭台で、方形の孔を6か所もち、X線写真撮影により側面に銀象嵌が施されていることが判明した（写真図版47）。蛇行縫間に円紋を配したモチーフである。126は銅鏡。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 曽根遺跡出土縄文早期押型文土器の胎土分析

河西 学

#### 1 はじめに

曾根遺跡の縄文時代遺物は、早期～後期の範囲におよぶが、遺物出土量および遺構は中期の藤内式～曾根式に集中する。本遺跡の曾根式土器については、岩石学的手法による胎土分析によって、巨摩山地などに分布する緑色変質した火山岩類で特徴づけられる地元原料を用いた土器胎土の存在が確認されたほか、甲府盆地内の各地で作られたと考えられる土器が搬入されたことが明かとなった（河西2000）。今回は、縄文早期押型文土器が少數ながらまとまりをもって出土していることから、これらの土器の産地と移動を解明することを目的として同様の胎土分析を行ったので、以下に報告する。

#### 2 試料・分析方法

分析試料は、押型文土器12試料である（第2表、図12）。分析方法は曾根遺跡や野牛島・西ノ久保遺跡と同様である（河西2000、2009a）。

#### 3 土器の岩石鉱物組成の特徴

分析結果を第3表に示す。土器中砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を図13に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成折れ線グラフを図14に示す。岩石組成折れ線グラフは、変質火山岩類・玄武岩・安山岩・ディサイト<sup>13</sup>・花崗岩類・変成岩類・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩・苦鉄質岩のポイント总数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。折れ線グラフのピークに基づいて土器を便宜的に

分類した（第4表）。クラスター分析の樹形図を図15に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の11種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した<sup>21</sup>。図15は、本遺跡試料のほか、甲府盆地の河川砂、および早期押型文土器の分析がなされている愛鷹山麓尾上イラウネ遺跡・西洞遺跡の分析結果（河西1992, 1996）と比較したもので、便宜的に1～7の番号をクラスターに付した。岩石鉱物組成の特徴について第3表の分類に基づいて以下に述べる。

##### (1) G類土器 (Nos.1～11)

粒子構成に占める砂粒子の割合（含砂率）は、20～44%と試料ごとに多様である。赤褐色粒子は1.8%以下で低率である。砂粒子における岩石鉱物組成は、花崗岩類・重鉱物が特徴的に多く、石英・カリ長石・斜長石を作り。重鉱物組成では、黒雲母と角閃石とが主体をなし、カミングトン閃石を少量伴う試料が半数を超える。花崗岩類を構成する有色鉱物は、黒雲母・角閃石を主体とし、カミングトン閃石を伴う場合がある。図15では、西洞遺跡の押型文土器Nos.1, 3, 5、縄文土器No.7、燃系文土器No.8、および笛吹川支流河川の河川砂などとともにクラスター3を構成する。岩石鉱物組成において、花崗岩類以外の岩石種の混入がほとんど含まれないことから、G類土器の原料産地は主に花崗岩類分布地域に推定される。しかし、きわめて微量の変質火山岩類・ホルンフェルス・泥質岩・珪質岩などが検出される場合もあることから花崗岩類分布地域の周辺地域も含めて原料産地候補とすることができる。無作為に抽出した試料の岩石鉱物組成がこのように類似性の高い土器で大部分が占められていることから、これらの土器は、同一の産地をもつ類似性の高い土器片の集合といえる。多様な原料産地をもつ土器から構成される西洞遺跡の押型文土器の構成と比較すると、本遺跡の土器胎土の組成は対照的であるといえる。

原料産地は、花崗岩類地域の中でカミングトン閃石で特徴づけられる岩体が候補となる。甲府盆地に分布する甲府深成岩体では、広瀬花崗閃綠岩・三宝花崗閃綠岩（あるいは和田利花崗閃綠岩）、小鳥花崗閃綠岩などでカミングトン閃石を伴う（日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会1988、三村ほか1984）。丹沢岩体では、ハンレイ岩類・古期・中期・新期トーナル岩においてカミングトン閃石を少量伴う（滝田1974、高橋は

第2表 土器の試料表

試料番号	時期	型式分類	器種	部位	地点	備考
No.1	縄文早期	押型文土器	深鉢	腹部	17号、一括	山形文
No.2	縄文中期	押型文土器	深鉢	脚部	18号、3334	山形文
No.3	縄文早崩	押型文土器	深鉢	脚部	18号、3362	縄円文
No.4	縄文早崩	押型文土器	深鉢	脚部	19号、一括	縄円文
No.5	縄文中期	押型文土器	深鉢	脚部	19号、一括	縄円文
No.6	縄文早崩	押型文土器	深鉢	脚部	余区、一括	縄円文
No.7	縄文早崩	押型文土器	深鉢	II幕部	1区、808	縄円文
No.8	縄文早崩	燃系文土器	深鉢	脚部	1区、1388	燃系文
No.9	縄文早期	燃系文土器	深鉢	脚部	1区、2187	燃系文
No.10	縄文早期	押型文土器	深鉢	脚部	1区、2265	縄円文
No.11	縄文早崩	押型文土器	深鉢	脚部	1区、一括	山形文
No.12	縄文中期	押型文土器	深鉢	脚部	1区、一括	格子文

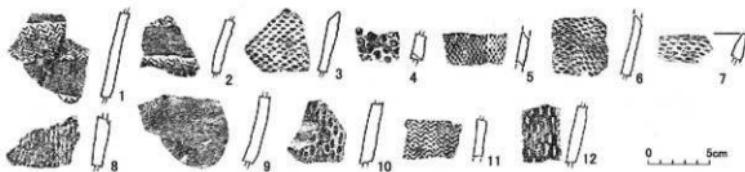


図12 土器試料拓影

か2004)。また長野県から愛知県に分布する領家帶の花崗岩類では、天竜川左岸に分布する生田花崗岩・勝間石英閃綠岩、三河地域に分布する神原トーナル岩などにおいてカミングトン閃石が含まれる(日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会1988、日本の地質「中部地方Ⅱ」編集委員会1988)。G類土器の原料産地は、本遺跡にもっとも近いことおよび後述のように西洞遺跡でカミングトン閃石を含む同様の胎土が確認されていることなどから甲府深成岩体が有力な原料产地候補のひとつであるといえるもの、近畿においても類似した組成の花崗岩類が分布していること、および押型文土器の胎土分析事例がわざかであることなどから、今後のデータの蓄積を待って再検討する必要がある。G類土器は、緑色変質火山岩類で特徴づけられる遺跡周辺地域の地質と明らかに異なることから、嵌入土器と判断される。なお、これらとは別に高山寺式押

第3表 土器胎土中の岩石鉱物(数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す)

試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
石英-長石	173	112	92	78	84	118	135	152	104	90	97	216
石英-長石	22	20	11	21	10	16	14	71	51	6	21	3
石英-多結晶												
カリ沸石	2	1		3	3	17	10	19	18	5	4	
石英石	12	15	42	75	6	17	35	24	177	164	11	345
黑雲母	125	144	206	302	108	53	103	142	150	55	193	35
白雲母												
角閃石	164	197	213	213	145	111	104	101	88	100	112	15
斜長石閃石												
カミングトン閃石	26	9	17	8	4	8						8
葉状輝石	2	2						1	1	1		
斜方輝石												
カシラン石						2	1	3				
鈍鐵石								1				
ジルコン	+											
ツコロ石						+						
絶滅石	7		1	3	1		+					1
不透明鉱物	6	14	8	9	5	8	6	10	2	1	11	8
玄武岩												
安山岩												
ディサイト												8
輝尻岩												
緑色変質大山岩類												
玄武火成岩類	2				1				8	1		28
花崗岩類	62	89	115	142	52	50	152	103	196	447	54	
カルシウムエルス						1	1	1				
片岩												1
他の変成岩類												
砂岩												
凝灰岩												
斑岩												
斑岩												
斑岩												
斑岩												
火成ガラス-無色	1			+	2	1	2	2			4	1
火成ガラス-褐色												
電気石	9	7	1	3	4	6	7	4	5	4	1	18
玄武岩	21	24	34	22	12	6	10	21	9	9	9	6
玄武岩	1	4			13	7	7	2			1	18
その他の												
赤褐色角子	1	5	10	2	8	13	36	14	17	14	8	34
マトリクス	1403	1361	1248	1119	1541	1589	1369	1343	1218	1129	1466	1263
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000
火成運動消光	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
石英消光												
石英斜長石												
バーサイト	+					+	+	+				
マイクロクリン												
ダイオードの熱感応物												b
電気石山岩類	0		0						AB,D	AD		AD,D
佐風呂山岩類有鉱物	b1, on, habi, on, habi, on, habi, ho	b1, on, habi, ho	b1, ho	b1, ho								
火山ガラス形態	A'		B	F	A'	K	K, B	A', C	A, B, C	A		
種々な性質	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+	+
種々な性質												

鉱物: b1: 黒雲母, on: 長石, habi: 倒角消光, ho: 斜長石, a: カミングトン閃石, opx: 平面斜長石, opx: 斜方斜長石

岩石: A: 安山岩, B: バーライト, C: 中間岩, D: 中酸性岩, E: 酸性岩, F: 粒状岩, G: ホルム

火成ガラス消光: A: 滑動型平緩, B: 垂直, C: 中間型, D: 中強度, E: 強烈型緩傾斜, F: 強烈型ボンジ状

布からこの土器片の原料産地は、西日本の花崗岩類地域に推定される。

型文土器片が本遺跡で出土している。肉眼観察によると粗粒の角張った優白色花崗岩類が多く、石英・長石・黒雲母・白雲母を伴う。岩石鉱物組成と高山寺式の分

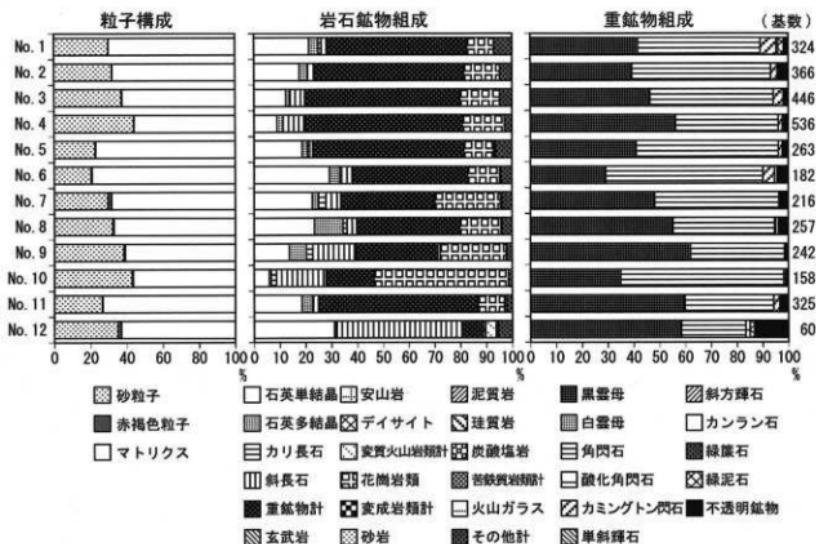


図13 土器胎土の岩石鉱物組成

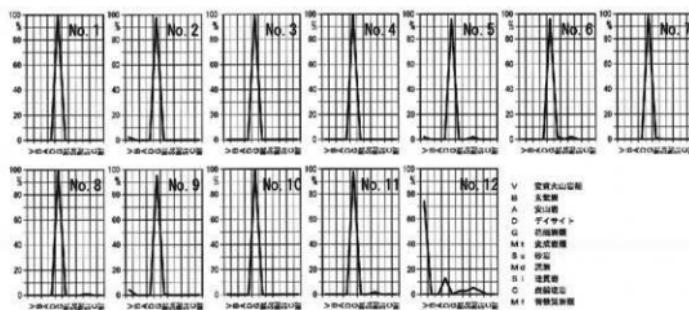


図14 土器岩石組成折れ線グラフ

第4表 岩石組成折れ線グラフによる土器分類

分類	折れ線グラフの特徴	折れ線グラフの特徴	試料番号
V-d類	変質火山岩類の第1ピーク	ダイサイトの第2ピーク	12
G類	花崗岩類の第1ピーク	顕著な第1ピーク	1~11

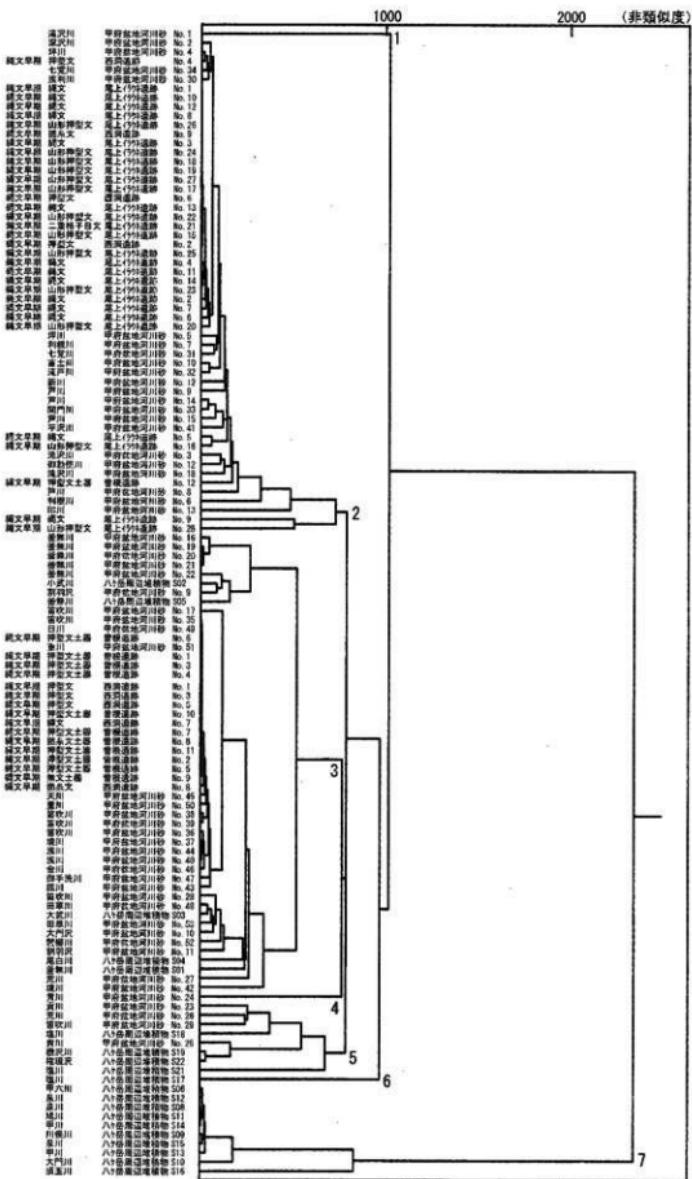


図15 土器と関東地域河川砂とのクラスタ分析樹形図

## (2) V-d 類土器 (No.12)

No.12は、含砂率が35%を占め、赤褐色粒子は1.7%と低率である。岩石鉱物組成では、斜長石・右英が大半を占め、重鉱物が続く。岩石では変質火山岩類が主体で、デイサイト(～流紋岩)・泥質岩・珪質岩・砂岩・片岩などをわずかに含む。重鉱物組成は、黒雲母が半数以上を占め、角閃石・不透明鉱物が続き、酸化角閃石・綠泥石をわずかに伴う。図15で巨摩山地を含む甲府盆地の新第三系分布地域の河川砂とともにクラスター2を構成する。しかし、No.12は、これら新第三系地質を特徴づける緑色変質火山岩類が含まれないことから、地元原料を用いて作られた土器である可能性は低く、搬入土器の可能性がある。原料産地は、変質火山岩類や堆積岩が分布する地域が想定されるが、具体的には分からぬ。重鉱物組成はG類土器と類似性がありやみられるので、原料産地が近い可能性もありそうである。

## 4 押型文土器の土器作りと移動

從来の胎土分析結果と本遺跡との比較から、押型文土器の土器作りと土器の移動を考えたい。

長野県は岐阜県とともに種沢系押型文土器の分布の中心である(中島2008)。市道遺跡では実体顕微鏡を用いて上器中の粗粒子を識別する方法で胎土を分類している(中村2001)。市道遺跡の汎式土器は、石墨(黒鉛)の粒子とともにペグマタイト、アブライト、片麻岩などの飛騨変成岩に特有の岩石を含むことから、飛騨地方で生産された搬入土器であると推定された。また、市道遺跡の立野式土器では高温型石英で特徴づけられる「水晶型胎土」が多くを占め、細久保式でも10～30%に含まれる。中村(2001)は「水晶型胎土」の土器原料が長野県北部に分布する高溫型石英を含むテフラ層に由来する可能性を示した。さらに「水晶型胎土」に区分されていない押型文土器や同時期の土器の胎土においても、高溫型石英を示す「水晶」の表現が普通に認められることから、市道遺跡の押型文土器がこの地域の地質的特徴を反映した胎土組成を示していくことが分かる。飯山市立野遺跡の立野式土器は、黒雲母が大量に含まれるとされる(中村2001)。これも領家帯の花崗岩類が広く分布する天竜川流域の地質的特徴を反映しているものと考えられる。岡谷市・塩尻市にまたがる種沢遺跡の押型文土器では、鉱物分析がなされている(上條1987)。黒鉛を含む土器のうちNo.2ではザクロ石・磁鐵鉱を主体とする組成が得られた。黒雲母が卓越する土器が3試料ほどあり、他の多くの試料は磁鐵鉱・紫蘇輝石(斜方輝石)が多く含まれる。

これ普通輝石(単斜輝石)・角閃石・黒雲母をともなう組成を示す。後者の組成は、火山岩との関連性が推定されることから、地域地質の特徴と調和的であると解釈される。

静岡県愛鷹山麓では、胎土分析例が多い。池田遺跡では、押型文土器・撫糸文土器が重鉱物分析され、角閃石が卓越し黒雲母を伴う組成と、両輝石を主体とする組成が明らかにされた(増島1990)。後者の胎土は、愛鷹山麓の小河川や富士川下流域の河川堆積物中の重鉱物組成と類似することから地域地質を反映した土器胎土であると判断される。尾上イラウネ遺跡では、押型文土器と繩文土器とが分析され、多くの試料で玄武岩・安山岩を伴い同質の変質火山岩類が卓越する組成が認められた(河西1992)。同時に分析された大谷津遺跡の撫糸文土器・繩文土器・広谷遺跡C区および寺林遺跡の撫糸文土器においても同様な傾向が認められた。西洞遺跡の押型文土器では同様の組成を示す試料も認められたが、花崗岩類主体の組成が3試料確認された(河西1996)。西洞遺跡の花崗岩類主体の押型文土器No.5は、カミングトン閃石を伴う花崗岩類から構成され、角閃石中にカミングトン閃石が少量認められ、曾根遺跡での同様の土器胎土と類似性が高い。No.5を含めこれら花崗岩類主体の胎土は、甲府深成岩体や丹沢岩体などが原料産地候補となりうるが、陥しい丹沢山地中央に分布する丹沢岩体の地理的条件および曾根遺跡の胎土との類似性の点から、甲府深成岩体の方が可能性が高いと考えられる。磐田市長者屋敷北遺跡の山形文と格子目文を施す押型文土器1試料(第317図73)は、肉眼観察によって花崗岩類・石英・長石・珪質岩のほか黒雲母・白雲母・角閃石を伴うことから花崗岩類主体で堆積岩を伴うG1類に分類された(河西2009b)。同じG1類に属する繩文中期後半土器分析試料No.2は、薄片分析の結果領家帯の花崗岩類分布地域に原料産地候補が推定されたことから、押型文土器も同様の原料産地をもつ可能性がある搬入土器と考えられる。

神奈川県三浦市三戸遺跡での押型文土器3試料が、三戸式土器とともに胎土分析されている(松田2009)。そのうち2点(土器3・4)は花崗岩類とその構成鉱物から主として構成され中部地殻の花崗岩類分布地域からの搬入品と推定された。土器5は、片岩が卓越する組成を示し変成岩分布地域に原料産地が推定されている。丹沢山地の場合、丹沢岩体の周辺部に結晶片岩の分布が知られるが、片岩がグリーンタフ層に漸移することから片岩に伴って変質火山岩類の混入が予想されること、片岩の分布が丹沢山地の中心部であ

り人間活動の場として考えにくいことなどから、丹沢山地が上器5の原料产地候補である可能性は低いと考えられ、三波川帯など広域変成岩分布地域が有力な原料产地候補として推定される。小田原城跡八幡山遺跡では押型文土器が2試料薄片分析され、花崗岩類・石英・カリ長石・斜長石・角閃石・黒雲母・不透明鉱物などから構成されることから、原料产地候補として甲府岩体などが推定された(パリノ・サーヴェイ2010)。神奈川県では、このように県外の地質に出来ると推定される押型文土器が多い。

以上のように、長野県や愛鷹山麓においては、地域地質を反映した胎土をもつ傾向が顕著であることから、押型文土器は地元原料を利用して各地域で作られていた可能性が考えられる。曾根遺跡の花崗岩類主体の押型文土器は、甲府盆地内の地域地質を反映した胎土組成としてとらえられる。今回の調査では地元の菱苦山岩類を伴う新第三系に由来する土器胎土は確認されなかっただが、甲府深成岩体分布地域においては土器作りが行われていた可能性が推定される。また、カミングトン閃石で特徴づけられる胎土が愛鷹山麓の西洞遺跡と共通することから、この時期における土器の動態の一部が解明される可能性がある。曾利式土器で認められた甲府盆地と駿河湾周辺地域とを結ぶ類似した交流ルートの存在が、おそらく押型文土器の時代でも期待される(河西2010)。今後の資料の蓄積によってさらに詳細が明らかになることを望みたい。

## 註

- 1) ここではデイサイト・流紋岩を含む珪長質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。
- 2) クラスタ分析のプログラムは、田中豊ほか(1984)『パソコン統計解析ハンドブックⅡ多変量解析編』(共立出版)所収のプログラム“CLUST”による。

## 参考文献

- 河西学(1992)尾上イラウネ遺跡出土土器の胎土分析。『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱその2』、沼津市文化財調査報告書、第53集、1-22。
- 河西学(1996)西洞遺跡出土繩文早期土器の胎土分析。『西洞遺跡(区)・葛原沢遺跡発掘調査報告書』、沼津市文化財調査報告書、第59集、269-277。
- 河西学(2000)梅町曾根遺跡出土繩文中期土器の胎土分析。『山梨県考古学協会誌』、11、59-68。
- 河西学(2009a)野牛島・西ノ久保遺跡出土土器の胎土分析。『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅲ・V・VI区』、南アルプス市埋蔵文化財調査報告書、第20集、59-72。
- 河西学(2009b)静岡市長者屋敷北遺跡出土繩文土器の胎土分析。『遠州広域水道用水供給事業谷谷水場築造工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—長者屋敷北遺跡・東浦遺跡Ⅰ』、626-644。
- 河西学(2010)静岡県東部地域出土曾利式土器の肉眼観察 胎土組成・破壊軌跡・押出シ道跡にみられる上器の移動。『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』、第14集、115-132。
- ト袖胡宏(1987)桶沢遺跡の押型文土器の胎土分析。『桶沢押型文遺跡調査研究報告』、129-136。
- 高橋正樹・金丸龍大・二平聰(2004)丹沢トナル岩体の全岩化学組成-分析値171個の統括一。『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』、No.29、259-284。
- 池田良基(1974)丹沢トナル岩稜合岩体の岩石記載と岩体形成史。『地質学雑誌』、80、505-523。
- 中島宏(2008)押型文土器(沢式・桶沢式・綱久保式土器)。『縄甕繩文土器』、アム・プロモーション、130-137。
- 中村由克(2001)『市道遠赤発掘調査報告書』。長野県信濃町教育委員会
- 日本の地質「中部地方I」編集委員会編(1988)『日本の地質4中部地方I』、共立出版。
- 日本の地質「中部地方II」編集委員会編(1988)『日本の地質5中部地方II』、共立出版。
- パリノ・サーヴェイ(2010)繩文土器分析・火山灰分析・木製品放射性炭素年代(AMS測定)。『小田原城跡八幡山遺跡調査IV(第4・5次調査)』、かながわ考古学財調査報告書、254、129-138。
- 増島淳(1990)静岡県東部地域における縄文土器の製作地について—胎土中の重鉛物組成から見たー。『沼津市博物館紀要』、14、21-47。
- 松田光太郎(2009)関東南部・三浦半島における縄文早期土器の胎土分析—神奈川県三浦市三戸遺跡出土土器の製作地推定一。『縄文時代』、20、1-26。
- 三村弘二・加藤祐三・片田正人(1984)御岳昇仙峡地域の地質。『地域地質研究報告(5万分の1回観)』、地質調査所、61pp.
- ## 第2節 曾根遺跡の炭化材・炭化種実分析
- パリノ・サーヴェイ株式会社
- ### 1 はじめに
- 曾根遺跡(山梨県南アルプス市上宮地)は、桶形山山地東縁の山麓に広がる市之瀬台地の東側斜面に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、縄文時代中期および弥生時代末~古墳時代初頭の竪穴住居等が確認されている。
- 本報告では、古墳時代初頭の焼失住居と考えられる竪穴住居から出土した炭化材等の樹種および木材利用、さらに竪穴住居の炉や貯藏穴、土坑の堆積物の水洗選別により回収された微細遺物における炭化種実の抽出・同定および植物利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

## 2 炭化材同定

### (1) 試料

試料は、古墳時代初頭の堅穴住居（2号堅穴、27号堅穴）から出土した炭化材17試料である。これらの炭化材試料のうち、2号堅穴の屋根材とされるNo3990は、出土時の状態で取上げられた塊状のカヤ状炭化物がであったことから、状態の良好な釋を4点抽出し、分析に供した。また、同堅穴の炭化材No3991は、多数の炭化材が認められたことから、同一の部材（樹種）の確認のため、形状が異なる炭化材片4点を抽出し、分析に供した。さらに、27号堅穴の炭化材No4580は、横断面（木口）の形状が異なる炭化材が複数認められたため、炭化材4点を抽出し、分析に供した。

今回の分析に供した炭化材試料の詳細および観察所見は、結果とともに第5表に示す。

### (2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・板目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

### (3) 結果

同定結果を第5表に示す。2号堅穴および27号堅穴より出土した炭化材は、広葉樹6分類群（アサダ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、ヤマグワ、カツラ、カエデ属）と、イネ科タケ亜科に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

#### ・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~30細胞高。

#### ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔團部は1~3列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織

は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

#### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔團部は3~4列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

#### ・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔團部は3~5列、孔團外への移行は緩やかで、晚材部では単独または2~4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~50細胞高。

#### ・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~30細胞高。

#### ・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~50細胞高。木縁維が木口面において不規則な紋様をなす。

### (4) 考察

古墳時代初頭の2軒の堅穴住居から出土した炭化材からは、アサダ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、ヤマグワ、カツラ、カエデ属の広葉樹6分類群と、イネ科タケ亜科が認められた。これらの分類群のうち、コナラ節、クリ、カエデ属は二次林を構成する落葉高木である。アサダ、ヤマグワ、カツラは、河畔林や渓谷林などを構成する落葉高木であり、上記したカエデ属の中には河畔林や渓谷林に生育する種類が含まれる。これらは、遺跡が立地する台地上や台地周辺の扇状地、さらに、後背の山地より流下する河川沿い等に生育したと考えられる。また、タケ亜科は、こうした落葉広葉樹林の林床や開けた明るい場所に生育する分類群が含まれる。

また、確認された各分類群の材質についてみると、アサダ、コナラ節、クリ、ヤマグワ、カエデ属は重硬で強度が高く、カツラは軽軟で強度は低い部類に入

る。タケ亜科は、タケ・ササ類であり、強度で柔軟性がある。2号竪穴の屋根材とされる炭化物（No.3989、3990）試料では、中空円筒状を呈する釋は全てタケ亜科であったことから、蓋材にはタケ・ササ類も利用されたことが示唆される。2号竪穴のこの他の炭化材試料では、芯持丸木にコナラ節（No.3987）、分割材状や破片にヤマグワ（No.3991）が認められたことから、強度の高い木材の利用が考えられる。

一方、27号竪穴の炭化材試料では、ヤマグワを主体として、アサダ、クリ、カツラ、カエデ属が混じるという樹種構成が認められた。この結果から、2号竪穴と同様に、強度の高い木材を主体とする利用が示唆される。これらの試料のうち芯持丸木を呈する試料は、径が4~6cmと各分類群の主幹の直徑としては小径である一方、分割材状の試料では残存径（放射面）が最大約4.5cmと、芯持丸木試料よりも大型の径の木材に由来する試料が含まれる。これらの出土炭化材の形状や大きさは、建築部材の種類の違いを反映している可能性があり、住居内における出土位置等と合せた検

討が望まれる。

なお、南アルプス市を含めた広義の岐北地域の古墳時代初頭～前期の住居跡から出土した炭化材の同定結果についてみると、坂井南遺跡（韮崎市）の古墳時代前期の住居跡出土炭化材はクヌギ節を中心として、アサダ、カエデ属、ケヤキ、ケンボナシ属、ヤマグワ、コナラ節、カバノキ属、クリ、サクラ属、ヒノキ属、モミ属、マツ属複数種東亜属等が混じる組成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1986）。また、龍角西遺跡（旧長坂町）の古墳時代前期の住居跡ではコナラ節とクヌギ節、酒呑馬遺跡（旧長坂町）の古墳時代前期の住居跡ではコナラ節を中心としてハンノキ属が混じる組成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、2001,2005）。上記した遺跡では、いずれもクヌギ節やコナラ節を主体としており、今回の分析結果で認められた樹種構成と異なることが指摘される。本地域では、古墳時代初頭から前期の住居跡出土炭化材の資料が少ないため、周辺環境と木材の選択・利用については今後の課題である。

第5表 樹種同定結果

試料名		形 状	仮名	備 考	樹 種
連構名	取上げ場所	種別			
02號 (2号竪穴)	3987	炭	芯持丸木（約3/4残）	径約3cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	3989	屋根材	釋	径約0.3cm	イネ科タケ亞科
	3990	屋根材	a	径約0.4cm	イネ科タケ亞科
		釋	b	径約0.4cm	イネ科タケ亞科
		釋	c	径約0.4cm	イネ科タケ亞科
		釋	d	径約0.6cm	イネ科タケ亞科
		釋	e	径約0.4cm	イネ科タケ亞科
	3991	炭	分割材状	a 残存径約4.5cm	ヤマグワ
			b 残存径約4cm	ヤマグワ	
			c 残存径約5.5cm	ヤマグワ	
			d 残存径約5cm	ヤマグワ	
27號 (27号竪穴)	4570	炭	破片	残存径約4.5cm	ヤマグワ
	4571	炭	分割材状（ミカン削状）	残存径約4.5cm	ヤマグワ
	4572	炭	芯持丸木（梢円）	長径約4.5cm × 短径約3.5cm	ヤマグワ
	4573	炭	芯持材（約1/3残）	半径約1.5cm	ヤマグワ
	4574	炭	芯持材（約1/3残）	半径約2cm	ヤマグワ
	4575	炭	芯持丸木（梢円）	長径約5.5cm × 短径約4cm	カエデ属
	4576	炭	破片	残存径約3cm	カツラ
	4577	炭	破片	残存径約3cm	クリ
	4578	炭	芯持丸木（梢円）	長径約6cm × 短径約5cm	アサダ
	4579	炭	芯持材（約3/5残）	径約4cm	アサダ
	4580	炭	分割材状	a 残存径約3.5cm	クリ
			b 半径約3cm	ヤマグワ	
			c 径約5.5cm	ヤマグワ	
			d 残存径約3cm	ヤマグワ	
	4581	炭	芯持丸木（梢円）	長径約5cm × 短径約3cm	アサダ
	4582	炭	破片（刃材部）	残存径約1cm	アサダ

### 3 炭化種実同定

#### (1) 試料

試料は、縄文時代中期の竪穴住居や土坑、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居の炉や貯藏穴の埋積物の水洗選別により回収された炭化物試料24点である。本分析では、炭化物試料からの炭化種実の抽出および同定、さらに、その他の炭化物を含む微細遺物の概査を行った。各試料の詳細や水洗選別に供した土壤量等について、結果とともに第6表に示す。

#### (2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な炭化種実を拾い出す。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照より実施し、個数を数えて表示する。分析後は、種実遺体を容器に入れて保管する。

#### (3) 結果

同定結果を第6表に示す。炭化種実は、栽培種のイネの胚乳と、落葉高木のオニグルミの核、トチノキの種子?、草本のアカネ科の核が確認された。イネの胚乳は、1号竪穴、4号竪穴、6号竪穴、8号竪穴、9号竪穴、12号竪穴、16号竪穴、22号竪穴の炉埋積物試料と、1号竪穴の貯藏穴埋積物試料から確認された。オニグルミの核は、1号竪穴、6号竪穴の貯藏穴埋積物試料や、15号竪穴、29号竪穴の炉埋積物試料、20号竪穴、71号土坑から確認された。なお、2号竪穴、3号竪穴、7号竪穴、17号竪穴、24号竪穴、25号竪穴、27号竪穴からは、炭化種実は確認されなかった。

以下に、本分析で同定された分類群の形態的特徴等を記す。

- オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) グルミ科 クルミ属

第6表 炭化種実同定結果

試料名 遺構名	地点名 (試料名称)	時期	土壤量 (kg)	炭化種実	その他(微細遺物)
1号竪穴	01竪 1炉	古墳時代初期	6.8	イネ胚乳(完形2、破片1)、アカネ科核(完形1)	炭化材
1号竪穴	01竪 貯藏穴	古墳時代初期	4.9	オニグルミ核(破片1)、イネ胚乳(完形2)	炭化材、シラカンバ、イネ科、蘇芳煙
2号竪穴	02竪 炉内 土	古墳時代初期	0.09	-	炭化材
2分竪穴	02竪 炉内 炉土	古墳時代初期	6.7	-	炭化材、イネ科
3号竪穴	03竪 炉の横上サンプル	古墳時代初期	2.0	-	炭化材、巻貝殻
4号竪穴	04竪 炉サンプル	弥生末～古墳初	5.1	イネ胚乳(完形1、破片6)	炭化材、昆虫
6号竪穴	06竪 炉サンプル	弥生時代末	3.3	イネ胚乳(完形1、破片1)	炭化材
6号竪穴	06號 貯藏穴の上(西半分)	弥生時代末	6.5	オニグルミ核(破片6)、トチノキ種子?(破片6)	炭化材
7号竪穴	07竪 炉の土 西半分	弥生時代末	3.2	-	炭化材
8号竪穴	08竪 炉内土	古墳時代初期	2.7	イネ胚乳(完形2、破片1)	炭化材
9号竪穴	09竪 炉	弥生時代末か	6.4	イネ胚乳(完形3、破片6)	炭化材
12分竪穴	12竪 炉内土サンプル土	古墳時代初期	4.7	イネ胚乳(完形6、破片3)	炭化材
15号竪穴	15竪 炉サンプル	縄文時代中期後半	-	オニグルミ核(破片24)	炭化材
16号竪穴	16竪 炉の土 西半分	弥生時代末か	3.6	イネ胚乳(完形3、破片2)	炭化材
16号竪穴	16號 貯藏穴の上(南半分)	弥生時代末か	3.3	-	炭化材
17号竪穴	17竪 炉サンプル	弥生時代末か	0.4	-	炭化材
20分竪穴	20竪	縄文時代中期後半	4.5	オニグルミ核(破片7)	炭化材
22号竪穴	22號 炉の横上	弥生末～古墳初	1.0	イネ胚乳(完形2)	炭化材
24分竪穴	24竪 炉内サンプル	古墳時代初期	1.4	-	炭化材
25号竪穴	25號 炉	弥生時代末	2.0	-	炭化材
27号竪穴	27竪 炉 土	古墳時代初期	1.4	-	炭化材
29号竪穴	29竪 炉の土	縄文時代中期後半	5.4	オニグルミ核(破片3)	炭化材
71号土坑	71号土坑 土底に近い	縄文中期中葉	6.0	オニグルミ核(破片3)	炭化材
71号土坑	71号土坑 土サンプル	縄文中期中葉	10.2	オニグルミ核(破片5)	炭化材

凡例「-」：炭化種実未検出

核は炭化しており黒色。完形ならば、長さ3~4cm、径2.5~3cm程度の広卵体。頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。破片の大きさは、最大0.8cm程度。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな空洞と隔壁がある。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科  
トチノキ属

種子は炭化しており黒色。完形ならば、径2.5~4cm程度の偏球体。表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する曲線を境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、不規則に割れ、破片は最大0.6cm程度。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ4.2mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度やや偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の隆条が継列する。

・アカネ科 (Rubiaceae)

核は炭化しており黒色。長さ1.2mm、幅1.4mm、厚さ1.1mm程度の偏球体。腹面中央に径0.5mm程度の楕円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様が発達する。

#### (4) 考 察

縄文時代中期および弥生時代末～古墳時代初頭の各遺構からは、炭化種実として落葉高木のオニグルミの核とトチノキの種子?、栽培種のイネの胚乳、草木のアカネ科が確認された。これらの分類群のうち、オニグルミやトチノキは、川沿い等の湿润な肥沃地に生育することから、周辺の河川沿いや後背山地の谷沿い等に生育した樹種に由来すると考えられる。また、アカネ科は、明るく開けた場所に生育する人里植物であることから、調査区近辺に生育していたと考えられる。

各時期の炭化種実の検出状況をみると、縄文時代中期の土坑および縄文時代中期後半の堅穴住居では、いずれもオニグルミの核が確認された。オニグルミは、核内部の種子が食生可能で、収量も多いことなどから、植物質食料として利用されたと考えられる。

一方、弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴住居では、炉壺植物試料からはイネの胚乳、貯蔵穴埋植物試料からはオニグルミ、トチノキ?、イネの胚乳が確認された。トチノキは、灰汁抜きすれば種子が食生可能であることから、オニグルミやイネとともに植物質食料として利用されたことが示唆される。

なお、栽培種のイネは、本遺跡周辺では金ノ尾遺跡や東山北遺跡、村前東△遺跡等の弥生時代後期～古墳時代初期の住居跡からの検出例がある（柳原、1999）。このうち、本遺跡の東方、御動使川局状地周辺に立地する村前東A遺跡（旧櫛形町・若草町）では、弥生時代後期の住居跡（II-1号住）からオオムギ、アワ、キビ、エゴマ等とともに確認されているほか、弥生時代後期末～古墳時代初頭の住居跡や古墳時代初期とされる焼土等からも確認されている（山梨県教育委員会ほか、1999）。今回の分析結果と種実組成と比較すると、曾根遺跡ではオニグルミやトチノキ等の食用できる有用植物と栽培種のイネが検出され、ムギ類や雜穀類が検出されないという異なる特徴が指摘できる。また、上記した遺跡以外では武家遺跡（山梨市）の堅穴状遺構よりイネ、アワヒエ、コムギ、マメ類等の炭化種実やモモの炭化材が確認されており（パリノ・サーヴェイ、2004）、炭化種実の組成は村前東△遺跡と概ね類似する。

現段階では山梨県内では弥生時代から古墳時代前期の調査事例が少なく、地域間の比較検討には至らないが、近距離に位置する曾根遺跡と村前東A遺跡との間に種実組成に差異が認められた。その要因については、遺跡周辺の地形やそれに関連する生産基盤（生産域）の違いも想定され、今後はこれらの状況を踏まえた評価も重要と考えられる。

#### 参考文献

- 林 昭三、1991. 日本産木材 跡微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄、1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会. 328p.
- 伊東隆大、1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載I. 木材研究・資料. 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆大、1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載II. 木材研究・資料. 32. 京都大学木質科学研究所. 166-176.
- 伊東隆大、1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載III. 木材研究・資料. 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆大、1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料. 34. 京都大学木質科学研究所. 30-166.
- 伊東隆大、1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料. 35. 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 柳原功一、1999. 炭化種実から探る食生活－古代から中世を中心に－. 食の復元－遺跡・遺物から何を読み取るか. 帝京大学山梨文化財研究所 研究集会報告集2. 柳原功一編. 81-98.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志、2000. 日本植物種子図鑑. 東北大出版社. 642p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社、1986. 板井南遺跡試料 花粉分析 材同定 重鉛分析 粒度分析及び種子同定報告書. 板井南遺跡 山梨県足柄市板井南遺跡発掘調査報告書. 菲崎市教育委員会・東京エレクトロン株式会社. 1

- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2001. 自然科学分析. 龍角  
西遺跡 県営広域管轄地農道整備事業に伴う埋蔵文化  
財発掘調査, 長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第21集,  
長坂町教育委員会・狹北土地改良事務所, 7-21.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2004. 中沢遺跡・武家遺跡  
の自然科学分析. 山梨県山梨市中心沢遺跡・武家遺跡  
-新環状・西関東道路建設工事に伴う発掘調査報告書, 山  
梨県埋蔵文化財センター調査報告書第214集, 山梨県教  
育委員会・山梨県土木部, 16-22.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005. 酒呑場遺跡における  
自然科学分析. 酒呑場遺跡(第1~3次) -酷農試験  
場増・改築工事に伴う発掘調査報告書- (遺物編・本文  
編), 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第216集, 山
- 梨県教育委員会, 101-109.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982. 国説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P., and Gasson P. E. (編),  
1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特  
徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監  
修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P., and  
Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic  
Features for Hardwood Identification].
- 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公團  
東京建設局, 1999. 村前東A遺跡--一般国道52号改築工  
事及び中郷横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘  
調査報告書-. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第  
157集, 山梨県埋蔵文化財センター編, 369p.

## 第5章 総括

### 第1節 集落の変遷

本遺跡の遺構および出土遺物から遺跡の時期区分および調査成果をまとめると次のようになる。

(1) 旧石器時代後期 4区でナイフ形石器1点が単独出土。周辺遺跡でも単独でのナイフ形石器の出土が知られるが、石器群のまとまりとして検出された例はない。

(2) 繩文時代早期 山形・楕円押型文土器を中心同時にみられる撫子文土器が出土。1区南～5区で遺構内外から出土したが、本時期に伴う遺構は不明。押型文土器には槌沢・細久保式土器のほか高山寺式土器も数点あり、時間幅をもつ。

(3) 繩文前期前半 下吉井式あるいはそれ以降の繩維土器が遺構内外から出土している。また同時期の灰色・薄手の東海系の無繩維土器(木島式)も存在する。

(4) 繩文前期後半～末 諸磯b式以降、前期末まで少量ではあるが土器が存在する。搬入土器の鷹島式土器が4区で出土。遺構の存在は不明。

(5) 繩文中期初頭 1区南、49号土坑に伴い五領ヶ台I式土器が出土したが、堅穴の存在は不明。

(6) 繩文中期前半～中葉 1区南～5区で堅穴が出現。26・28・30・33号堅穴があり、時期は藤内新段階～井戸尻式古段階で、ほぼ同時期とみなすことができる。そのうち30号堅穴と33号堅穴には切り合い関係があり、33号堅穴のうち30号堅穴を作り替えているが、同じ地点、ほぼ同じ主軸方

向、類似した柱穴配置から同一系譜による建替えだろう。この4軒のみで集落構造に関する情報を得ることは難しい状況にあるものの、28・30号堅穴は7本柱穴、33号堅穴は9本と考えられ、類似した柱穴配置となる。それに対して26号堅穴は4～5本である。また炉が遺存する26号堅穴と30号堅穴では炉形態が異なっている。共通点は4軒とも主軸方向がおおむね同じと考えられる点で、ひとつのグループ(小群)として何らかの関係性をもつことを示唆する。

4区で検出した集石炉群は、中期前半～中葉らしい。確実な時期が不明で、堅穴群との関係がわからぬ

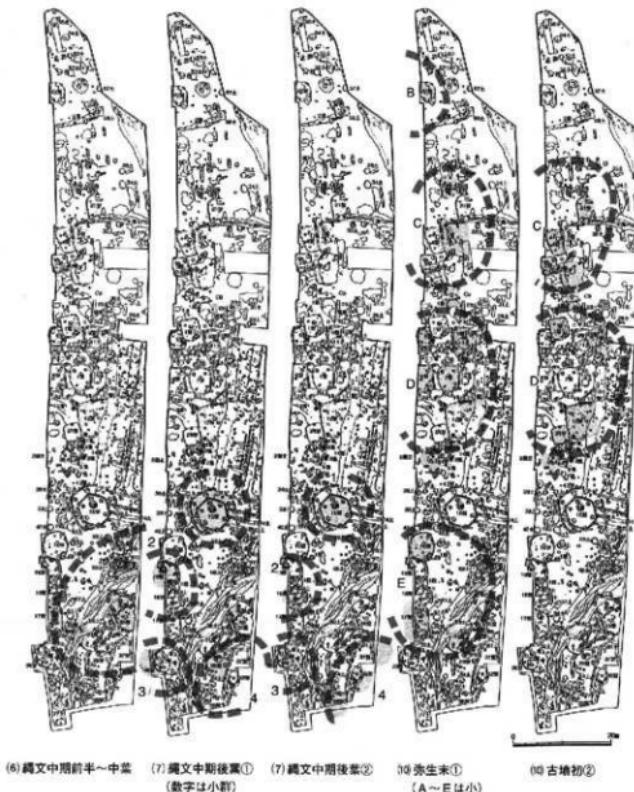


図16 集落の変遷

いが、季節的なキャンプサイトとして利用されたものであろう。

(7) 繩文中期後半 1区南～5区には13・15・18・19・20・29・32・36・38号住が存在する。いずれも曾利Ⅲ・IV式期の時期の住居で、前後の土器を若干含む。

それらの配置は北限を13・15号竪穴、西限を20・38号竪穴とする環状配置とみなすことができ、集落の直径は45～50m程度で内部に土坑を含む径30m程度の広場をもつと理解できる。柱穴配置が判明した竪穴のうち15・19・20・29・36号住はいずれも5本主柱となる。18号竪穴は5本の可能性が高く、32号竪穴については4本ないし5本、大形の13号竪穴は7本柱穴である。それらの配置は重複を含む小群がブロック状に環状配置していく、北から反時計回りに小群1(13・15号竪穴)、小群2(18・19号竪穴)、小群3(20・38号竪穴)、小群4(29・32・36号竪穴)の4小群を認めることができる。集落全体では未調査区に3から4小群が存在したと考えられることから、全体では7～8小群と推定でき、4小群が東西に弧を描く2大別8小群構造を環状モデルとして想定できる。小群1では13号竪穴から15号竪穴へ、小群2では19号竪穴から18号竪穴へ、小群3では38号竪穴から20号竪穴へ、小群4では29号竪穴から32・36号竪穴へという変遷過程をもち、各小群が各時期1軒程度で推移するとみられる。

各小群の変遷によれば、小群1では同一主軸線上での縮小が行われ、柱穴配置は7本から5本へと変更しているが、壁が直線的な特徴的な竪穴構造を継承することから、同一系譜による建替えとみなすことができると。

小群2では18号竪穴が半分程度しか調査できなかつたため比較は難しいが、两者とも円形基調の竪穴で、埋甕をもち、主軸方向も類似することから、系統性を見出すことは可能である。小群4では29号と36号を比較すると、ともに5本柱穴で、円形ではなく横に長い楕円形もしくは隅丸方形を呈し、小群1・2との違いがある。以上のように、限られた調査区内での推測ではあるが、各小群内では系統的建替えが行われた状況がわかり、集落構造を考える上で良好なデータといえる。

そうした配置を示すなかで、とくに注目されるのが13・15号竪穴の特徴的な構造で、15号竪穴の六角形プランは異彩を放って存在感を示している。13号竪穴も六ないしは八角形で、多角構造となっている点で共通するが、ともに他の竪穴よりひとまわり大形で、さらに北側のやや高い位置に存在し、他の住居を見下ろす位置にある点は注目すべきである。後期前半では「核

家庭」がこうした位置に配置されるが、中期後半段階でそうした現象の萌芽を認めることができるのはないか。なお、多角形住居については次節で述べたい。

土坑は66・90号土坑が典型例で、66号土坑は環状集落の中央に近いところに位置するが90号土坑は小群寄りにある。集落の中央部に群として存在する状況は認めがたく、小群に近い竪穴群の内側に各小群に付随するように土坑が配置すると考えられる。

小群1の東側に4本または6本柱穴列の可能性がある土坑(22・23・45・46・48・60号土坑)の配列が認められる。竪穴の柱穴かあるいは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、竪穴が周囲で確認できている状況からすれば掘立柱建物の可能性があろう。土坑の大きさが不揃いなため、直ちに掘立柱建物とするには躊躇するが、建物であれば集落の中心に主軸方向を向ける建物である。

土器については、おおむね從来の曾利式土器の理解をこえるものはないものの、唐草文土器陶との接触によって地域的な色合いをもつ土器がある(20号竪穴19など)。18号竪穴2、20号竪穴3についても曾利式土器ではあるが異質である。この点については胎土の肉眼的観察による砂岩を多く含む土器にそうした地城色の強い在地的傾向がみられることを指摘しておきたい。また13号竪穴3、26号竪穴3については長野県境の唐草文土器の搬入品である。

土器の出土状況について整理しきれていないのが19号竪穴の2つの埋甕の型式的時期差についてである。19号竪穴埋甕では、曾利IV式とされる3が曾利III式の斜行文土器よりも先に埋設された状況を示している。古い土器を再利用する際に型式の逆転現象が起きたらしいが駄然としない。

(8) 繩文後期前半 遺構外から堀之内式期の土器片がわずかに出土しているが遺構はない。

(9) 繩文晩期末～弥生前・中期 この時期については遺構外に土器片がわずかに存在するほか、フ拉斯コ状土坑のいくつかが該当する(1・2・18・29・69号土坑)。袋状もしくはフ拉斯コ状土坑からは、時期を示す遺物が伴わないものが多いが、2号土坑からは散片の弥生前期とみられる条痕文土器が出土している。そうした土坑は台地中央にあたる1区中央付近に群在していることから、いくつかは弥生末以降の可能性もあるものの、条痕文期の貯蔵穴群として把握することができる。

(10) 弥生末～古墳時代初期 本遺跡の主体となる時期で、19軒が存在する。1区台地上に計画道路幅に沿って南北に展開し、その配置は等高線に沿った帯状配置

といえる。ただし第1地点とされた農道調査時にも同時期の堅穴が存在することから、台地面全体に広がることは容易に想像できる。また台地ばかりではなく、低地にあたる2区の25号堅穴、5区の27・31号堅穴が存在することから、集落は低地にも広がっていたことがわかる。

調査範囲内の住居の配置には、いくつかのグループが可能で、それらが一定の距離を保つように配置し、小群内で重複関係をもつ点がひとつの特徴といえる。堅穴を群別に分けると北から次のようになる。

A群（25号堅穴）、B群（22号堅穴）、C群（C1小群-21・23号堅穴、C2小群-4・5号堅穴、C3小群-2・3号堅穴）、D群（D1小群-1・6群、D2群-9・10号堅穴、D3群-7・8号堅穴、D4群-11・12・24号堅穴）、E群（E1群-16号堅穴、E2群-17号堅穴、E3群-27号堅穴、E4群-31号堅穴）と5大群13小群を見出すことができる。この中でC群、D群には南側に掘立柱建物を1棟ずつもつのが特徴的である。

重複関係のある小群はC2小群、D1小群、D2小群の3小群が存在するが、D1・2小群については斜面が高い方から低い方へと建替えをする。その際小判形から隅丸方形へというプランの変化が認められ、後者がより新しいことがわかる。

住居の時期は、遺物が少なく不明なものが数軒含まれているが、弥生末の複合口縁並、古墳初頭のS字台付甕の存在を指標に弥生末、古墳初頭の2時期に区別すると次のようになる。

弥生末-（5・6）・7・8・9・11・（16・17）・22・23・（25）・27・31号堅穴

古墳初頭-1・2・3・4・10・12・（21）・24号堅穴  
※（）は推定

先の重複関係からみたプランの変化とも大きな矛盾はなく、弥生末での小判形から古墳初頭の隅丸方形への変化を支持している。4・5号堅穴については4号堅穴が隅丸方形を呈し、5号堅穴が時期不明のため、斜面の高い方への建替えの可能性がある住居である。

柱穴は4本で時期差、規模による変化はないが、そのほかのいくつかの要素（炉、出入り口施設、焼失家屋）での検討を加える。

炉にはA類-地床炉、B類-枕石（1-1個、2-2個高列、3-4個）がある。

A類-3・5・7・9・12・16・21・22・24・25・27号堅穴

B1類-8号堅穴

B2類-4・6・17・31号堅穴

### B3類-1・2号堅穴

B1・2類は弥生末の傾向、B3類は古墳初頭の傾向があり、A類はどちらにも存在することがわかる。

出入り口施設にはC類-土手状施設+ピット、D類-ピットのみ、E類-なし、の3類がある。

### C類-1・6・16号堅穴

D類-7・8・24・25・31号堅穴

E類-なし

不明-2・3・4・5・9・10・11・12・17・21・22・23・27号堅穴

D類が弥生末の傾向があり、C類は弥生末、古墳初頭のどちらにも存在している。

焼失家屋（火災作戦）と認定されたのは次のとおりである。

### F類-2・17・21・24・27・31号堅穴

弥生末、古墳初頭とともに存在し、21軒中6軒、29%を占める。繩文中期に比べるとかなりの高率といえ、不慮の失火のほか住居廃絶に伴う意図的な火入れ行為も想定される。炭化材については広葉樹が用いられたことが分析結果で判明したほか、炭化種実分析では堅穴内よりイネが各地点で検出されている。この時期の類型としては富士川町（旧増穂町）平野遺跡13号住があり、床上を方眼でサンプリングして水洗した結果、イネの住居内分布の状況が明らかにされている。各地の事例分析によれば、イネの多出傾向が指摘できる。

堅穴について整理すると、弥生末から古墳初頭では堅穴住居群は小群が複数まとまっていくつかの群となり、各大群には掘立柱建物1棟が伴う傾向にある。堅穴住居は等高線に並行に主軸方向を向け、南北に長く構築する。炉は主軸線上奥壁寄り、まれにやや東に寄る例があり、枕石の有無、形態でいくつかの分類が可能である。柱穴は4本で、弥生末に小判形、古墳初頭に隅丸方形化する傾向がある。出入り口施設は南東隅にあり、貯蔵穴ともいわれるピット周囲に土手状施設を伴うことがある。東海系の大部式土器の存在から東海系の影響が認められる。火災住居の比率が高く、意図的な火入れ行為も想定できる。

なお、2号堅穴で炭化材といっしょに出土したカヤ状の植物遺体は全てタケ科（タケ・ササ類）であった。屋根の葺き材としてササ類が用いられた可能性が判明した。

（1）古墳時代後期 堅穴はないが、1区南の3号溝などから須恵器片などが出土したほか、5区表土剥ぎの際に刀鎧が採集されている。当初、3号溝を円墳周溝と推測し、調査の過程で円墳ではないとの判断に至ったが、周囲に古墳があった可能性も考えられる。

## 参考文献

- 山梨県教育委員会ほか 1993『平野遺跡』  
柳原功一 1999「炭化穀実から探る食生活—古代～中世を中心に—」『研究集会報告集2 食の復元—遺跡・遺物から何を読み取るか』

## 第2節 繩文時代の諸課題

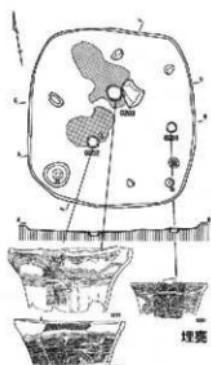
### 1 33号竪穴の埋甕について

山梨県内での堅穴住居の出入り口部に伴う屋内埋甕の出現については、曾利II式期に急速に一般化するが、曾利I式以前に少数ながら各地で屋内埋甕の事例が報告されているのも見逃せない事実である。本遺跡の33号竪穴では、藤内式期新段階の竪穴の西南壁際から正位の大形埋甕が検出され、内部より磨り石が見つかった。この32号竪穴の埋甕の特徴は2点ある。つまり竪穴の主軸線からはずれた位置に存在する屋内埋甕であること、大形の深鉢形土器を用いていることである。この事例についてどのように評価できるのかまとめておきたい。ここでは、曾利I式期以前の屋内埋甕を「初期屋内埋甕」と呼称し、山梨県内での事例を整理したい。時期的に古い順に列記する。

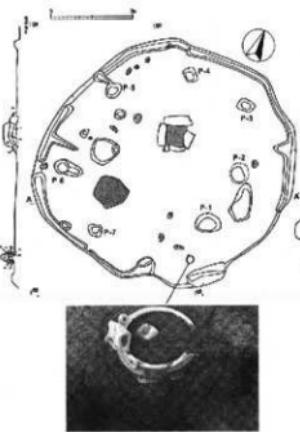
①天神C遺跡（北杜市大泉町）2号住 五領ヶ台式期  
4.4×4.1mの隅丸方形の住居。東壁から40cmのところに胴部上半のみの土器を正位埋設する。

②积迦堂遺跡群S III区（甲州市勝沼）SB84 藤内式期 出入り口にあたる部分に胴部下半を正位に埋設する。

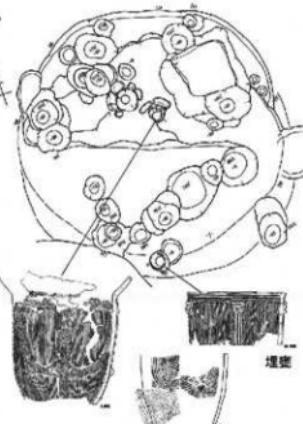
- ③积迦堂遺跡群S III区 SB87 藤内式期 脇部下半を正位埋設する。
- ④御所前遺跡（北杜市須玉町）4号住 井戸尻式期  
5.45×6.5mの円形プランで、7本柱穴をもつ。井戸尻古段階のミミズク状突起のついた深鉢を住居出入り口付近に正位に埋める。底部欠損か。
- ⑤唐松遺跡（甲斐市）7号住 井戸尻式期
- ⑥上野原遺跡（甲府市中道町）8号住 井戸尻式期  
8号住北西壁際にある正位土器だが、7号竪穴炉に近く、また焼土を含むことから、炉体土器の可能性が高い。
- ⑦高畑遺跡（山梨市）10号竪穴 井戸尻式期 底部打ち抜き、口縁部を欠く長胴の深鉢を推定出入り口に正位に埋設する。
- ⑧高畑遺跡2号竪穴 曾利I新段階 口縁部、脇下半を欠く長胴甕を推定出入り口に正位埋設する。
- 天神C遺跡2号住例が最古例で、この段階に土器を埋甕炉に転用する事例が多いことを考えれば、何らかの目的をもって土器を床面に埋設する行為が出現したとしても不思議ではない。埋甕は住居主軸線上にはないものの、出現段階の1例として重視すべきであろう。藤内式段階では新段階に御所前遺跡例や本遺跡例が存在する。屋内埋甕の相続的なものが出現する段階として画期とすべき時期であり、埋甕に大小2種がある点は注目すべきである。本遺跡例は井戸尻式期の高畑遺跡10号竪穴や、曾利I式期の积迦堂遺跡群S III区SB64にも共通する大形埋甕で、井戸尻末～曾利I・



天神C遺跡2号住



御所前遺跡4号住



高畑遺跡2号竪穴

図17 各地の初期屋内埋甕例(1)

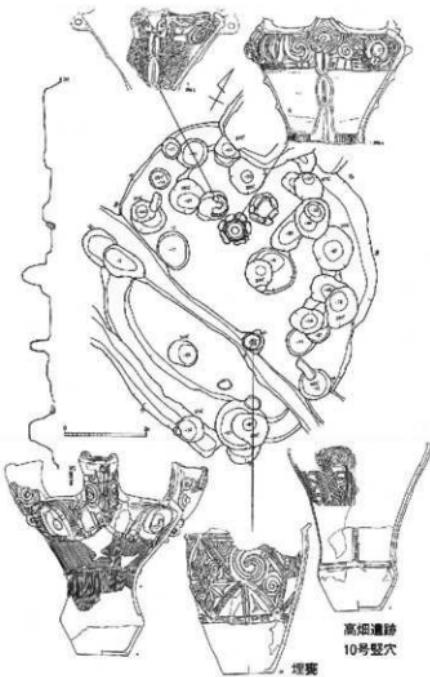


図18 各地の初期屋内埋壙例(2)

II式期に多い底部穿孔土器の大きさにも匹敵することから、まったくの推測ではあるが小児用壙棺として出現し、中期後半に普及した屋内壙の一種であろうと思われる。住居の主軸線上出入り口付近に設置する例、そうではない例があるが、本遺跡例は主軸線上ではなく、出入り口ではない事例となる。ただ竪穴住居の出入り口に関しては、出入り口をあえて主軸線上からずらし、右入り、あるいは左入りとする事例があると推測する向きもあることから、出入り口と無関係かどうかの判断は容易ではない。また初期屋内埋壙の大形例は逆位底部穿孔土器であるが、本例は正位である点が異なっている。それに対して御所前遺跡例は小形で、曾利II式期以降に急激に普及する屋内出入り口の埋壙との共通性がある。主軸線上にあることから、それ以降の埋壙への祖形的な事例として念頭に置く必要がある。曾利I式期の高畠10号竪穴例は主軸線上に設置されるが、深さが浅いことから、壙棺というよりは小形系譜の埋壙とみられる。このように初期段階において

藤内式新段階すでに大小2種の埋壙が出現し、その後の屋内外の埋壙に系譜性をもつことが考えられる。

#### 参考文献

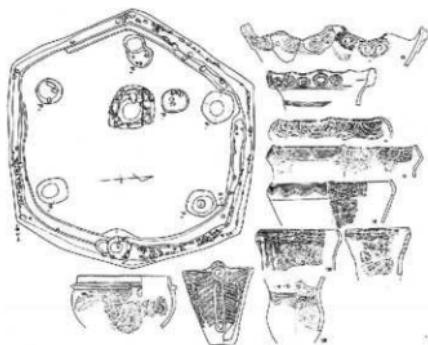
- 須玉町教育委員会 1987『津金御所前遺跡』  
 山梨県教育委員会ほか 1987『駿遊堂II』  
 山梨県教育委員会ほか 1987『上野原遺跡 智光寺遺跡 切附遺跡』  
 山梨県教育委員会 1994『天神遺跡』  
 山梨県教育委員会ほか 1996『竹松遺跡』  
 山梨県教育委員会ほか 2005『高畠遺跡』  
 吉澤宏 2007『編文時代における底部穿孔埋壙の発生と展開—事例よりみた基礎的分析を中心にして—』『山麓考古』20

#### 2 六角形の竪穴住居

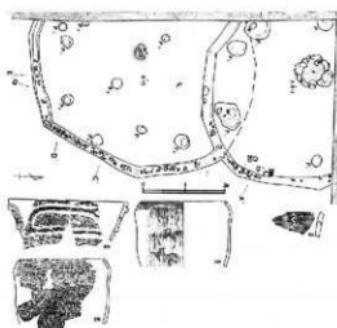
曾根遺跡の15号竪穴は5本柱穴で六角形プラン、13号竪穴は7本柱穴で六ないしは八角形プランの竪穴で、柱穴を結ぶ線に合わせたように壁が直線になるのが大きな特徴といえる。六角形住居については、静岡県島田市東鎌坂原遺跡（曾利IV b式期？）が五角形住居として著名で、同2・3号住も周溝が直線的で多角形をなしていることから、1号住との関連性がみられる。この1号住については、周辺地域での類例がないことから単発的な存在であり、時空的な広がりをもつ住居型式としての充分な評価を与えられないままであった。曾根遺跡15号竪穴の発見を契機に山梨県内の事例をみたところ、多角形竪穴ともよびうる類例が八ヶ岳南麓を中心に見出すことができたため、列記しておく。

- ①石之坪遺跡（蘆崎市） W12号住（曾利IV b期、六角形5本）
  - ②石之坪遺跡 W38号住（曾利III b期、逆五角形4または5本）
  - ③石之坪遺跡 W130号住（曾利IV a期、六角形5本）
  - ④石之坪遺跡 W165号住（曾利IV b期、五角形5本）
  - ⑤甲ヶ原遺跡（北杜市大泉町） 2号住（曾利II式期七角形5本）
  - ⑥鳥居原遺跡（北杜市白州町） TH80-14号住（曾利II b式期、五角形5本）
- 曾利II式期以降、IV式期に存在し、主柱穴5本で五ないしは六角形とする例が多いが、4本柱穴の事例に隅丸方形の四角形に近い事例が多いほか、原町農業高校前遺跡でも壁が直線ではないにせよ多角形気味の住居があり、そうした事例も多角形竪穴の仲間として視野に入れておく必要はある。

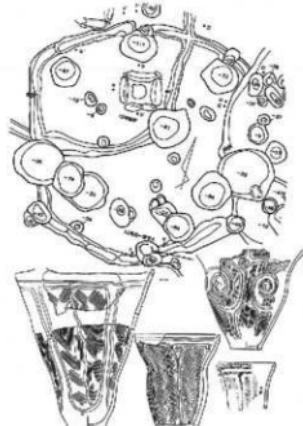
このように曾利式期に山梨県側の八ヶ岳南麓から甲



東鎌塚原遺跡 1号住



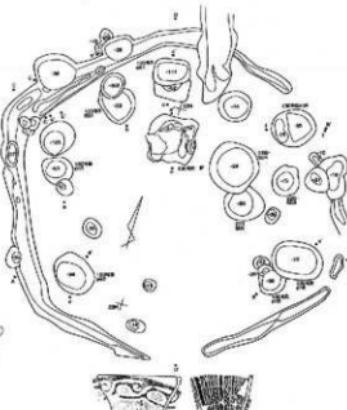
東鎌塚原遺跡 2・3号住



石之坪遺跡 W12号住



石之坪遺跡 W38号住



石之坪遺跡 W130号住



石之坪遺跡 W165号住



甲ツ原遺跡 2号住



鳥居原遺跡 14号住

\*堅穴住居の縮尺は1/120、  
土器は不同

図19 各地の多角形堅穴

府盆地西部にこうした多角形竪穴が分布するのは、ひとつ建築様式の広がりとしての意味をもつものとして理解したい。また島田市までの広がりがある点については富士川（釜無川）を媒介とした静岡県遠江地域との交流の存在がうかがえ、八ヶ岳南麓側を中心とみなすと静岡方面への住居様式の伝播も考えねばならないだろう。石之坪、鳥居原遺跡は釜無川に近く、本遺跡を含めた3遺跡がいずれも釜無川右岸にあたる点も無視できない。これらの多角形竪穴を総称して「石之坪型」竪穴（住居）と呼称しておく（柳原2010）。

石之坪型竪穴は、壁体構造に強く規制されたプランの竪穴といえる。周溝から立ち上る平面的な概面で竪穴空間を形成したと考えられ、15号竪穴の周溝中に観察されたように幅広の擁壁構造が埋め込まれていたと思われるが、あるいは北欧のログハウス状に丸太木を横に積み上げたような構造を考えるべきかもしれない。

いずれにしても四角ではなく複雑な六角形という幾何学的な形を選択したのはどのような理由からだろうか。曾根遺跡では13・15号竪穴がやや高い北側に位置することから、集落全体の要としての住居を想定したが、六角形という形が5本柱穴をもつ竪穴空間をより象徴化した形としてマジカルな意味合いを帯びていた可能性がある。また6面という空間の形が世界観を表出していたことが考えられ、平面的な形そのものが放つ不可思議さとともに空間として構成されたときの室内空間が意味のあるものだったに違いない。蛇足ながら付け加えると、六角形の壁と柱で構成された室内では、角を結ぶ直線ラインとして空間区分を視覚的に明確化することができる。つまり、奥壁の角と出入り口を結ぶ主軸線を通る直線により、室内は左右2つに区分されるとともに、さらに角を斜めに結ぶことで生じる放射状配置をした6つの三角形空間、あるいは主軸と直交するように結ぶ直線で生じる前、中、後の3つの空間区分が発生する。そうした空間認識装置としての住居ではなかったかと思われるのである。

#### 参考文献

- 島田市教育委員会 1989『東濃域原遺跡発掘調査報告書』  
郡崎市教育委員会 2001『石之坪遺跡（西地区）』  
北杜市教育委員会ほか 2007『鳥原平遺跡群4』  
柳原功一 2010『縄文中期後半の竪穴住居の変遷』『山梨県考古学協会誌』16

#### 3 曾利式土器の単位数

縄文中期後半の竪穴住居は、ほとんどの柱穴配置が5で、大形竪穴では7であった。この5本柱穴については甲府盆地の曾利式期の住居では一般的であるが、中期後半では小形住居で3本柱穴が存在し、曾利I・II式期の中に7本柱穴も比較的多く認められるなど、時期的に7本から5、あるいは4本へと柱穴本数を減らす傾向がある中で、4に加えて3・5・7という奇数を好む傾向にある。これについては、炉裏に1本の柱を立てるこにより生じる現象で、炉の裏に柱を持たない唐草文土器團の竪穴では4本、6本と偶数となることが知られている。

ところで、中期後半に竪穴住居の柱本数と連動するよう土器文様の単位数が3・4・5・7の構成をとるものが多いことが今回の遺物観察を通じて明確になった。これは他の時期、例えば中期前半、中葉の土器群と比較すると違いが明瞭で、数を強く意識したうえで割付がしにくいくらい、7といった数に文様数を合わせているのではないかとさえ思われる事例が存在するのである。ここでは本遺跡において、文様単位を観察した土器をあらためて検証したい。

- 15号竪穴 1(曾利III) - 把手は4単位、胴部S字文は3単位  
2(曾利III a) - 脇部文様は4単位  
5(曾利III) - 口縁部つなぎ文は5単位  
27(曾利V) - 台付土器脚部の孔は5、胴部圓文は7単位
- 18号竪穴 1(曾利III) - 口縁部のつなぎ文は6単位、胴部横S字文は3単位  
2(曾利III) - 脇部の蛇行懸垂文（区画文）は7単位
- 19号竪穴 1(曾利III a) - 口縁部突起は推定4単位  
3(曾利IV b ?) - 脇部は9単位
- 20号竪穴 1(曾利III) - 脇部は7単位  
2(曾利III b) - 把手は3単位、胴部は2単位の横S字文  
11(曾利III b) - X把手は5単位、胴部は2単位の横S字文  
12(曾利III b) - X把手は5単位、胴部は2単位の横S字文  
20(曾利III b) - X把手は4単位、胴部の渦巻文も4単位  
30(曾利III ?) - 頸部文様は7単位  
31(曾利II a ?) - 口縁部つなぎ文は推定8単位？
- 29号竪穴 2(曾利III) - 突起は3単位

- 3(曾利Ⅲ～Ⅳ) - 把手は4単位、胴部は  
4単位
- 4(曾利Ⅲ～Ⅳ) - 胴部文様は3単位
- 5(曾利Ⅳ?) - 胴部単位は7
- 7(曾利Ⅳ) - 把手数は3
- 90号土坑 1(曾利Ⅲ?) 一つなぎ文は5単位、胴部  
文様も5単位
- 2(曾利Ⅲ?) - 口縁部は2単位、胴部は  
2単位の横S字文

以上を集計すると、単位数を観察できた曾利Ⅲ・Ⅳ式期を中心とする22個体中、2単位-1、3単位-  
4、4単位-5、5単位-4、6単位-1、7単位-  
4、8単位-1、9単位-1となる（口縁部と胴部で  
は口縁部を優先、それ以外では胴部優先）。3・4・5・  
7の単位数が多いことがわかる。とくにX把手壺では  
5単位とする傾向があるほか、15号竪穴27では脚部の

孔が5、胴部文様が7となるなど、5・7を意識した  
割付と考えられる例がある。

竪穴住居の心臓部ともいえる炉に土器を据えた姿を  
想像すると、土器の文様や把手、突起が柱穴配置と相  
似的となり、炉や土器を囲む空間区分の割付との連動  
が想起される。以上により土器文様構成は空間区分、  
構成と大いに関連があったと考えることができないだ  
ろうか。今後もそうした視点で土器文様、住居形態の  
双方から検証を続けていく必要がある。

#### 参考文献

- 石井 匠 2008『文様構造』『総覧 縄文土器』アム・ブ  
ロモーション
- 石井 匠 2009『土器空間とムラ空間』『縄文土器の文様  
構造—縄文人の神話的思考の解明に向けて—』未完成考  
古学叢書7 アム・プロモーション

第7表 土器・陶磁器類別統計表

(第7の結果を長・短T、共・共M、短・短T、短・短M、白・白Mに分類する)

区	地点	地名	器種	輪胎	口・底・高	内輪	蓋形		色調		施		備考
							(% / N)						
57 1型	1 上原	S字型	竹筒形	(13.5) / - / -	-	ハケヌメ/ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	63.9	-	-	外腹薄く変色
57 1型	2 上原	S字型	古筒形	(16.0) / - / -	-	ハケヌメ/ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	62.2	-	-	内腹薄く変色
57 1型	3 上原	器?	古筒?	(14.6) / - / -	-	ハケヌメ/ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	62	-	-	内腹薄く変色
57 1型	4 +地?	器?	古筒?	(15.7) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	63.0	63.0	64.0	内腹薄く変色
57 1型	5 +地?	土山型	古筒?	(7.8) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	70.3	-	-	内腹薄く変色
57 1型	6 +地?	竹叶型	古筒?	(6.8) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	70	-	-	内腹薄く変色
57 1型	7 +地?	竹叶型	古筒?	(6.8) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	70	-	-	内腹薄く変色
57 1型	8 上原	小竹壳	古筒?	9.3~9.6(13.2) / - / -	70	ハケヌメ/ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	70	滑・滑	灰	61.7	63.0	-	内腹薄く変色
57 1型	9 上原	小竹壳	古筒?	9.2~10.2 / - / -	-	ハケヌメ/ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	60.1	-	-	内腹薄く変色
57 1型	10 +地?	小竹壳	古筒?	9~12 / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	61.8	62.8	-	内腹薄く変色
57 1型	11 +地?	瓶?	古筒?	(16.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	61.5	62.5	-	内腹薄く変色
57 1型	12 +地?	瓶?	口筒?	- / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	61.5	62.5	-	内腹薄く変色
59 2型	1 竹?	5?	竹叶形	(14.7) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	27	-	-	内腹薄く変色
59 3型	1 +地?	5?	竹叶形	(14.7) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	27	-	-	内腹薄く変色
59 3型	2 楊?	器?	骨科?	(8.4) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	1.6	-	-	内腹薄く変色
59 4型	1 1.6cm?	壺?	骨科?	(15.6) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	24	24	22.6	外腹薄く変色
59 4型	2 1.9cm?	壺?	占筒?	(16.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	18.5	-	-	内腹薄く変色
59 6型	1 竹?	5?	占筒?	(11.6) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	5.6	5.6	5.6	外腹薄く変色
59 6型	1 竹?	5?	竹叶形	(11.6) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	5.6	5.6	5.6	外腹薄く変色
59 6型	2 弓生	器?	竹叶形	(20.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	4.2	-	-	外腹薄く変色
59 6型	3 弓生	器?	竹叶形	(19.4) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	6.6	-	-	外腹薄く変色
59 6型	4 弓生	小竹壳	竹叶形	(12.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	6.6	6.6	6.6	外腹薄く変色
59 6型	5 弓生	竹叶形	竹叶?	(8.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	6.6	6.6	6.6	外腹薄く変色
59 6型	6 +地?	竹叶?	古筒?	- / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	6.6	-	-	内腹薄く変色
60 7型	1 竹?	5?	竹叶?	(10.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	12.9	12.9	12.9	内腹薄く変色
60 7型	2 5?	器?	竹叶?	(6.4) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	12.9	12.9	12.9	内腹薄く変色
60 8型	1 弓生	器?	竹叶?	(26.2) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	12.2	12.2	12.2	内腹薄く変色
60 8型	2 弓生?	器?	竹叶?	(12.6) / (5.2) / -	46	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	46	滑・滑	灰	12.2	12.2	12.2	内腹薄く変色
60 8型	3 水沟	器?	竹叶?	12.2~12.5(7.6) / -	80	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	80	滑・滑	灰	4.6	4.6	4.6	内腹薄く変色
60 8型	4 水沟	器?	竹叶?	12.2~12.5(7.6) / -	80	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	80	滑・滑	灰	4.6	4.6	4.6	内腹薄く変色
60 8型	5 弓生	器?	竹叶?	(13.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	14.7	14.7	14.7	外腹薄く変色
60 8型	6 弓生	器?	竹叶?	(13.0) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	14.7	14.7	14.7	外腹薄く変色
60 8型	7 弓生	器?	竹叶?	(22.6) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	14.7	14.7	14.7	外腹薄く変色
60 8型	8 弓生	器?	竹叶?	(15.4) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	14.7	14.7	14.7	外腹薄く変色
60 8型	9 弓生	器?	竹叶?	(13.6) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	14.7	14.7	14.7	外腹薄く変色
60 8型	10 弓生?	器?	山罐?	(10.3) / - / -	-	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	-	滑・滑	灰	14.7	14.7	14.7	外腹薄く変色
61 9型	1 上原	竹叶?	竹叶?	(18.8) / - / -	30	ナツメ・ナツメ・ナツメ・ナツメ/-	30	滑・滑	灰	13.9	13.9	13.9	内腹薄く変色

部	部名	類別	類型	形制	口・底・周	附形	附合%	修復段式		色調	(%) (%)	焼成	焼成	備考
								(外) (内)	(外) (内)					
61	施灰	2 素燒	器	張牛?	口(6) / -/-	-	子ダ・ナダ?/-	實體	宜・良・石・白	今・不・良	1300, 1342	-	-	-
61	9 壶	3 容生?	器	添生?	口(-/-)	-	横面模文・口文・面毛?/ハケメ/-	壳	長・善	良	1320	-	-	-
61	9 壶	3 容生?	器	添生?	口(-/-)	-	横面模文・口文・面毛?/ハケメ/-	壳	長・善	良	1310	-	-	-
61	9 壶	4 十脚	器	古燒?	口(-/-)	-	ハケメ・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1295	-	-	内面黒變
61	9 壶	5 十脚	器	古燒?	口(-/-)	-	ハケメ・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1291	-	-	-
61	9 壶	6 异?	器	张牛?	口(-/6.3/-)	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1291	-	-	-
61	9 壶	7 銀瓶	器	张牛?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1291	-	-	-
61	10 壶	1 小号器?	器	张牛?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1274	-	-	外腹一面黒變
61	10 壶	2 土山	竹筒	竹筒?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1348	-	-	内面黒變
61	10 壶	3 十脚	小瓶心付變	古燒?	口(7.2) / -	-	ハケメ・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1377	-	-	外腹薄く変色
61	11 壶	1 要?	器	张牛?	口(6) / -/-	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1291	-	-	-
61	12 壶	2 60年?	器?	张牛?	口(-/7.0/-)	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1691	-	-	-
61	12 壶	1 异生?	器	张牛?	口(6.2) / -/-	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1695	-	-	-
61	12 壶	2 异生?	器	张牛?	口(4.4) / -/-	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1712	-	-	-
61	12 壶	3 异生?	器	张牛?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ハケメ?	壳	長・善	石・白	1722	-	-	口腹堆土: 3本の馬上鉢
62	125	4 新生?	器	张牛?	口(26.8) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	長・善	石・白	1665	-	-	口腹堆土: 8本の波紋
62	125	5 异生?	器	张牛?	口(19.0) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	長・善	石・白	1706	-	-	内面赤か、口縁厚3mm以上
62	125	6 异生?	器	张牛?	口(19.8) / -	-	沈底・底端・ナダ? -	壳	長・善	石・白	1523	-	-	の直後 16山上
61	125	7 异生?	器	张牛?	口(24.6) / -	-	豫網・ナダ? -	壳	豫網	豫網	不見	16+1566	-	-
62	125	8 异生?	器	张牛?	口(17.8) / -	-	豫網・ナダ?・ナダ? -	壳	豫	良	1694	-	-	-
62	125	9 异生?	器	张牛?	口(16.0) / -	-	豫網・ナダ?・ナダ? -	壳	豫	良	1702	-	-	外腹黒變
62	125	10 异生?	器	张牛?	口(16.5) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	善	良	1708	-	外腹黒・スヌ
62	125	11 异生?	器	张牛?	口(16.0) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	善	良	1708	-	軸部、内面薄く變色
62	125	12 异生?	竹筒	竹筒?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1698	-	-	小底黒變
62	125	13 异生?	竹筒?	竹筒?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1723	-	-	-
62	125	14 二脚?	竹筒?	张牛?	口(10.6) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1737	-	-	内腹赤く變色
62	125	15 二脚?	底环?	古燒?	口(16.2) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1721	-	-	内腹赤、脚孔3mm
62	125	16 二脚?	底环?	古燒?	口(12.8) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1695, 1728	-	-	外底薄く變色、脚孔3mm
62	125	17 二脚?	底环?	古燒?	口(12.2) / -	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1751, 1763	-	-	外腹黒變
62	125	18 二脚?	竹筒?	古燒?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1675	-	-	-
62	125	19 1.05?	竹筒?	古燒?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1714	-	-	-
62	125	20 1.05?	古口?	古口?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1733	-	少安: 1.1, 脚孔: 1.1.3	-
62	125	21 1.05?	古口?	古口?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1696	-	-	-
62	125	22 1.05?	古口?	古口?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1697	-	-	内腹黒變、脚孔3mm
62	125	23 1.05?	古口?	古口?	口(-/4.4/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1729	-	ニチ・ヌア・タル	-
62	125	24 1.05?	古口?	古口?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1772	-	-	-
62	125	25 1.05?	古口?	古口?	口(-/-)	-	ナダ?・ナダ?/ナダ? -	壳	豫	良	1714	-	口は3.2倍位か	-
63	135	1 鋼文	海牀	曾村?	口(20.4) / -/-	-	沈底・底端・ナダ? -	壳	豫	良	1693, 1707, 1715	-	外腹黒變	-
63	135	2 鋼文	海牀	曾村?	口(18.0) / -/-	-	桑根・底端・ナダ? -	壳	豫	良	1691, 1704	-	外腹赤く變色	-
63	135	3 鋼文	海牀	曾村?	口(-/-)	-	沈底・底端・ナダ? -	壳	豫	良	2520, 2549	-	内面赤く變色	-
63	135	4 鋼文	海牀	曾村?	口(-/-)	-	沈底・底端・ナダ? -	壳	豫	良	1915, 1931, 1967, 1968	-	内面赤く變色	-

区	地点	No.	種別	説明	略記	口/叱/歎	成7%	整枝耕作 (%)		生葉 (%) / (%)		鉢土	袋底	注記	備考
								花	芽	葉	茎				
61	13号	5	株文	苗床	-/-/-	-/0.0/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	1966	-	-
62	13号	6	株文	苗床	苗床	-/0.0/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	3899-3823	-	-
63	13号	7	株文	苗床	苗床	-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2577-2772-2775-2778.2	苗子文立起	内向出上
64	13号	1	株文	苗床	苗床	25.0/4.7/7.9	30	1.5%	1.5%	白	白	良	879-2046-3103	内向出下	内向出下
64	13号	2	株文	苗床	苗床	-/6.6/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	4,0388	外側出	外側出
64	15号	3	株文	苗床	苗床	(16.4)/-(7.8)/-	40	1.5%	1.5%	白	白	良	2994-2766-2768-2001-15	外側出	外側出
64	15号	4	株文	苗床	苗床	24.0	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2005	外側出	外側出
64	15号	5	株文	苗床	苗床	(24.0)/-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	3006-3094-3121-2813	外側出	外側出
64	15号	6	株文	苗床	苗床	-/15.5/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	3006-3096-3098-3099-3102.3	外側出	外側出
64	15号	7	株文	苗床	苗床	(41.0)/-9/40.2	30	1.5%	1.5%	白	白	良	126,3127,3134,3135,3136,3130	外側出	外側出
64	15号	8	株文	苗床	苗床	-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	3029	外側出	外側出
64	15号	9	株文	苗床	苗床	(43.6)/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2714-2894	外側出	外側出
65	15号	10	株文	苗床	苗床	(23.6)/0.6/28.6	30	1.5%	1.5%	白	白	良	2707-2714	外側出	外側出
65	15号	11	株文	苗床	苗床	(23.0)/-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2861-3067	外側出	外側出
65	15号	12	株文	苗床	苗床	-/9.0/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	3104	内側出	内側出
65	15号	13	株文	小苗床	苗床	11.0/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	3151-3292	内側出	内側出
65	15号	14	株文	苗床	苗床	-/7.8/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2719-2996	内側出	内側出
65	15号	15	株文	苗床	苗床	(17.8)/-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2713-2881	内側出	内側出
65	15号	16	株文	苗床	苗床	15.0/8.2/24.7	60	1.5%	1.5%	白	白	良	2713-2411-2288-2000-3000.3	内側出	内側出
65	15号	17	株文	苗床	苗床	-/4.1/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	493	内側出	内側出
65	15号	18	株文	苗床	苗床	-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2762-2763-2764	内側出	内側出
65	15号	19	株文	苗床	苗床	-/0.7/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2797	内側出	内側出
65	15号	20	株文	苗床	苗床	-/(7.0)/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	1921-1914	内側出	内側出
65	15号	21	株文	苗床	苗床	-/7.2/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2677	内側出	内側出
65	15号	22	株文	苗床	苗床	-/(7.0)/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2762-2763	内側出	内側出
65	15号	23	株文	苗床	苗床	-/9.2/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2845-2866	内側出	内側出
65	15号	24	株文	苗床	苗床	-/(30.2)/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2036-2709-2794	内側出	内側出
65	15号	25	株文	苗床	苗床	-/26.0/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	良	2375-2715	外側出	外側出
65	15号	27	株文	苗床	苗床	-/18.0/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	3091	外側出	外側出
65	15号	28	株文	苗床	苗床	-/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2461-2462-2606	外側出	外側出
65	15号	29	株文	苗床	苗床	-/23.0/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2704	外側出	外側出
65	15号	30	株文	苗床	苗床	-/18.0/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2701	外側出	外側出
65	15号	31	株文	苗床	苗床	-/14.8/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2782-2783-2784	外側出	外側出
65	15号	32	株文	苗床	苗床	-/(15.8)/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2791-3066	外側出	外側出
65	15号	33	株文	苗床	苗床	-/38.0/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2845-2863-3007	外側出	外側出
65	15号	34	株文	苗床	苗床	-/9.7/-/-	-	1.5%	1.5%	白	白	不良	2798	外側出	外側出

回	施氏	名	種別	部類	時期	口/添/高	夾字	整序法 (外/内)	卷		注記	備考
									外	内		
65	15型	35 篠文	X把半變	滑卦	-/-/-	-	系綱／繩綱／ナダ/-	司馬鳴	其	參	2966	讀爲文
66	15型	36 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	竹籠／竹籠／ナダ/-	明治御	長	參	2375	外御聲／變也
66	15型	37 篠文	添卦	滑卦	/-/	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	海綱／海綱	長	參	2965	外御聲／變也
66	15型	38 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓綱／圓綱／ナダ/-	圓綱／圓綱	長	參	2794	外御聲也
66	15型	39 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	竹管綱／竹管綱／ナダ/-	竹管綱／竹管綱	長	參	2075	內御聲也
66	15型	40 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	竹管綱／竹管綱／ナダ/-	圓	其	參	2473, 2480	外御聲也
66	15型	41 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	竹籠／竹籠／ナダ/-	圓	其	參	2477, 252, 23897	外御聲／ <u>少</u> 也
67	15型	42 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	圓	其	參	2699, 2904, 2926, 292	外御聲也
67	15型	43 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓綱／圓綱／ナダ/-	圓	其	參	2691, 2694	外御聲也
67	15型	44 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓管綱／圓管綱／ナダ/-	圓管綱／圓管綱	其	參	2395, 2393, 245	內御聲也
67	15型	45 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓管綱／圓管綱／ナダ/-	圓管綱／圓管綱	其	參	2960	外御聲也
67	15型	46 篠文	鈎子添	滑卦	-/-/-	-	ナメ／鈎子／ナメ／ナダ/-	鈎子	其	參	2470, 272, 2734, 2871	成義外御に有者文
67	15型	47 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	ナメ／鈎子／ナメ／ナダ/-	鈎子	其	參	2796	以御音／無變
67	15型	48 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓綱／圓綱／ナダ/-	圓	其	參	2787	外御聲變
67	15型	49 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓綱／圓綱／ナダ/-	圓	其	參	2764	外御聲變
67	15型	50 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	圓綱／圓綱／ナダ/-	圓	其	參	3047, 3074, 482207, 2208,	長語聲也
68	16型	1 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	鈎子	其	參	3288	外御聲也
69	16型	2 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	鈎子	其	參	2399	外御聲／無變
69	16型	3 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	竹管綱／竹管綱／ナダ/-	鈎子	其	參	4962	以御音／無變
69	17型	1 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	金管綱／金管綱／ナダ/-	鈎子	其	參	3206, 3212, 3455, 3466, 3398	外御聲也
69	17型	2 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	金管綱／金管綱／ナダ/-	鈎子	其	參	354, 26, 2719, 3894	外御聲也
69	17型	3 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	金管綱／金管綱／ナダ/-	鈎子	其	參	3209	外御聲也
69	17型	4 篠文	X把丁變	滑卦	-/-/-	-	金管綱／金管綱／ナダ/-	鈎子	其	參	3467, 3512	外御聲也
69	17型	5 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	山形文／山形文／ナダ/-	鈎子	其	參	1, 4, 145	外御聲也
69	17型	6 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	山形文／山形文／ナダ/-	鈎子	其	參	1, 20, 25	外御聲也
69	17型	7 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	山形文／山形文／ナダ/-	鈎子	其	參	1, 17, 46	外御聲也
70	18型	1 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	卡其	其	參	1, 20, 204	1号御聲
70	18型	2 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	卡其	其	參	331, 3356, 3372, 3375, 3397	外御聲也
70	18型	3 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	卡其	其	參	3308, 3308, 3343, 3360, 3364, 3	外御聲也
70	18型	4 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	其	參	372, 3402, 3410, 3417, 347, 376	外御聲也	
70	18型	5 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	其	參	3309, 3341, 3361, 3360	外御聲也	
70	18型	6 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	沈綱／沈綱／ナダ/-	其	參	773, 15, 20, 16, 21, 2576	16型／向／別體	
70	18型	7 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	金管綱／金管綱／ナダ/-	白扇／白扇	其	參	1, 2, 2, 3703	2号御聲
70	18型	8 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	山形文／山形文／ナダ/-	明治御	其	參	3344, 3355, 3375	御十分析
70	18型	9 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	山形文／山形文／ナダ/-	明治御／舊稱	其	參	3362	船主分析
70	18型	10 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	金管綱／金管綱／ナダ/-	宣音	其	參	1, 1, 1	輪上分析
70	18型	11 篠文	添卦	滑卦	-/-/-	-	山形文／山形文／ナダ/-	宣音／曉音	其	參	1, 1, 1	輪上分析

固	地点	No.	植物	花期	产地	产地	果(%)	鉴别特征	(体/肉)	毛土	果成	注記		
												产地	产地	
70	1885	12	博文	灌木	中南	-/-/-	-	毛叶、ナゲ、ナゲ	短,灰褐色	长,粉,粉	今今今	3360	26.1±27.1	
71	1886	14	博文	灌木	南科	-/-/-	-	深裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,石	干风	3360	26.1±27.1	
71	1886	15	博文	灌木	南科	-/-/-	-	浅裂,ナゲ/-/-	带状,灰褐色	长,粉,石,粉	风	3883.1±W204	内面圆,变 从微变	
71	1903	1	博文	灌木	南科	38.5/10.6/46.5	90	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,粉,白,深褐色	长,粉	风	3867.3870.3885.3887.3886	3.9±5.3	7.5~
72	1904	2	博文	灌木	南科	-/-/8.0/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,灰褐色	长,粉,粉	良	3884.3891.4000.4007.-	内外面无变	
72	1904	3	博文	灌木	南科	36.5/-/-/-	95	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,灰褐色	长,粉,粉	良	3894.3895.3900.3900.3	内外面无变	
72	1904	4	博文	灌木	南科	138.0/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉	良	3891.3895.3906.3900.3	内外面无变	
72	1905	5	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉	风	702	内外面无变	
71	1906	6	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3496.3497.3498.3499.3500	外内凸出	
71	1906	7	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3497	内外面无变	
72	1906	8	博文	灌木	南科	-/-/-/-	50	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3482.3483.3485.3486.3487	内外面无变	
72	1906	9	博文	小形灌木	南科	114.0/-/5.6/15.6	40	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,灰褐色	长,粉,粉	良	3492.3493.3494.3495.3496	内外面无变	
72	1906	10	博文	灌木	南科	13.0/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3497.3498.3499.3500	内外面无变	
72	1906	11	博文	灌木	南科	-6.0/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3495	内外面无变	
72	1906	12	博文	灌木	南科	-/-/7.4/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3496	内外面无变	
72	1906	13	博文	灌木	南科	-/-/7.3/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3497	内外面无变	
72	1906	15	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	良	3498	内外面无变	
73	2005	1	博文	灌木	南科	-9.0/-/-	80	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,灰褐色	长,粉,粉	风	4446	内外面无变	
73	2005	2	博文	灌木	南科	23.0/8.3/20.0	70	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,灰褐色	长,粉,粉	风	274449	3号变,内外面无变	
73	2005	3	博文	灌木	南科	31.8/-/10.0/-	30	浅裂,毛被,条纹,ナゲ,ナゲ	带状,灰褐色	长,粉,粉	风	3384.3385.3386.3387.3388	3号变,内外面无变	
73	2005	4	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	777.3779.3816.3842	内外面无变	
73	2005	5	博文	灌木	南科	23.0/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3386	内外面无变	
73	2005	6	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3387	内外面无变	
73	2006	7	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3460	内外面无变	
73	2006	8	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3461	内外面无变	
73	2006	9	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3462	内外面无变	
73	2006	10	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3463	内外面无变	
74	2007	11	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3464	内外面无变	
74	2007	12	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3465	内外面无变	
74	2007	13	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3466	内外面无变	
74	2007	14	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3467	内外面无变	
74	2007	15	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3468	内外面无变	
74	2007	16	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3469	内外面无变	
74	2007	17	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3470	内外面无变	
74	2007	18	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3471	内外面无变	
74	2007	19	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3472	内外面无变	
74	2007	20	博文	灌木	南科	-/-/-/-	-	浅裂,毛被,条纹,ナゲ/-	带状,灰褐色	长,粉,粉,粉	风	3473	内外面无变	

回	行	部	假名	釋義	時間	口・風・肉	魄(%)	集形法	色調		輪上	魄	11.12	備考
									(5) / (H)	(6) / (H)				
74	206	13	偏玄	詠体	神利	(21.0) / -/-/-	-	圓滑・後端・ナダ/-	長	安・珍・珍・珍	良	3669	内圓滑・く変化	
74	206	14	偏玄	詠体	音利	(22.0) / -/-/-	-	北端・後端・ナダ/-	圓滑	長・珍・珍・珍	良	3738	内圓滑・く変化	
74	206	15	偏玄	詠体	音利	(25.0) / -/-/-	-	後端・後端・ナダ/-	圓滑	長・珍・珍・珍	良	3634	内圓滑・く変化	
74	206	16	偏玄	詠体	音利	(18.0) / -/-/-	-	後端・後端・ナダ/-	圓滑	長・珍・珍・珍	良	4270	内圓滑・く変化 内外圓滑更	
74	206	17	偏玄	詠体	音利	(/-/-/-)	-	後端・後端・ナダ/-	圓滑	珍・珍・珍・珍	良	3518	外圓滑・く変化 外圓滑・く変化	
74	206	18	偏玄	詠体	音利	(/-/-/-)	-	圓滑・後端・後端・ナダ/-	圓滑	長・珍・珍・珍	良	3636	外圓滑・く変化 外圓滑・く変化	
74	206	19	偏玄	詠体	音利	(15.0) / -/-/-	-	竹管・音利・ナダ/-	圓滑・明滑	長・珍・珍・珍	良	3631	外圓滑・く変化 外圓滑・く変化	
75	206	20	偏玄	詠体	中利	(15.0) / 9.0-30.8	50	低音・後端・ナダ/-	黑・極・極・明滑	長・珍・珍・珍	良	3643	3548-3548-3548-3548	3542
75	206	21	偏玄	X把子裏	音利	(42.0) / -/-/-	-	沈音・後端・ナダ/-	黑・極・極・明滑	長・珍・珍・珍	良	3644	3535-3535-3535-3535	3565.3
75	206	22	X把子裏	音利	音利	(/-/-/-)	-	後端・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3656	3596-3596-3596-3596	3665
75	206	23	偏玄	体	音利	(/-/-/-)	-	圓滑・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	4289	外圓滑・く変化 外圓滑・く変化	
75	206	24	偏玄	体	音利	(/-/-/-)	-	圓滑・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3881	外圓滑・く変化 外圓滑・く変化	
75	206	25	偏玄	詠体	音利	(/-/-/-)	-	圓滑・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3428	内圓滑・く変化	
75	206	26	偏玄	詠体	音利	(13.0) / (6.0) / 9.0	90	沈音・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3653	3564	内圓滑・く変化
75	206	27	偏玄	詠体	音利	(11.9) / -/-/-	-	沈音・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3653	3572-3572-3572	3573
75	206	28	偏玄	詠	音利	(5.0) / -/-/-	-	沈音・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3654	3573-3573-3573	3574
75	206	29	偏玄	X把子裏	音利	(18.0) / -/-/-	-	沈音・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3655	3574-3574-3574	3575
75	206	30	偏玄	詠	音利	(34.0) / 0.20.70	80	沉音・後端・ナダ/-	圓滑・後端・後端	長・珍・珍・珍	良	3656	3575-3575-3575	3576
76	206	31	偏玄	詠体	音利	(96.7) / -/-/-	-	稀・竹音・竹音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	6754	内圓滑・く変化 内圓滑・く変化	
76	206	32	偏玄	詠体	音利	(46.0) / -/-/-	-	竹音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	3619	3549-3549-3549-3549	3567.3
76	206	33	偏玄	詠体	音利	(/-/-/-)	-	沈音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	67	3601-3713-3713-3729-373	373
76	206	34	偏玄	詠体	甲利	(/-/-/-)	-	梢音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	2,3733	3706-3706-3722-4083	-4088
76	206	35	偏玄	詠	甲利	(/-/-/-)	-	梢音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	7130	3622-7022-7022-7119	
76	206	36	土裡	音利	音利	(9.2) / -/-/-	-	ナ・ナ・ナ・ナ	音利	安・珍・珍・珍	良	6870	3674-3674-3674-3674	3741
76	206	37	偏玄	詠體	音利	(10.0) / -/-/-	-	梢音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	6888	3688-3688-3688-3688	3742
76	206	38	偏玄	詠體	音利	(54.4) / -/-/-	-	竹音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	7033	3708-3708-3708-3708	3743
76	206	39	偏玄	詠體	音利	(/-/-/-)	-	竹音・後端・ナダ/-	圓滑	安・珍・珍・珍	良	7098	3744-3744-3744-3744	3744
77	206	1	土裡	小形	音利	(/-/-/-)	-	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	4256	3745-3745-3745-3745	3745
77	206	1	土裡	X伴奏	音利	(13.8) / -/-/-	19.9	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	3655	3746-3746-3746-3746	3746
78	206	1	土裡	X伴奏	音利	(13.5) / -/-/-	30	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	4212	3747-3747-3747-3747	3747
78	206	2	土裡	音利	音利	(13.2) / -/-/-	85	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	4126	3748-3748-3748-3748	3748
78	206	3	土裡	音利	音利	(13.2) / -/-/-	70	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	4126	3749-3749-3749-3749	3749
78	206	4	土裡	音利	音利	(12.8) / 5.25.47	95	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	4136	3750-3750-3750-3750	3750
78	206	5	土裡	小形	音利	(6.0) / 1.14.1	100	ナ・ナ・ナ・ナ	圓滑	安・珍・珍・珍	良	4135	3751-3751-3751-3751	3751

列	卷江	No.	植物	部位	叶质	口/虚 背	株/%	株/%	株/%	株/内	色相	株/内	结实	计数	备注
78	2656	1	裸子	油津	营养	(15.0) / -	-	-	花被、雄蕊、鳞片/ナデ/-	紫	长·赤	良	1枝	外型7.3升量	
78	2656	2	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	长·赤·石	良	4枝	内型黑紫	
79	2656	3	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	长·粉·白	良	1枝	结实上等	
79	2656	4	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	5	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	6	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	7	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	8	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	9	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	10	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	11	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
79	2656	12	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
80	2656	13	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
80	2656	14	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
80	2656	15	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
80	2656	16	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
80	2656	17	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	18	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	19	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	20	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	21	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	22	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	23	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	24	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	25	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	26	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	
81	2656	27	裸子	油津	营养	-/-	-	-	花被、雄蕊、胚珠/ナデ/-	紫	粉·青·白	良	4枝	外型黑紫	





語	類	名	類別	形態	時間	丁度/度/度	範例	整形枚数 (枚/内)		整形 (枚/内)		記	備考
								前	後	前	後		
89	場次	1 道文	語体	實科	-/-/-		參照 黒帯、赤ナダ/-	-	-	長形、赤	真	4394	
89	66.1	1 道文	語体	俗科	-/-/-		參照 ナダ/-ナダ/薄代	-	-	長形、黒	真	4393	
89	66.1	2 道文	語体	山形文	-/-/-		山形文 ナダ/-	-	-	長形、黒	真	一柄	
89	67.1	1 韻文	語体	甲類	-/-/-		明文化 ナダ/-	-	-	長形、赤	真	4395	
89	67.1	2 高文	語体	半類	-/-/-		北極 文、ナダ/-	-	-	長形、赤	真	4396	
89	68.1	1 道文	語体	俗科	-/-/-		北極 文、國文、北極文 ナダ/-ナダ	-	-	長形、黒	真	4397	外側面黒要
89	71.1	1 道文	語体	俗科	22.4/13.0/35.4	95	鳥類	尾羽黒地、喉鈍	尾羽黒地	長形、赤	真	4398	
90	71.1	2 道文	語体	俗科	18.4/ 0/29.5	60	鳥類	胸白、喉鈍	尾羽黒地	長形、赤	真	4399	沙勿面薄く要色
90	71.1	3 道文	語体	俗科	11.0/13.3	35	チメナダ/-ナダ	チメナダ/-ナダ	尾羽黒	長形、赤	真	4400	
90	74.1	古音		古音	(12.6) /-/-/-	-	ハヌメナダケヌ/-	ハヌメナダケヌ/-	尾羽	長形、赤	真	5201.5周224・5205	
90	1 鳴文	語体	俗科	明文化	-/-/-		隠文化 ナダ/-	-	-	端葉上唇	真	7219	
90	36.1	1 道文	語体	明文化	-/-/-		利文化 ナダ/-	-	-	短形、赤	真	一柄	
90	90.1	1 鳴文	語体	普科	24.0 /-	80	竹筒魚食 池沼、候新雀	尾羽黒地	長形、赤	2	7229.-.5周 C区 油		
90	90.1	2 鳴文	語体	普科	14.5 /-/-/-	90	竹筒魚食、候新雀	尾羽黒地、鈎背	長形、赤	2	7230.-.5周 C区 油		
91	174.1	1 鳴文	語体	方言	-/-/-/-		ハヌメナダ/-ナダ	ハヌメナダ/-ナダ	尾羽黒	長形、赤	真	1718.12.28	11型の西面
91	土語集中	1 道文	語体	方言	(15.6) /0.2/-	40	ハヌメナダケヌ/-	ハヌメナダケヌ/-	本冠、石	今冬不見	真	4706.4708.-4770.5周4.4770.5周4.4770.5周4.4770.5周	外腹入仕被
91	上語集中	2 附	語	方言	(18.2) /-/-/-	-	ハヌメナダ/-ナダ	ハヌメナダ/-ナダ	口、赤、脚	今冬不見	真	222.45	6.6と14.1?
91	土語集中	3 你文?	語	方言	-/-/-/-	-	ハヌメナダケヌ/-ナダ	ハヌメナダケヌ/-ナダ	尾羽	短形、暗褐色	真	4706.-.4708.12.28	外側面黒要
91	北部山口	1 土山	方言	方言	9.8/-	-	ハヌメナダ/-ナダ	ハヌメナダ/-ナダ	尾羽	短形、鈎背	真	4706.4708.4711.4709.	脚部内腹、鈎背?
91	十種集中	5 鳴文	語体	方言	(14.4) /-/-/-	-	橿文化、原鶴、系形文 ナダ/-	橿文化、原鶴	長形、赤	今冬不見	真	4706.4708.4711.4709.	沙勿面薄く要色
91	3 鳴	1 土山	方言	方言	15.7	-	占鷺	占鷺	尾羽	短形、鈎背	真	1718.12.23.423	沙勿面薄く要色
91	3 鳴	2 土山	方言	方言	(15.6) /0.4/3	40	テナゲ原鶴 ナダ/-新鶴割り	テナゲ原鶴 ナダ/-新鶴割り	短	今冬不見	真	1184	
91	3 鳴	3 土山	方言	方言	(17.6) /-/-/-	-	テナゲナダ/-ナダ	テナゲナダ/-ナダ	安、赤、脚	今冬不見	真	4706.4708.4711.4709.	
91	3 鳴	4 土山	方言	方言	(17.6) /-/-/-	-	テナゲナダ/-ナダ	テナゲナダ/-ナダ	安、赤、脚	今冬不見	真	4706.4708.4711.4709.	
91	3 鳴	5 土山	方言	方言	(13.6) /-/-/-	-	テナゲナダ/-ナダ	テナゲナダ/-ナダ	安、赤、脚	今冬不見	真	4706.4708.4711.4709.	
91	3 鳴	6 土生	方言	方言	(19.6) /-/-/-	25	テナゲナダ/-ナダ	テナゲナダ/-ナダ	安、赤、脚	今冬不見	真	1092.-.1096.-1097.-1116	内外面薄く黒要
91	3 鳴	7 法生	方言	方言	-/-/-/-	-	チフ、麻突? ナダ/-	チフ、麻突? ナダ/-	短形、赤	尾葉114	真		
91	3 鳴	8 落生	方言	方言	-/-/-/-	-	ハヌメナダ/-ナダ	ハヌメナダ/-ナダ	短形、赤	尾葉109	真		
92	5周	1 1.16	5.7要	方言	(18.8) /-	-	古猶物	古猶物	帶状	長形、赤	真	5211.5203.5214.5215	
92	5周	2 1.16	1 道文	方言	(9.0) /-/-	-	ナダ/-ナダ/-ナダ	ナダ/-ナダ/-ナダ	帶状	今冬不見	真	5217	
92	道體外	1 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	海凹文 ナダ/-	海凹文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5218	船身分野
92	道體外	2 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	海凹文 ナダ/-	海凹文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5219	船身分野
92	道體外	3 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	山形文 仙人島 ナダ/-	山形文 仙人島 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5220	内側面薄く要色
92	道體外	4 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	海凹文 ナダ/-	海凹文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5221	船身分野
92	道體外	5 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	海凹文 ナダ/-	海凹文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5222	内側面薄く要色
92	道體外	6 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	山形文 ナダ/-	山形文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5223	船身分野
92	道體外	7 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	海凹文 ナダ/-	海凹文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5224	内側面薄く要色
92	道體外	8 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	山形文 切丸 ナダ/-	山形文 切丸 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5225	内側面薄く要色
92	道體外	9 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	山形文 ナダ/-	山形文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5226	内側面薄く要色
92	道體外	10 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	川形文 ナダ/-	川形文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5227	内側面薄く要色
92	道體外	11 道文	方言	方言	-/-/-/-	-	山形文 ナダ/-	山形文 ナダ/-	帶状	今冬不見	真	5228	内側面薄く要色

回	地點	No.	種別	特徴	葉形	上/下葉/葉	殘存%	葉面地被		土壤	狀況	計測	備考
								(外/内)	(外/内)				
92	遠隔外	12	雜木	灌木	半圓	/	-	山茶文/ナツメ/-	常綠	生長	新	新	植生分所
92	遠隔外	13	雜木	灌木	卵圓	/	-	山茶文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4303	
92	遠隔外	14	雜木	灌木	半圓	/	-	月桂文/ナツメ/ナツメ/-	常綠	生長	良	2233	
92	遠隔外	15	雜木	灌木	圓錐形	/	-	柏樹文/ナツメ/新樹葉/-	常綠	生長	良	566	
92	遠隔外	16	雜木	灌木	半圓	/	-	圓錐文/ナツメ/新樹葉/-	常綠	生長	良	566	
92	遠隔外	17	雜木	灌木	半圓	/	-	柳葉文/ナツメ/-	常綠	生長	良	14	
92	遠隔外	18	雜木	灌木	半圓	/	-	柏樹文/ナツメ/-	常綠	生長	良	3083	内面薄く黒変 葉口一尾片現
92	遠隔外	19	雜木	灌木	半圓	/	-	柳葉文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4876	
92	遠隔外	20	雜木	灌木	半圓	/	-	柏樹文/ナツメ/-	常綠	生長	良	2186	
92	遠隔外	21	雜木	灌木	半圓	/	-	柏樹文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4879	
92	遠隔外	22	雜木	灌木	半圓	/	-	柏樹文/ナツメ/-	常綠	生長	良	1388	枝十分弱
92	遠隔外	23	雜木	灌木	半圓	/	-	柏樹文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4478	
92	遠隔外	24	雜木	灌木	半圓	/	-	針葉文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4863	外表面く紫色
92	遠隔外	25	雜木	灌木	半圓	/	-	柏樹文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4442	生長強
92	遠隔外	26	雜木	灌木	半圓	/	-	圓錐形/ナツメ/ナツメ/-	常綠	生長	良	1917	内面薄く黒變
92	遠隔外	27	雜木	灌木	半圓	/	-	柳葉形/ナツメ/ナツメ/-	常綠	生長	良	479	内面薄く黒變
92	遠隔外	28	雜木	灌木	半圓	/	-	圓錐形/ナツメ/ナツメ/-	常綠	生長	良	4854, 4855	内面薄く黒變
92	遠隔外	29	雜木	灌木	半圓	/	-	柳葉形/ナツメ/ナツメ/-	常綠	生長	良	14	内面薄く黒變
92	遠隔外	30	雜木	灌木	半圓	/	-	竹葉文/ナツメ/-	常綠	生長	良	387	内側面同色
92	遠隔外	31	雜木	灌木	半圓	/	-	附生文/ナツメ/新葉文	常綠	生長	良	492	
92	遠隔外	32	雜木	灌木	半圓	/	-	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	14	
92	遠隔外	33	雜木	灌木	半圓	/	-	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	456	
92	遠隔外	34	雜木	灌木	半圓	/	-	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	456	
92	遠隔外	35	雜木	灌木	半圓	b	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	549	内面薄く淡色
92	遠隔外	36	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4860	内面薄く淡色
92	遠隔外	37	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4861	内面薄く淡色
92	遠隔外	38	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	470	
92	遠隔外	39	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	430	
92	遠隔外	40	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	470	
92	遠隔外	41	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4862	
92	遠隔外	42	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4863	
92	遠隔外	43	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4864	
93	遠隔外	44	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4865	
93	遠隔外	45	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4866	
93	遠隔外	46	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4867	
93	遠隔外	47	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4868	
93	遠隔外	48	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4869	
93	遠隔外	49	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4870	
93	遠隔外	50	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4871	内面薄く淡色
93	遠隔外	51	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4872	
93	遠隔外	52	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4873	
93	遠隔外	53	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4874	
93	遠隔外	54	雜木	灌木	半圓	c	25%	附生文/沈綸文/ナツメ/-	常綠	生長	良	4875	

第8表 土製品製織表

第9表 石製品観察表

固	地点	No.	分類	長/幅/厚cm	g	石 片	色調	注記	備考
57	2堅	2	刃斧	14.7/6.1/1.4	169	ホルンフェルス	灰	床305	
57	2堅	3	槌振り石	10.4/8.0/6.1	814	安山岩	灰青	3094	
57	2堅	4	槌振り石器	13.5/6.3/3.9	421	緑色凝灰岩	にぶい黄	4538	自然輝
57	2堅	5	槌振り石器	10.0/5.3/3.5	225	点状岩(緑色変質)	にぶい黄褐	4539	自然輝
57	2堅	6	槌振り石器	11.2/6.2/3.9	328	砂岩	灰	4541	自然輝
57	2堅	7	槌振り石器	12.5/5.3/4.2	306	緑色凝灰岩	にぶい黄	4542	自然輝
58	2堅	8	槌振り石器	13.2/5.0/3.4	317	緑色凝灰岩	青褐	4543	自然輝
58	2堅	9	槌振り石器	10.4/4.9/5.1	401	緑色凝灰岩	明褐色	4544	自然輝
58	2堅	10	槌振り石器	13.5/6.5/3.6	421	緑色凝灰岩	オリーブ黄	4545	自然輝
58	2堅	11	槌振り石器	11.8/6.0/4.1	353	安山岩(緑色変質)	にぶい黄	4556	自然輝
58	2堅	12	槌振り石器	14.9/8.6/5.9	1140	緑色凝灰岩	オリーブ黄	4559	自然輝
58	2堅	13	槌振り石器	12.5/5.4/5.8	524	緑色凝灰岩	オリーブ黄	4558	自然輝
58	2堅	14	槌振り石器	12.7/4.7/5.8	381	安山岩(緑色変質)	灰オーライ	4562	自然輝
58	2堅	15	槌振り石器	15.5/6.8/3.3	400	安山岩(緑色変質)	灰オーライ	4560	自然輝
58	2堅	16	槌振り石器	12.4/7.1/4.1	477	安山岩(緑色変質)	灰オーライ	4561	自然輝
58	2堅	17	槌振り石器	12.7/7.0/3.3	370	安山岩(緑色変質)	浅青	4555	自然輝
58	2堅	18	槌振り石器	9.8/1.3/3.6	334	安山岩(緑色変質)	にぶい黄	4558	自然輝
59	2堅	19	槌振り石器	10.5/6.3/4.6	386	玄武岩(緑色変質)	灰白	4547	自然輝
59	2堅	20	槌振り石器	10.7/6.6/4.1	321	玄武岩(緑色変質)	別地灰	4543	自然輝
59	2堅	21	槌振り石器	10.2/7.4/4.3	342	砂岩	灰	4554	自然輝
59	2堅	22	槌振り石器	11.6/5.7/3.4	290	砂岩	灰オーライ	4553	自然輝
59	4堅	4	石錐	1.9/1.5/0.4	0.51	黑曜石	墨透	167	
59	4堅	5	剥片	2.8/2.5/0.4	2.57	黑曜石	墨透	195	種類か
59	5堅	1	磨片	13.3/4.5/2.3	213	緑色片岩	灰オーライ	388	
60	7堅	3	石鏡	2.1/1.8/0.5	0.91	黑曜石	墨透	844	
60	7堅	4	石錐	2.5/1.35/0.4	0.82	黑曜石	墨透	843	
60	7堅	5	石錐	1.6/1.3/0.3	0.53	黑曜石	墨透	908	
60	7堅	6	石錐	1.2/1.3/0.4	0.33	黑曜石	墨透	1-5	
60	7堅	7	石錐	1.7/1.8/0.5	1.01	黑曜石	墨透	1-5	
60	7堅	8	石錐	1.3/1.8/0.5	1.92	チャート	重灰	一端	石集ではない可能性
60	7堅	9	打斧	8.5/1.4/0.8	35	砂岩	灰	4482	
60	7堅	10	打斧	17.8/6.1/2.3	319	ホルンフェルス	浅青	890	
60	8堅	11	石錐	1.9/1.5/0.3	0.75	黑曜石	墨透	1274	
60	8堅	12	石錐	6.2/4.7/1.8	33.31	黑曜石	墨透	床下4510	
61	9堅	8	石錐	1.3/1.8/0.5	0.82	黑曜石	墨透	-15	
61	9堅	9	石錐	5.8/2.9/0.8	22	貝殻	灰白	1334	
61	9堅	10	打斧	9.2/6.5/1.6	127	執板岩	灰	床下4489	
62	12堅	27	石鏡	2.0/1.7/0.5	1.32	黑曜石	墨透	1-5	
62	12堅	28	打斧	8.0/4.3/1.9	91	ホルンフェルス	青灰	1735	
63	13堅	5	打斧	11.6/3.0/0.7	31	執板岩	灰	裏面外1870	
63	13堅	9	磨片	8.0/6.5/4.8	428	安山岩	にぶい黄	遠拂外2296	幾何柄石か
63	13堅	10	門み石	16.0/15.0/5.0	1600	安山岩	灰白	裏面外1830	四み面は2
63	13堅	11	磨片	7.7/6.6/3.3	200	緑色凝灰岩	灰白	2385	方舟内
63	13堅	12	石錐	1.7/1.4/0.3	0.73	黑曜石	墨透	1-5	
67	15堅	32	打斧	13.7/6.9/3.0	311	砂岩	灰	2388	
67	15堅	33	打斧	13.6/7.3/2.0	192	砂岩	灰白	3121	
67	15堅	34	打斧	11.7/3.0/0.6	35	千枚岩	灰	2385	
67	15堅	35	打斧	11.8/7.0/0.8	96	執板岩	灰	2651	
67	15堅	36	打斧	10.6/4.5/1.2	75	緑色凝灰岩	灰白	2712	刃形韌耗
67	15堅	37	打斧	9.8/5.4/2.1	165	砂岩	灰	2385	
67	15堅	38	打斧	6.2/0.9/1.9	1.67	貝殻	灰白	2592	
67	15堅	39	磨片	12.5/5.7/4.3	418	緑色凝灰岩	灰白	床下3161	
67	15堅	40	磨片	10.6/6.7/3.8	500	安山岩	灰白	床下3157	裏面に凹面
68	15堅	61	石錐	17.0/10.6/6.2	1820	緑色凝灰岩	青褐	3119	裏面裏に凹み
68	15堅	62	門み石	9.1/9.4/5.1	598	安山岩	暗灰青	2758	四み面は2
68	15堅	63	磨片	6.0/4.8/5.2	217	安山岩	青灰	2917	幾何柄石か
68	15堅	64	磨片	7.0/9.1/5.2	456	緑色凝灰岩	オリーブ黄	2597	裏面裏に凹い
68	15堅	65	石錐	8.1/8.9/3.3	372	安山岩	明褐色	3005	肩り石の可塑性
68	15堅	66	石錐	14.7/21.2/13.0	550	緑色凝灰岩	浅青	3132	裏面に凹み
68	15堅	67	石錐	1.9/1.2/0.3	0.27	黑曜石	墨透	2961	
68	15堅	68	石錐	2.7/1.9/0.5	1.67	黑曜石	墨透	1-5	
68	15堅	69	石錐	1.8/1.45/0.4	0.82	黑曜石	墨透	1-5	
68	15堅	70	石錐	1.5/1.2/0.3	0.41	黑曜石	墨透	2908	

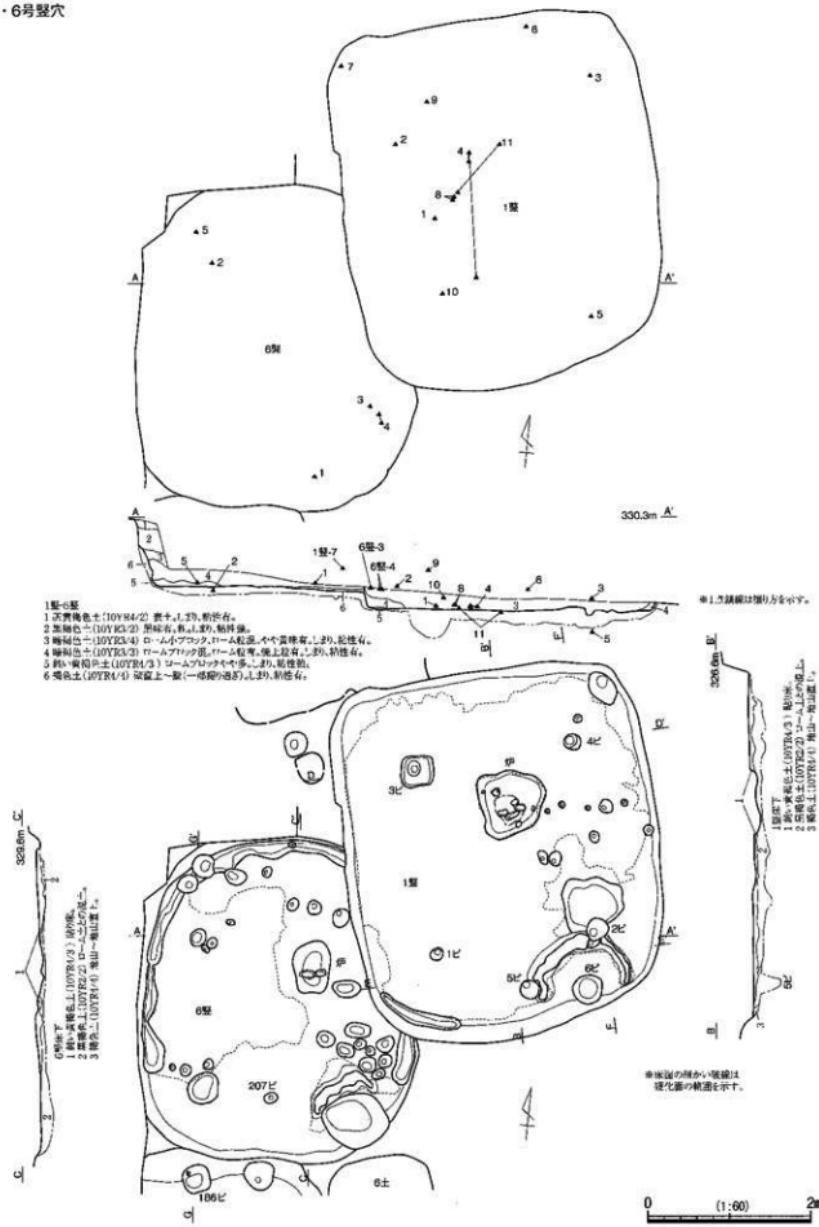
固	地点	No.	分類	直/横/厚cm	g	石 材	色調	注記	備考
66	13号	72	右側	1.3/1.2/0.2	0.24	黒曜石	黒透	一粒	薄片微
66	13号	73	側片	1.5/1.9/0.5	1.35	黒曜石	黒透	板	板器か
66	13号	74	右柱	5.9/4.7/3.4	60.24	黒曜石	黒	周波3159	
66	16号	4	打斧	7.3/5.5/1.7	28	カルンフェルス	暗灰青	3113	
66	16号	5	右側	1.4/(1.4)/0.4	0.36	黒曜石	黒透	3117	
66	16号	6	右側	1.1/1.4/0.2	0.23	黒曜石	黒透	板	
66	16号	7	右側	1.6/1.7/0.3	0.80	黒曜石	黒透	周波3386	
66	17号	8	凹み石	10.5/10.1/4.6	678	安山岩	浅黄	3463	
66	17号	9	打斧	5.6/6.2/1.6	79	砂質粘板岩	灰	3447	
66	17号	10	右側	5.8/3.0/0.9	21	頁岩	灰白	一粒	石板形
66	17号	11	右側	1.2/1.1/0.3	0.22	黒曜石	黒透	東下-1号	
70	18號	13	六石	40/0.29/2.10/7	23100	緑色凝灰岩	鈍い青	3644	
71	18號	16	右側	1.8/1.0/1.3	0.35	黒曜石	黒透	140ビーブ	140ビーブ内
72	19號	17	磨り石	6.2/9.0/4.7	372	安山岩	灰白	3723	
72	19號	18	凹み石	11.0/8.8/3.8	572	安山岩	灰	9745(9)	凹み面は2
72	19號	19	叩き石	16.5/5.6/4.1	666	緑色凝灰岩	浅黄	3487	両端叩き、表面に擦り面
95	19號	20	磨き石	7.8/5.5/4.2	259	砂岩	灰	道標番3166	
72	19號	21	研片	10.2/6.1/2.2	188	頁岩	灰	4070	
95	19號	22	右側	5.2/6.4/1.2	38	粘板岩	灰	道標番3173	
72	19號	23	右側	2.0/1.4/0.3	0.64	黒曜石	黒透	板	剥片微か
72	19號	24	右側	2.5/1.5/0.6	1.43	黒曜石	黒透	一粒	
72	19號	25	右側	1.75/1.0/0.3	0.45	黒曜石	黒透	板	
77	20號	41	磨き石	8.0/4.5/4.0	236	緑色凝灰岩	緑	3757	
77	20號	42	凹み石	12.1/6.1/4.8	596	緑色凝灰岩	灰白	3636	凹み面は4
77	20號	43	凹み石	11.3/5.2/6.5	478	花崗岩	灰白	7101	
77	20號	44	凹み石	1.5/7.0/3.5	407	安山岩	灰白	7099	凹み面は2、側面にも敲打痕
77	20號	45	磨り石	12.6/7.3/5.7	860	砂岩	浅黄	3640	側面に磨き
77	20號	46	打斧	12.8/4.3/1.5	125	砂岩	青灰	5268	
77	20號	47	磨き石	5.0/3.7/2.8	79	砂岩	灰白	3834	
77	20號	48	打斧	5.7/4.0/0.8	37	カルンフェルス	灰青梅	3713	
77	20號	49	右石	18.3/16.4/5.7	3200	緑色岩	オーリーブ青	3739	凹み面は1
78	24號	6	底石	12.6/9.0/4.0	698	砂岩	灰白	4132	鏡面面は4
79	26號	8	磨り石	10.4/7.3/5.3	606	安山岩	灰白	4439	3回他用
79	26號	11	右側	1.4/1.2/0.3	0.25	黒曜石	黒透	4447	
79	26號	12	椎形石群	11.5/6.8/2.3	214	頁岩	浅黄	一粒	
79	28號	3	凹み石	9.5/7.7/3.2	340	安山岩	灰	4532	凹み面は2
82	29號	36	叩き石	9.4/5.9/5.4	473	安山岩	灰青	6066	右側
82	29號	37	凹み石	8.8/7.0/4.3	409	緑色凝灰岩	浅黄	6082	凹み面は2
82	29號	38	磨り石	5.4/8.7/3.1	188	安山岩	灰青	5413	
82	29號	39	凹み石	7.5/6.6/4.2	257	安山岩	晦灰	5414	凹み面は3
82	29號	40	叩き石	14.5/3.6/4.1	365	砂岩	灰白	7102	両端かすかに敲打痕
82	29號	41	磨り石	13.0/5.8/4.7	538	安山岩	灰	6222	
82	29號	42	右側	1.9/1.3/0.5	0.79	黒曜石	黒透	5551	
83	30號	9	磨り石	7.1/9.3/2.5	251	安山岩	にじいろ青	5730	裏面欠損
83	30號	10	複数磨り石	6.5/9.0/5.9	510	安山岩	灰青	5531	凹み面は1
83	30號	11	凹み石	4.6/6.9/4.0	187	安山岩	灰	5718	凹み面は1
83	30號	12	磨り石	8.3/5.8/4.9	439	安山岩	灰青	5777	使用面は4
83	30號	13	麻石	5.9/6.0/5.7	280	緑色凝灰岩	オーリーブ青	5722	錆斑状
83	30號	14	磨き石	6.1/3.4/2.3	84	砂岩	灰	5724	
83	30號	15	右側	1.7/1.2/3.0	0.33	無縫石	黒透	5775	
83	30號	16	打斧	12.7/5.2/1.8	140	粘板岩	黒透	5774	刃部にスレ
84	32號	7	磨り石	9.1/8.2/4.9	596	安山岩	灰オーリーブ	6116	裏面は1
84	32號	8	右側	2.0/1.7/0.3	0.36	黒曜石	黒透	5674	
84	33號	8	右側	0.8/1.1/0.2	0.12	黒曜石	黒透	6601	
85	33號	9	凹み石	11.2/9.35/4.1	732	安山岩	灰白	6602	凹み面は2、裏面は磨り面
85	33號	10	凹み石	6.3/(7.15)/4.3	522	安山岩	灰	6690	凹み面は2
85	33號	11	凹み石	6.25/6.5/2.6	288	安山岩	灰青	6485	凹み面は2
85	33號	12	凹み石	6.4/7.2/3.9	473	安山岩	灰青	周波6744	凹み面は2、裏面は磨り面
87	35號	21	右側	22.8/11.6/10.8	5660	安山岩(緑色変質)	灰青	37244	他の北東溝に見立
87	35號	22	右側	3.9/4.5/1.7	53	粘板岩	灰白	6812	
87	35號	23	磨り石	11.8/5.0/3.3	385	緑色凝灰岩	オーリーブ灰	7106	
87	35號	24	複数磨り石	6.1/3.2/4.9	224	安山岩		7113	
87	35號	25	凹み石	9.5/9.3/6.0	710	安山岩	黄青	7227	凹み面は3面
87	35號	26	凹み石	11.6/7.4/3.6	598	緑色凝灰岩	灰オーリーブ	7114	凹み4.2面
87	35號	27	複数磨り石	5.4/7.1/0.7	51	千枚岩	灰	7202	

番	地點	№	分類	長/幅/厚cm	kg	石 材	色調	特記	備 考
87	36号	28	石鐵	1.6/1.1/0.3	0.30	墨暈石	黒透	6828	
87	36号	29	白暈	2.45/1.75/0.3	0.91	墨暈石	黒透	7224	
87	37号	3	凹み石	(8.2)/7.7/4.2	377	安山岩	灰褐色	7123	凹み面は1
88	38号	6	凹み石	9.3/6.4/1.5	411	緑色変状岩	オリーブ黄	7134	凹み面は2
88	38号	7	碧り石	10.1/6.5/4.7	514	緑色変状岩	浅青	7190	碧り面は2
88	12号	1	洞片	2.4/2.9/0.35	2.92	黒暈石	黒透	1634	洞隙のある洞片
88	27号	1	杏石	22.3/22.5/10.6	8180	緑色変状岩	浅青	3767	
88	33号	1	碧り石	13.3/8.2/4.1	706	安山岩	灰青	4481	
89	49号	6	透鏡?	2.4/2.1/8.0/5	2.35	墨暈石	黒透	4195	碧り面は2
89	63号	2	石鐵	2.0/1.6/0.5	1.12	墨暈石	黒	-	一括
90	71号	4	凹み石	9.7/6.7/3.5	400	安山岩	灰褐色	4537	凹み面は2
91	47号	1	石鐵	2.05/1.45/0.5	0.74	墨暈石	黒	2945	
91	117号	1	石鐵	1.4/1.6/0.4	0.81	加暈石	黒透	-	一括
92	3風岡木	1	打斧	6.65/8.1/6	39	砂岩	灰	4707	
92	君嶋外	80	ナイフ形	4.5/1.4/0.4	2.77	墨暈石	黒透	5162	印石器
94	遠橋外	81	石鐵	2.3/1.6/0.25	0.36	墨暈石	黒透	1789	
94	遠橋外	82	石鐵	1.6/0.95/1.4	0.41	墨暈石	黒	透標外20墨透3844	
94	遠橋外	83	石鐵	1.6/1.1/0.3	0.35	墨暈石	黒透	1851	
94	遠橋外	84	石鐵	1.9/1.4/0.4	0.67	墨暈石	黒透	透標外4226	
94	遠橋外	85	石鐵	2.1/1.4/0.4	1.09	墨暈石	黒透	透橋外-透	
94	遠橋外	86	石鐵	2.0/1.35/0.35	0.50	加暈石	黒透	透橋外1778	
94	遠橋外	87	石鐵	1.9/1.8/0.35	0.73	墨暈石	黒透	17号由3381	
94	遠橋外	88	石鐵	1.9/1.35/0.4	0.50	加暈石	黒	4061	
94	遠橋外	89	石鐵	1.21/1.5/0.4	0.69	墨暈石	黒透	477	
94	遠橋外	90	石鐵	2.0/1.4/0.46	0.68	加暈石	黒透	透標外1831	
94	遠橋外	91	石鐵	1.7/1.4/0.4	0.69	墨暈石	黒透	透橋外4286	
94	遠橋外	92	石鐵	1.7/1.3/0.5	0.62	加暈石	黒透	-	一括
94	遠橋外	93	石鐵	1.9/1.5/0.4	0.52	墨暈石	黒透	透橋外4250	
94	遠橋外	94	石鐵	2.0/2.4/0.4	0.64	加暈石	黒透	透橋外5336	
94	遠橋外	95	石鐵	2.2/1.22/0.3	0.33	墨暈石	黒透	835	
94	遠橋外	96	片岩	2.3/0.95/0.4	0.67	墨暈石	黒透	16番南3271	石錐狀
95	遠橋外	97	打斧	11.8/4.7/1.7	152	砂岩	灰白	透橋外4336	刃部半丸
95	遠橋外	98	打斧	14.6/6.0/2.5	119	ホルンフェルス	灰オリーブ	4877	
95	遠橋外	99	打斧	8.7/4.4/0.8	61	透質粘板岩	灰	5272	
95	遠橋外	100	打斧	11.5/3.0/1.3	8	ホルンフェルス	灰	1148	黒い
95	遠橋外	101	打斧	10.2/5.2/1.0	67	砂岩	灰	透標外336	
95	遠橋外	102	打斧	11.4/5.8/1.7	136	ホルンフェルス	透灰	透橋外836	
95	遠橋外	103	打斧	5.0/5.6/0.8	41	ホルンフェルス	灰	466	
95	遠橋外	104	桃刃形石器	7.0/3.8/1.3	47	頁岩	灰	5373	
95	遠橋外	105	凹み石	13.9/9.7/4.3	1020	安山岩	透青	透橋外1806	凹み面は2
95	遠橋外	106	凹み石	10.9/7.6/4.5	584	安山岩(緑色変質)	にぶい黄	-	凹み面は3
95	遠橋外	107	凹み石	13.0/9.8/3.7	774	安山岩	鉄	透標外1996	凹み面は2
95	遠橋外	108	凹み石	11.5/10.1/3.7	928	安山岩	黒透	透橋外1529	凹み面は2
95	遠橋外	109	凹み石	10.5/9.0/3.3	497	安山岩	にぶい黄	透橋外1592	凹み面は2
95	遠橋外	110	凹み石	10.5/9.0/4.2	636	安山岩	黒黄	5334	凹み面は2
95	遠橋外	111	凹み石	8.2/6.8/4.0	118	安山岩	灰白	4888	凹み面は2
95	遠橋外	112	凹み石	9.5/8.9/2.5	361	安山岩	灰オリーブ	7151	凹み面は2
95	遠橋外	113	碧り石	9.7/5.8/4.3	347	安山岩	灰白	透橋外4587	
95	遠橋外	114	凹み石	11.9/9.2/4.7	902	安山岩	透青	周溝1997	
95	遠橋外	115	碧り石	11.7/6.2/6.1	716	緑色変状岩類	透青	透橋外1395	
95	遠橋外	116	透鏡?	10.7/6.9/2.4	329	砂岩	透青	5311	紙石南1
95	遠橋外	117	碧り石	8.3/6.2/6.1	584	安山岩	灰青	透橋外2509	
95	遠橋外	118	碧り石	10.2/7.4/5.6	662	安山岩	灰	透橋外2510	
95	遠橋外	119	碧り石	8.4/5.9/5.6	469	安山岩	灰青	透橋外2153	
95	遠橋外	120	碧り石	7.4/5.0/3.7	210	ダイサイト(緑色変質)	にぶい黄	透橋外3345	

第10表 金属製品観察表

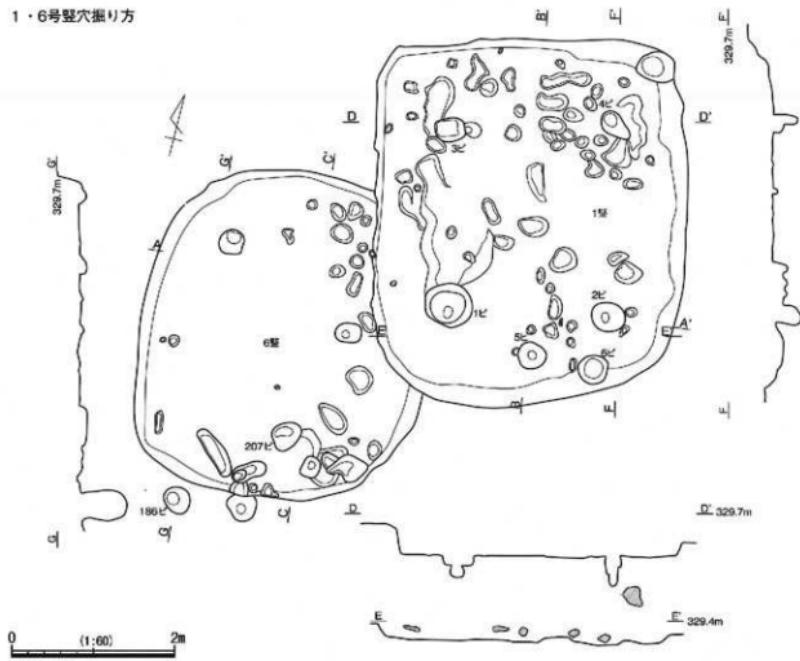
番	地點	量測	材質	長cm	幅cm	厚cm	重きg	注記	備 考	
62	26	12号	拂状ち製品	鉄	15.2	0.8	0.4	18.0	1767	
95	121	遠橋外	かすりかい	鉄	6.8	0.7 (0.35)	0.7	4.0	-	
95	122	遠橋外	釘	鉄	4.2	0.3	0.3	1.0	-	
95	123	遠橋外	不規則製品	鉄	3.2	1.1	0.4	4.3		
95	124	遠橋外	火打し金	鉄	5.25	2.7	0.4	15.2	両面内出上	
95	125	遠橋外	釘	7.35	5.5	4.0	64.0	古墳時代か		
95	126	遠橋外	内鉄	鋼	2.4	2.4	0.15	2.8	5247	元金? 鎏金?、背面内出上

1・6号堅穴

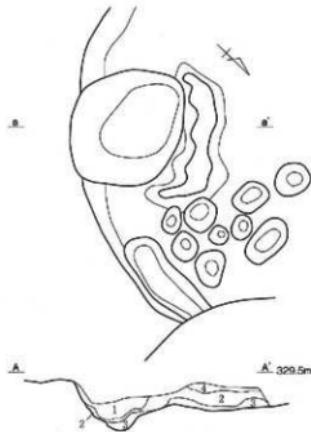


第1図 1・6号堅穴(1)

1・6号竪穴掘り方



6号竪穴出入口ピット



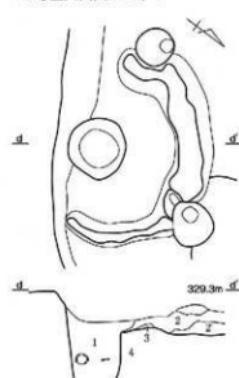
- 6号出入口ピット  
 1 暗褐色土(10YR3/3) ローム有。  
 2 黒褐色角巣土(10YR6/3) しわ有。性状柔軟。コーム小・ソックリキや多。  
 3 黄褐色土(10YR4/4) 一層褐色土。  
 4 黒褐色角巣土(10YR6/3) 土手の部分。ローム土。底と同質。

1号竪穴炉



- 1号炉  
 1 黒褐色土(10YR2/2) 腐化較有。黒味のある土。  
 2 黒褐色土(10YR4/4) ローム小・ブロックや多。腐化較有。L10%、性状柔軟。  
 3 黄褐色土(10YR4/3) 2層以上ロームブロックや多。腐化較有。L10%、性状柔軟。  
 4 黄褐色土(10YR4/6) ローム土。底山。しわ有。性状柔軟。

1号竪穴出入口ピット

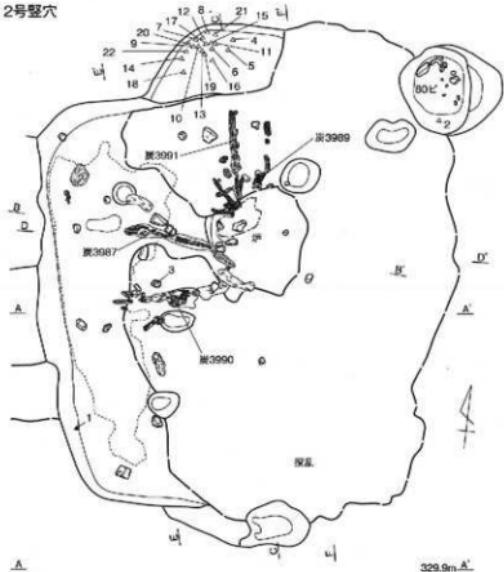


- 1号出入口ピット  
 1 黄褐色土(10YR6/3) 竪穴火薬上。土器片(土器片)入。  
 2 ムラサキシナガバや多。性状柔軟。  
 3 黑褐色土(10YR4/4) ローム小・ブロックや多。腐化較有。L10%、性状柔軟。  
 4 黄褐色土(10YR4/6) ローム土。底山。しわ有。性状柔軟。

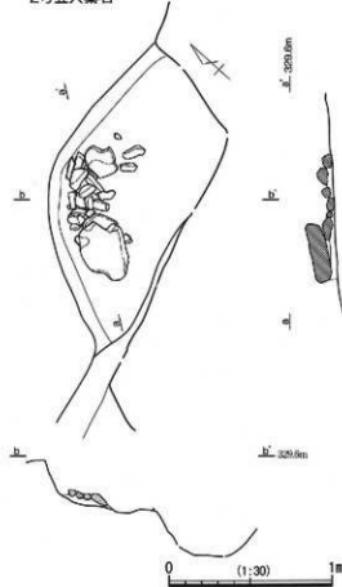
0 (1:30) 1m

第2図 1・6号竪穴(2)

2号整穴



2号整穴集石

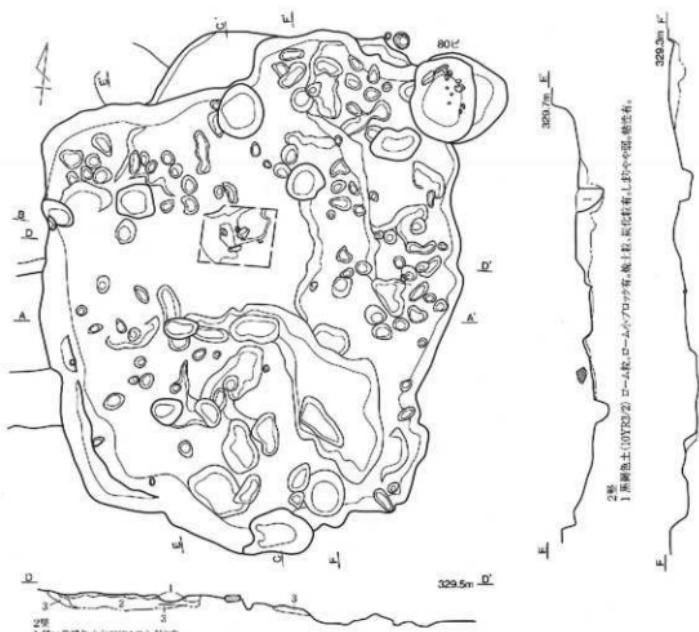


2号整穴炉

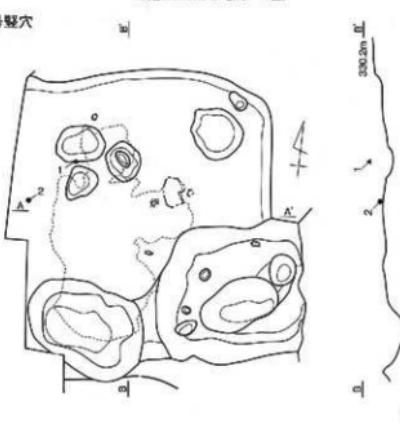


第3図 2号整穴(1)

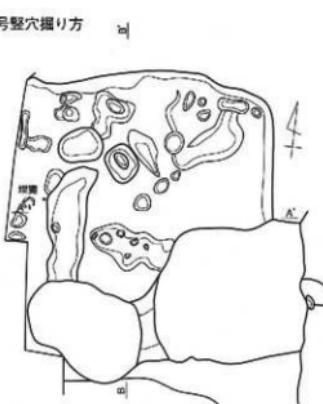
2号竪穴掘り方



3号竪穴

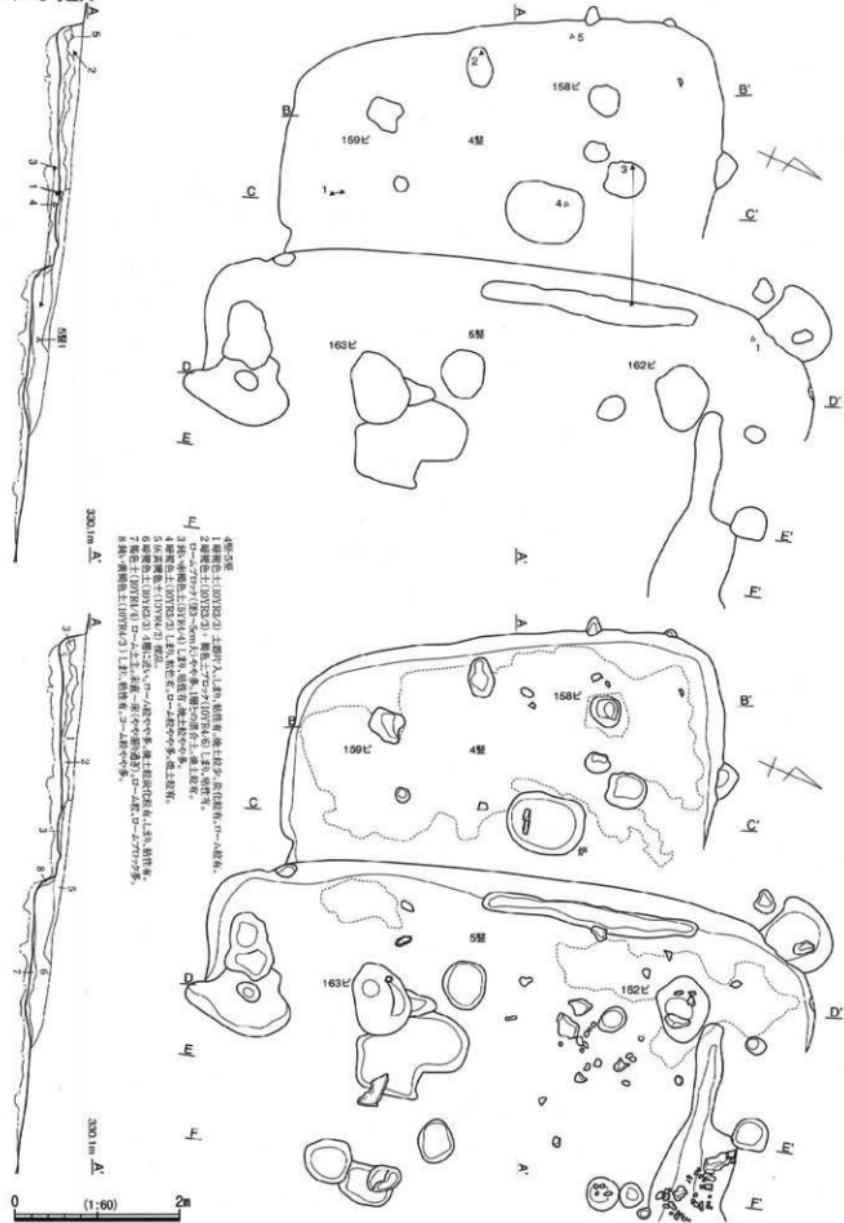


3号竪穴方



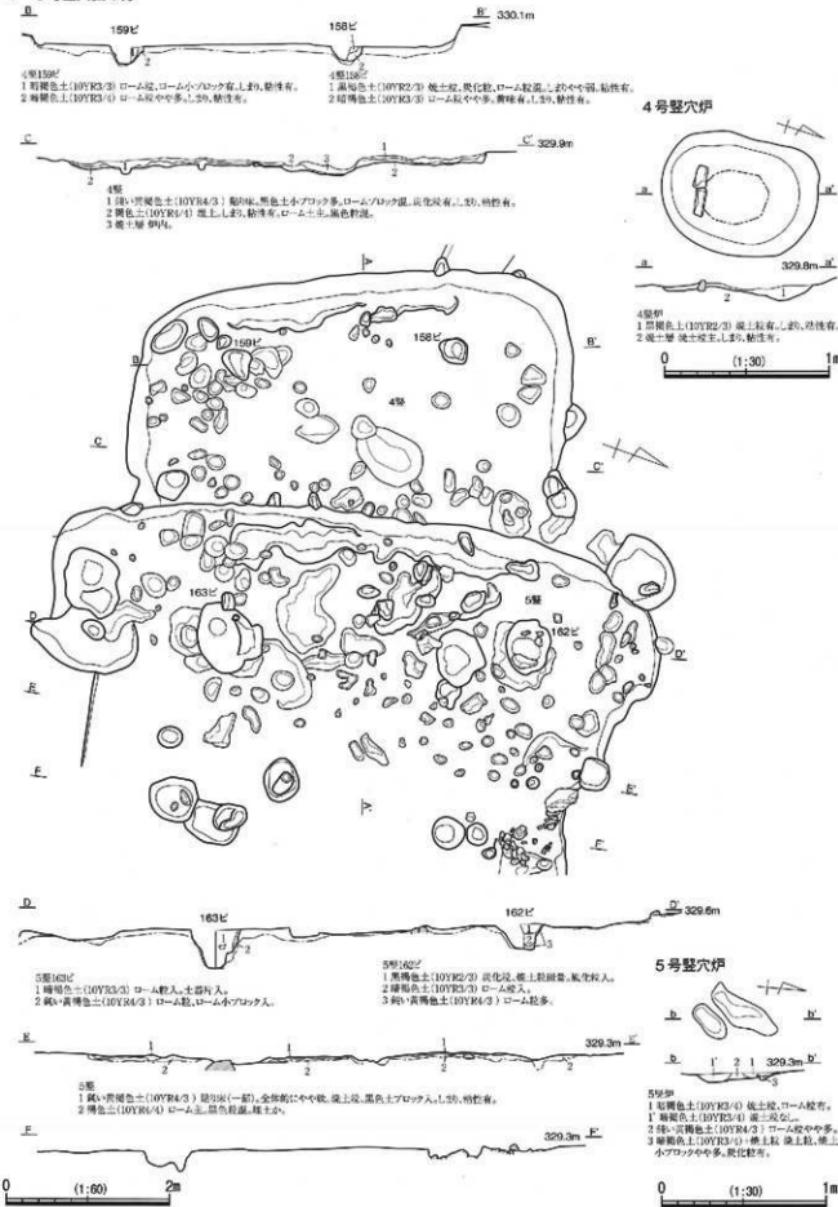
第4図 2号竪穴(2)、3号竪穴

4・5号窓穴



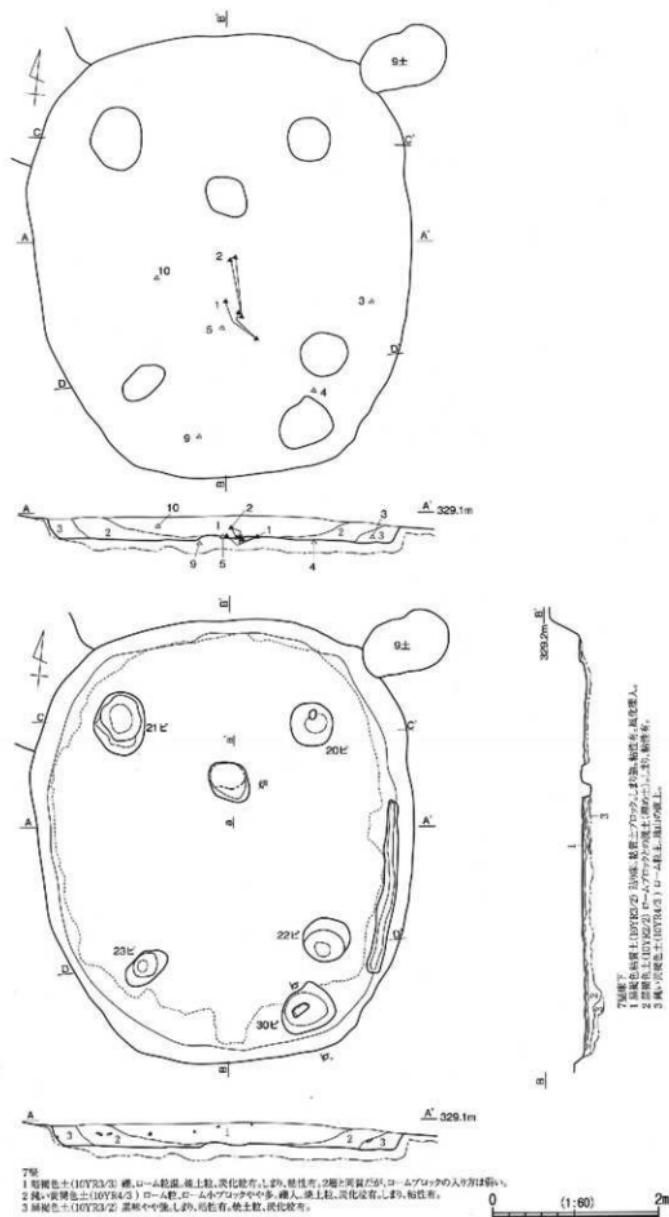
第5図 4・5号窓穴(1)

#### 4・5号豎穴掘り方



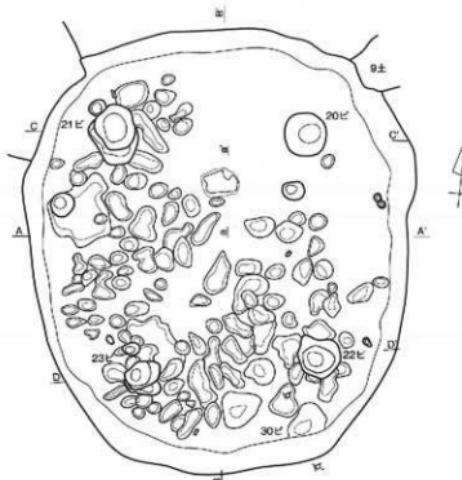
第6図 4・5号竪穴(2)

7号竪穴



第7図 7号豎穴(1)

7号堅穴掘り方



7堅20ビ  
1 黄褐色土(10YR3/4) ローム粒含。やや黄味有。L.30, 粘性有。  
2 開闢色土(10YR4/2) 小塊入。L.30, 粘性有。  
3 黄褐色土(10YR3/4) L.30, 粘性有。L.30, 粘性有。L.30, 粘性有。  
4 開闢色土(10YR4/4) ローム土上。L.30, 粘性有。  
5 黄褐色土(10YR3/4) ローム粒含。L.30, 粘性有。小塊入。

7 329.3m

7堅20ビ  
1 開闢色土(10YR4/4) コームブロック大。  
2 開闢色土(10YR3/2) L.10中中間。コーム粒含。

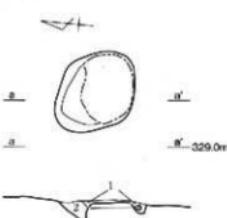
7堅23ビ  
1 黄褐色土(10YR3/4) ローム粒や多。黄味有。L.30, 粘性有。  
2 開闢色土(10YR4/4) L.30, 粘性有。ロームブロック有。  
3 黄褐色土(10YR3/4) L.30, 粘性有。黄味有。ローム粒有。  
4 加穀色土(10YR2/2) L.30, 粘性有。ローム粒や多。  
5 開闢色土(10YR4/4) L.30, 粘性有。ローム土上。30ヒローム土の混合。

7 329.0m

7堅22ビ  
1 黄褐色土(10YR2/3) ローム粒、板状粒、小塊有。L.30, 粘性有。  
2 開闢色土(10YR4/4) L.30中や多。L.30中や多。粘性有。  
3 開闢色土(10YR4/4) 岩山に近。ローム土上。L.30, 粘性有。

0 (1:60) 2m

7号堅穴炉



丁觸炉

1 黄褐色土(10YR3/2) L.30, 粘性有。微土粒。泥化軟方。  
2 開闢色土(10YR4/3) L.30, 粘性有。ローム土。風山底上。1層合。

7号堅穴出入口30号ピット

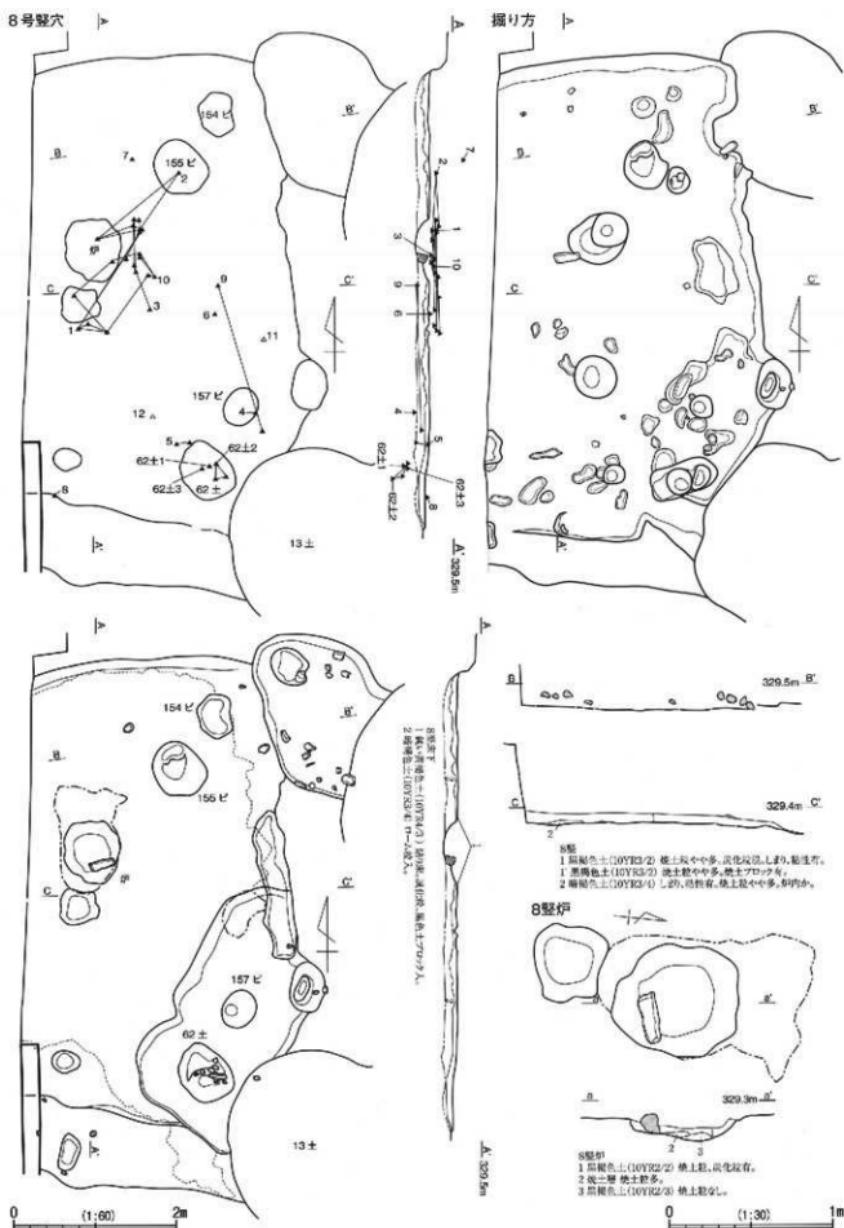


7号堅穴出入口30号ピット

1 黄褐色土(10YR3/2) ローム粒、板状粒、泥味有。L.30中や多。粘性有。  
2 黄褐色土(10YR2/2) ローム粒、ローム小プロックや多。L.30中や多。粘性有。  
3 開闢色土(10YR4/3) ローム粒、ローム小プロック多。黄味有。L.30, 粘性有。

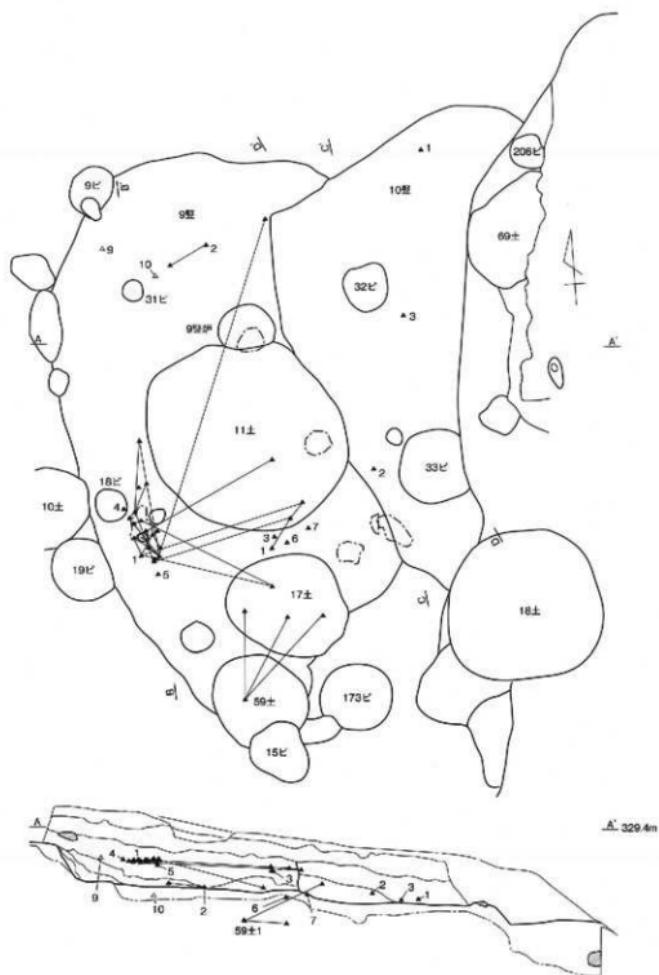
0 (1:30) 1m

第8図 7号堅穴(2)



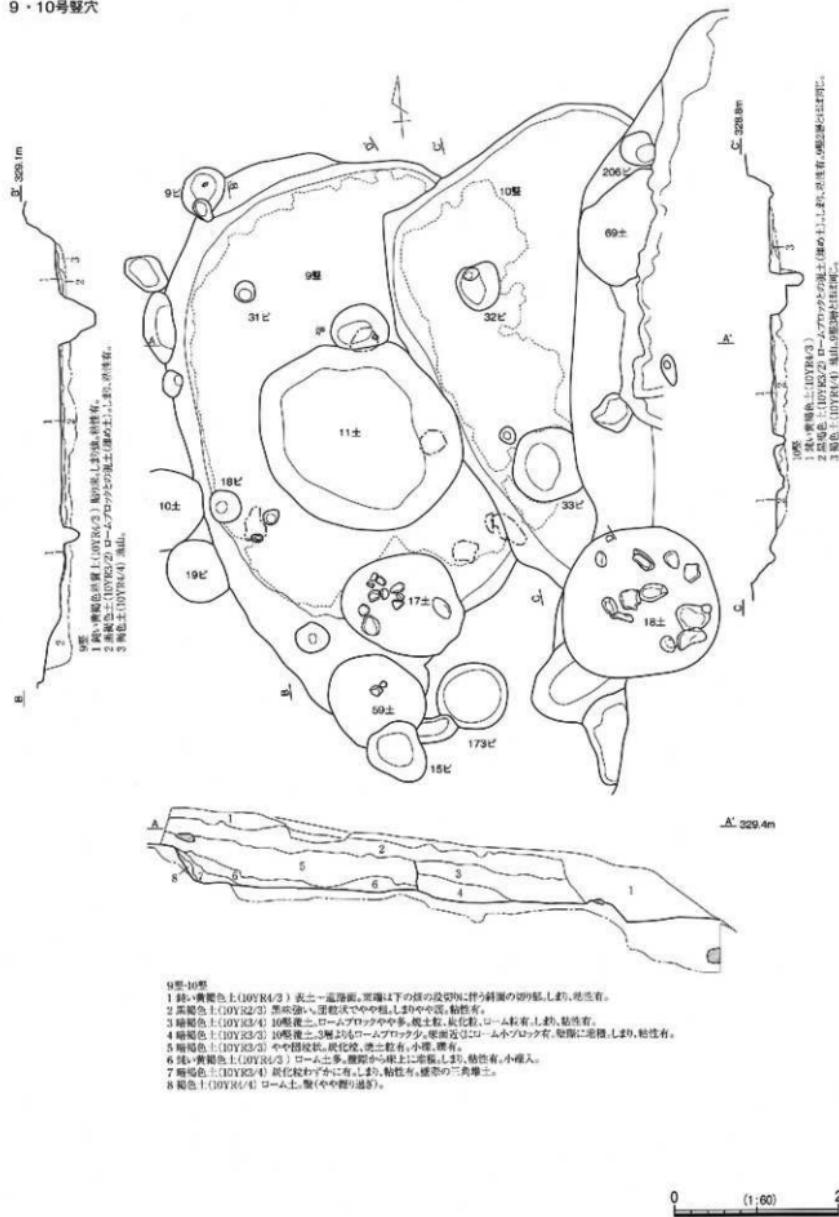
第9図 8号豎穴

#### 9·10号竪穴



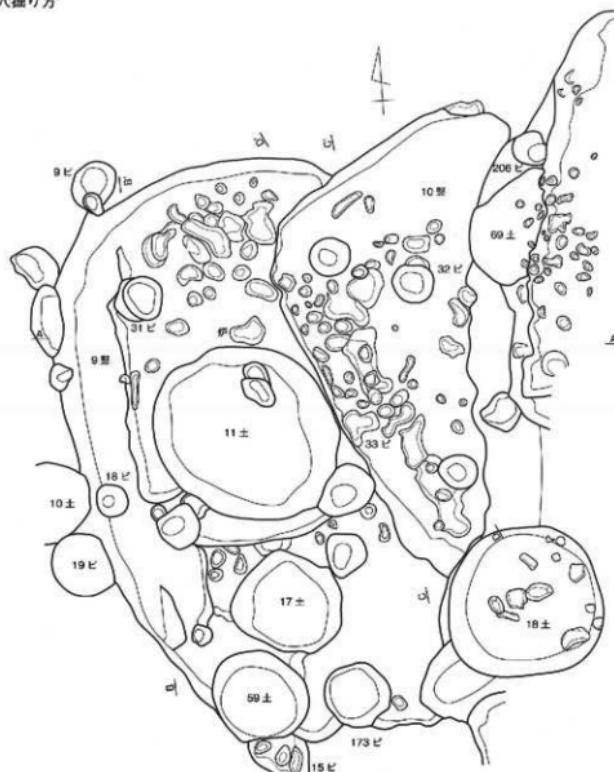
第10図 9・10号豎穴(1)

9・10号竪穴



第11図 9・10号竪穴(2)

9・10号豎穴掘り方



9号聚穴炉



500-2



卷之三

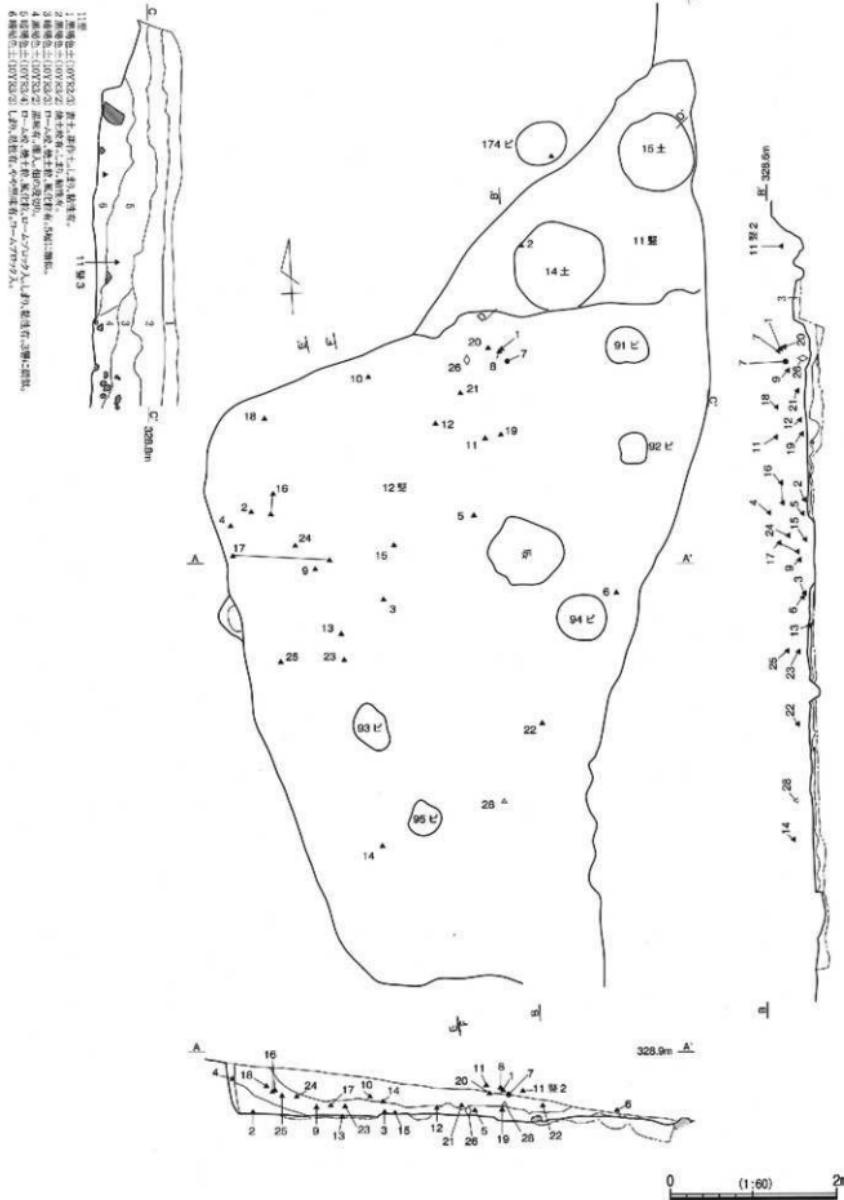


9盛即  
1 黒褐色土(10YR2/3) 砂土较多、しわ、粘性有。  
2 黄褐色土(10YR2/3) 炭化粒多、基盤強、根土直面。  
しわ、粘性有。  
3 黄褐色土(10YR4/3) ローム土中に2層を含む。  
しわや少、粘性有。

0 (1:30) 1m

第12図 9・10号竪穴(3)

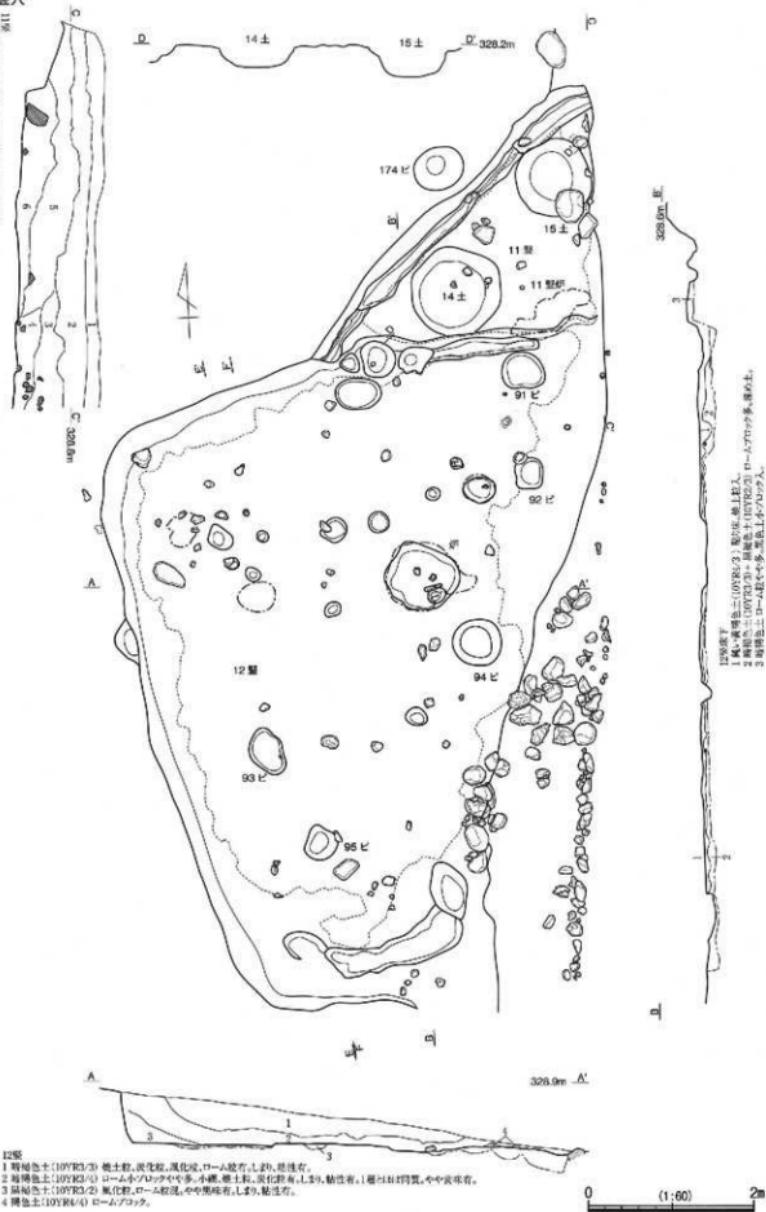
11・12号竪穴



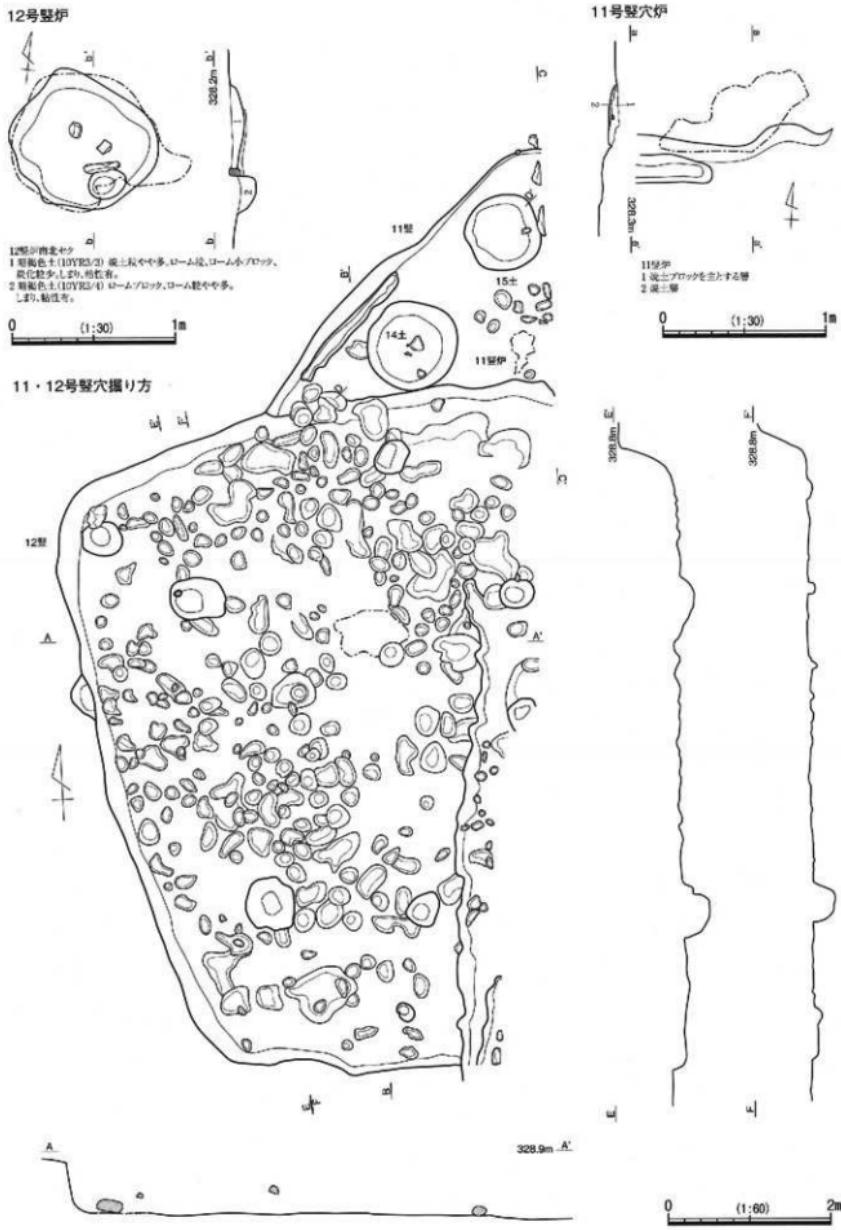
第13図 11・12号竪穴(1)

11・12号竪穴

11号  
1 黄褐色土(10YR5/2) 砂土粒、灰壳粒、風化壳、ローム粒有。上部有、無性有。  
2 黄褐色土(10YR5/2) 砂土粒、灰壳粒、風化壳、ローム粒有。上部有、無性有。  
3 黄褐色土(10YR5/2) 砂土粒、灰壳粒、風化壳、ローム粒有。上部有、無性有。  
4 黄褐色土(10YR4/4) ローム/ブロック。

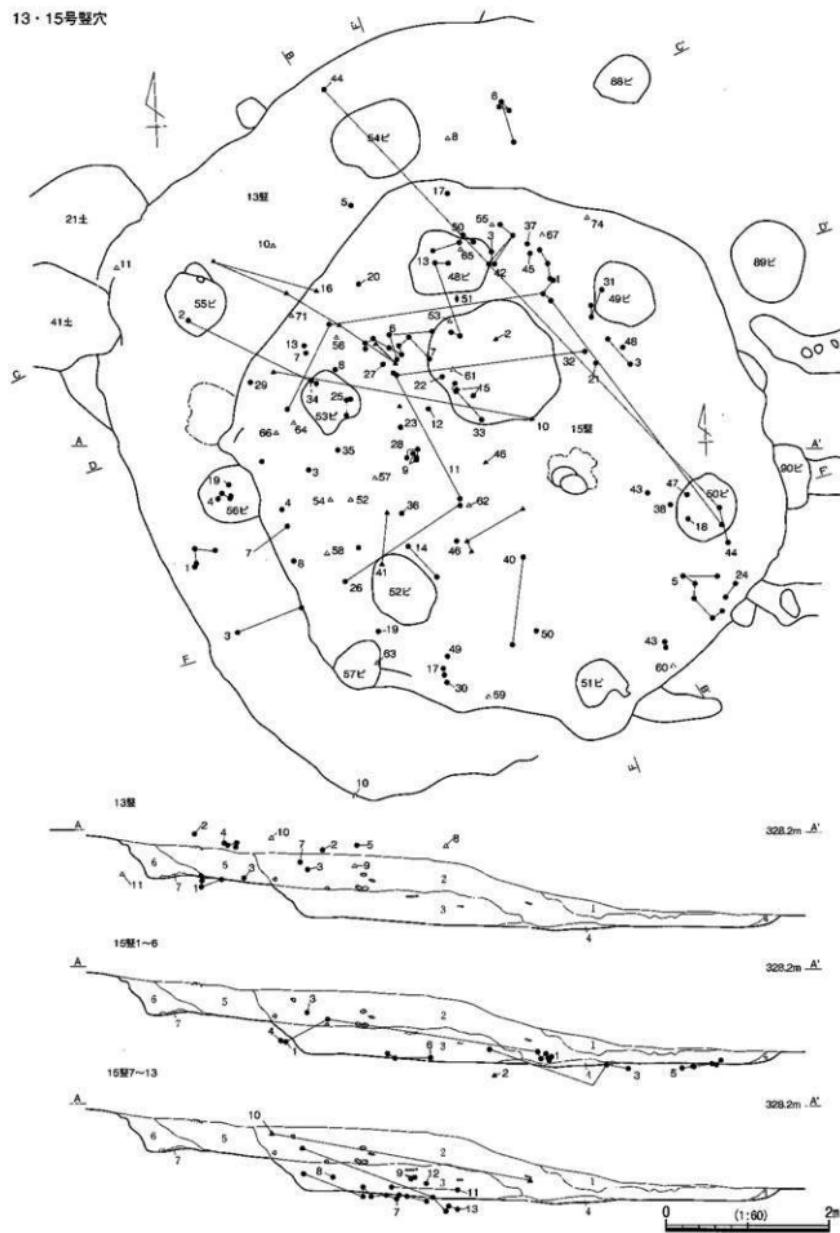


第14図 11・12号竪穴(2)



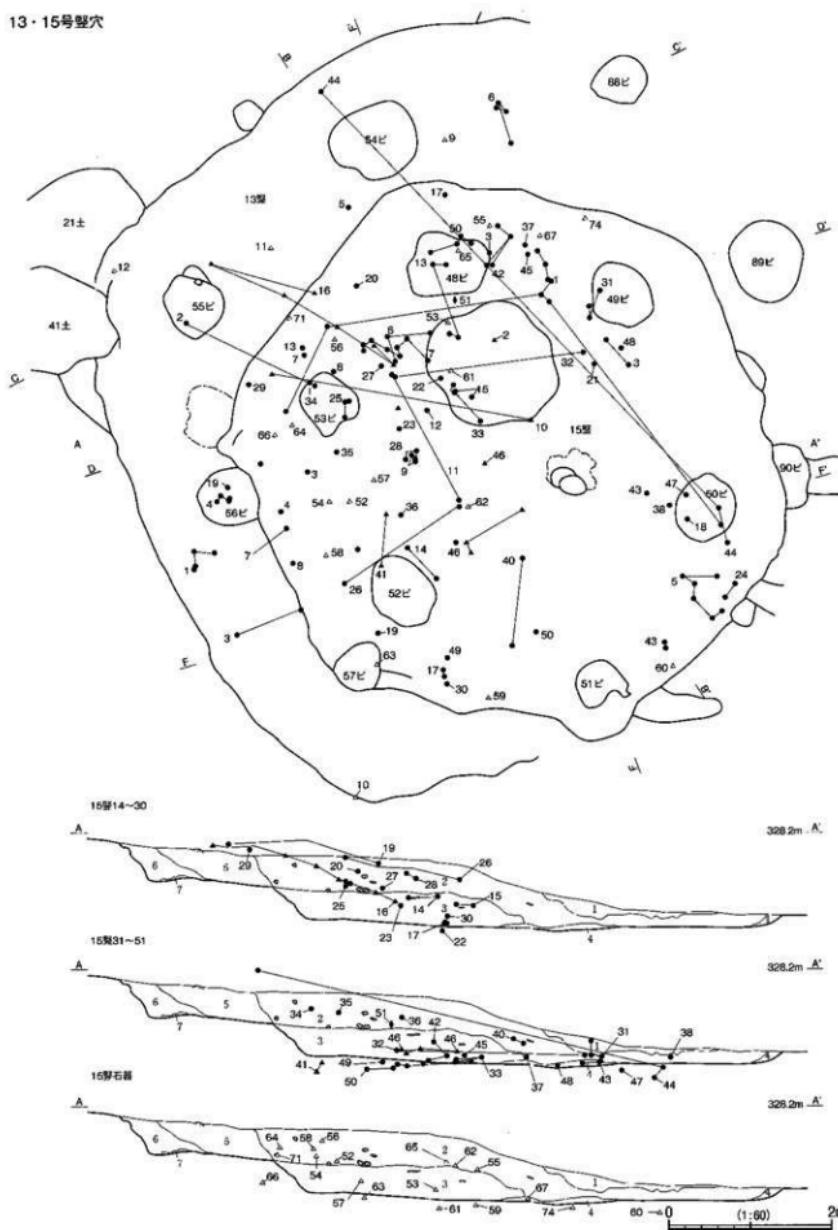
第15図 11・12号竪穴(3)

13・15号竖穴

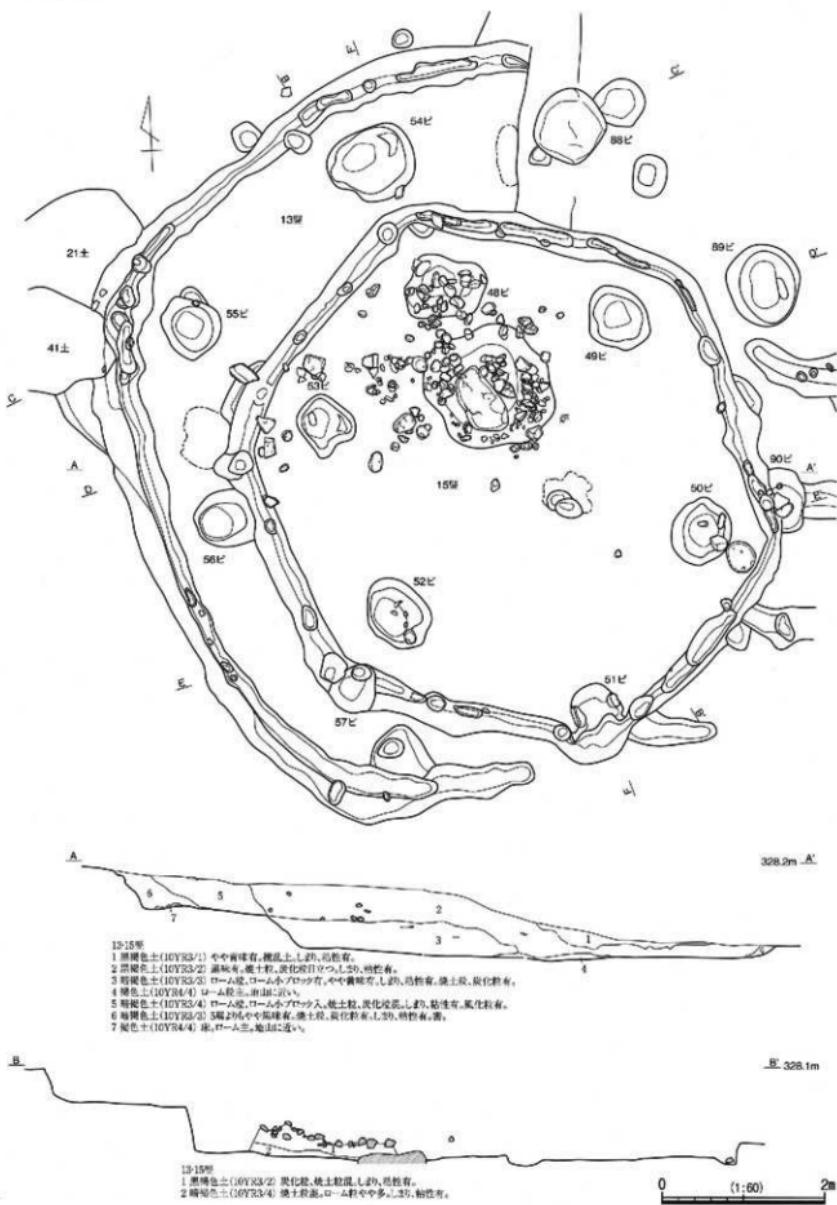


第16図 13・15号竖穴(1)

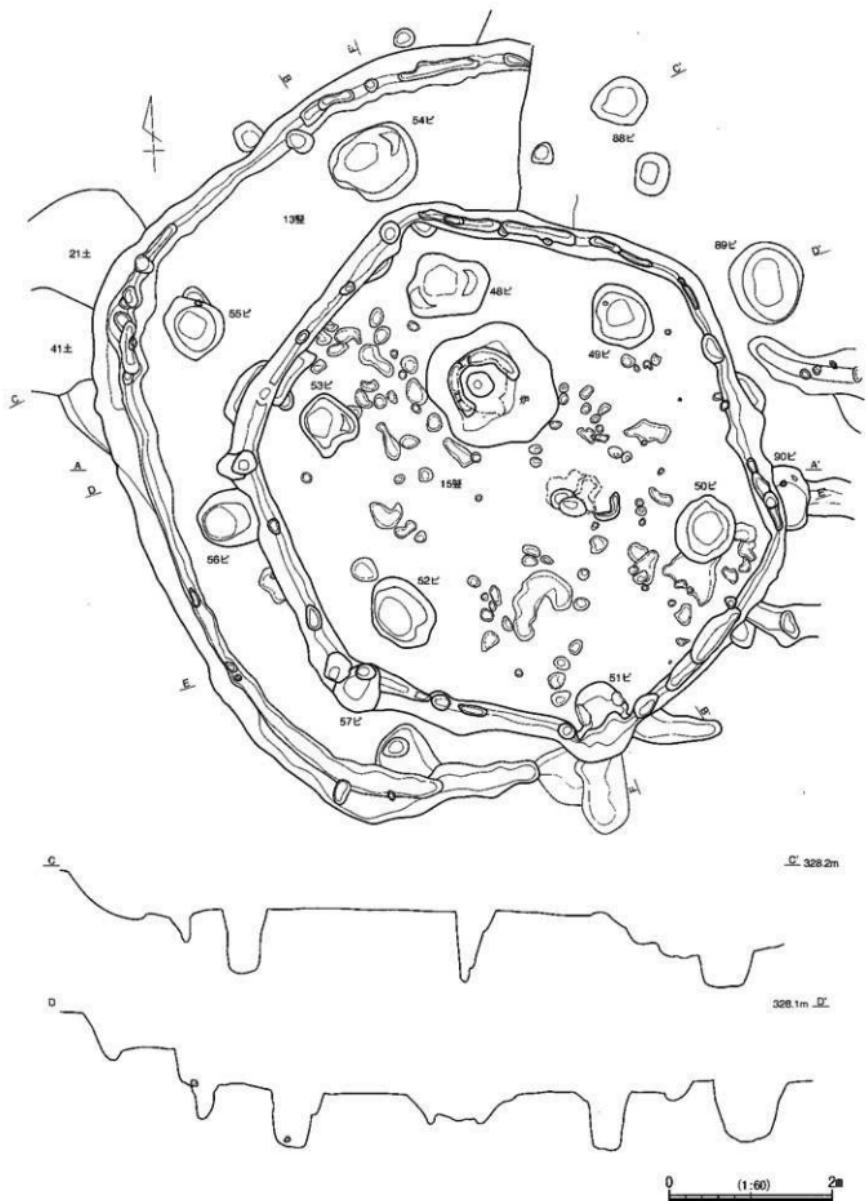
13・15号豊穴



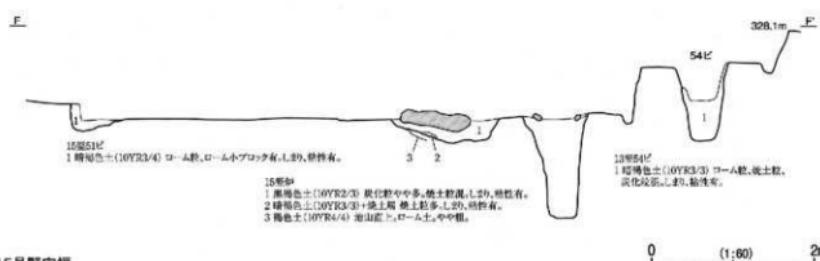
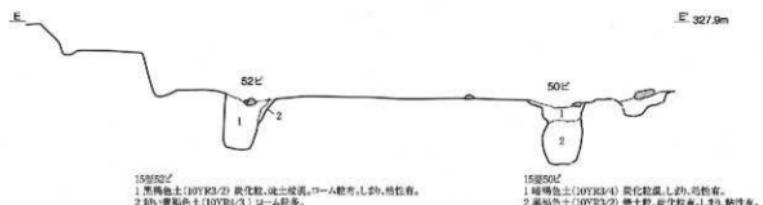
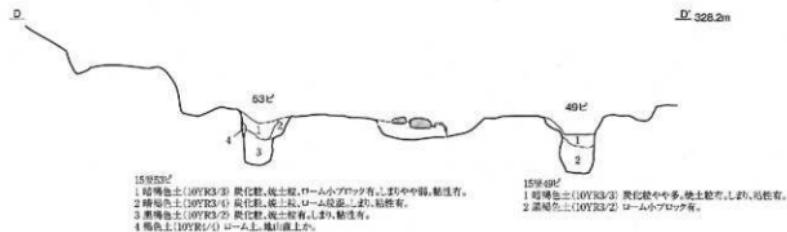
第17図 13・15号豊穴(2)



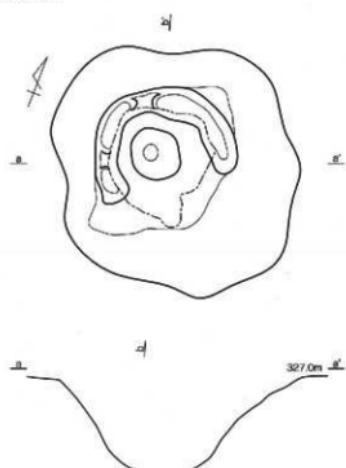
第18図 13・15号豎穴(3)



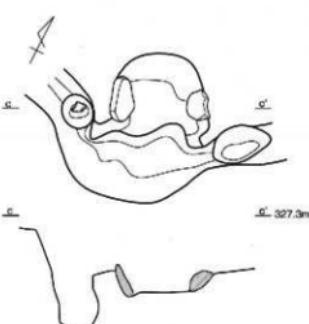
第19図 13・15号竪穴(4)



15号竪穴炉

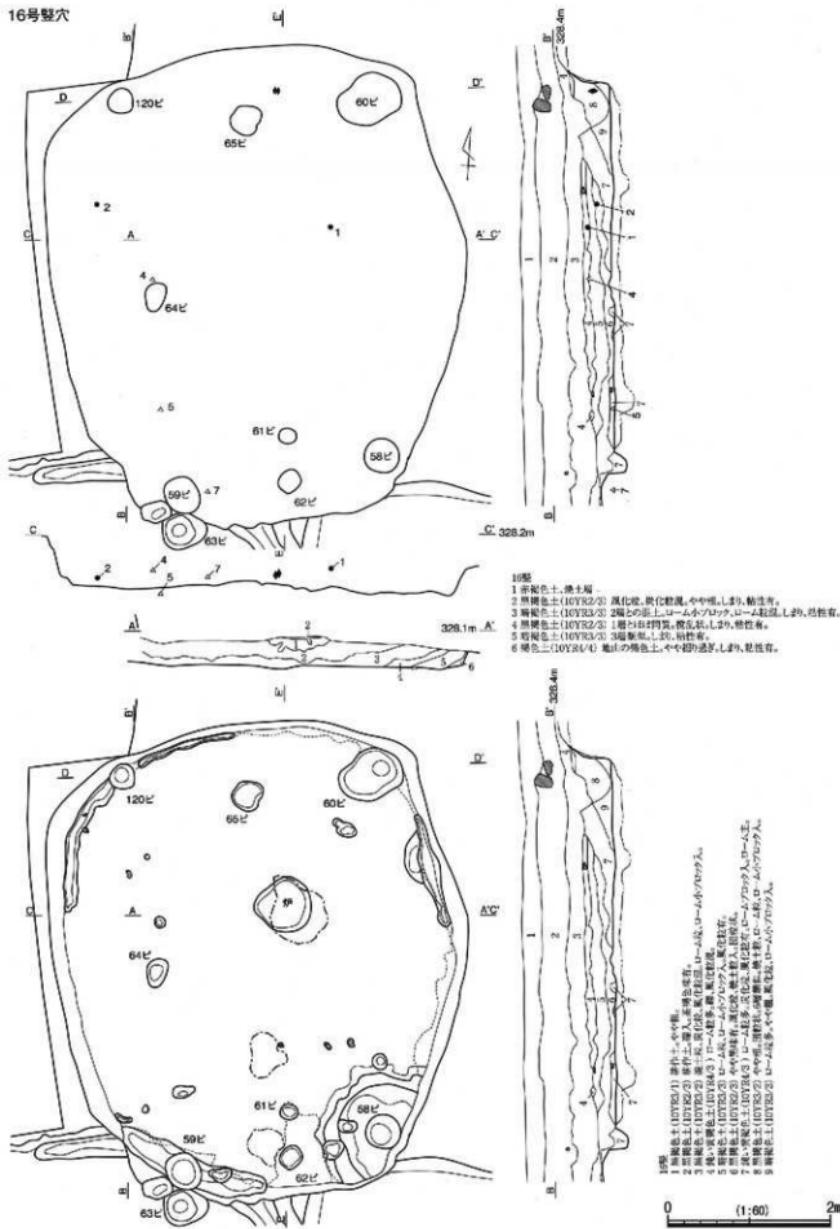


15号竪穴出入口ビット

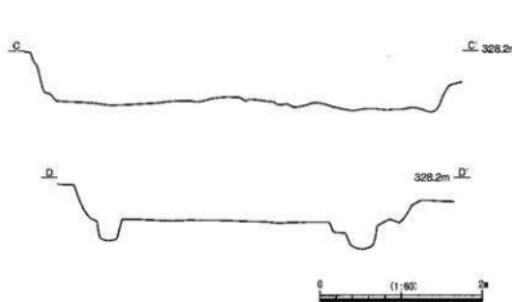
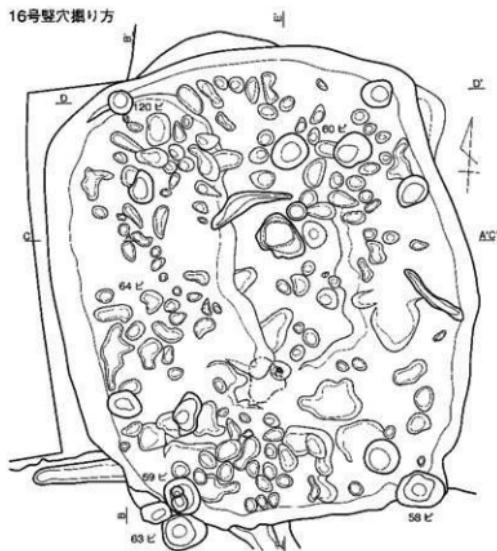


第20図 13・15号竪穴(5)

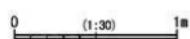
16号豊穴



第21図 16号豊穴(1)

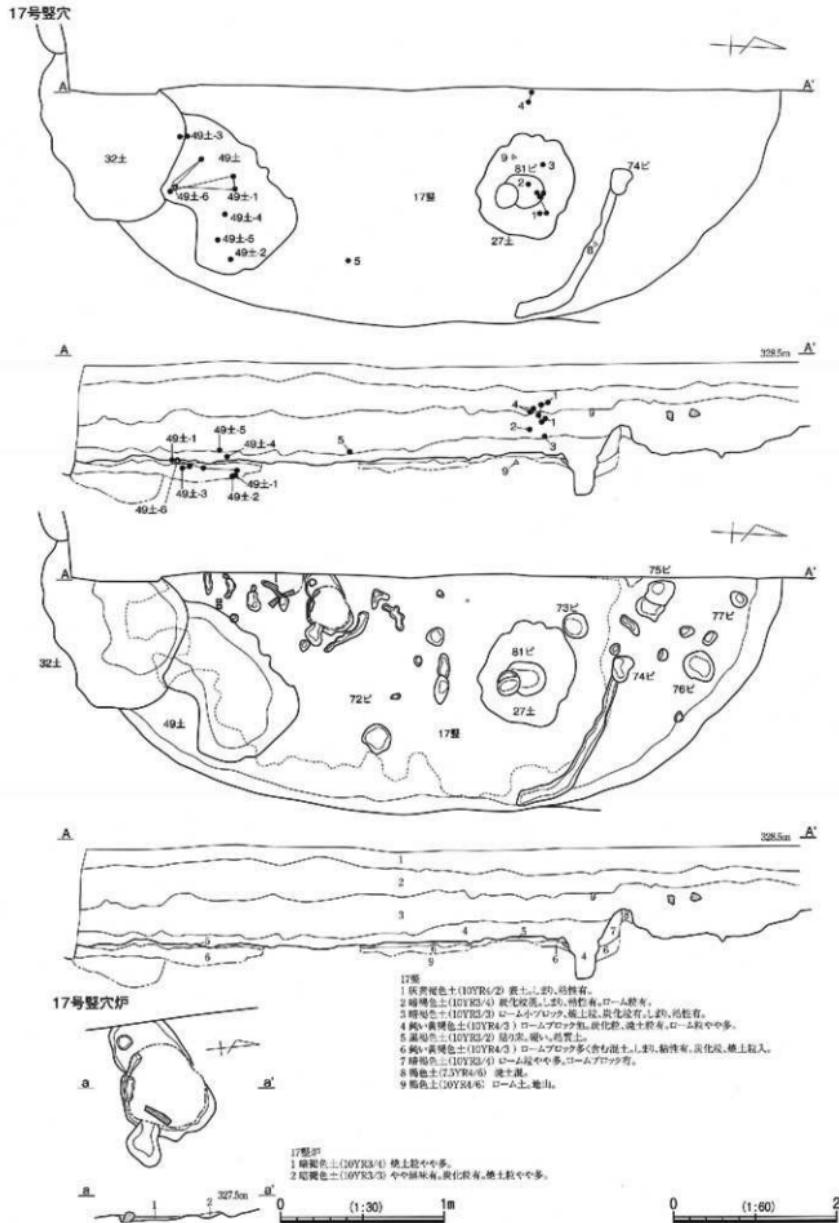


- 16号入口ピット  
1 黒褐色上(10YR3/2)桃十粒少、風化粒、ローム粒有。  
2 黑褐色上(10YR3/3)1層2mm砂やや多、風化粒有。  
3 黄褐色上(10YR2/3)風化粒、ローム小プロック、ローム粒有。  
4 黄褐色下(10YR4/4)ロームプロック、ローム粒有。  
5 黄褐色(10YR4/4)ローム上。



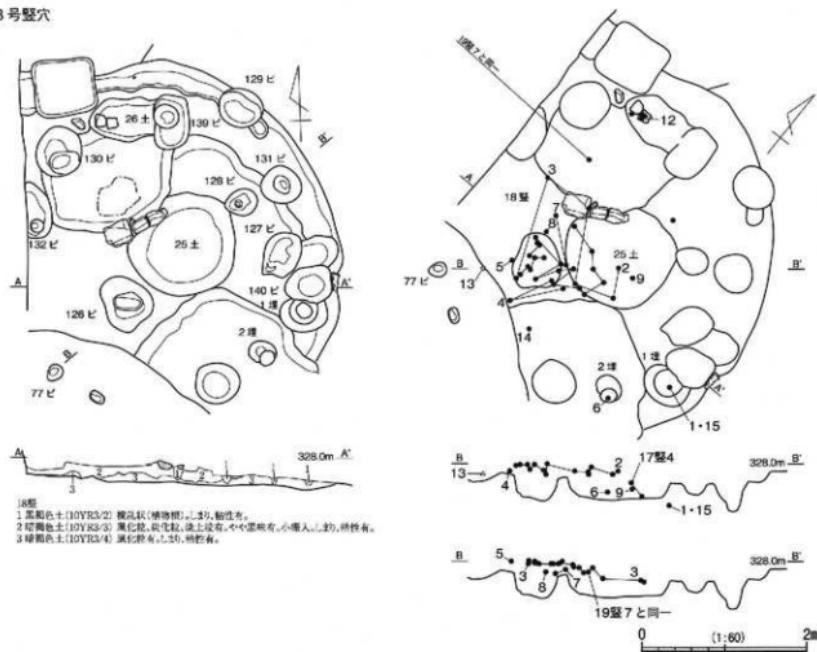
第22図 16号竖穴(2)

16号  
1 黑褐色土(10YR2/2) 砂土粒混、風化物有。  
2 黄褐色土 黄褐色土に風化した土。



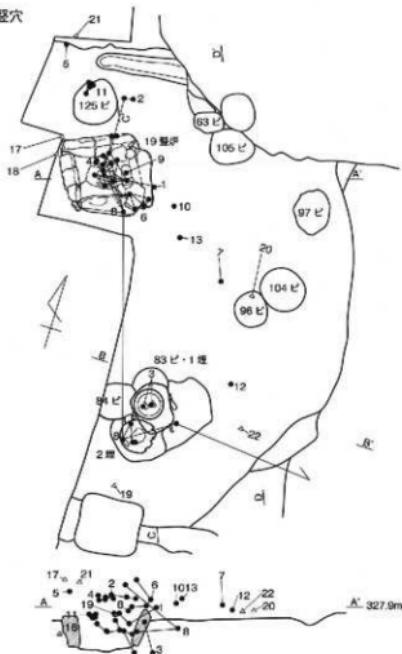
第23図 17号竖穴

### 18号竪穴

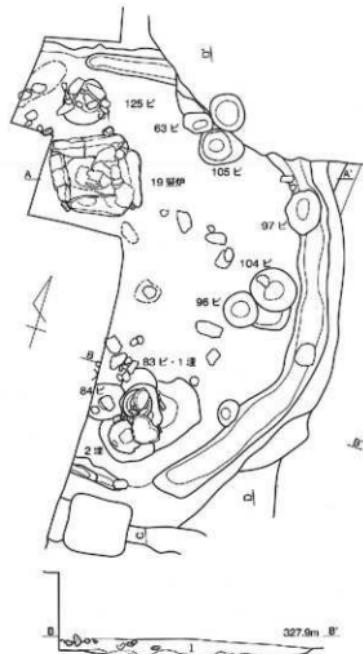


第24図 18号竪穴

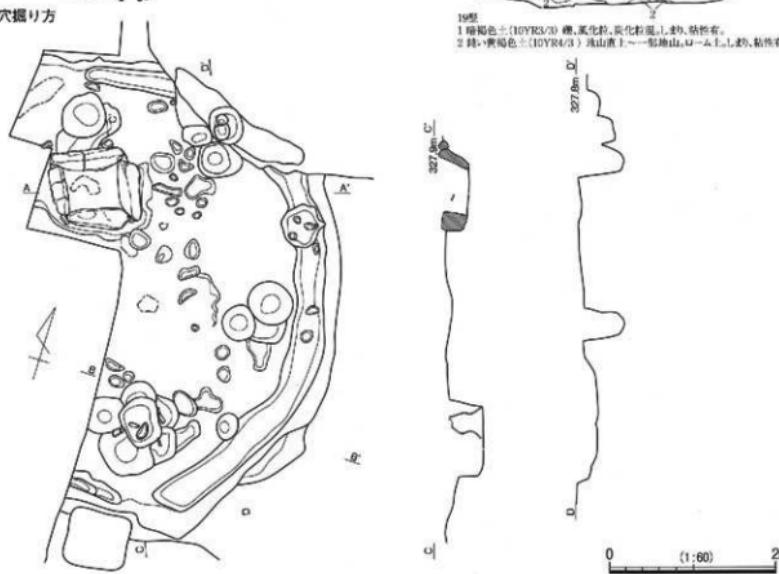
### 19号豎穴



19号豎穴掘り方

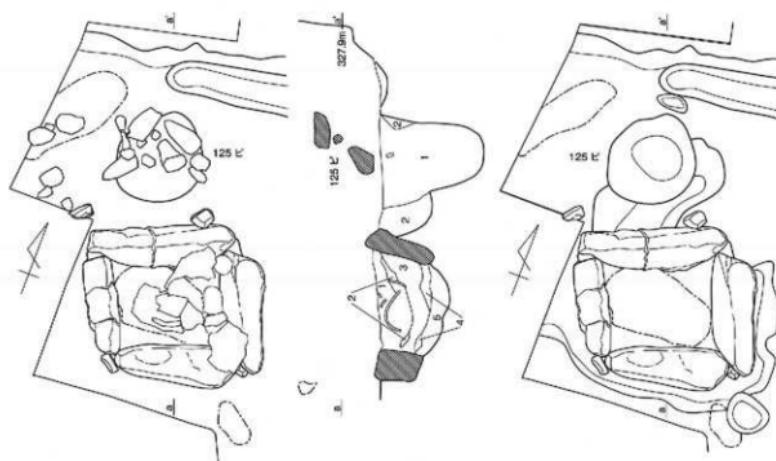


1暗褐色土(10YR3/3)壤,氯化铝、氯化镁混,盐分少,粘性有。  
2砖红黄褐色土(10YR4/3)洪山土上—鄱阳地山,沙—土,盐分少,粘性有。



第25図 19号豎穴(1)

19号竪穴炉



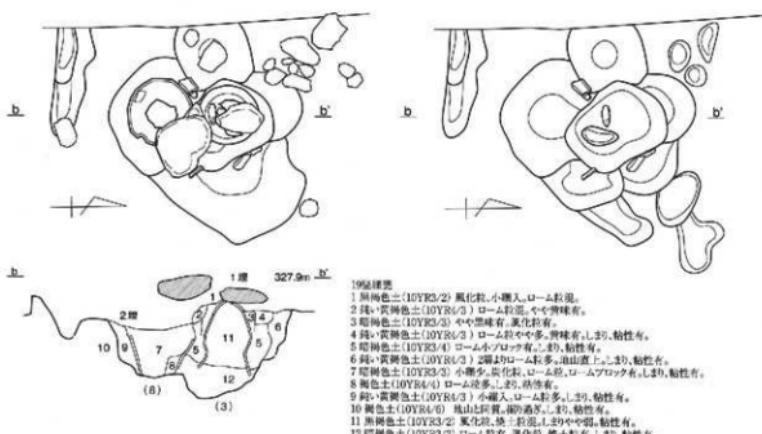
19号竪穴

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 上部多く、黄化粒、燒土粒、風化粒有。小縫入。
- 2 黑褐色土 (10YR2/3) 黄化粒やや多。風化粒有。
- 3 黑褐色土 (10YR2/2) 風化粒、ローム粒有。同上。
- 4 細い赤褐色土 (10YR4/3) ローム粒やや多。風味有。
- 5 細い赤褐色土 (10YR4/4) 燃土粒、ローム粒多。

19号竪穴2

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 黄化粒、燒土粒、ローム粒。
- 2 黑褐色土 (10YR2/3) ローム粒有。風化粒やや多い。

19号竪穴埋甕



第26図 19号竪穴(2)

20号竪穴

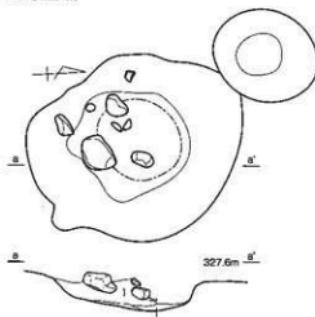


第27図 20・38号竪穴(1)

20 · 38号暨穴

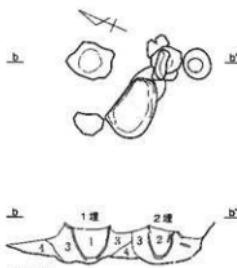


20号竖穴炉

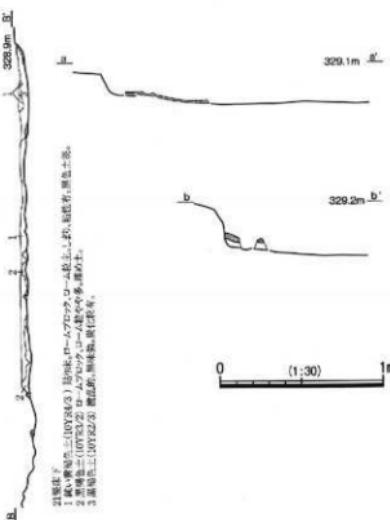
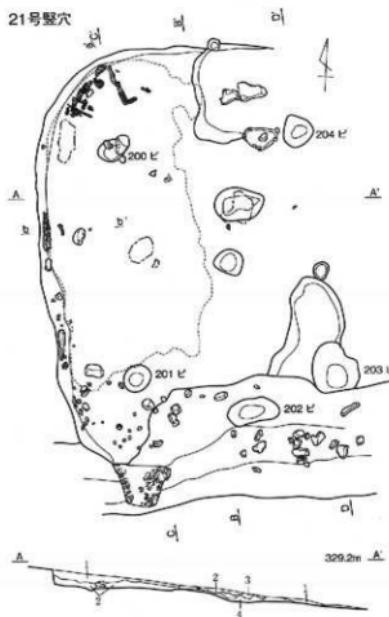


20整沪  
1 黑褐色土(10YR2/3) 深上耕, 粒度較粗, 漢化程度高, 有砂, 壓性有。  
2 黑褐色土(10YR3/3)+浅上耕 煤灰土深。

20号壁穴埋壓



2)堅壳果  
 1 坚硬色土 (10YR2/3)  
 2 坚硬色土 (10YR3/2) 上碎片有。  
 3 坚硬色土 (10YR3/2) 壳室内与表层同。  
 4 坚硬土 (10YR3/2) 表层与壳内不同。

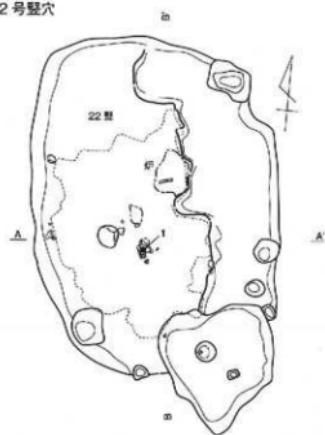


21号豊穴掘り方

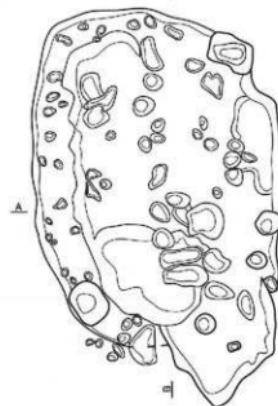


第29回 21号豎穴

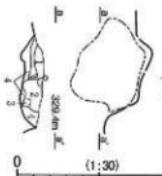
22号竪穴



22号竪穴掘り方

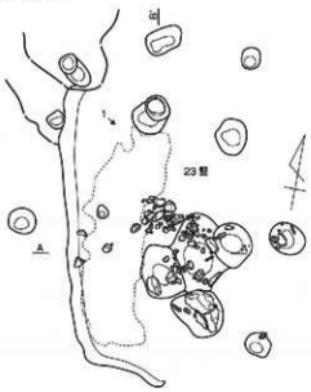


22号竪穴炉

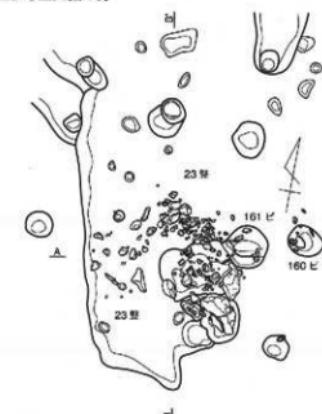


- 22形47  
 1 黒褐色土(10YR5/2) 滲化粘土、土塊有。  
 2 黑褐色土(10YR4/2) 黏性土、ローム粘土、黑褐色粘土。  
 3 黑褐色土(10YR4/4) 黏土、粘性土、埴土、埴土層上。  
 4 黑褐色土(10YR3/2) 黏土、粘性土、透風、ローム小ブロック有。

23号竪穴



23号竪穴掘り方



329.6m

- 23形  
 1 黑褐色土(10YR3/3) 黑化粘土、黑褐色土、土塊有。  
 2 黑褐色土(10YR4/3) ローム粘土多、しろい、粘性土。  
 3 黑褐色土(10YR4/4) 地下に近いローム土上、粘性土有。

0 (1:60) 2m

第30図 22・23号竪穴

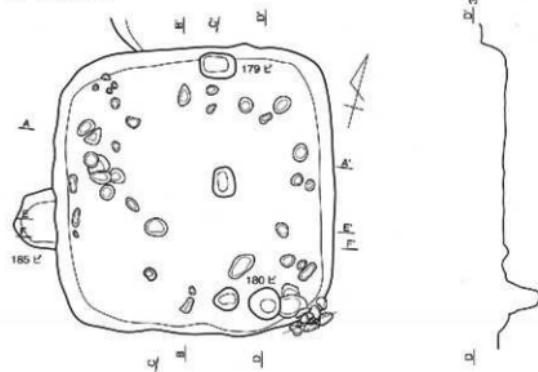
24号竪穴



24号竪穴  
1 黒褐色土 (10YR2/3) 灰化粘土、L鉄、活性有。  
2 黑褐色土 (10YR3/2) 砂土粒や小砂、L鉄、活性有。



24号竪穴掘り方



24号竪穴炉

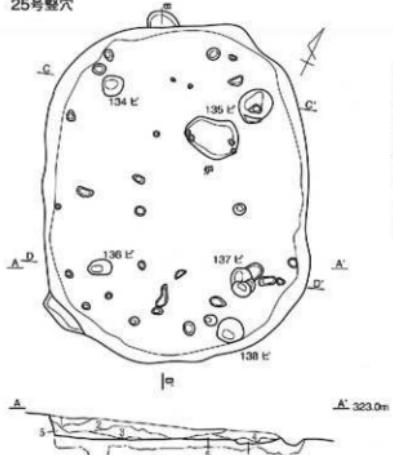


24号竪穴炉  
1 黒褐色土 (10YR2/2) 灰化粘土、ローム粒、炭土粒有。  
2 炭土 ブロック状、沈土较多。

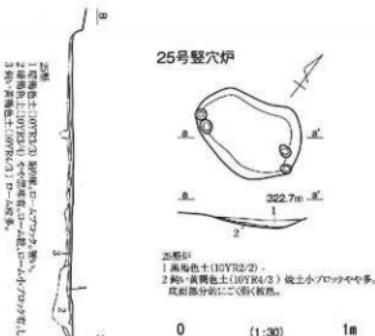
0 (1:60) 2m

第31図 24号竪穴

25号竪穴



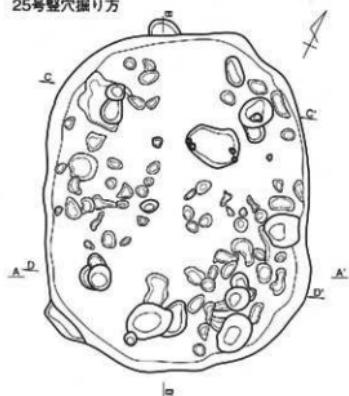
25号竪穴炉



25号竪穴  
1 黒褐色土(10YR2/2) サブ調査有。ローム粘、ローム小ブロック有。上部灰白色有。砂性有。  
2 黄褐色土(10YR3/4) ローム粘、ローム小ブロック、壁上粘有。砂性有。  
3 黑褐色土(10YR3/3) ローム粘、ローム小ブロック、壁上粘有。砂性有。  
4 黄褐色土(10YR3/3) ローム粘、ローム小ブロック、壁上粘有。砂性有。  
5 黑褐色土(10YR3/3) ローム粘、ローム小ブロック、壁上粘有。砂性有。

6 黄褐色土(10YR4/3) ローム粘や多。L59.粘性有。

25号竪穴掘り方



25号134ビ  
1 黑褐色土(10YR3/2) ローム粘、ローム小ブロック有。砂性有。粘土较少。

2 黄褐色土(10YR4/3) 地山に近い。ローム粘少。砂性有。



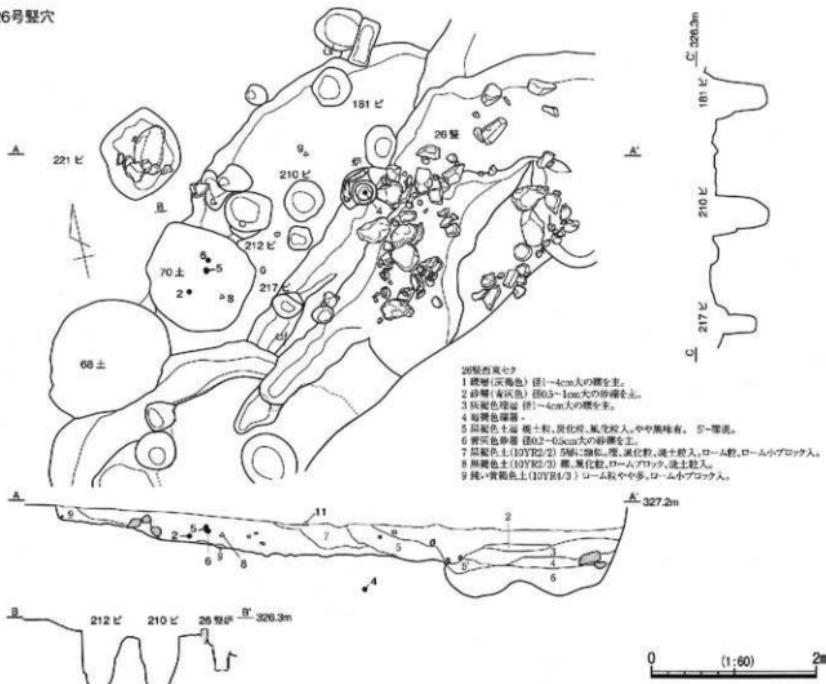
25号136ビ  
1 黑褐色土(10YR3/2) ローム粘、ローム小ブロック有。L29やや少。砂性有。粘土较少。  
2 黄褐色土(10YR4/3) 地山に近い。ローム粘少。砂性有。

25号137ビ  
1 黑褐色土(10YR3/2) ローム粘、ローム小ブロック有。L29。砂性有。粘土较少。

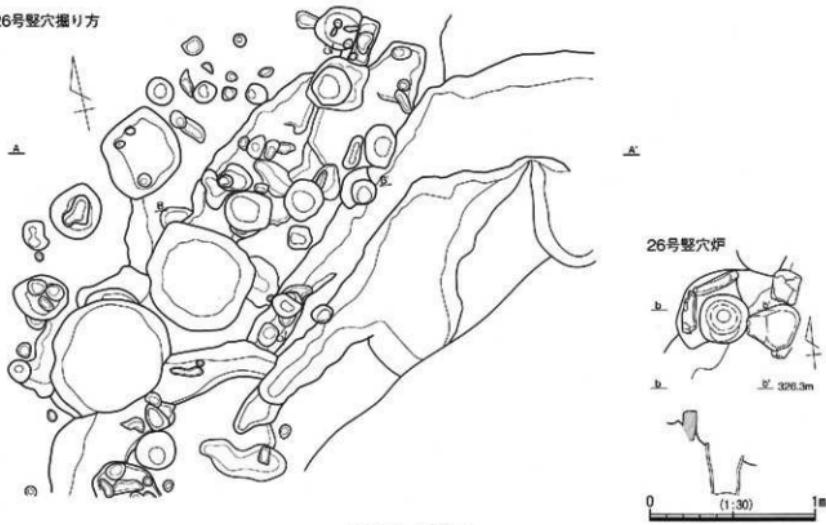
0 (1:60) 2m

第32図 25号竪穴

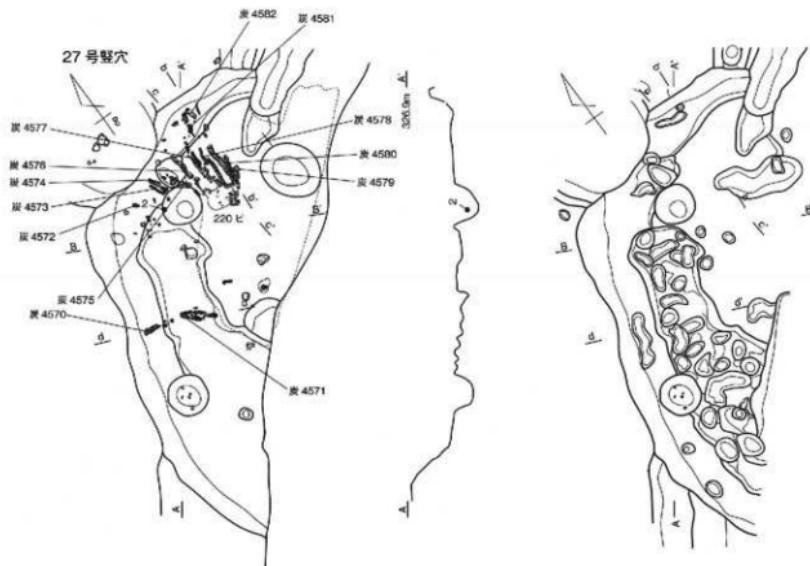
26号竪穴



26号竪穴掘り方

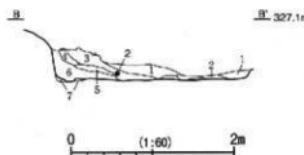


第33図 26号竪穴

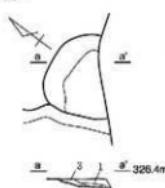
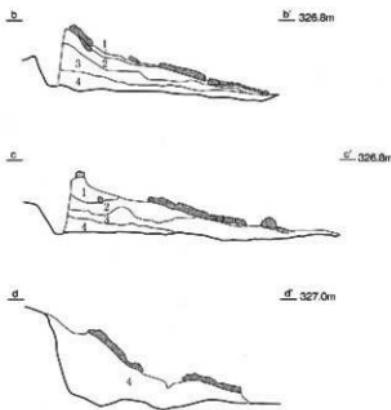


27号

- 1 黄褐色土(10YR2/2) 质化材、炭化物、礫土粒入。
- 2 黑褐色土(10YR2/3)+泥土粒 灰土粒や少。
- 3 黑褐色土(10YR3/2) 灰土粒多、炭化物入。
- 4 黑褐色土(10YR3/2) 灰土粒多、炭化物入。
- 5 黑褐色土(10YR3/4) 灰土粒や少。
- 6 黑褐色土(10YR2/3) 灰土粒、炭化物、ローム粒入、しめり弱、塑性有。
- 7 海色土(10YR4/4) ローム土、少、粘性有。



27号竪穴炉



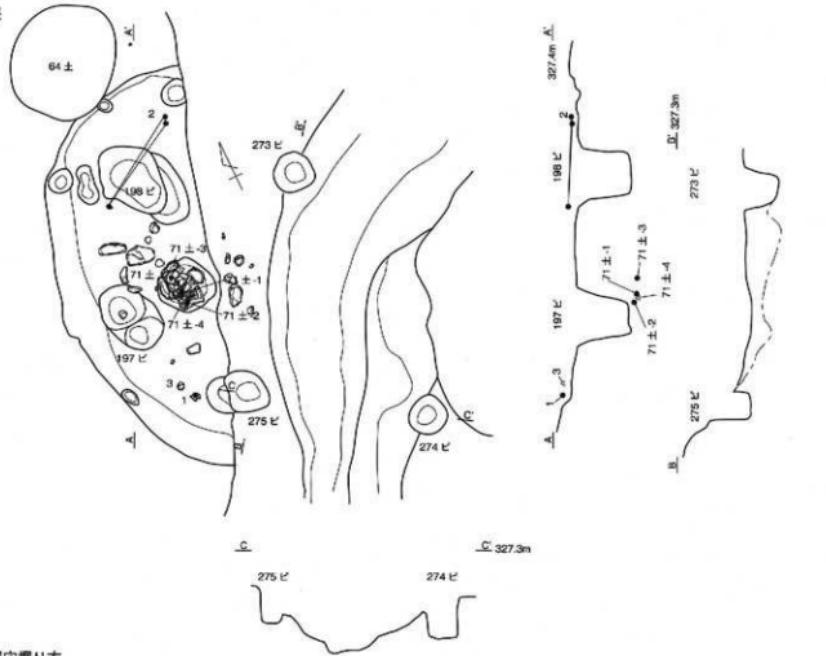
27号炉

- 1 黑褐色土(10YR2/3) 泥土ブロック、炭化物多。
- 2 灰土 ブロック灰。
- 3 灰土

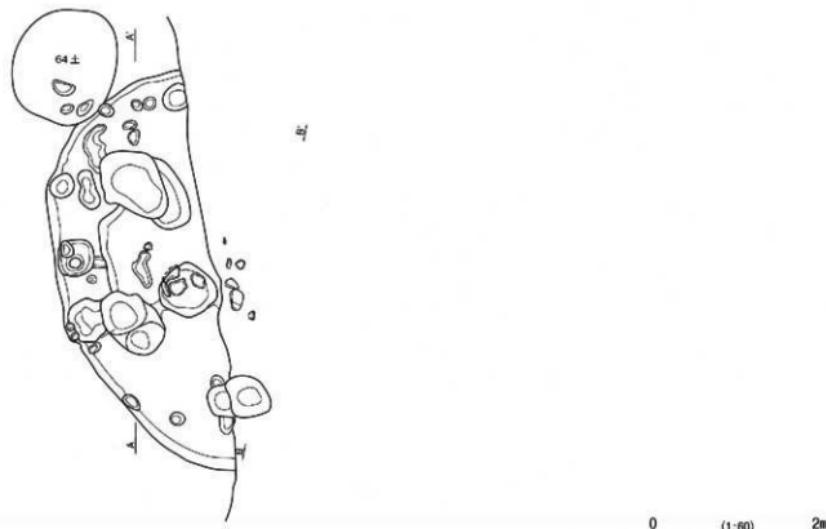


第34図 27号竪穴

28号豎



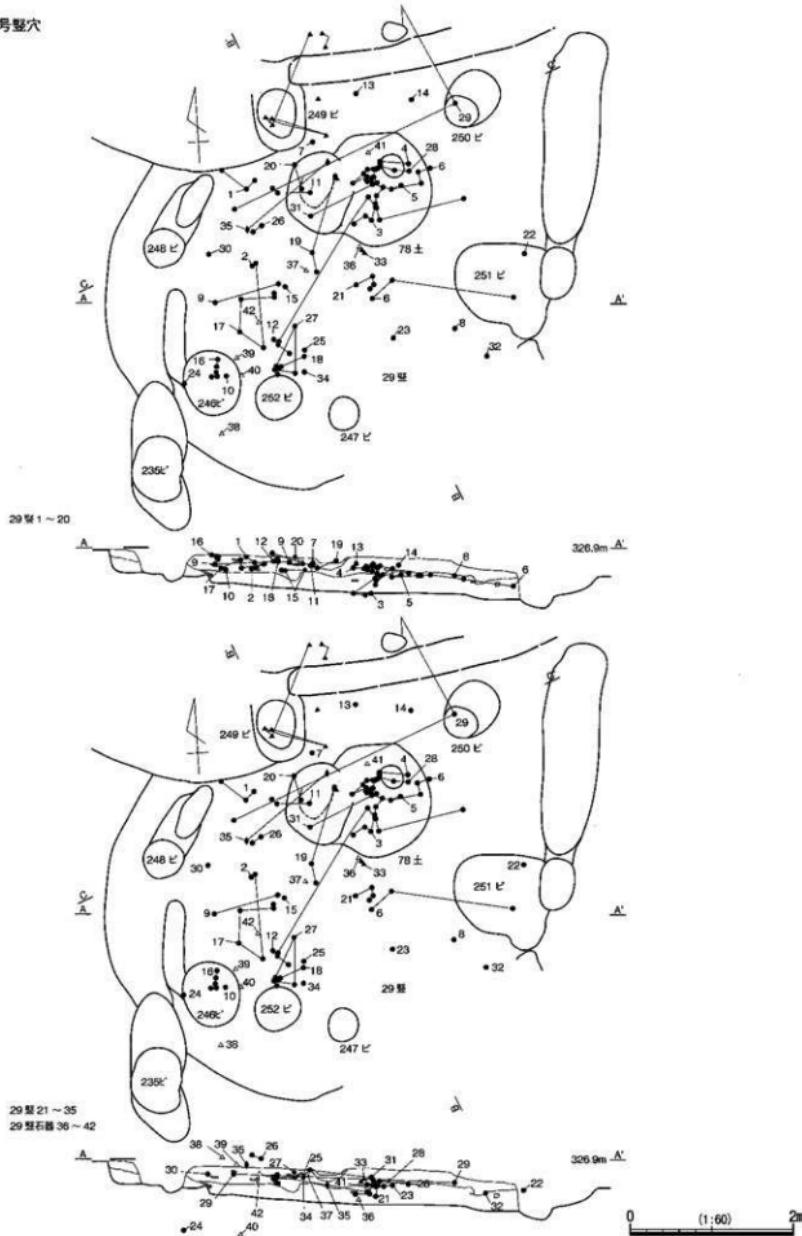
28号豎穴掘り方



第35図 28号豎穴

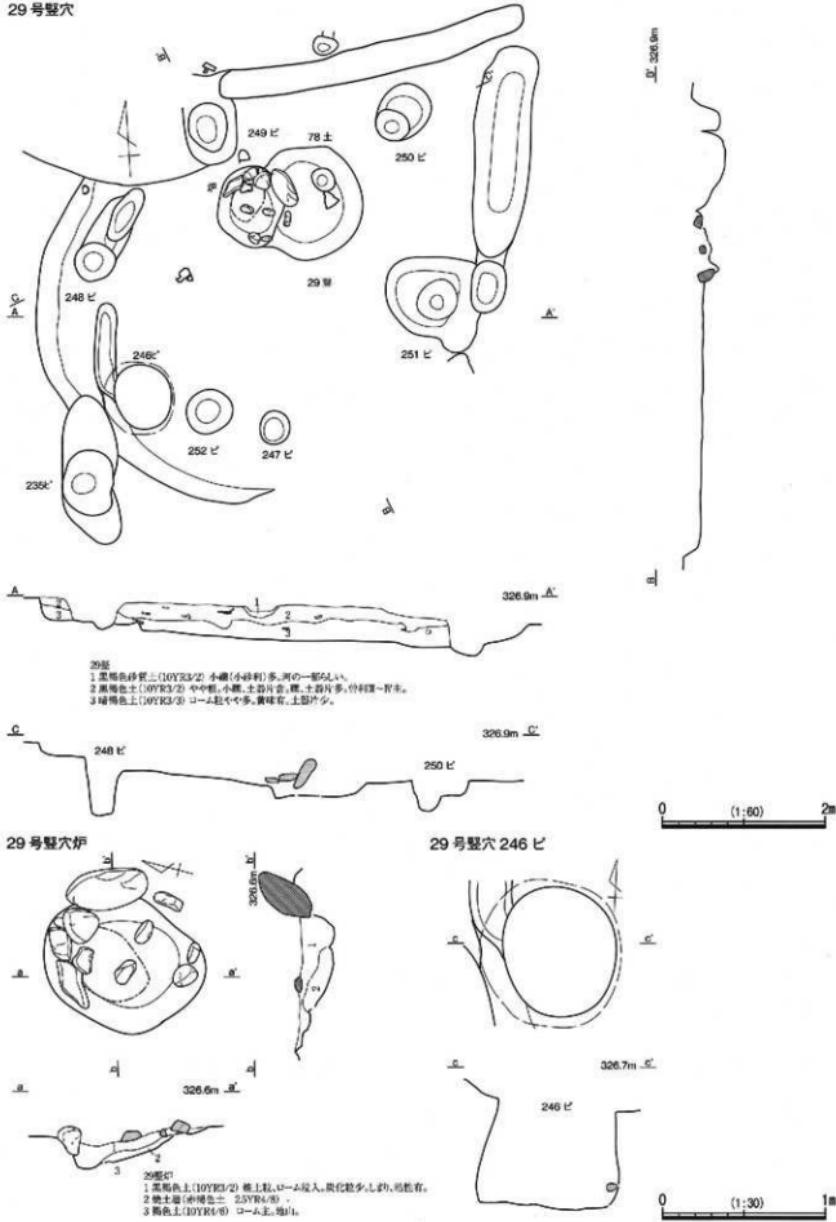
0 (1:60) 2m

29号整穴



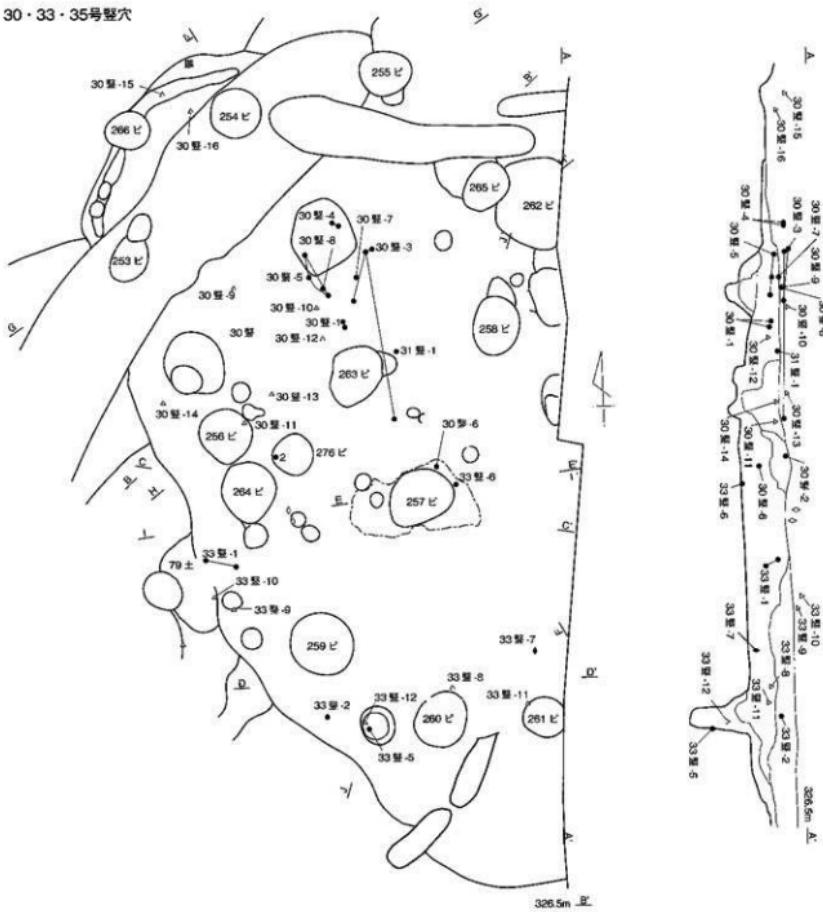
第36図 29号整穴(1)

29号竪穴



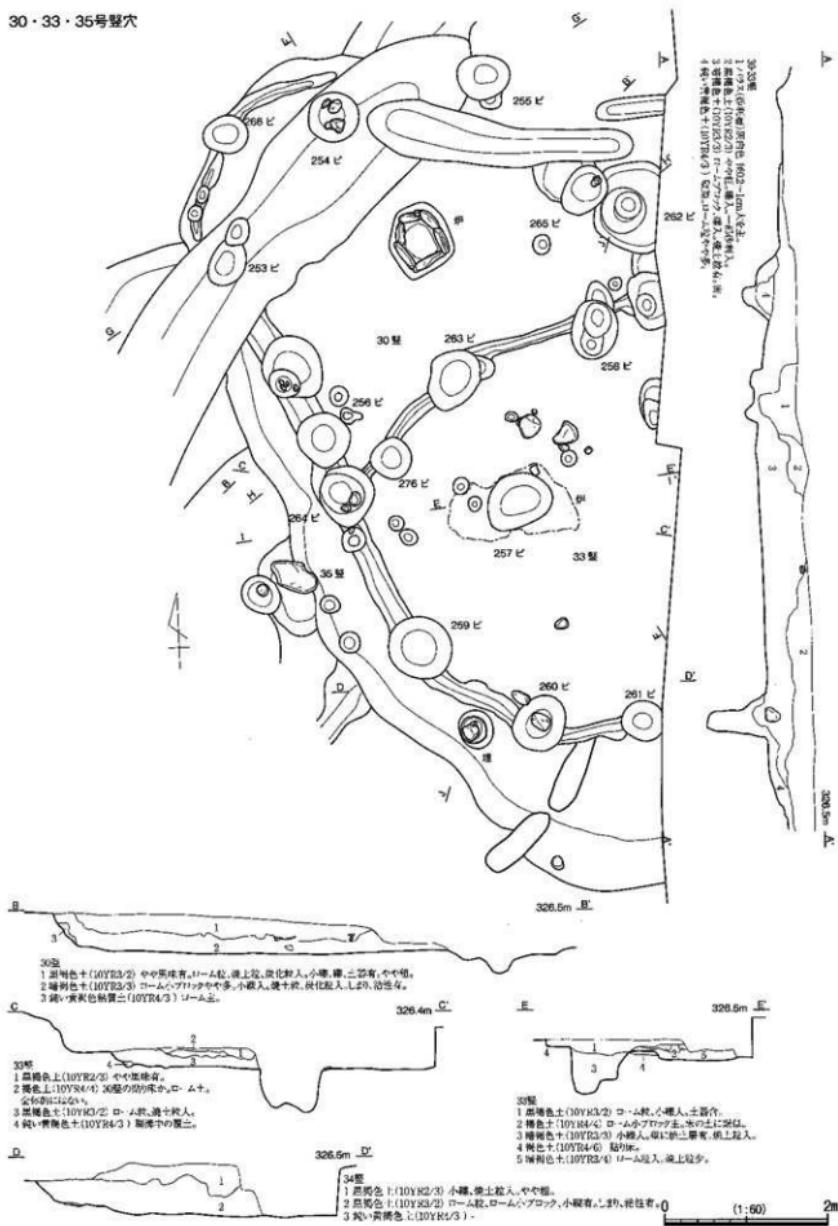
第37図 29号竪穴(2)

30 · 33 · 35号竪穴



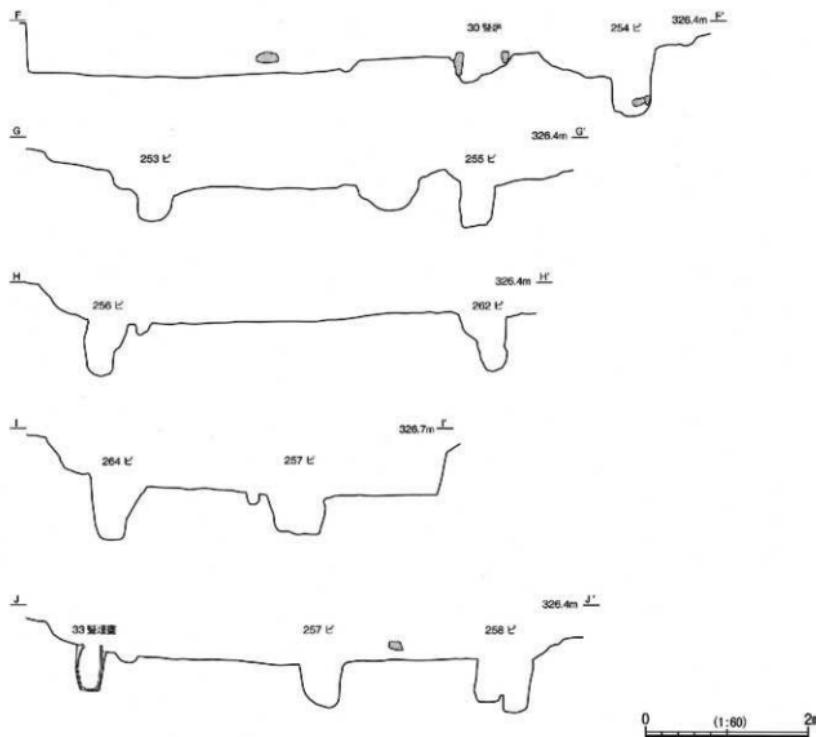
第38図 30・33・35号竪穴(1)

- 110 -

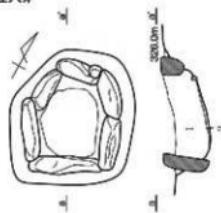


第39図 30・33・35号髄穴(2)

30・33・35号竪穴

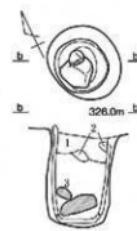


30号竪穴炉

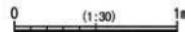


30号竪  
1 黄褐色土(10YR2/3) ローム粒や多、粘土質細粒。  
小礫入、炭化物などない。土色や中灰、粘性有。  
2 粉褐色土(10YR3/4) ローム粒や多、黄味強。

33号竪穴埋甕

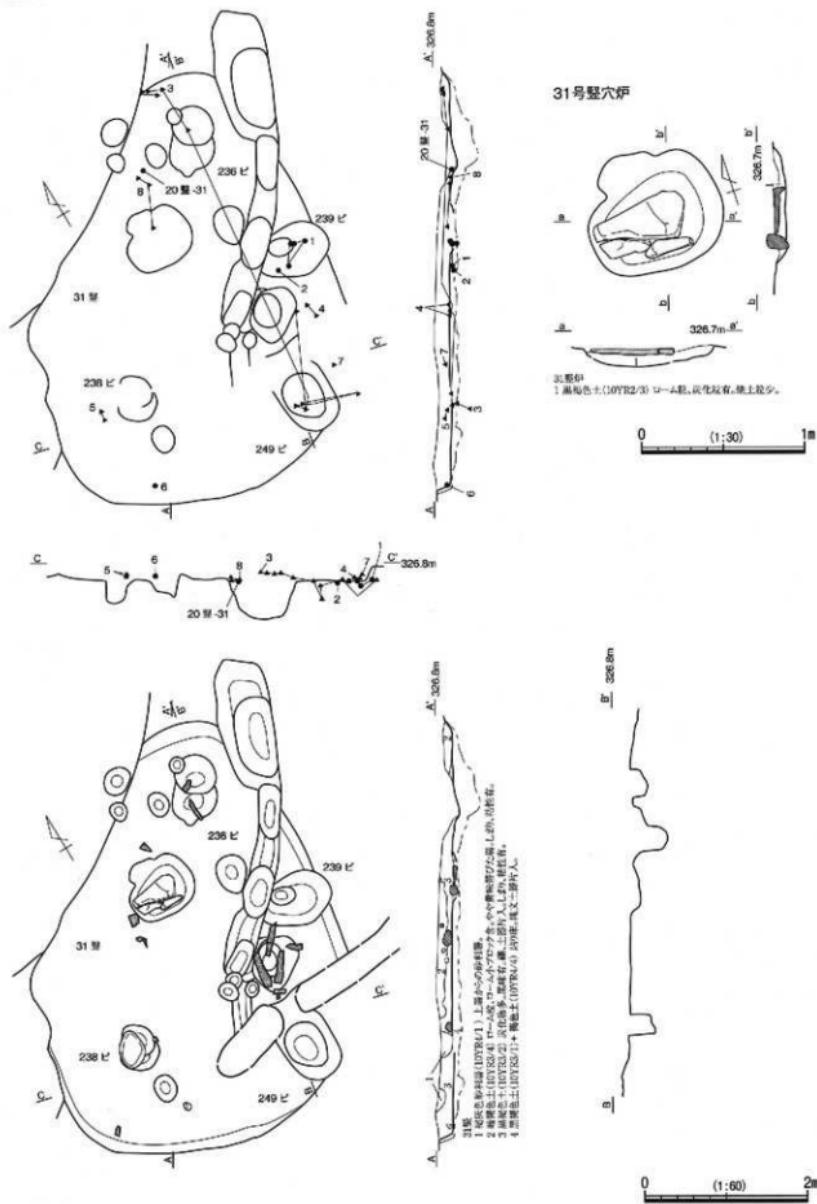


33号竪  
1 黄褐色土(10YR3/2) 小礫入。し的、粘性有。  
2 黄褐色土(10YR4/6) ロームブリッケ。  
3 粉褐色土(10YR3/4) ローム粒や多、し的、  
粘性有。大礫含。礫石入。



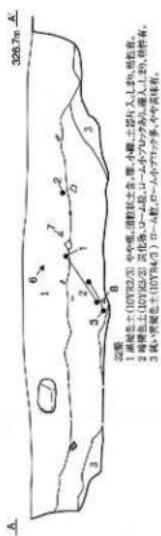
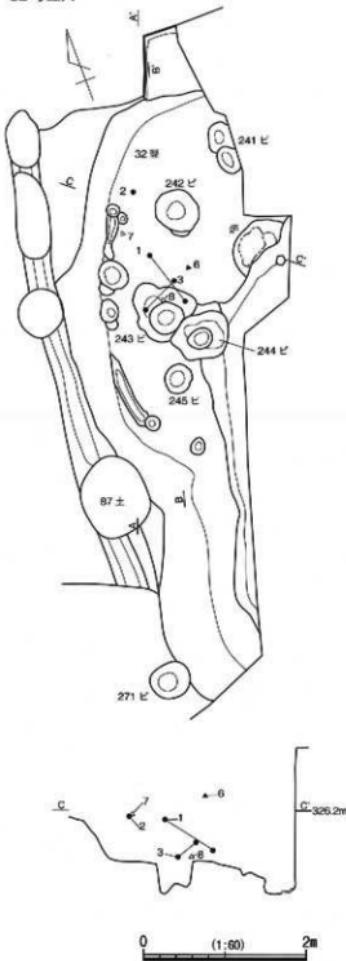
第40図 30・33・35号竪穴(3)

31号竖穴

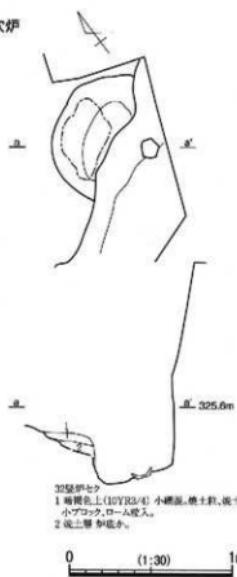


第41図 31号竖穴

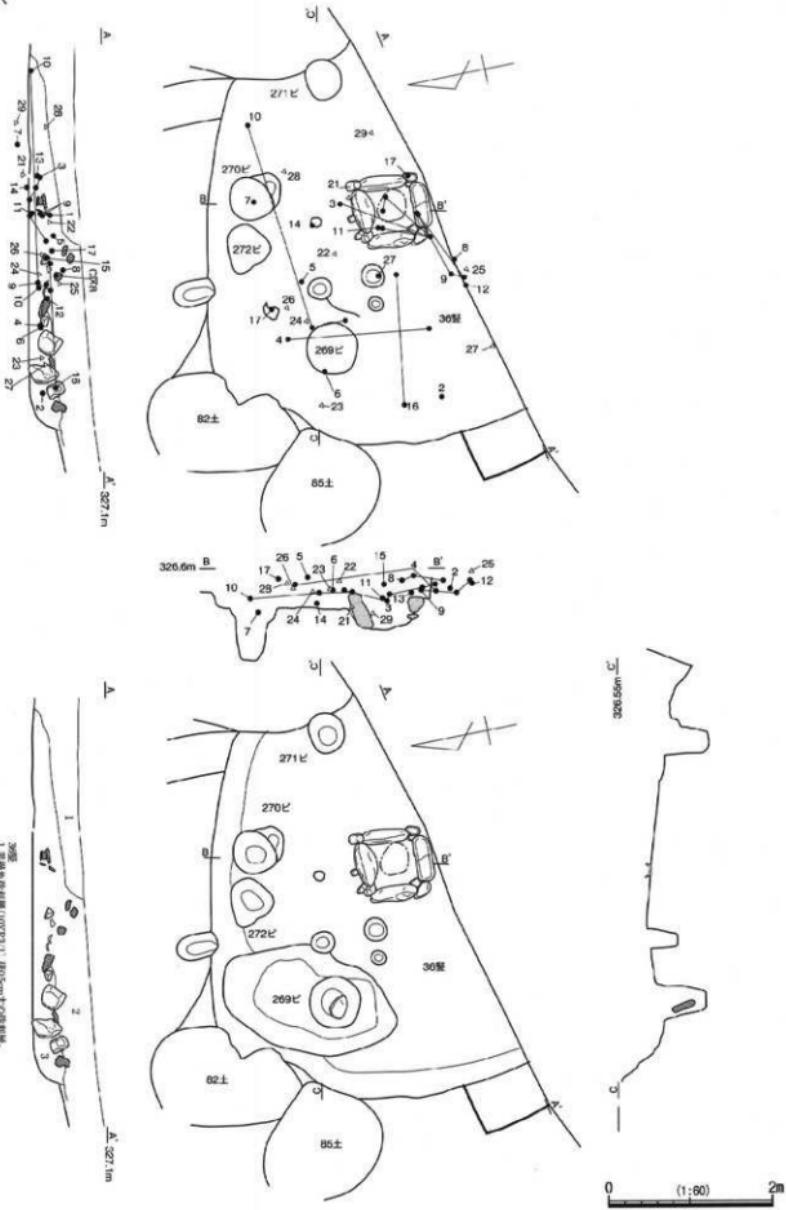
32号竪穴



32号竪穴炉

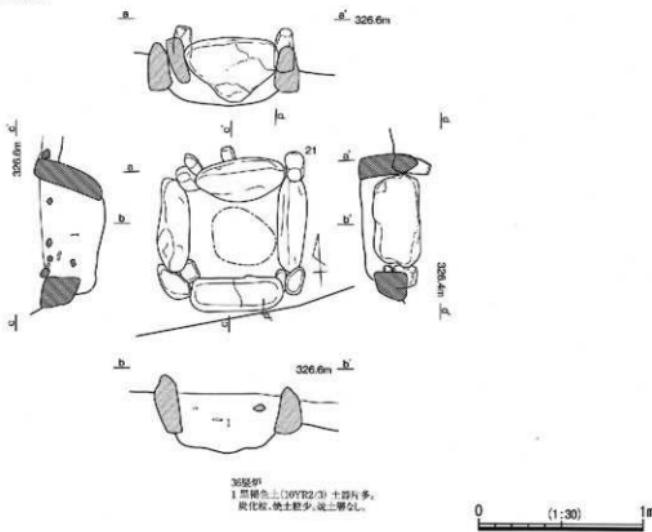


第42図 32号竪穴

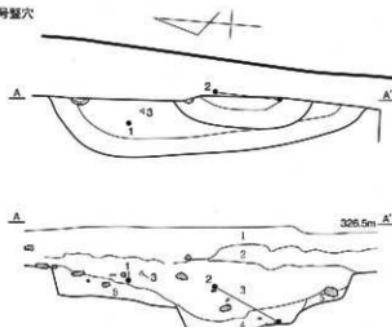


第43図 36号豎穴(1)

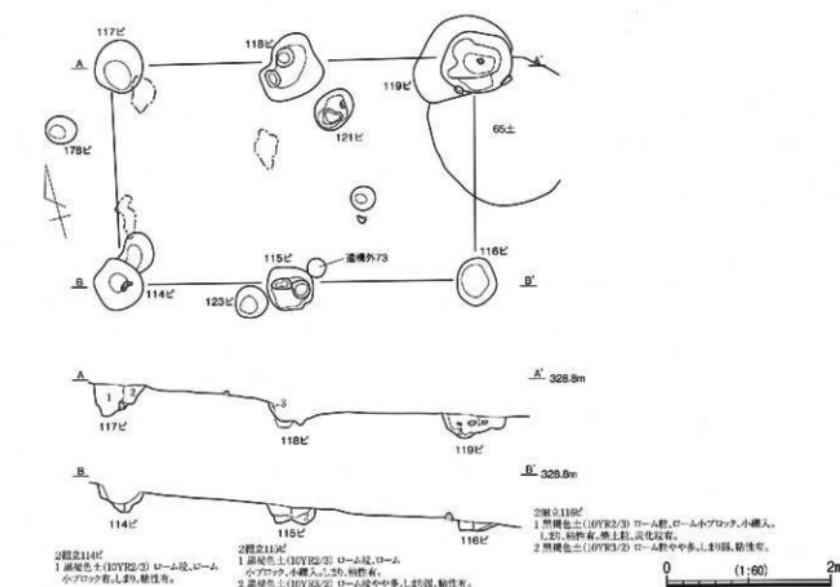
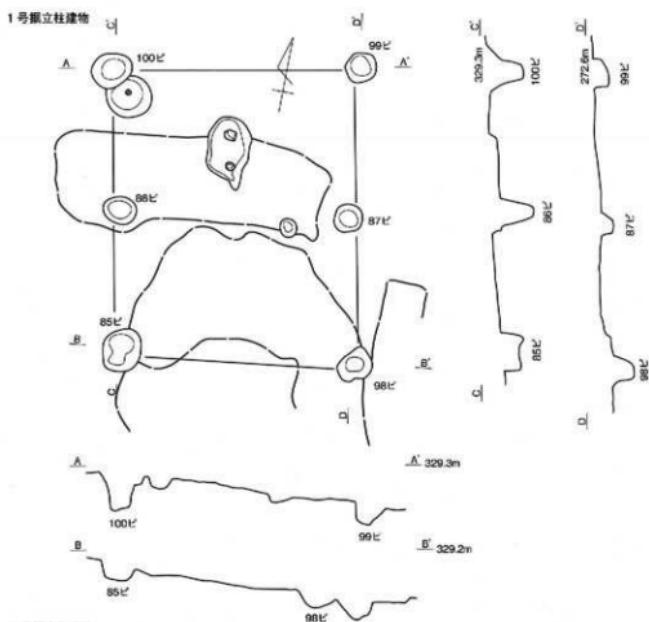
36号整穴



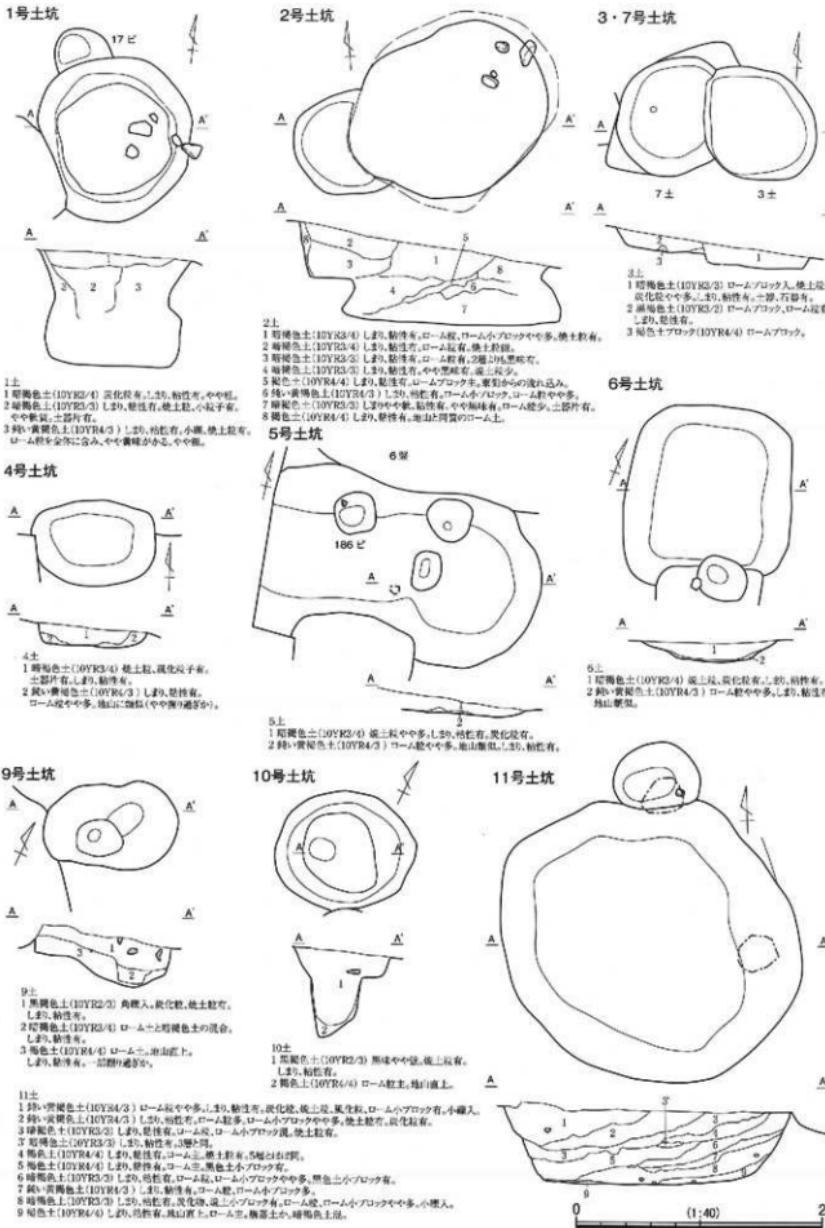
37号整穴



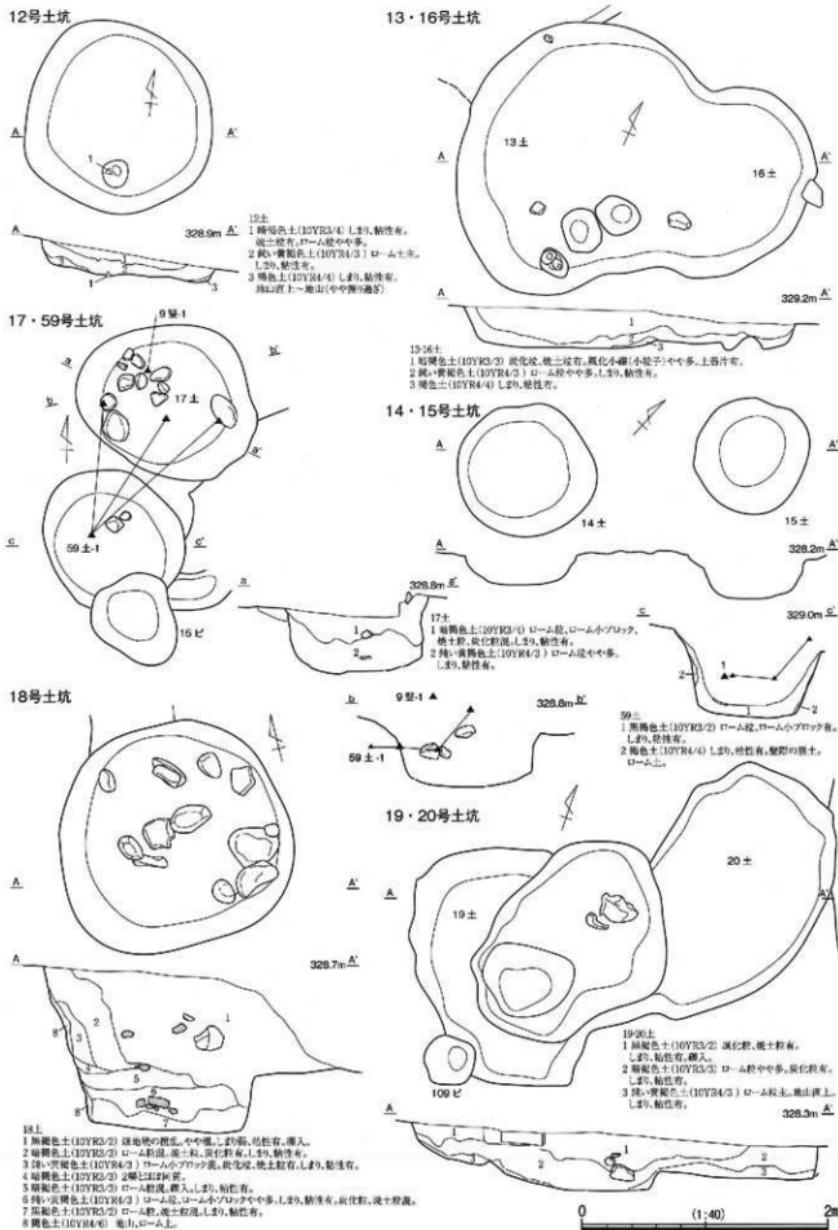
第44図 36号整穴(2)・37号整穴



第45図 1・2号掘立



第46図 1~11号土坑



第47図 12~20号土坑

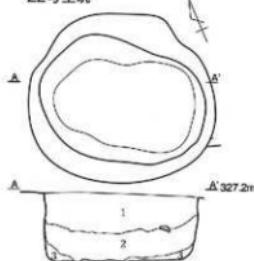
21号土坑



21土

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 硫化鉄、ローム粒や多。  
2 黒褐色土(10YR4/3) ローム粒多、地表面に。  
3 黑褐色土(10YR4/4) ローム粒多、地表面に。

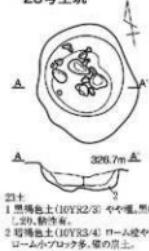
22号土坑



22土

- 1 黒褐色土(10YR3/4) ローム小ブロック、ローム粒混、ローム粒や多。  
2 黑褐色土(10YR3/2) 緩入、ローム小ブロック有。し的、特徴有、粘土性有。  
3 黑褐色土(10YR4/4) ローム小ブロック、地の京土。

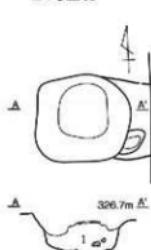
23号土坑



23土

- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや重、黒褐色。  
2 黑褐色土(10YR3/4) ロームや多、  
ローム小ブロック多、地の京土。

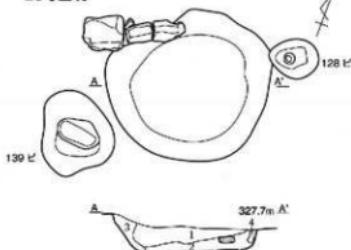
24号土坑



24土

- 1 暗褐色土(10YR3/2) ローム粒有。  
2 黑褐色土(10YR4/3) 緩入、硫化鉄有。

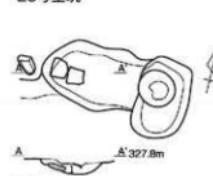
25号土坑



25土

- 1 黒褐色土(10YR3/3) 硫化鉄、根株、硫化鉄有。  
2 黑褐色土(10YR3/4) ローム有。  
3 黑褐色土(10YR4/3) ローム粒混、やや重者。  
4 黑褐色土(10YR2/4) 植物根による混入。

26号土坑



26土

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 小根入やや重者。

27号土坑



27土

- 1 暗褐色土(10YR3/2) 硫化鉄、ローム粒、埋入、じのり、特徴有。  
2 黑褐色土(10YR4/3) ローム粒、ロームブロック混、じのり、粘性有。  
3 黑褐色土(10YR4/4) 地山・地表面に。

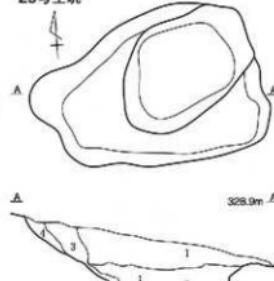
28号土坑



28土

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 2種の小石や重いじのり、特徴有。  
2 黑褐色土(10YR3/4) ロームや多、根付有、硫化鉄有、硫化鉄少。  
3 黑褐色土(10YR4/3) ローム、じのり、小ブロック有。  
4 黑褐色土(10YR4/4) ローム、特徴有、じのり・小粒有。

29号土坑

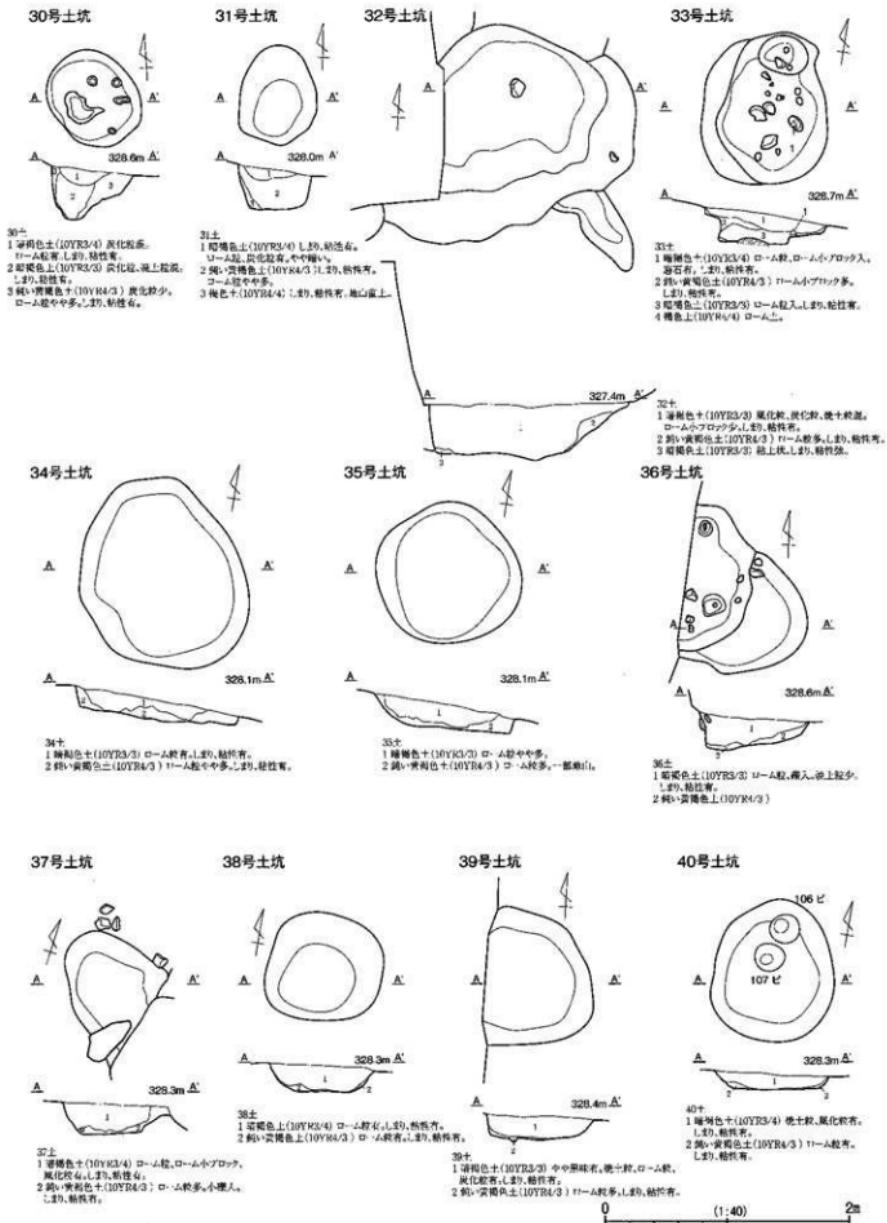


29土

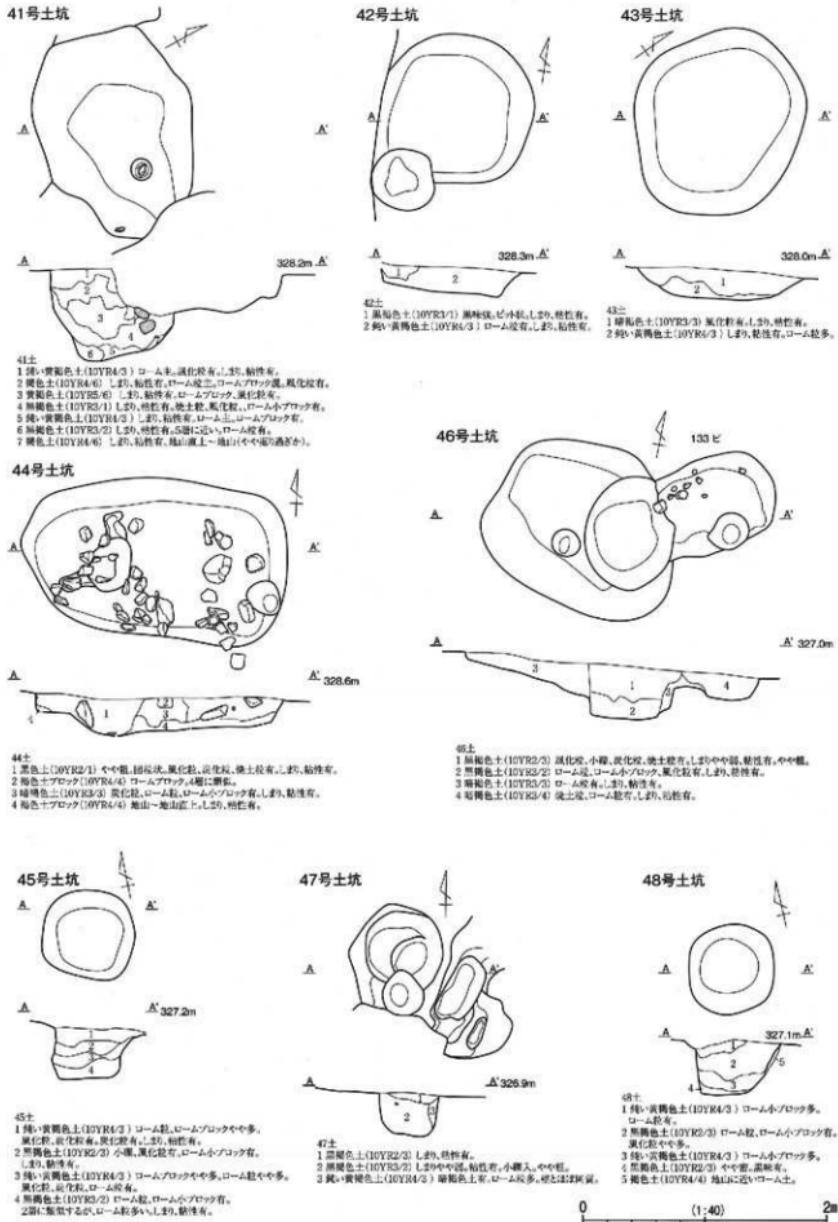
- 1 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒、地土特徴、じのり、特徴有。  
2 黑褐色土(10YR3/4) ロームや多、根付有、硫化鉄有、特徴有。  
3 黑褐色土(10YR4/3) ローム多、じのり、特徴有。  
4 黑褐色土(10YR4/4) じのり、粘性有、地表面に。

0 (1:40) 2m

第48図 21~29号土坑

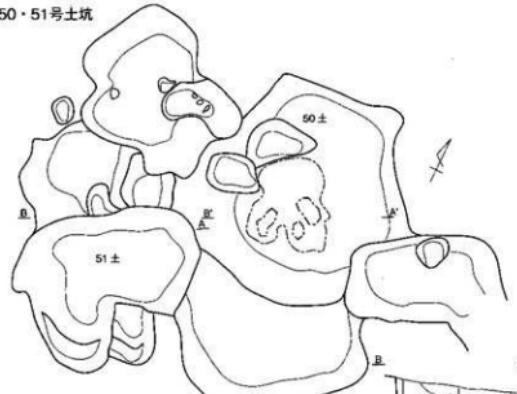


第49図 30~40号土坑



第50図 41～48号土坑

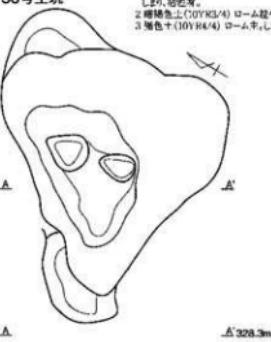
50·51号土坑



53号土坑

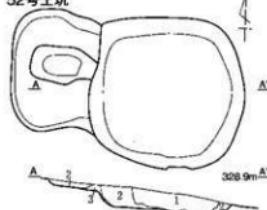


56量十坑



56上 1 本褐色土 (10YR3/3) 小塊入。ローム粒有。密。少動。粘性有。  
2 暗褐色土 (10YR3/1) ローム粒や有。密。少動。粘性有。下  
3 黑褐色土 (10YR2/1) 粒有。密。少動。粘性有。

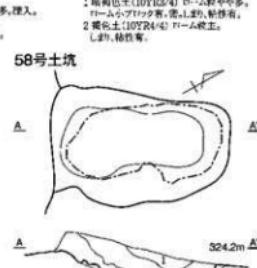
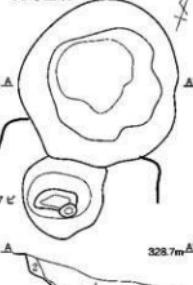
52号土坑



52±  
 1 黒褐色土(10YR2/3) ローム緻密、ローム小ブロック有。  
 しのぎ性有。  
 2 黑褐色土(10YR3/2) ローム緻密、しのぎ、粒度有。  
 3 梅色土(10YY6/4) ローム生。

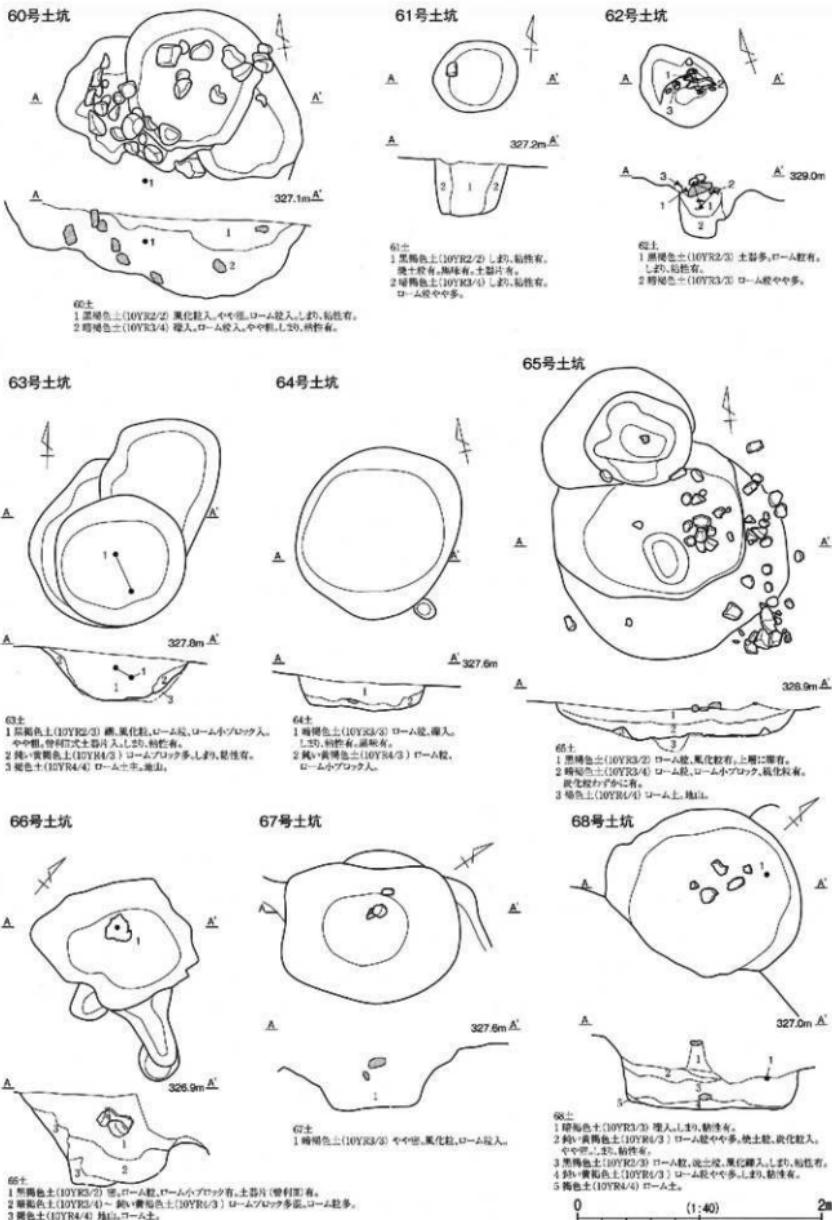


55号土坑



58-  
 1 細胞色土 (10YR5/3) 横上部入し砂、粘性有。  
 2 細胞色土 (10YR5/3) + 横上部 病土層、横上小アプロト多く砂、粘性有。やや粗。  
 3 細胞色土 (10YR5/3) 横上部入し砂、粘性有。  
 4 黄色土 (10YNN4/4) ローマト、地山し砂、粘性有。

第51図 50~58号土坑

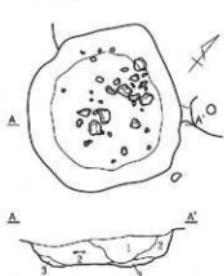


第52図 60~68号土坑

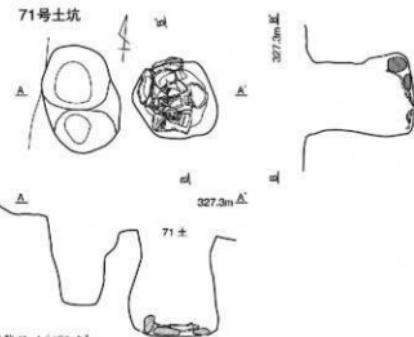
69号土坑



70号土坑

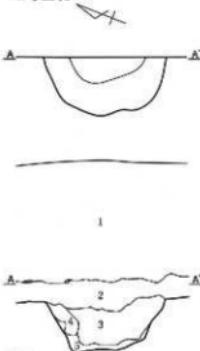


71号土坑

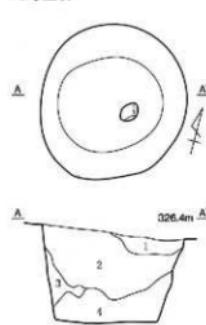


70土  
1 黑褐色土 (10YR2/3) 粘化层, 罗姆粒入。  
2 绿褐色土 (10YR3/2) 罗姆粒很多, 粘化层, 培土层, 罗姆小块块入。  
3 黄褐色土 (10YR4/3) 罗姆小块块, 罗姆粒入。—是地山。

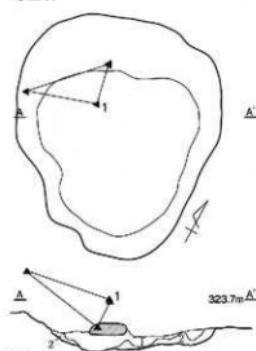
72号土坑



73号土坑

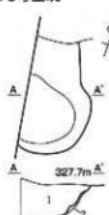


74号土坑

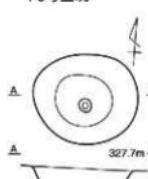


74号土坑  
323.7m A'

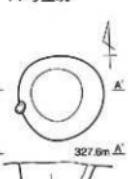
75号土坑



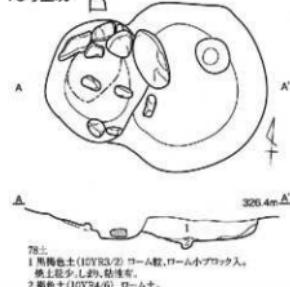
76号土坑



77号土坑

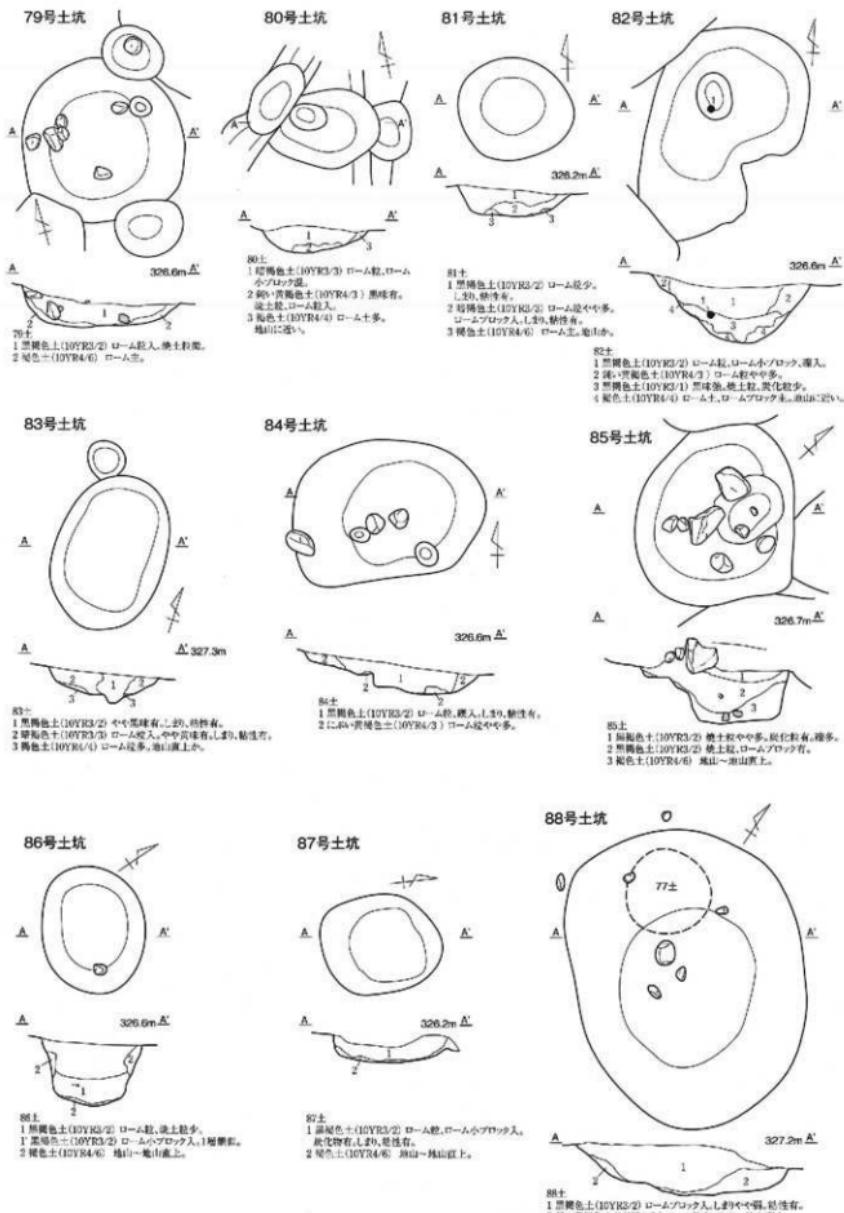


78号土坑

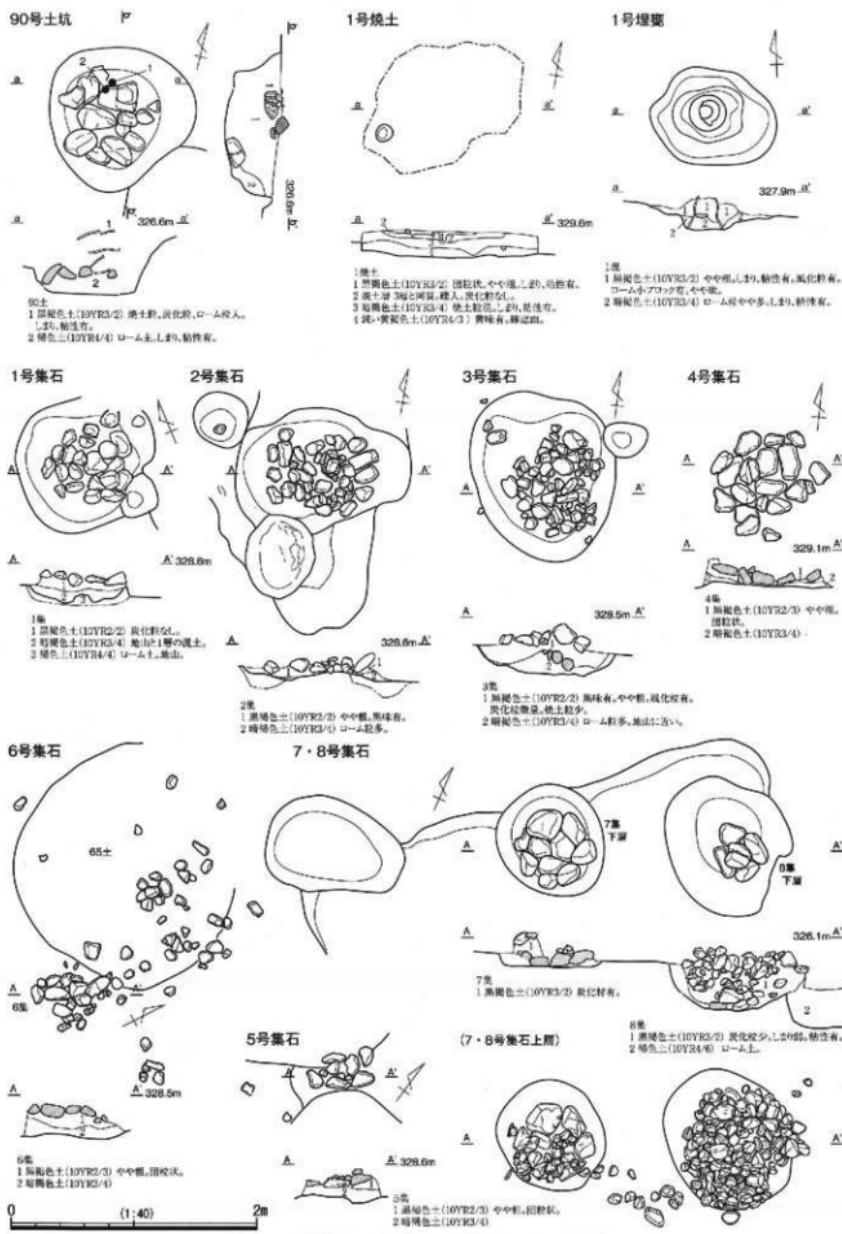


0 (1:40) 2m

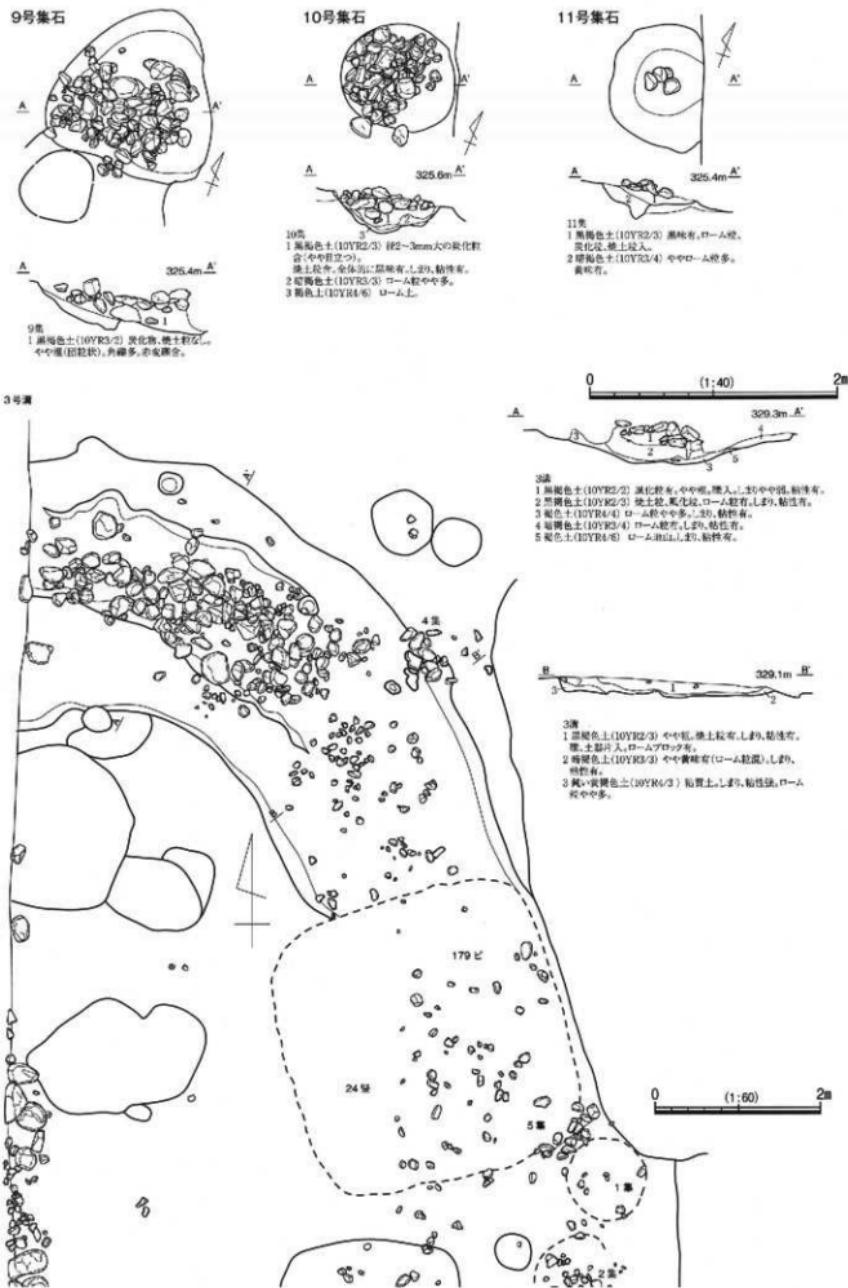
第53図 69~78号土坑



第54図 79~88号土坑

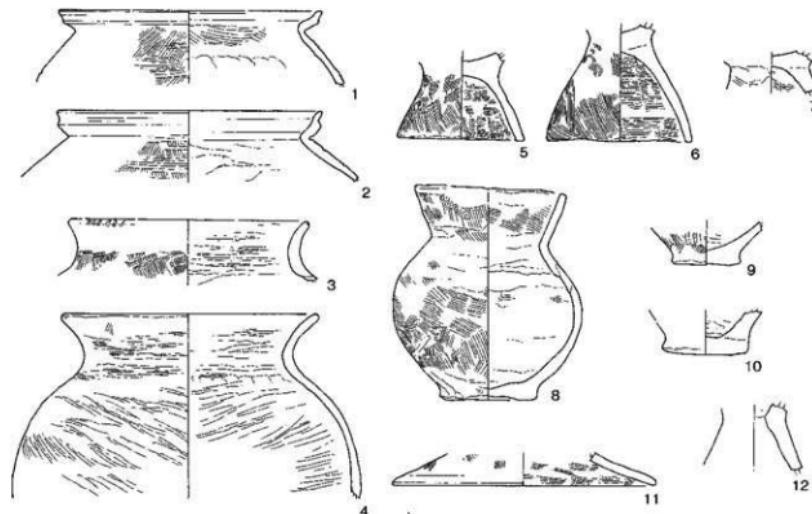


第55圖 90號土坑、1號燒土、1號埋甕、1~8號集石

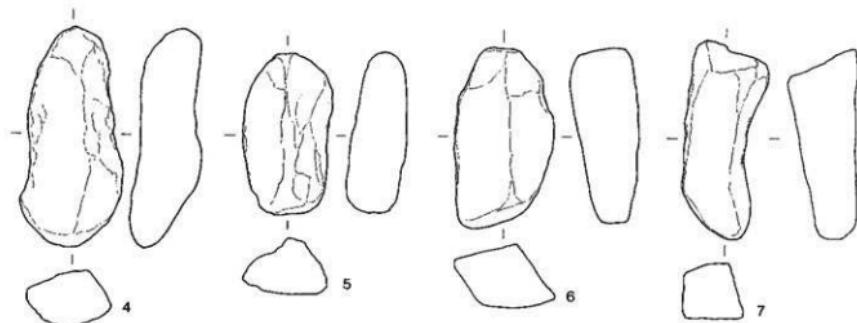
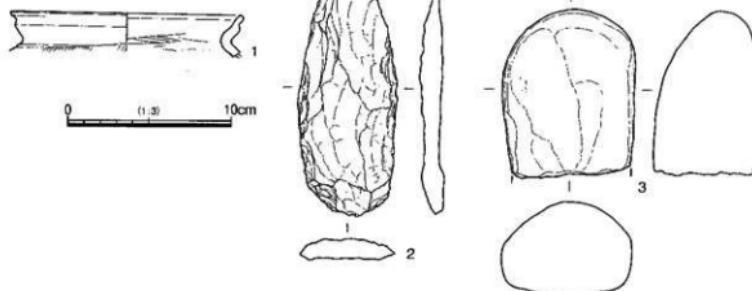


第56図 9~11号集石、3号溝

1号竖穴



2号竖穴



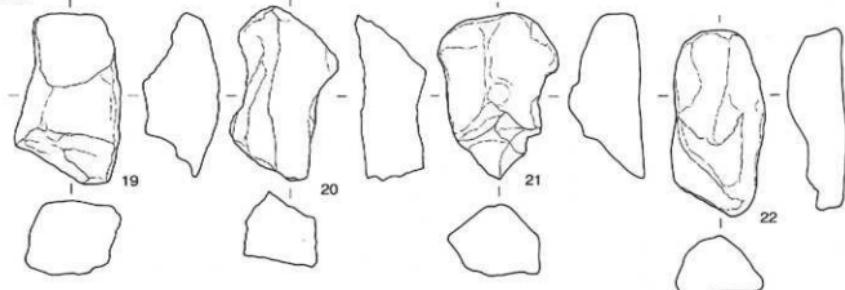
第57図 1・2号竖穴遺物

2号竪穴



第58図 2号竪穴遺物

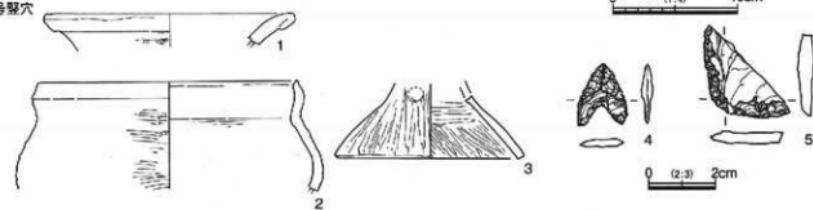
2号竪穴



3号竪穴



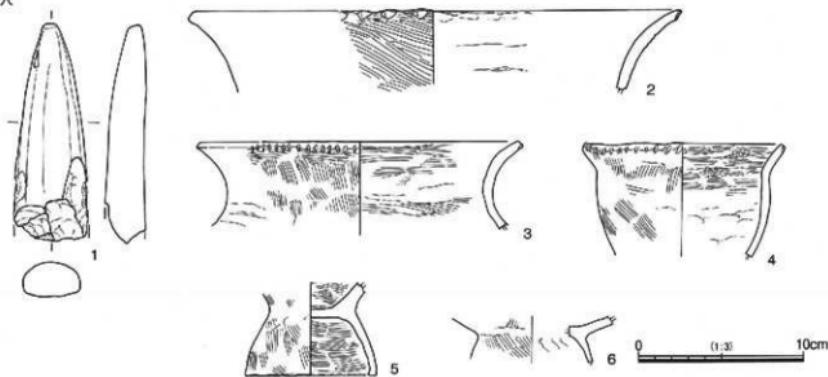
4号竪穴



6号竪穴

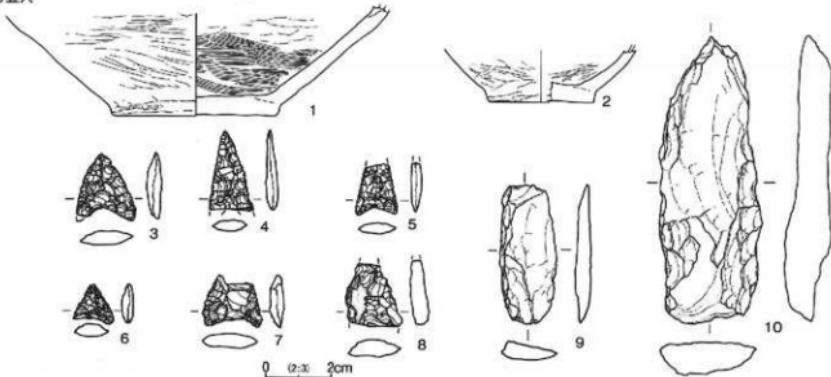


5号竪穴

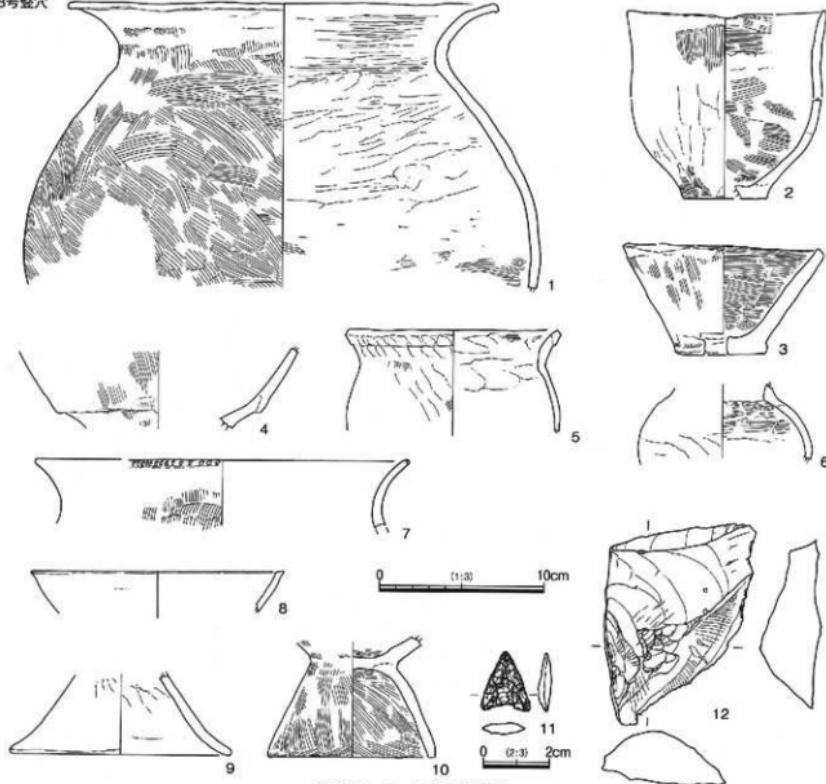


第59図 2～6号竪穴遺物

7号竪穴

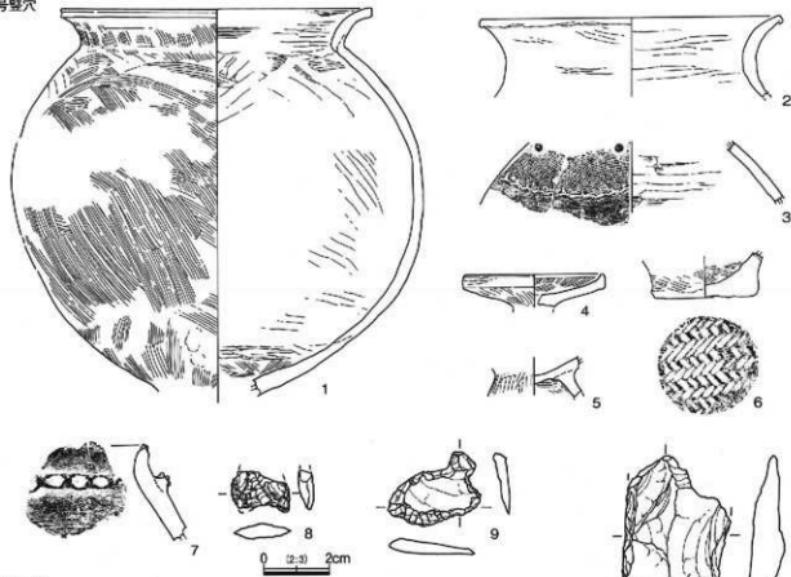


8号竪穴



第60図 7・8号竪穴遺物

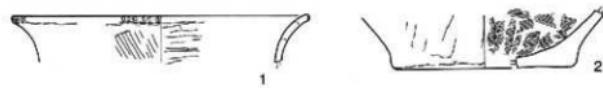
9号竪穴



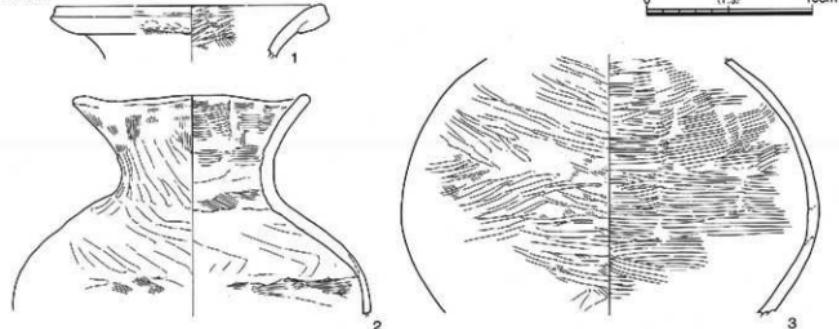
10号竪穴



11号竪穴

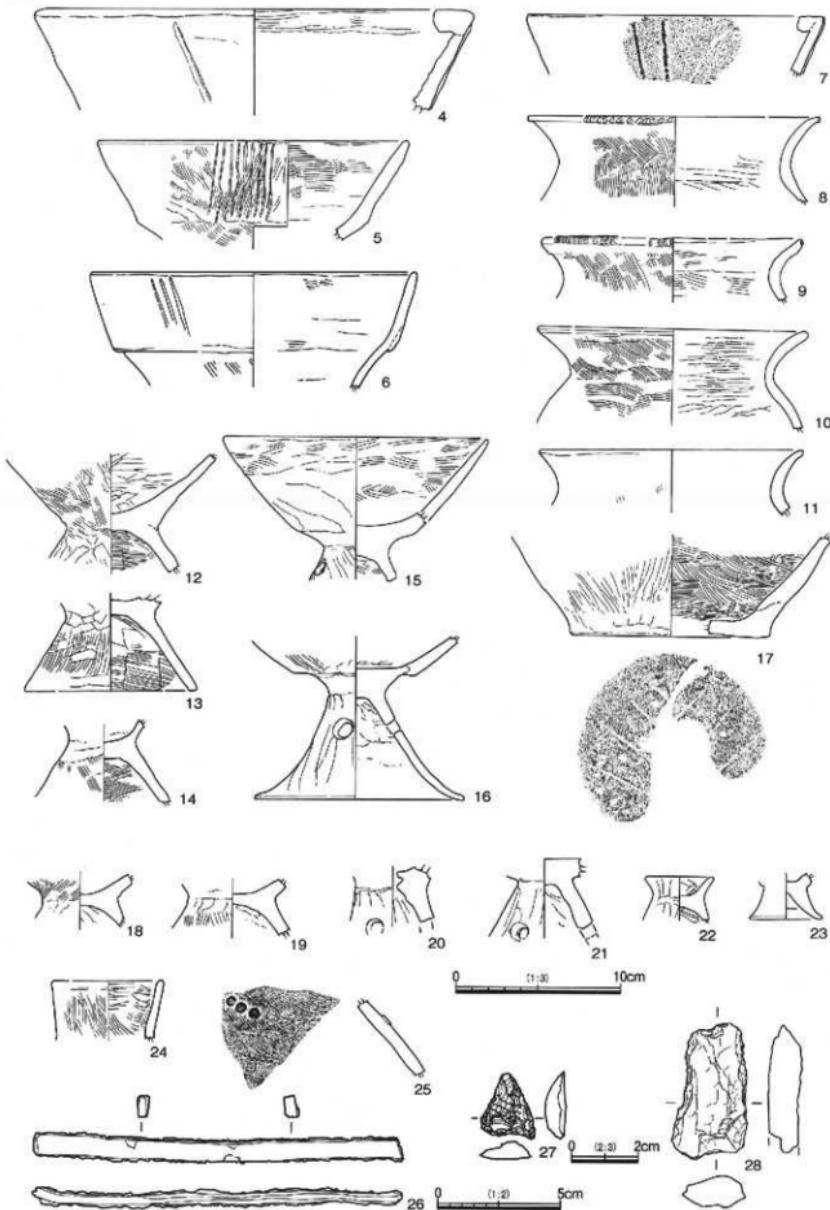


12号竪穴



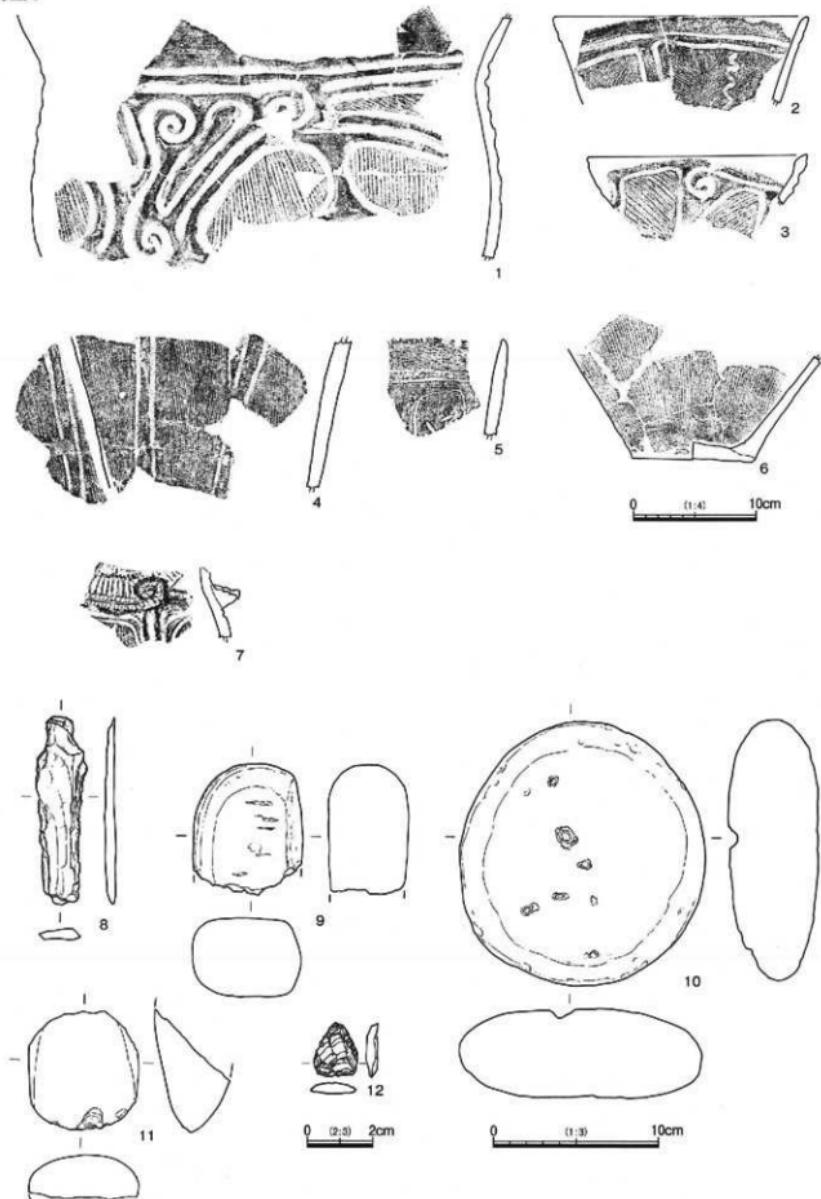
第61図 9~12号竪穴遺物

12号竖穴



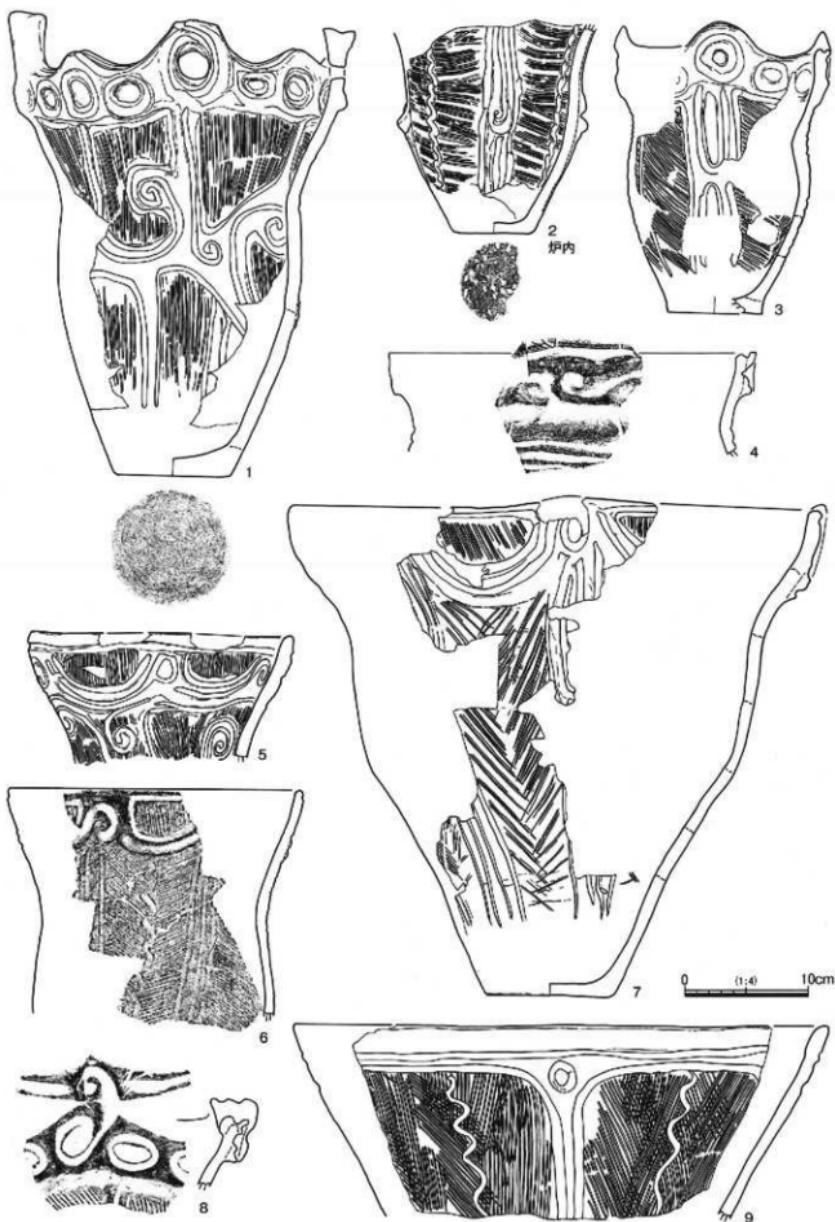
第62圖 12號竖穴遺物

13号竪穴



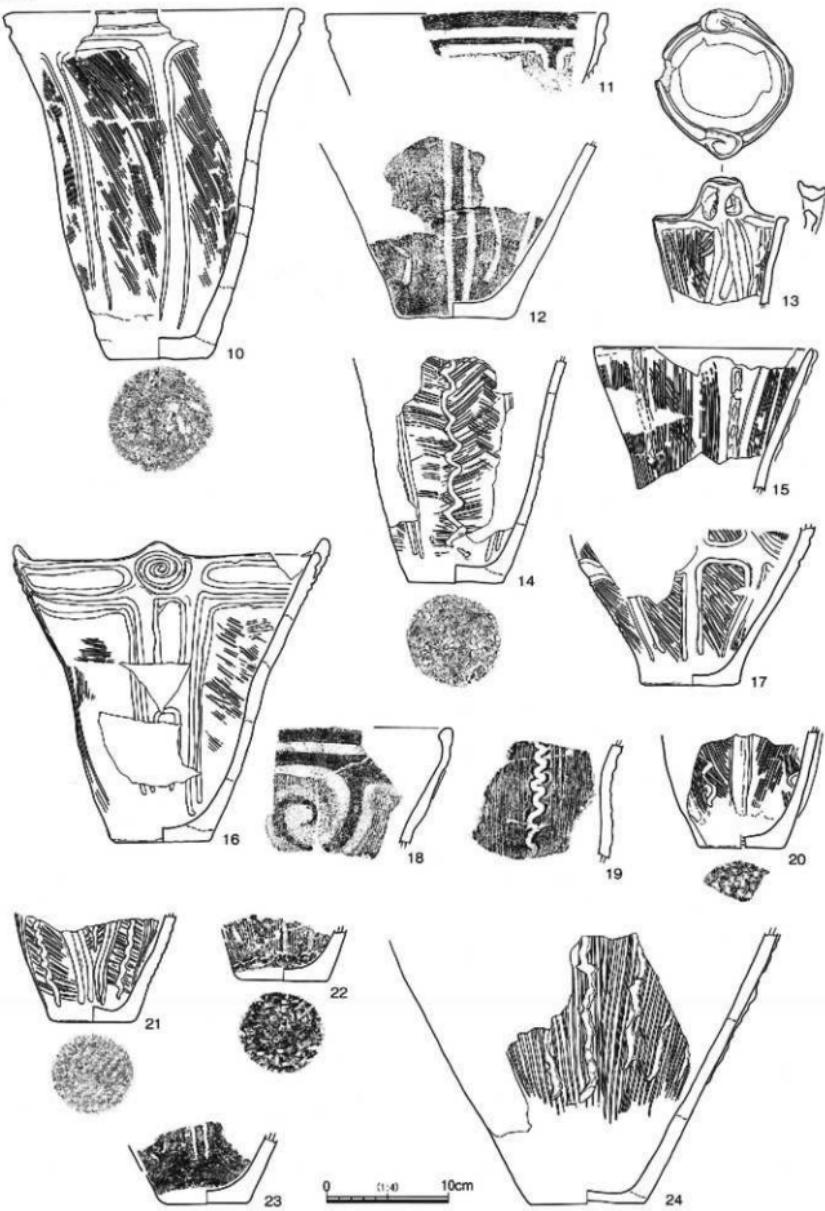
第63図 13号竪穴遺物

15号竪穴



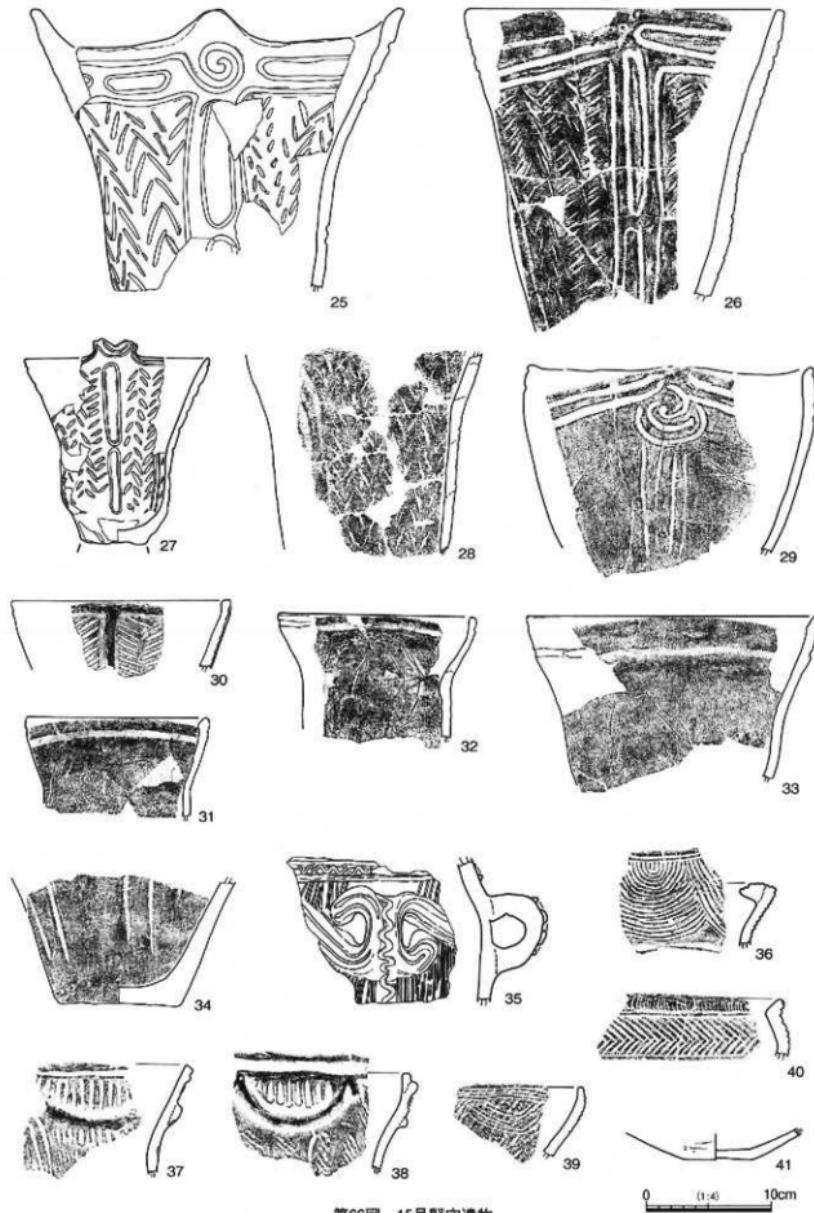
第64図 15号竪穴遺物

15号竪穴



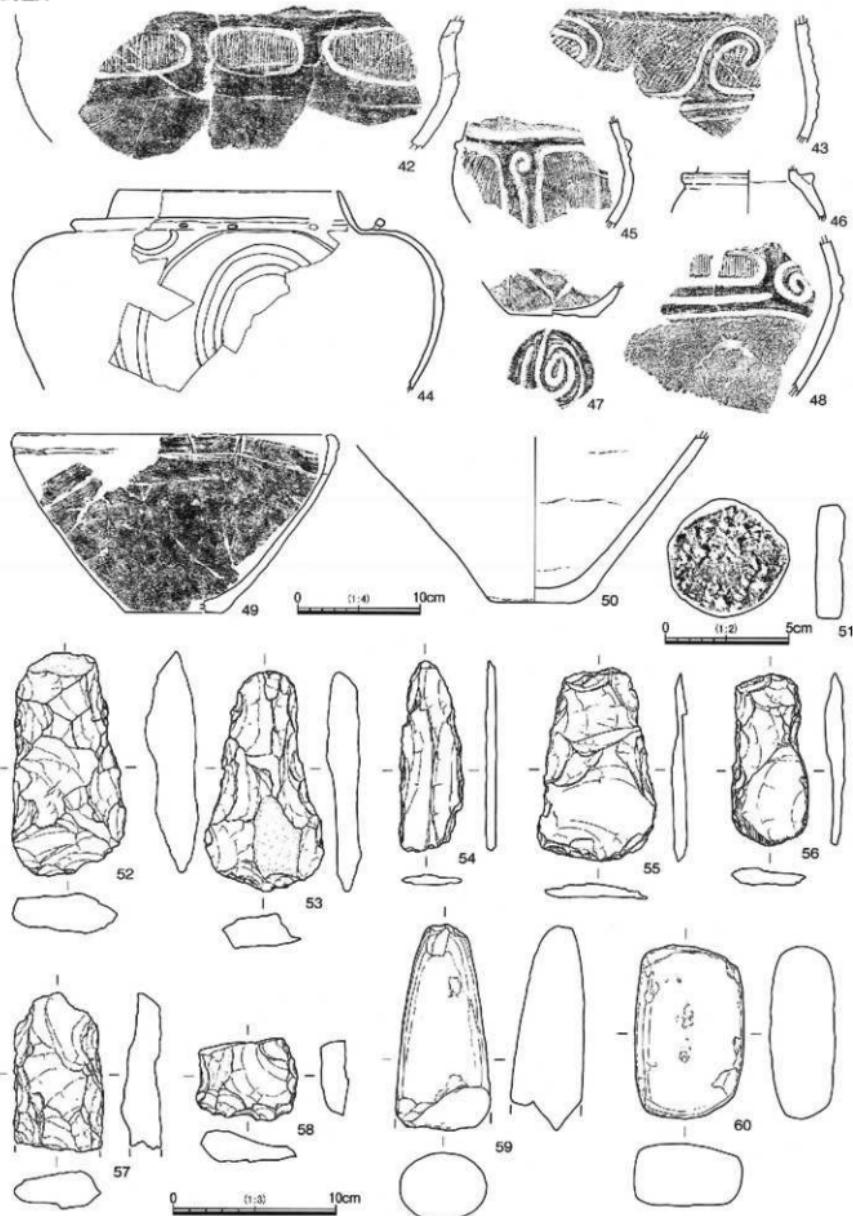
第65図 15号竪穴遺物

15号竪穴



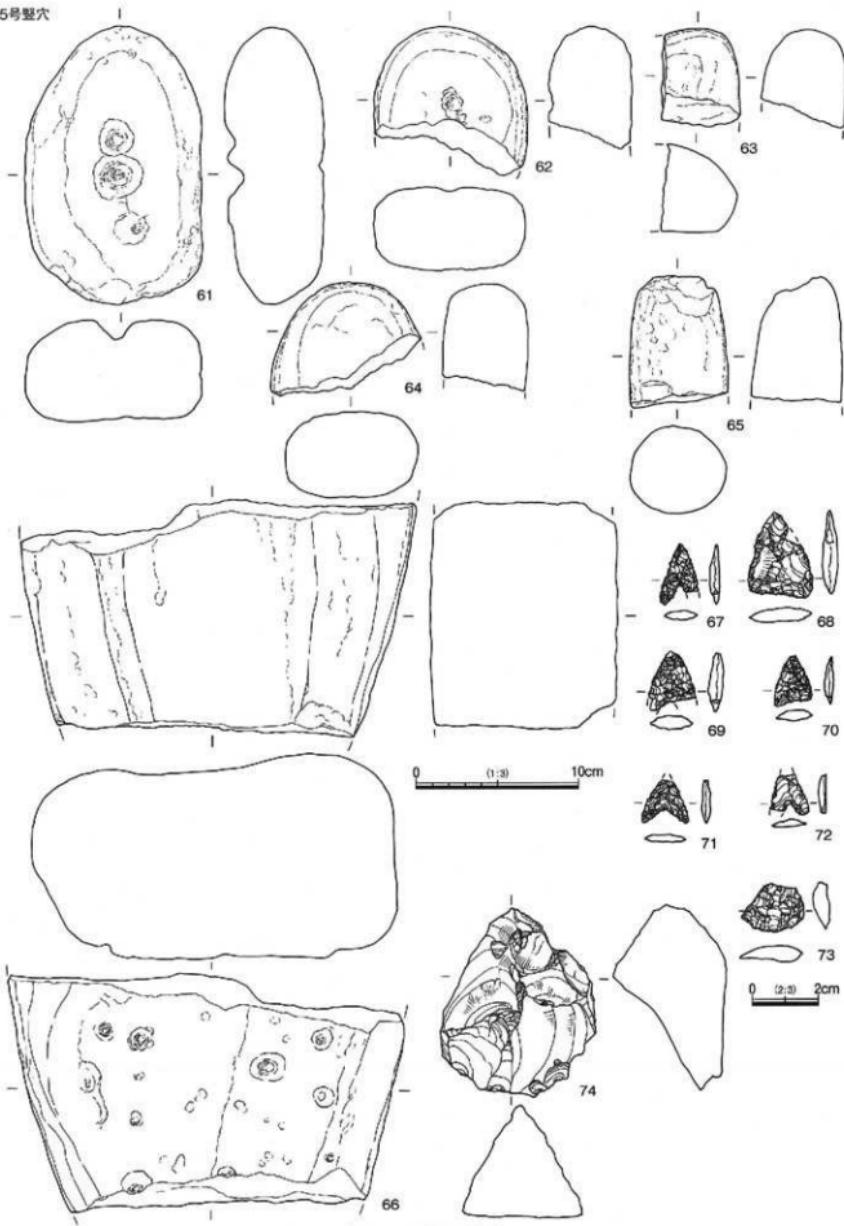
第66図 15号竪穴遺物

15号竖穴



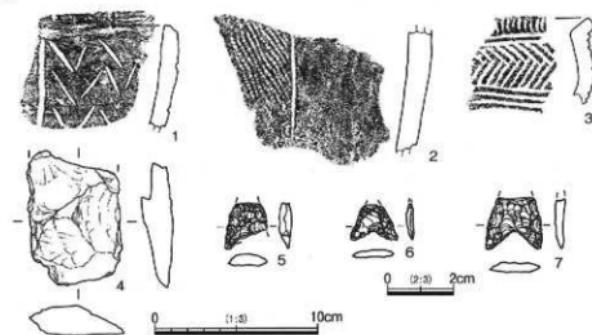
第67圖 15号竖穴遺物

15号竪穴

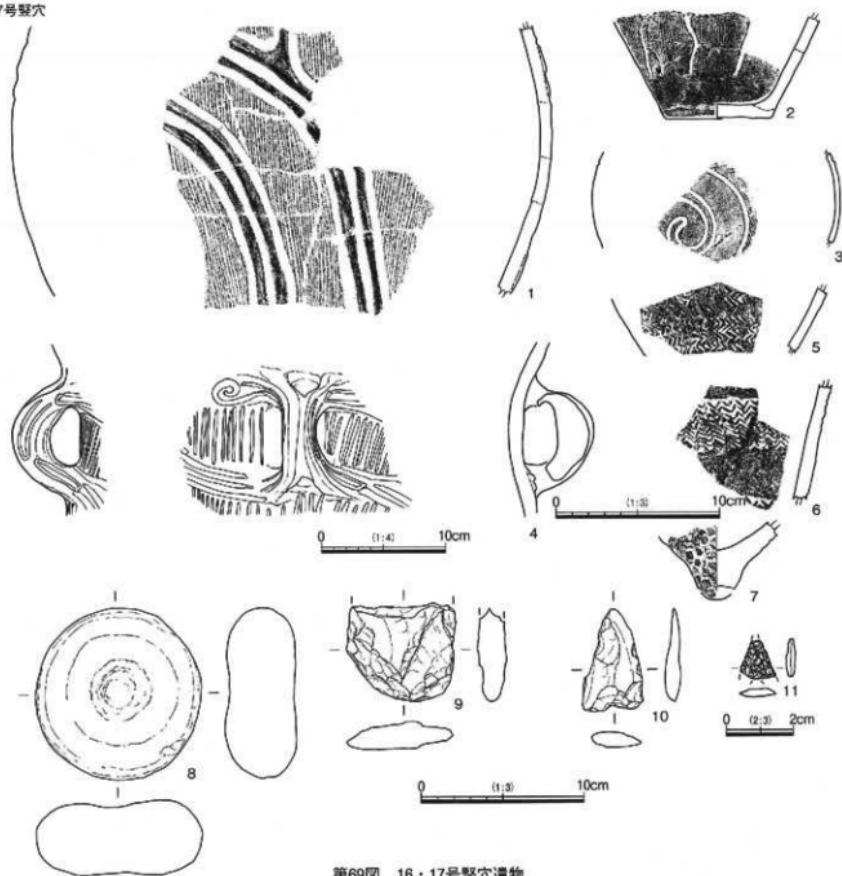


第68図 15号竪穴遺物

16号竪穴



17号竪穴



第69図 16・17号竪穴遺物

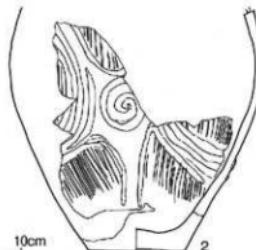


第70図 18号竪穴遺物

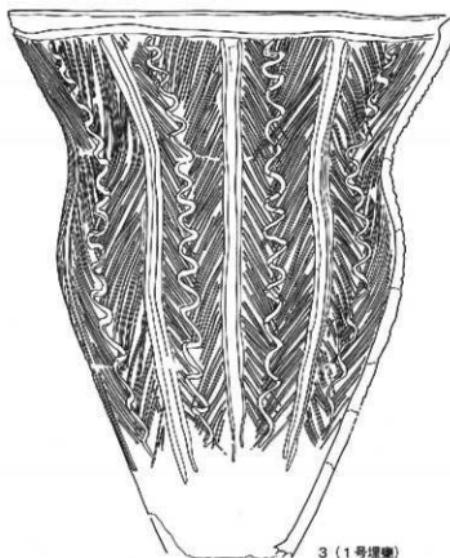


0 (1:3) 2cm

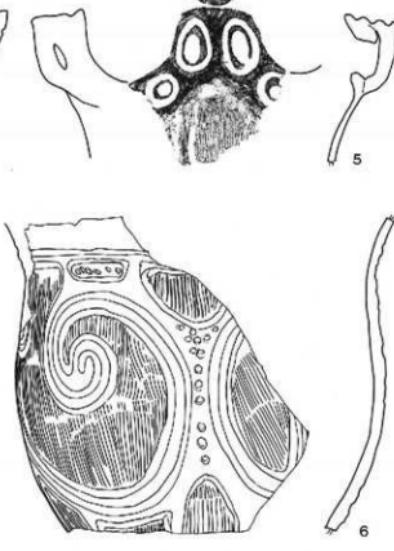
0 (1:4) 10cm



4

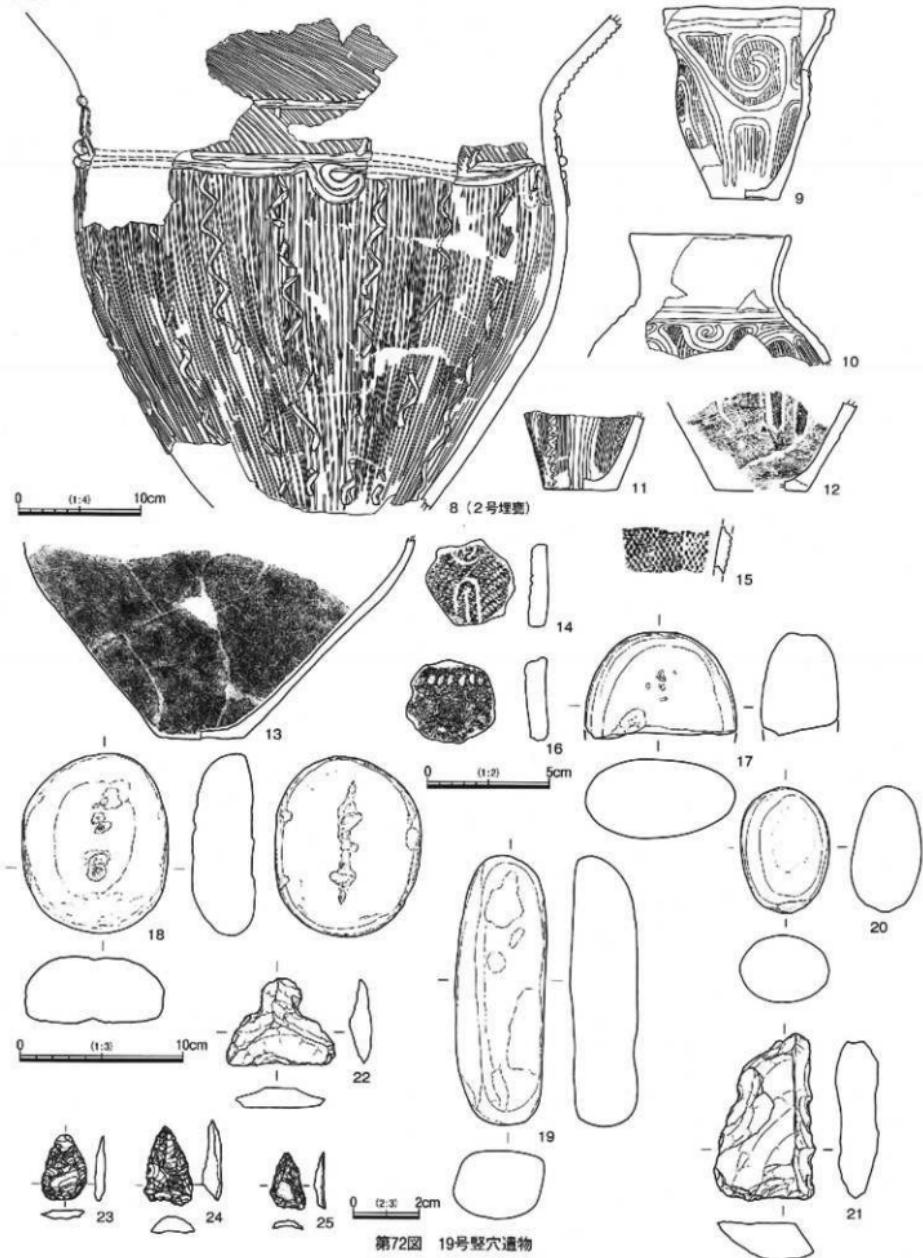


3 (1号埋集)



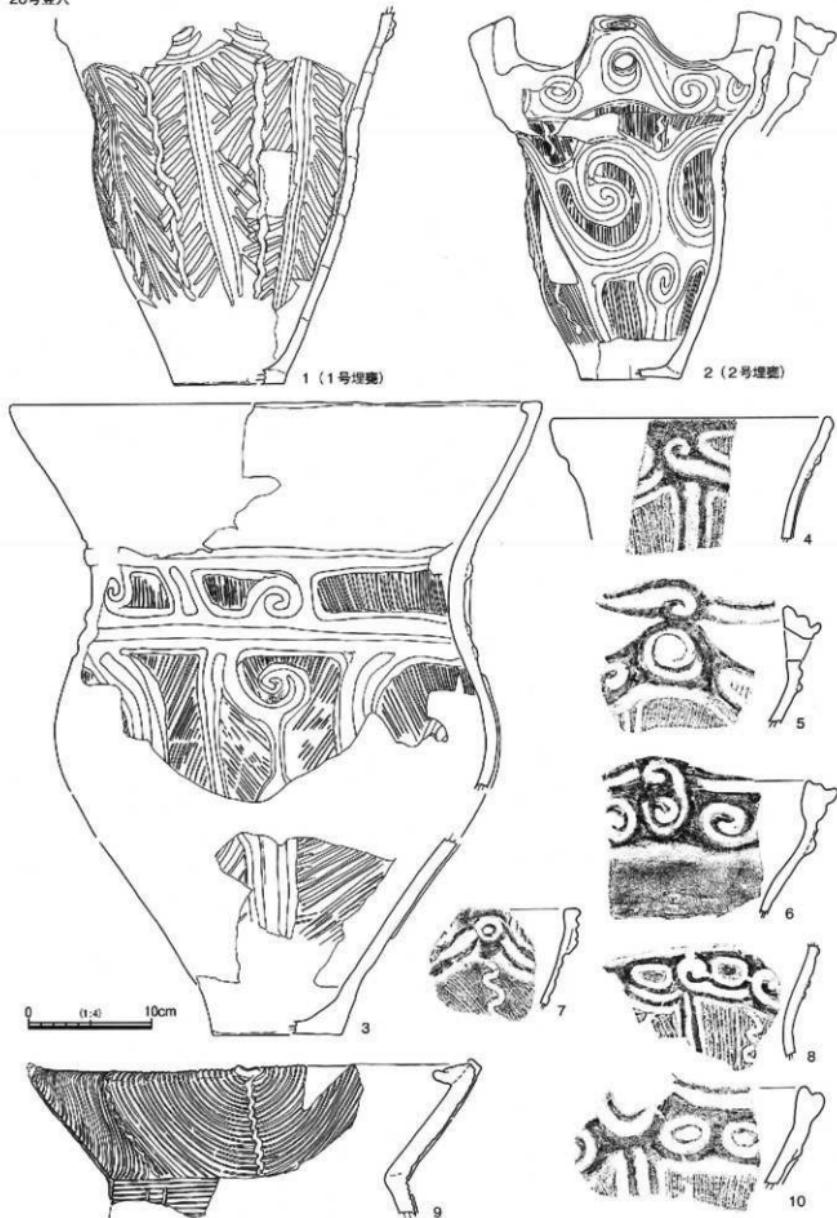
第71図 18・19号整穴遺物

19号竪穴

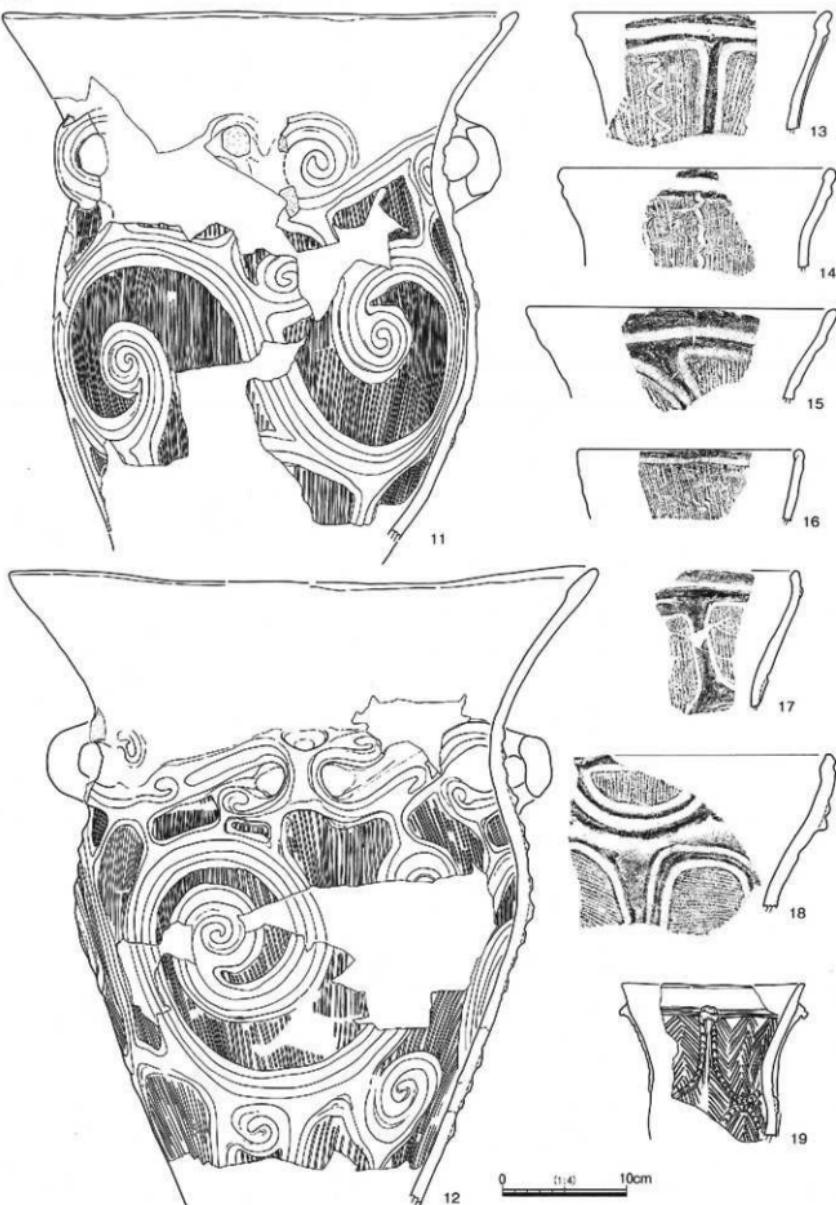


第72図 19号竪穴遺物

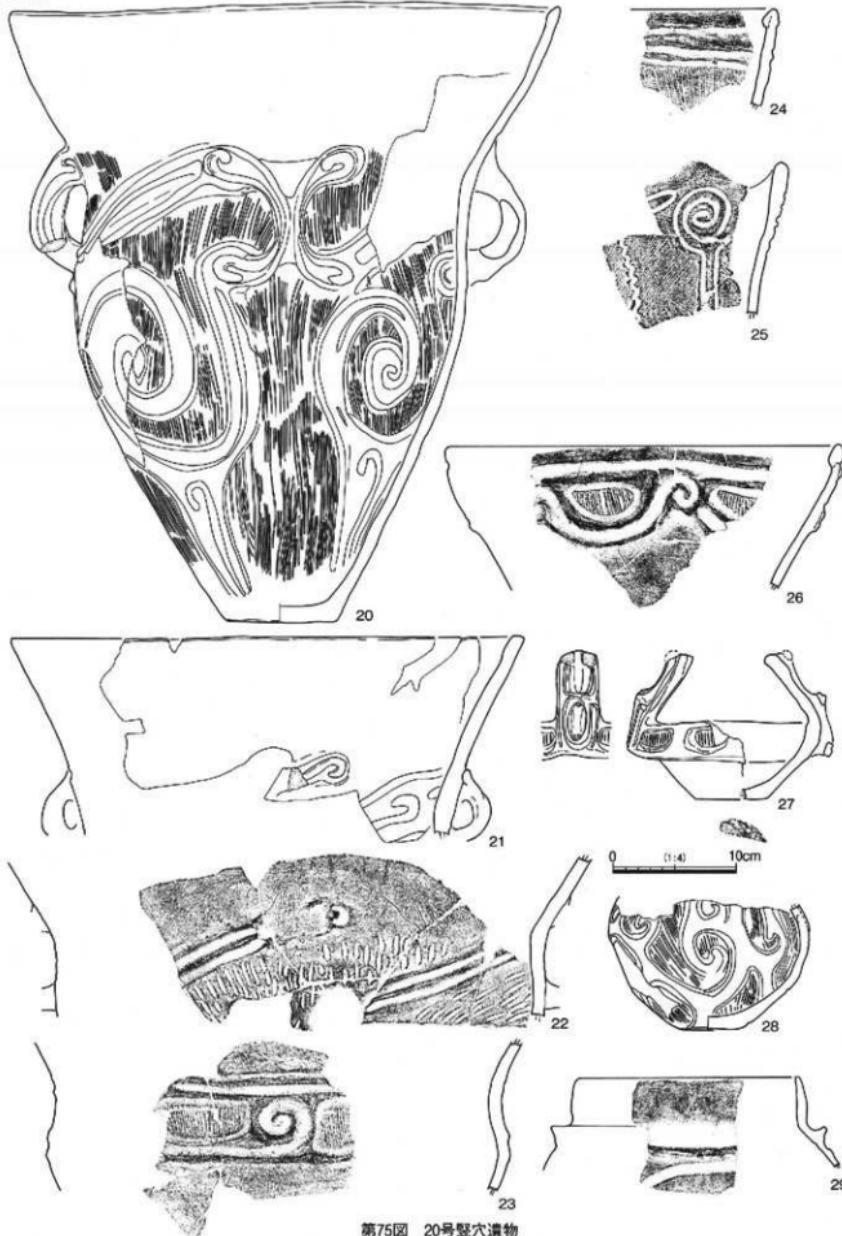
20号竪穴



第73図 20号竪穴遺物

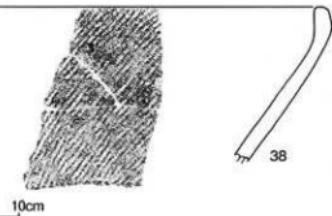
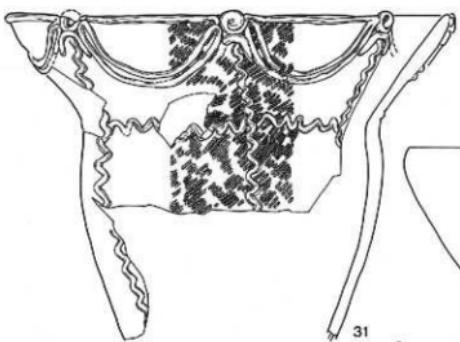
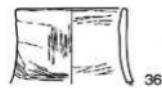
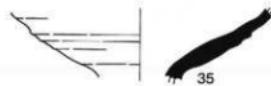
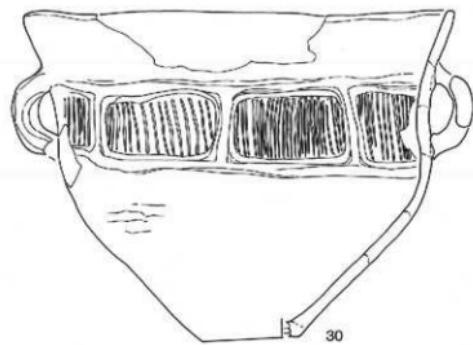


第74図 20号墳穴遺物

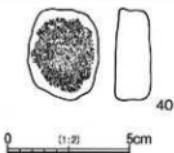
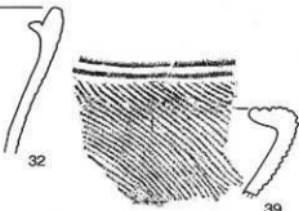


第75図 20号竪穴遺物

20号竪穴



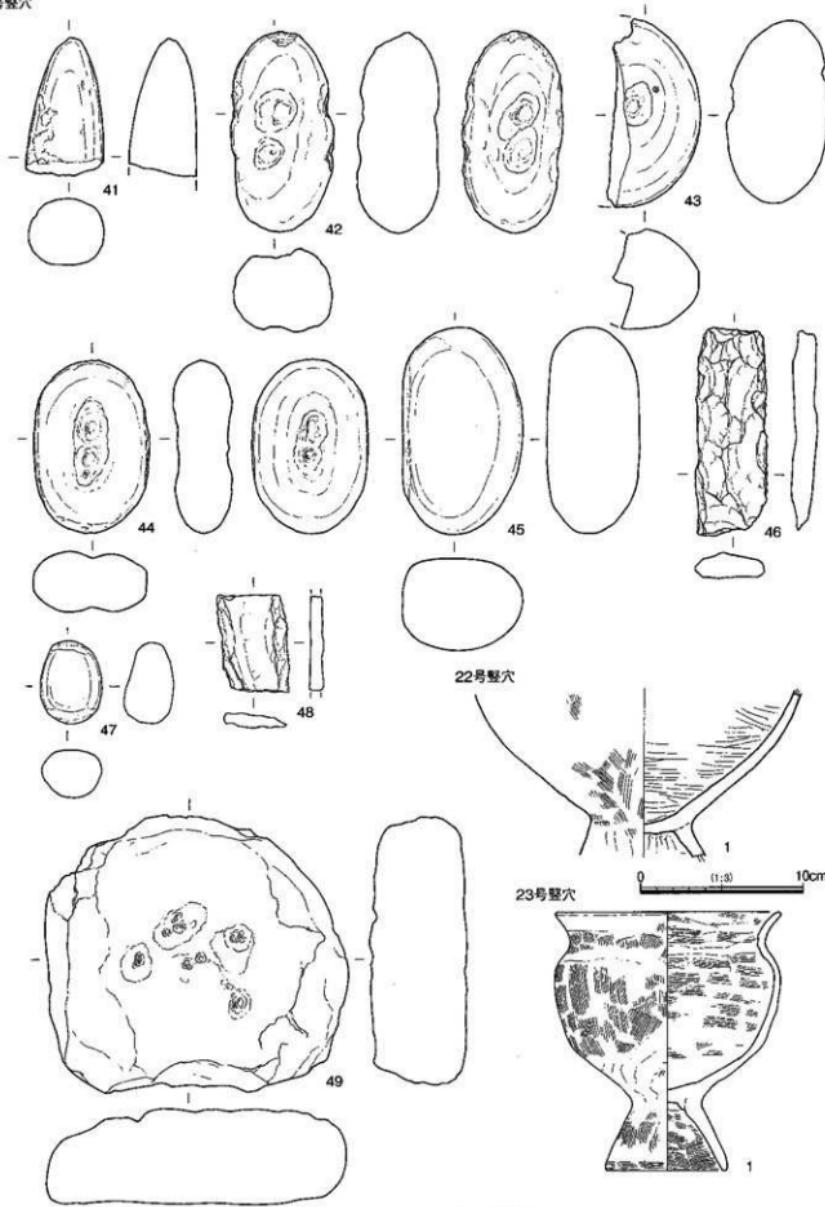
0 (1:4) 10cm



0 (1:2) 5cm

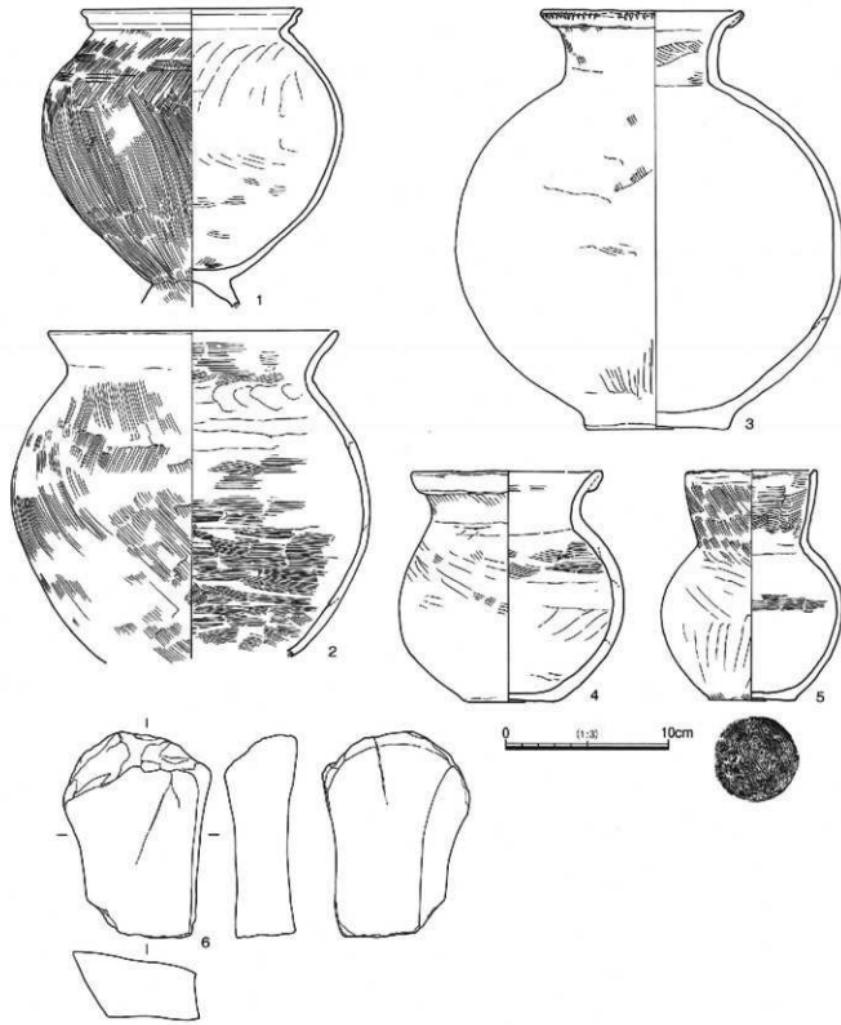
第76図 20号竪穴遺物

20号竪穴



第77図 20・22・23号竪穴遺物

24号竪穴

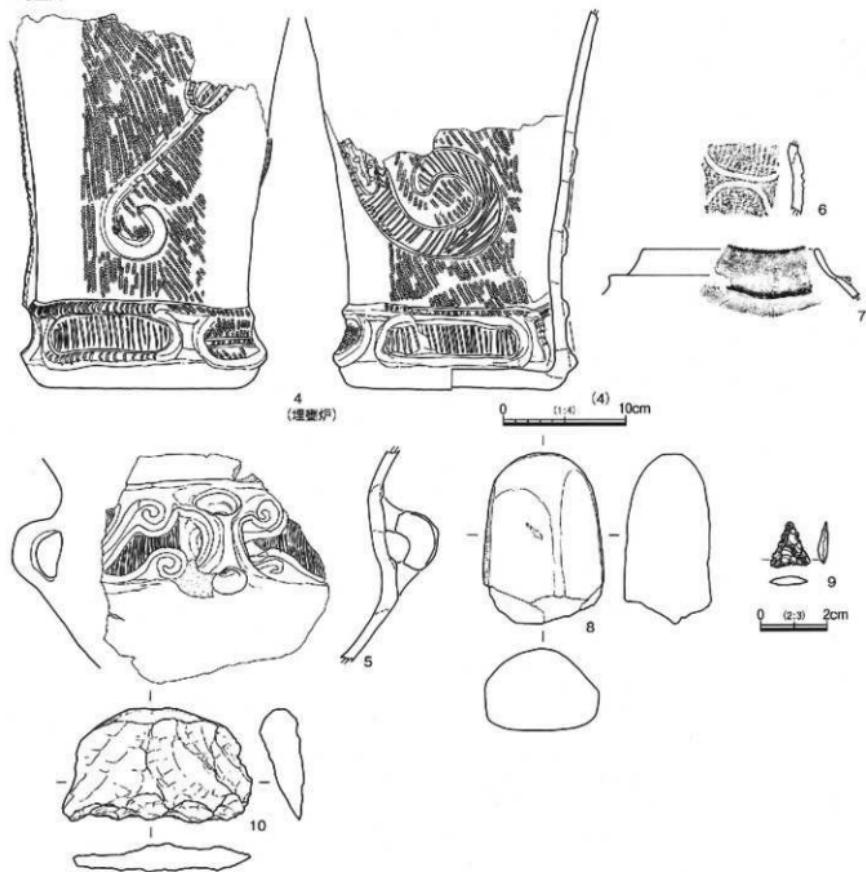


26号竪穴

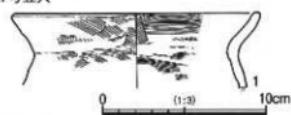


第78図 24・26号竪穴遺物

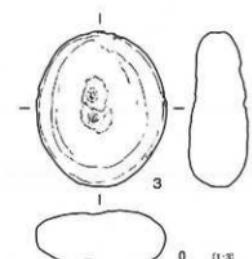
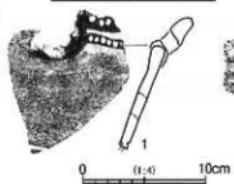
26号竪穴



27号竪穴

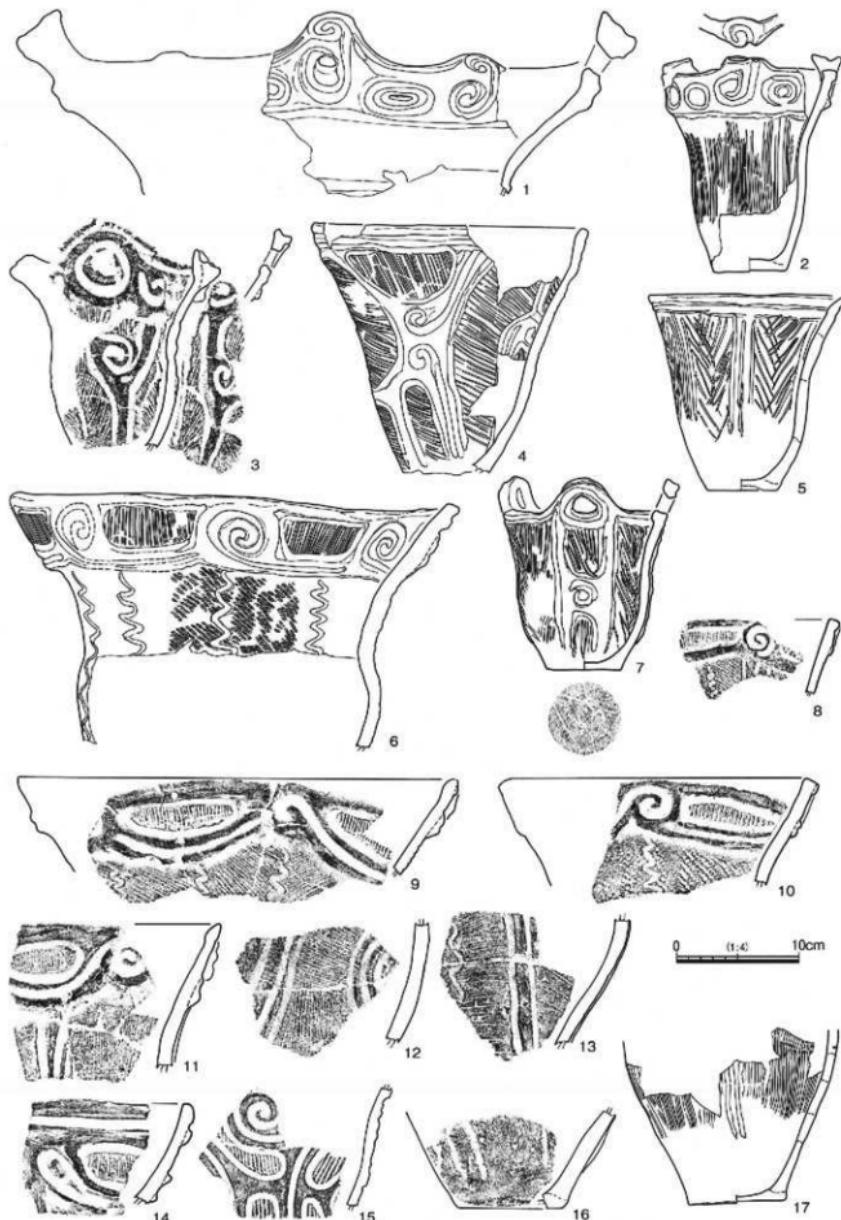


28号竪穴

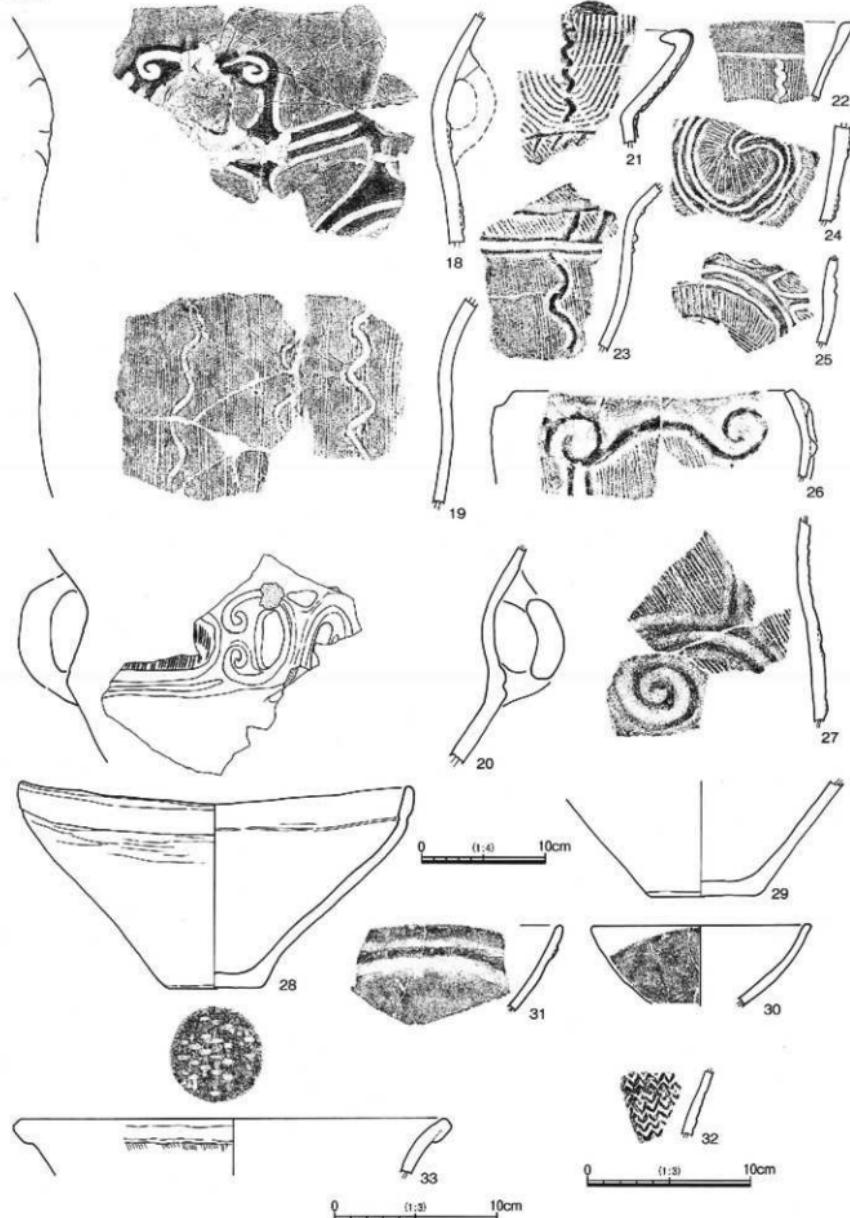


第79図 26~28号竪穴遺物

29号竪穴

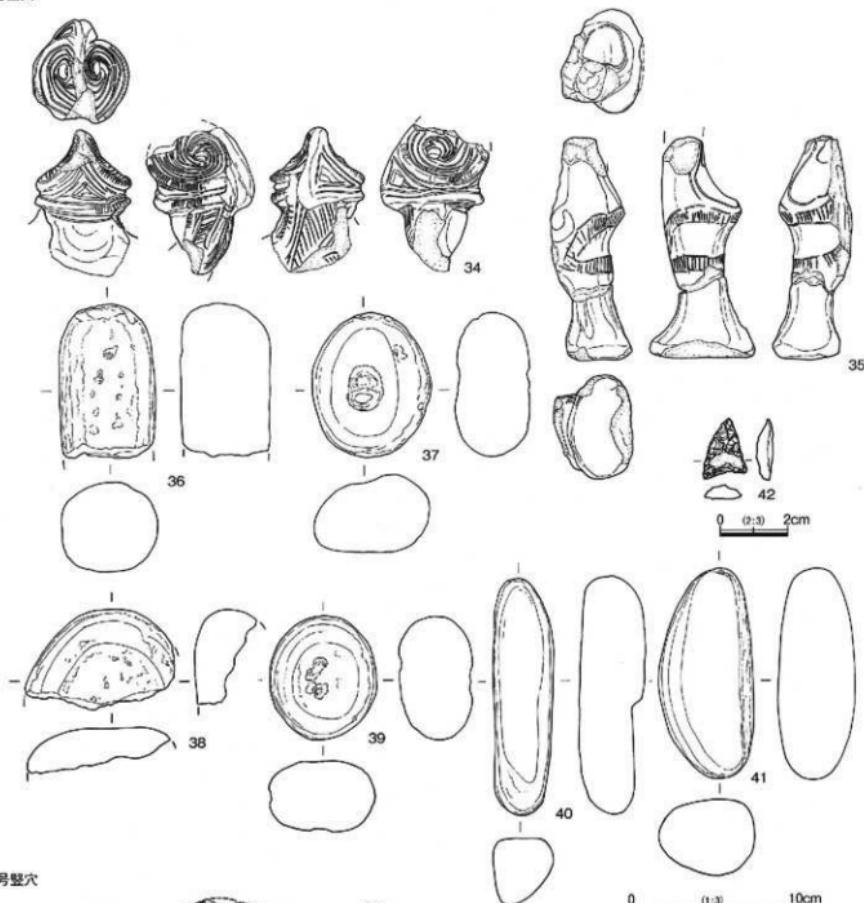


第80図 29号竪穴遺物

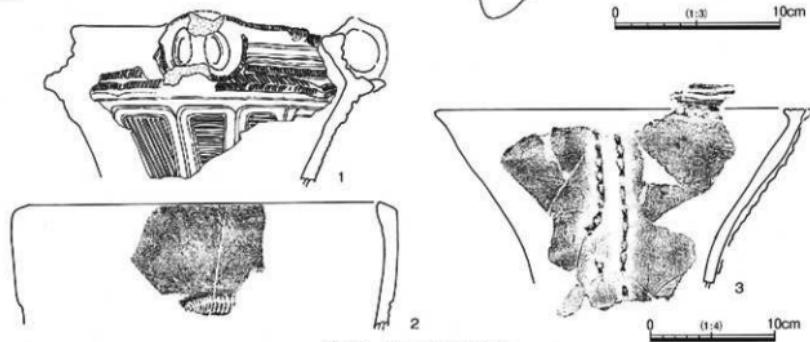


第81図 29号竪穴遺物

29号竪穴

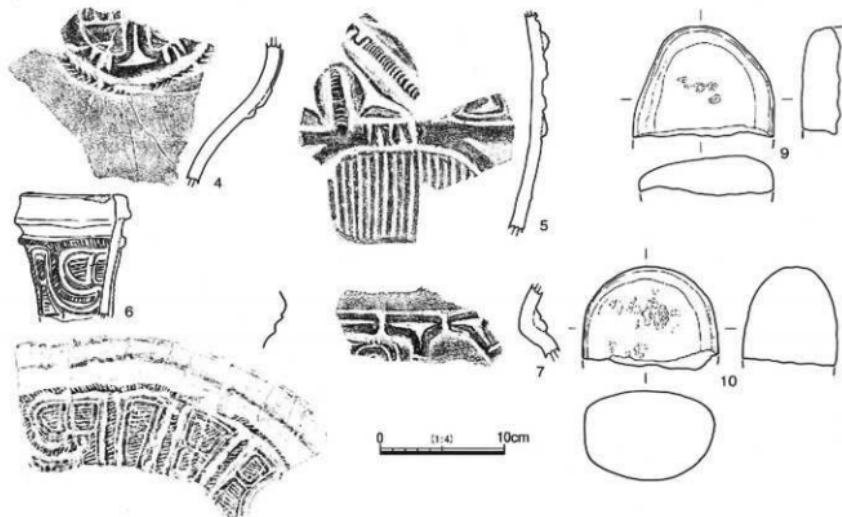


30号竪穴



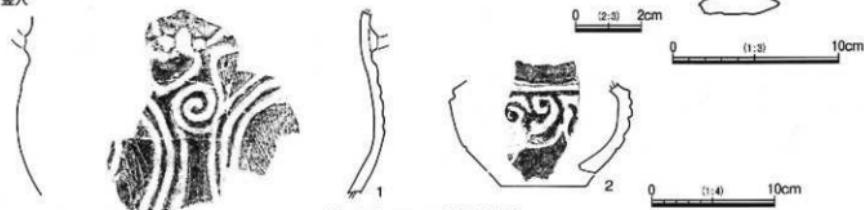
第82図 29・30号竪穴遺物

30号竪穴



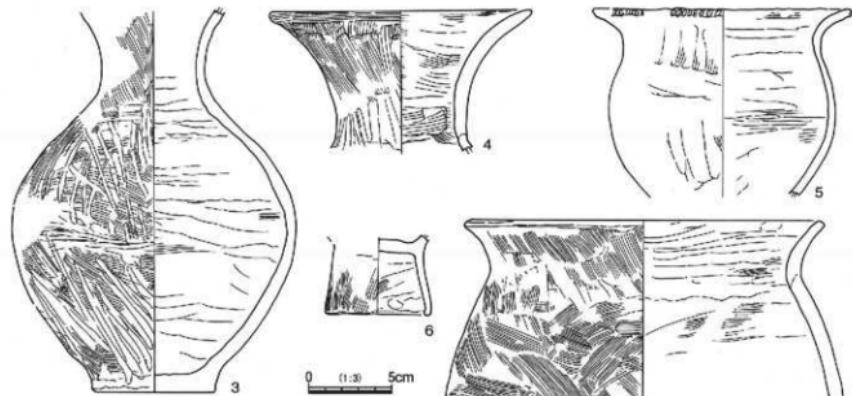
0 1:4 10cm

31号竪穴

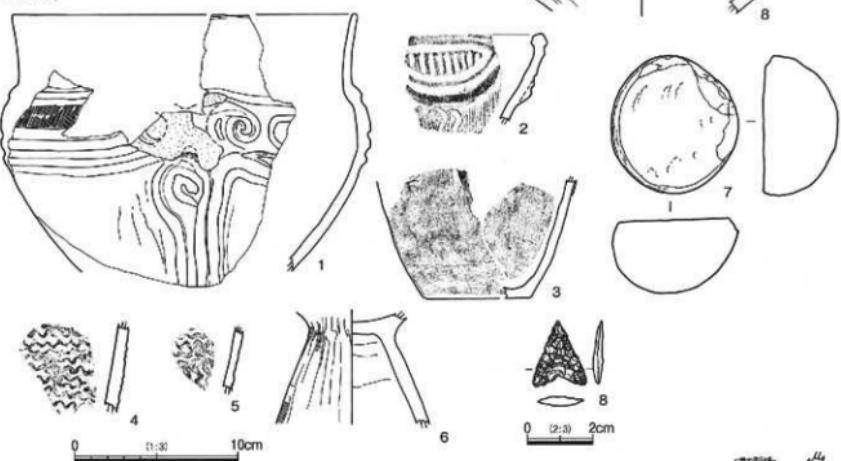


第83図 30・31号竪穴遺物

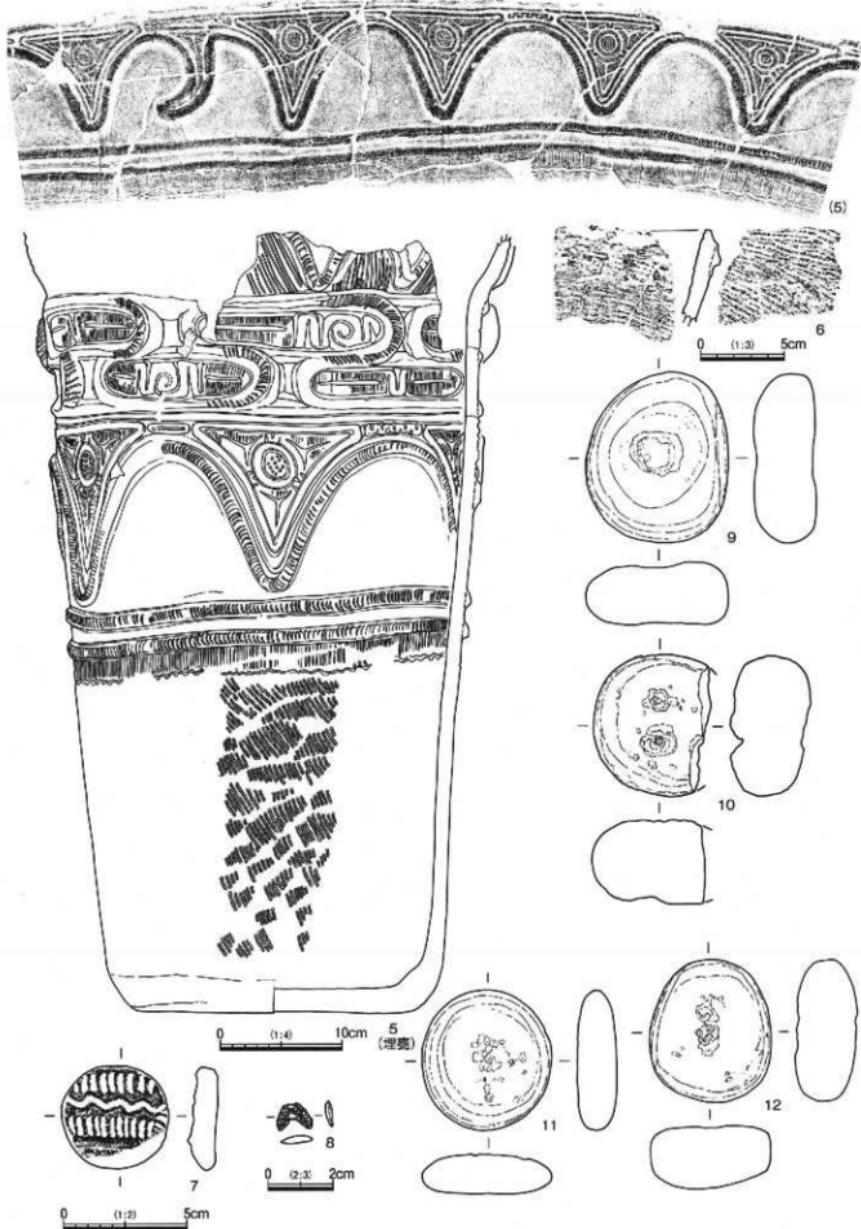
31号竪穴



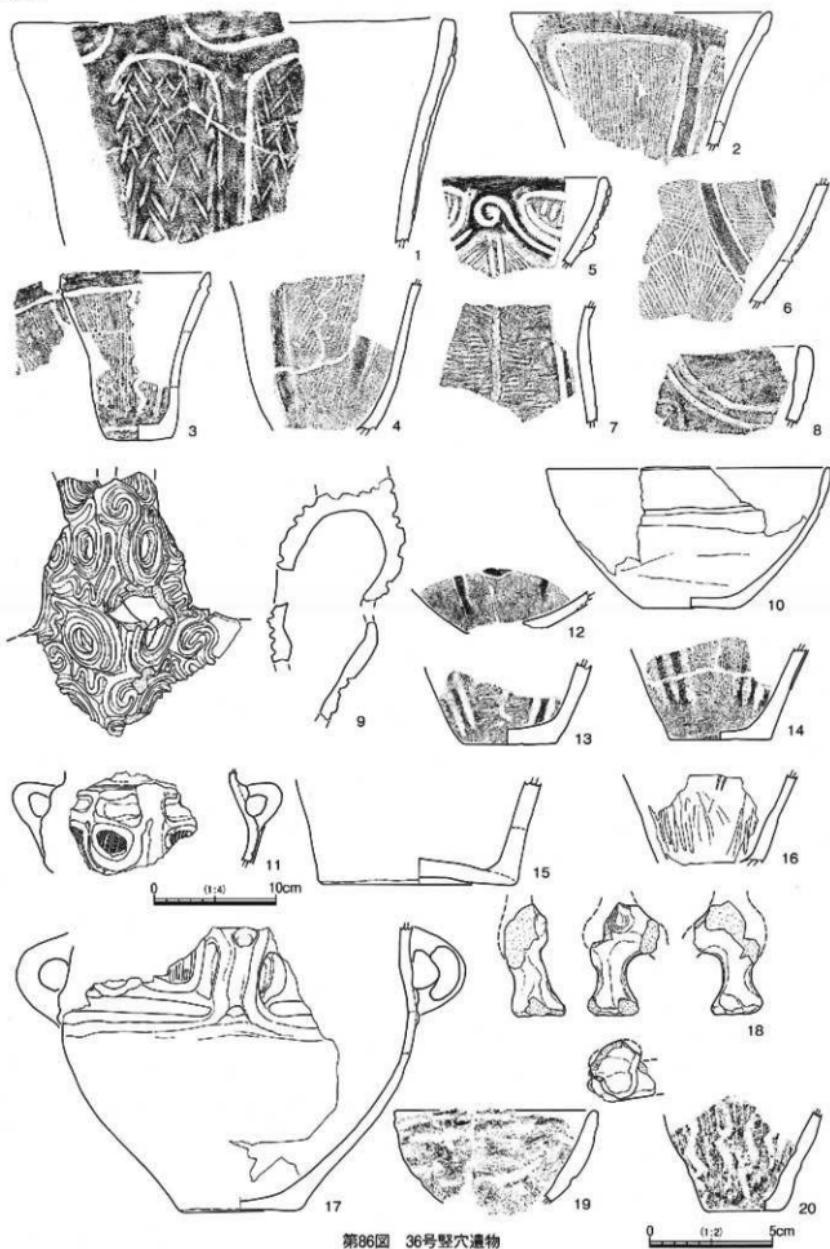
32号竪穴



第84図 31~33号竪穴遺物

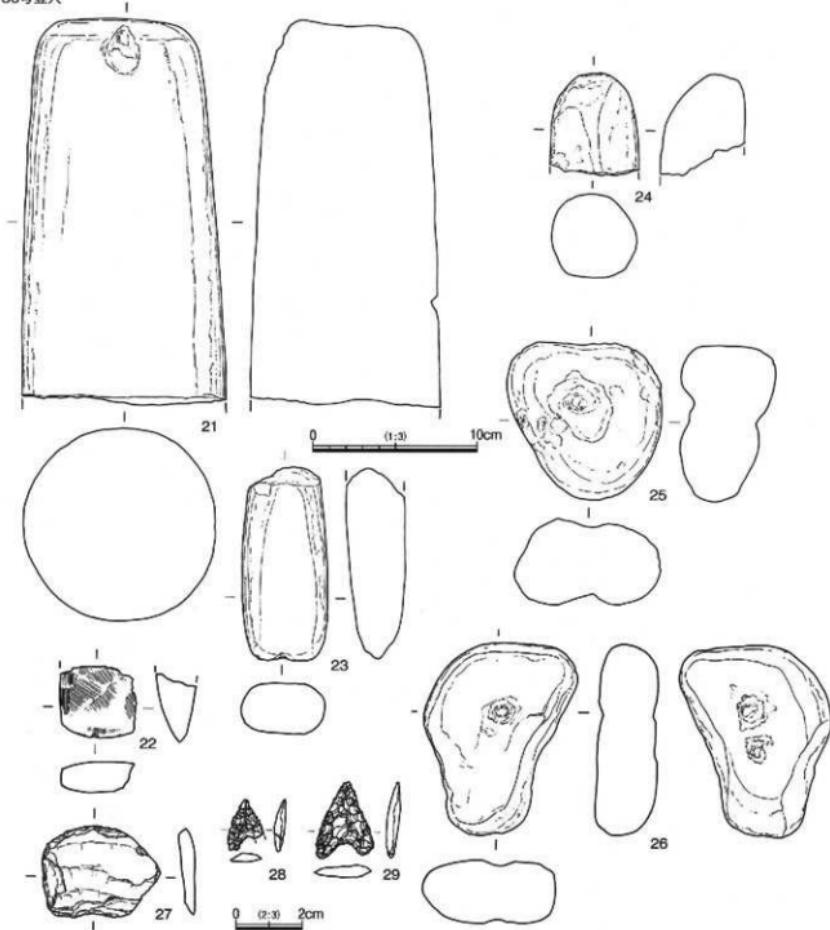


第85圖 33号竪穴遺物

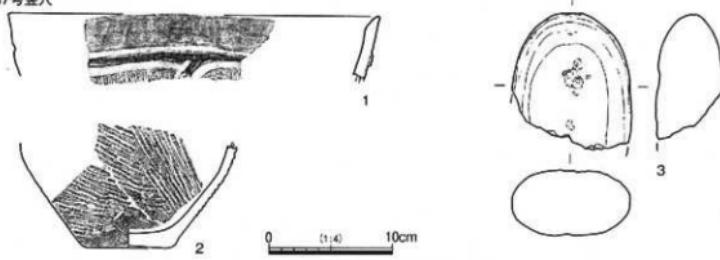


第86図 36号竪穴遺物

36号竪穴

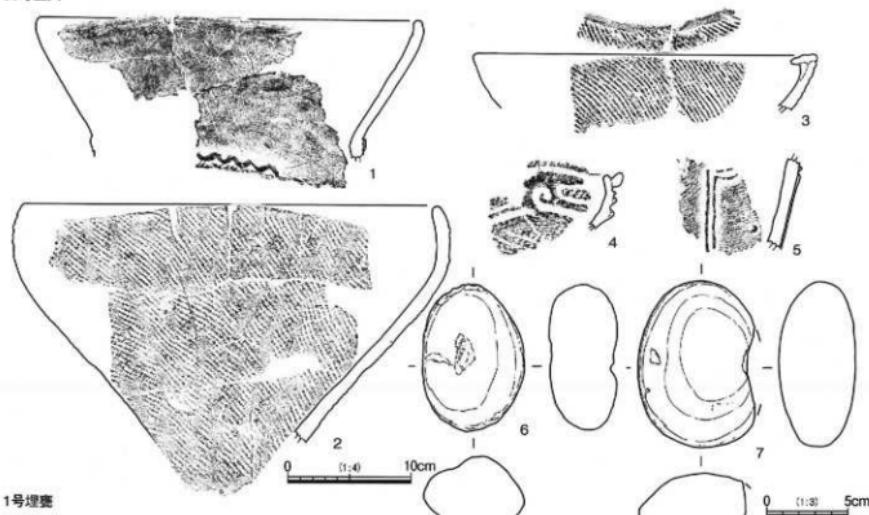


37号竪穴

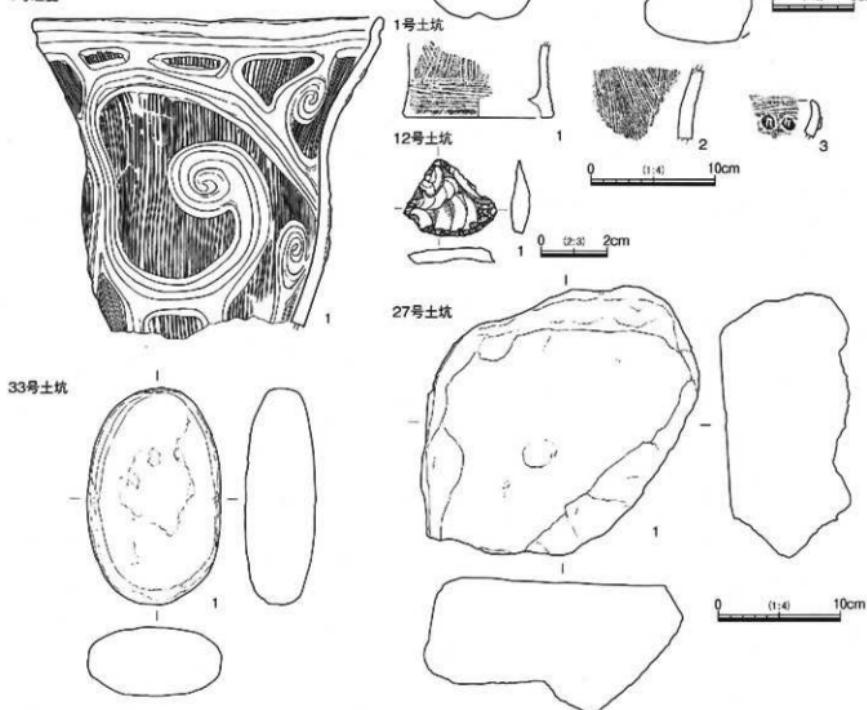


第87図 36・37号竪穴遺物

38号竖穴

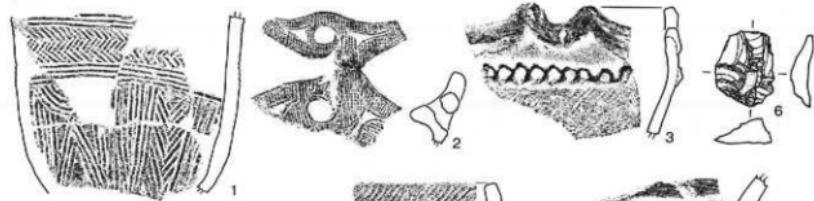


1号埋甕



第88图 38号竖穴·1号埋甕·1~33号土坑遗物

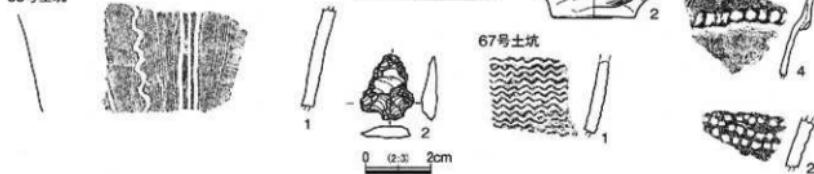
49号土坑



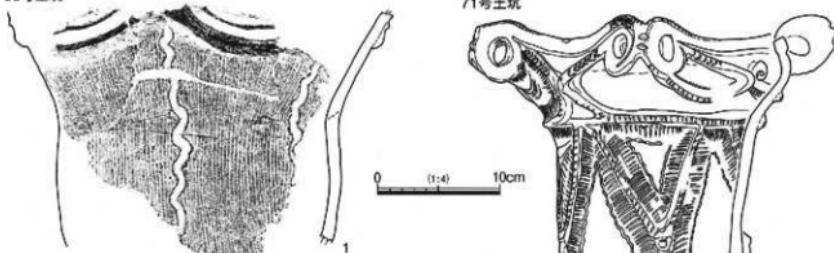
59号土坑



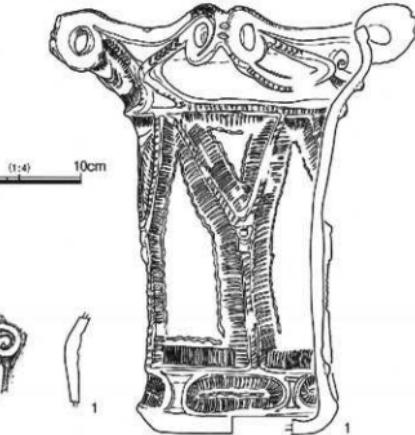
63号土坑



66号土坑

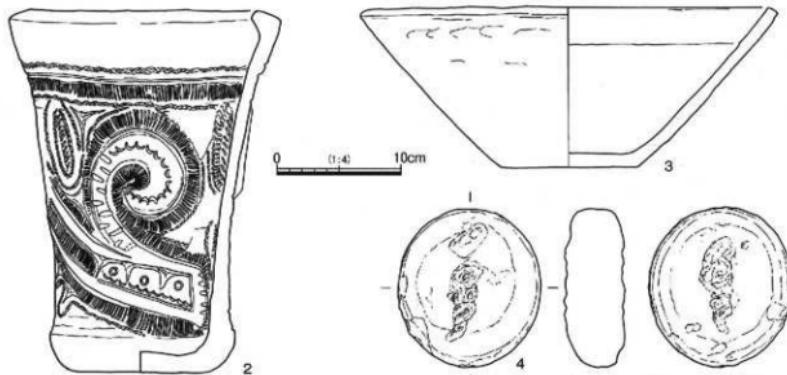


71号土坑

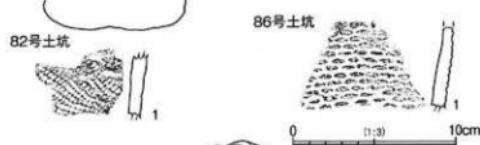
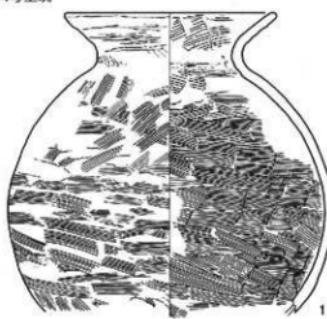


第89図 49~71号土坑遺物

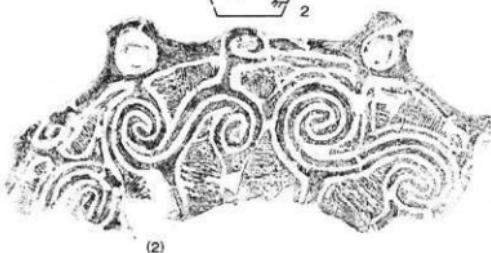
71号土坑



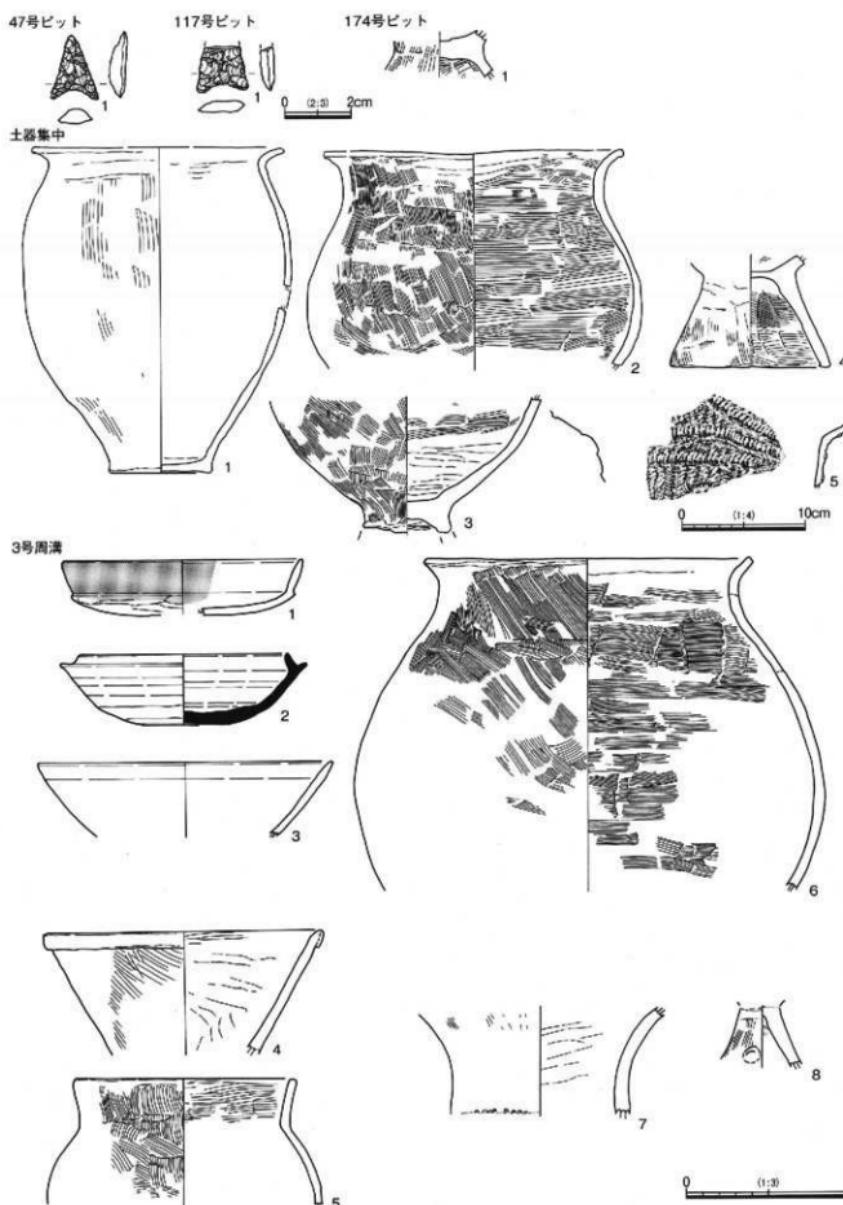
74号土坑



90号土坑

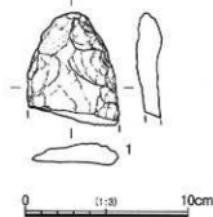


第90図 71~90号土坑遺物

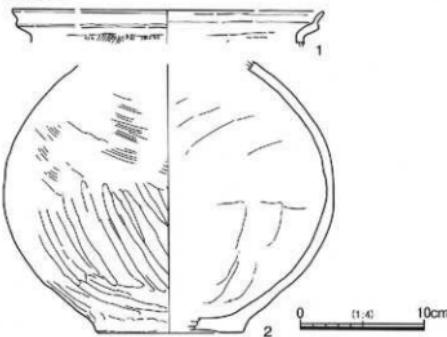


第91図 47～174号ピット、土器集中区、1号周溝遺物

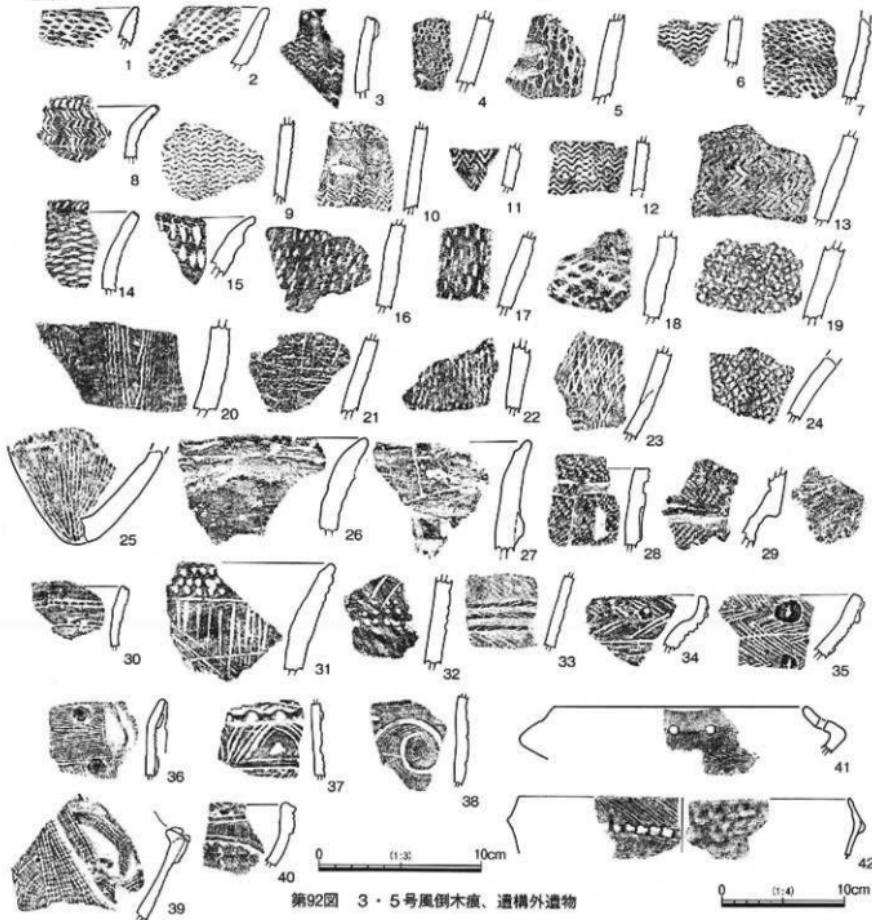
3号風倒木



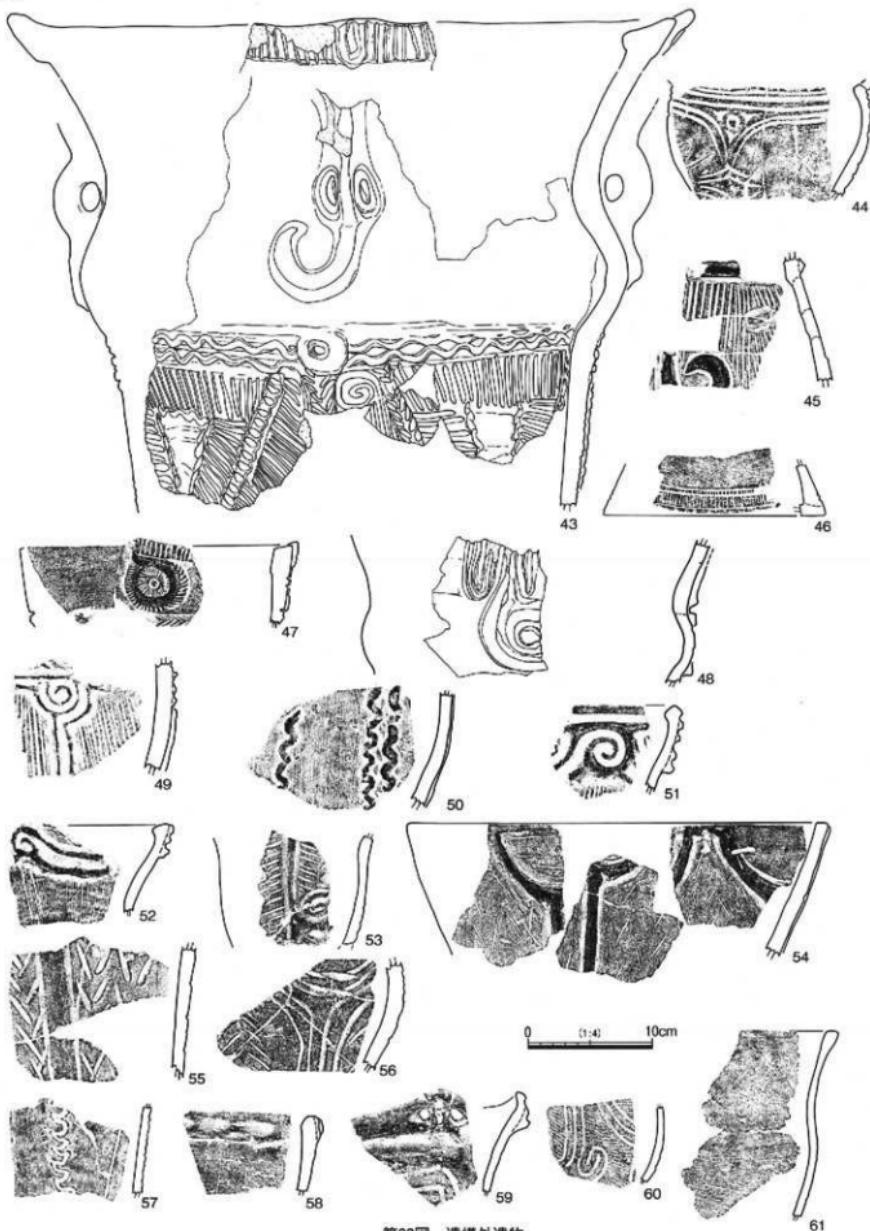
5号風倒木



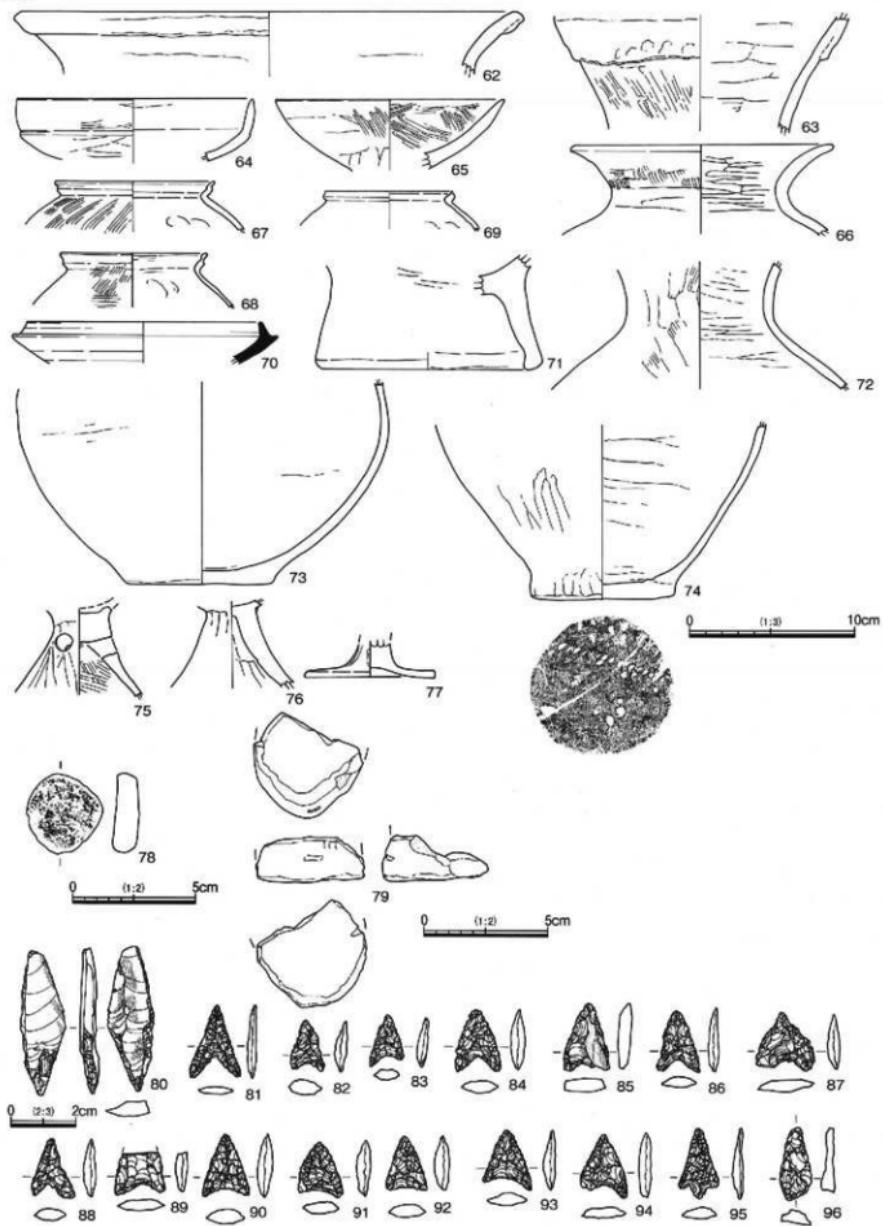
遺構外



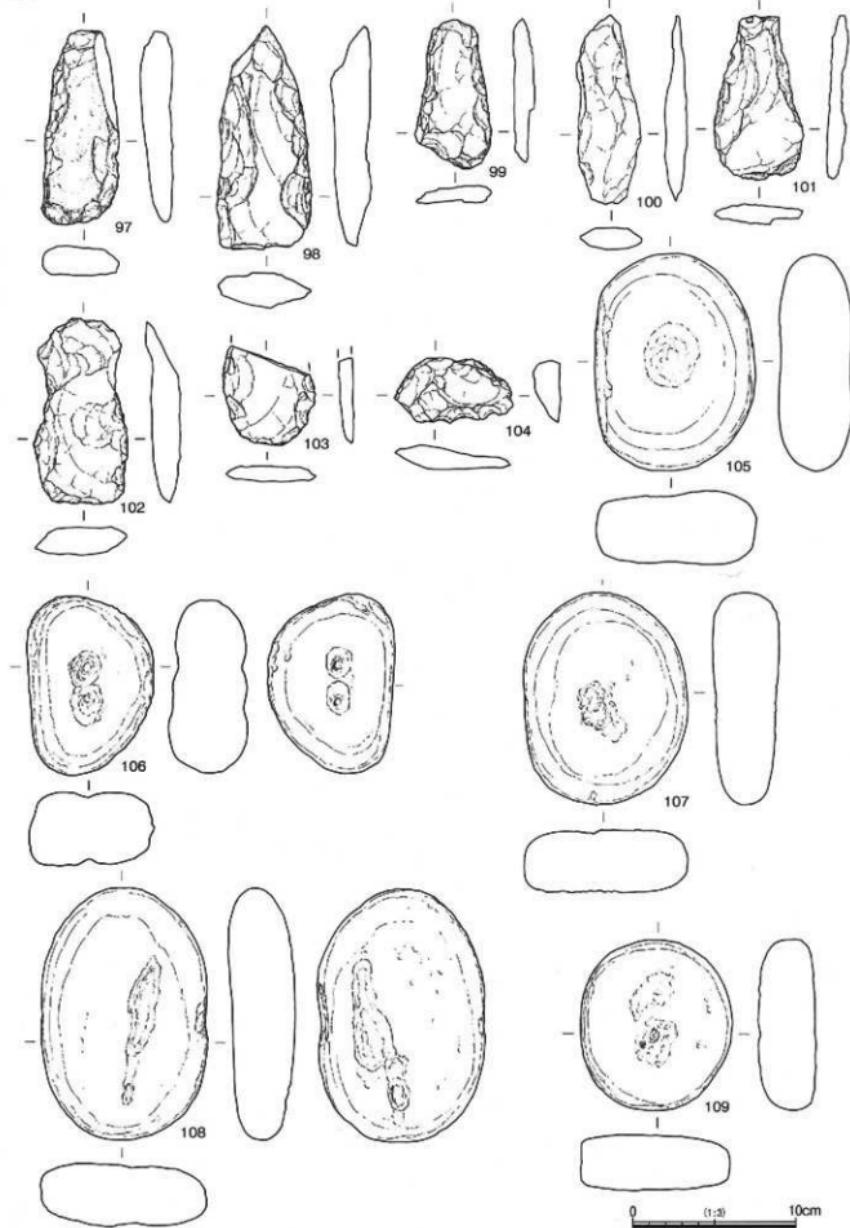
第92図 3・5号風倒木底、遺構外遺物



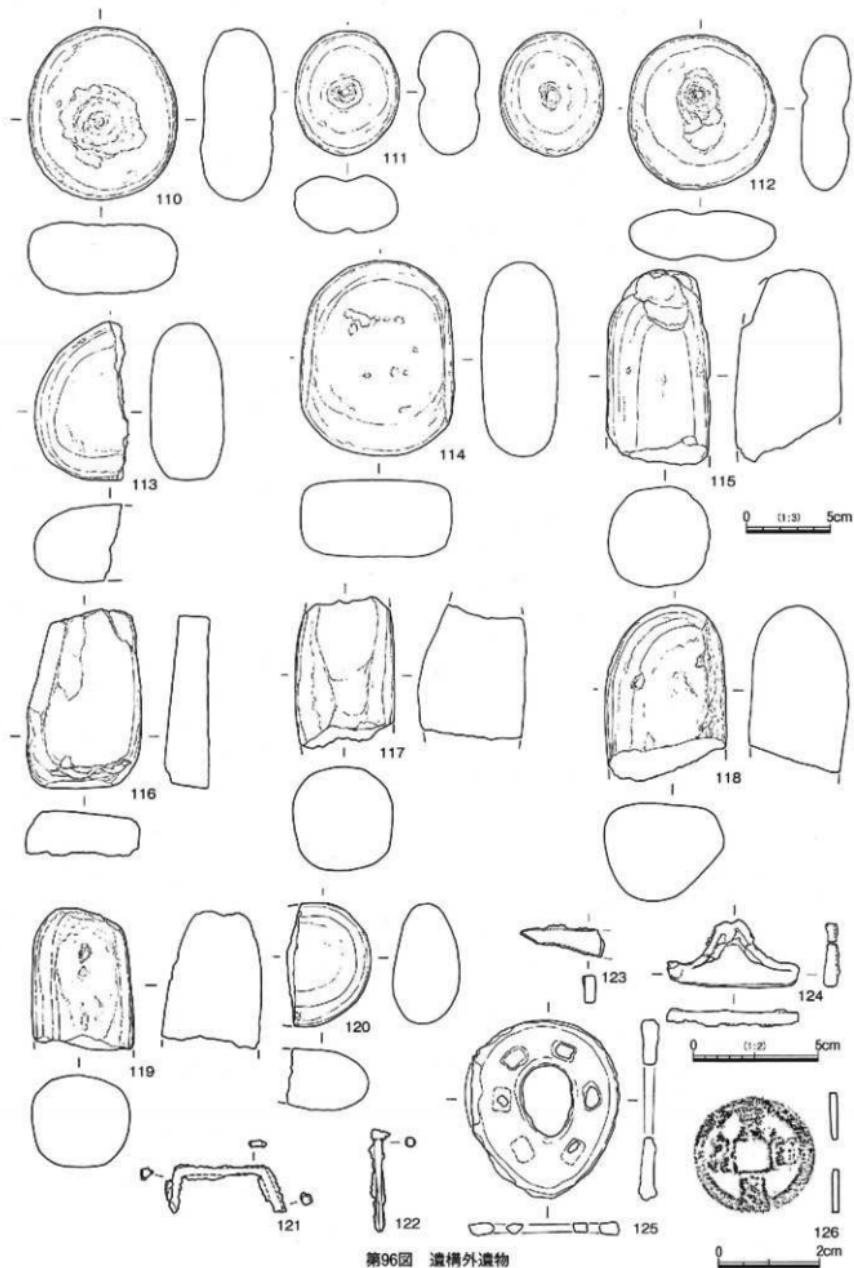
第93図 造構外遺物



第94図 遺構外遺物



第95図 遺構外遺物



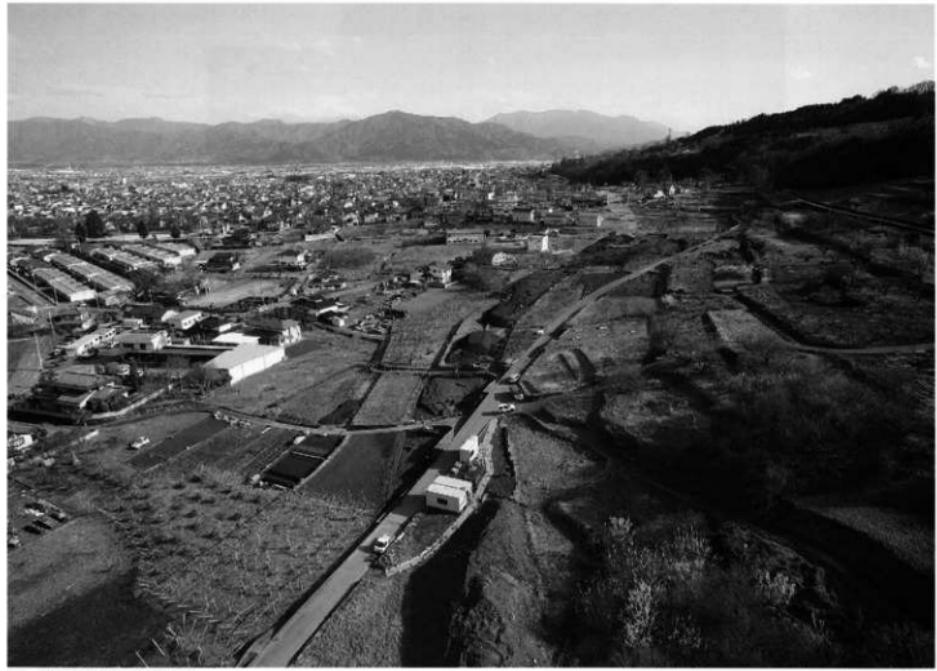
第96図 遺構外遺物

1 調査区全体写真  
(1・2次分を合成)





1 2区俯瞰写真（北東より）



2 2区俯瞰写真（北より）



1 4区俯瞰写真（南より）



2 4区俯瞰写真（北より）

図版4



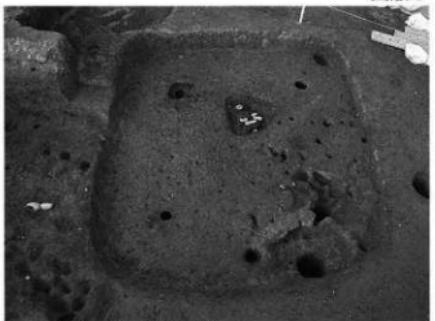
1 5区俯瞰写真（南より）



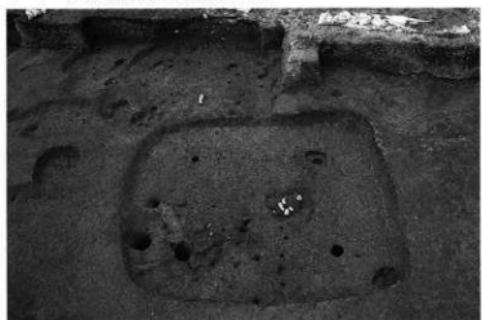
2 5区俯瞰写真（東より）



1 1・6号墳穴遺物出土状況（東より）



2 1号墳穴完掘状況（南より）



3 1・6号墳穴完掘状況（東より）



4 1号墳穴炉



5 6号墳穴炉



6 1・6号墳穴掘り方（東より）



7 6号墳穴掘り方（東より）



8 2号墳穴遺物・炭化材出土状況（南より）



9 2号墳穴炭化材

図版 6



1 2号竖穴炭化材（ササ）



2 2号竖穴北側礫集石



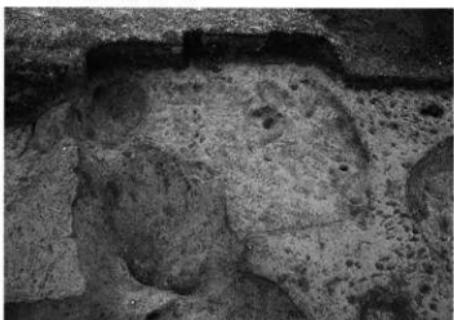
3 2号竖穴完掘状況（東より）



4 2号竖穴掘り方（東より）



5 3号竖穴遺物出土状況（南より）



6 3号竖穴掘り方（東より）



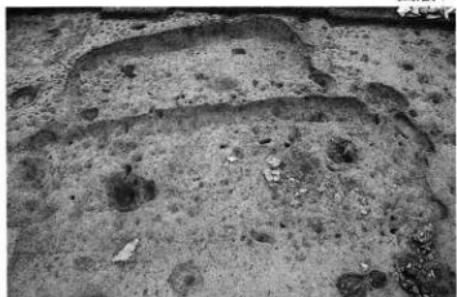
7 4・5号竖穴遺物出土状況（東より）



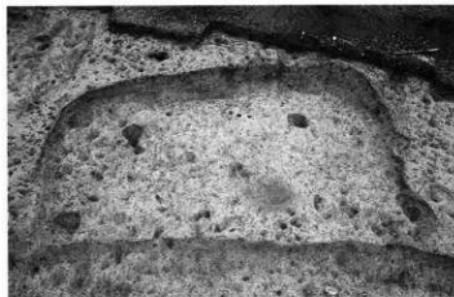
8 4号竖穴炉



1 4・5号竪穴完掘状況（東より）



2 4・5号竪穴掘り方（東より）



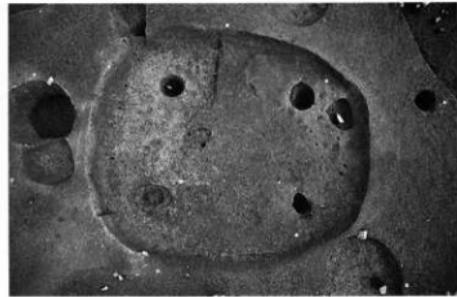
3 4号竪穴掘り方（東より）



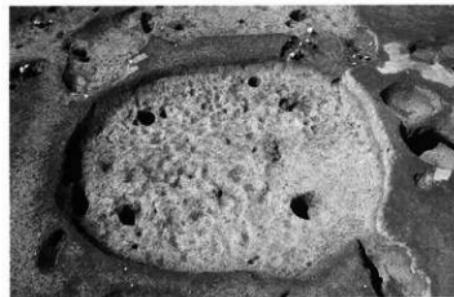
4 6号竪穴完掘状況（東より）



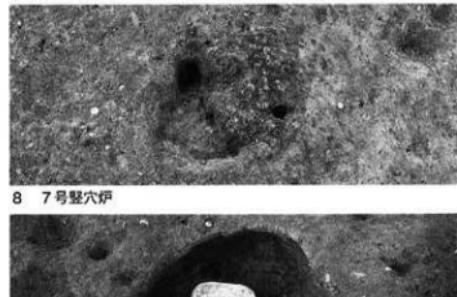
5 7号竪穴遺物出土状況



6 7号竪穴完掘状況（真上より）



7 7号竪穴掘り方（東より）



9 7号竪穴出入り口部ピット

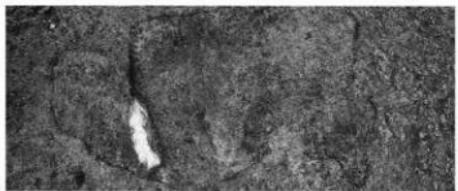
図版8



1 8号竪穴遺物出土状況（東より）



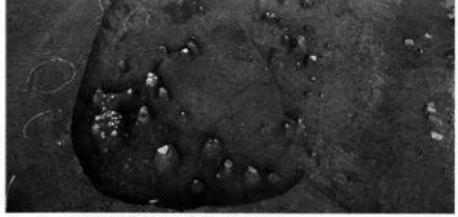
2 8号竪穴完掘状況（東より）



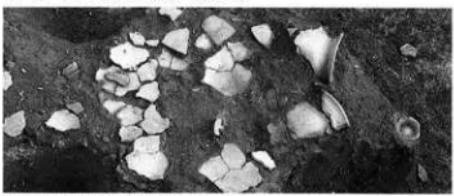
3 8号竪穴炉



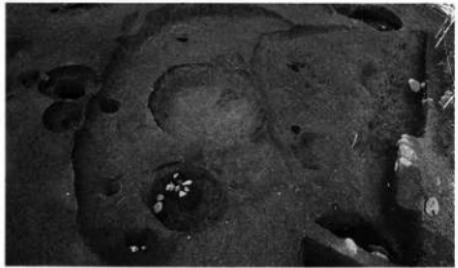
4 9・10号竪穴調査風景（南より）



5 9・10号竪穴遺物出土状況（南より）



6 9号竪穴遺物出土状況



7 9・10号竪穴完掘状況（南より）



8 9・10号竪穴掘り方（南より）



9 9・10号竪穴掘り方（東より）



10 9・10号竪穴掘り方（北より）



1 12号竪穴遺物出土状況（南より）



2 12号竪穴調査風景



3 12号竪穴鉄製品出土状況



4 12号竪穴遺物出土状況



5 12号竪穴遺物出土状況（南より）



6 12号竪穴完掘状況（南より）



7 12号竪穴炉



8 12号竪穴掘り方調査風景（西より）

図版10



1 13・15号竪穴堆積状況（東より）



2 13・15号竪穴遺物出土状況（南より）



3 15号竪穴下層遺物出土状況（南より）



5 15号竪穴炉内出土土器



4 15号竪穴炉遺物出土状況（南より）



6 15号竪穴出入り口部配石およびピット



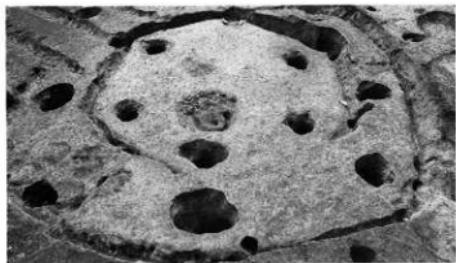
7 13・15号竪穴完掘状況（南より）



8 15号竪穴奥壁ピット



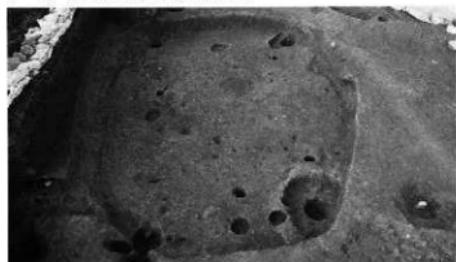
9 15号竪穴完掘状況（南より）



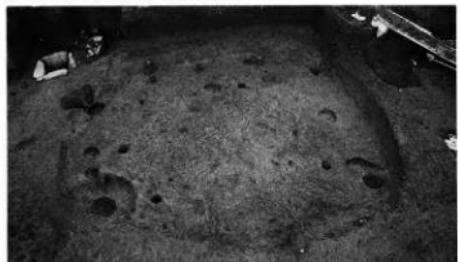
1 13・15号竪穴完掘状況（北より）



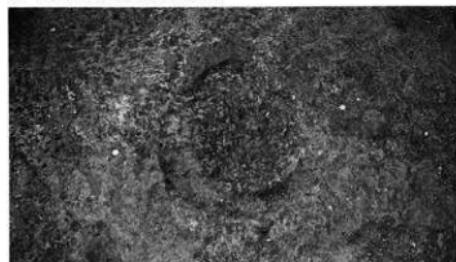
2 16号竪穴遺物出土状況（南より）



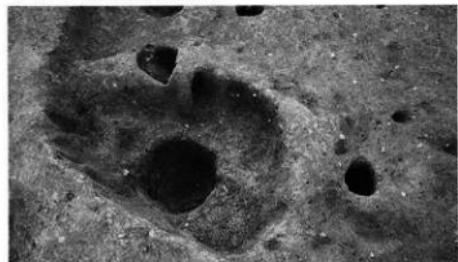
3 16号竪穴完掘状況（南より）



4 16号竪穴完掘状況（東より）



5 16号竪穴炉



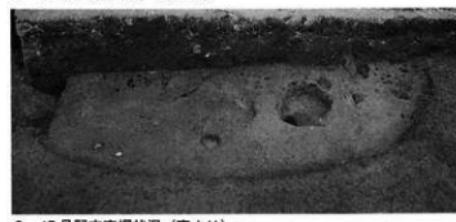
6 16号竪穴出入り口施設



7 16号竪穴掘り方（東より）



8 17号竪穴遺物出土状況（東より）

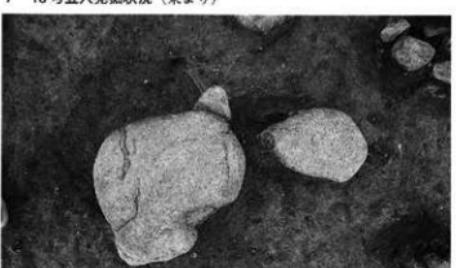
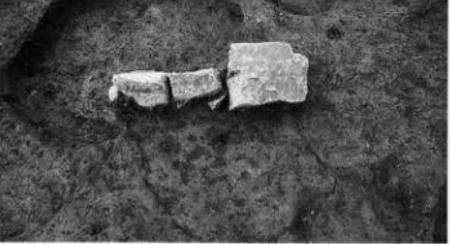
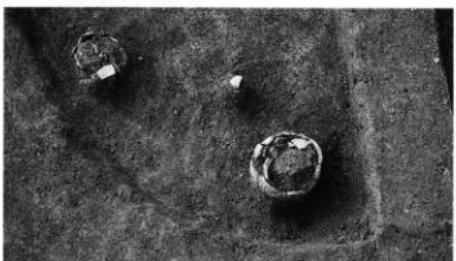


9 17号竪穴完掘状況（東より）



10 17号竪穴炉周辺炭化物出土状況

図版12





1 19号竪穴炉上層遺物出土状況（東より）



2 19号竪穴埋甌出土状況



3 19号竪穴炉内土器出土状況（南より）



4 19号竪穴埋甌出土状況（上より）



5 19号竪穴炉内土器出土状況（東より）



6 19号竪穴埋甌



7 19号竪穴炉と奥壁集石



8 19号竪穴完掘状況（東より）

図版14



1 19号竪穴炉内完掘状況



2 20号竪穴内遺物出土状況



4 20号竪穴埋甕



5 20号竪穴埋甕完掘状況



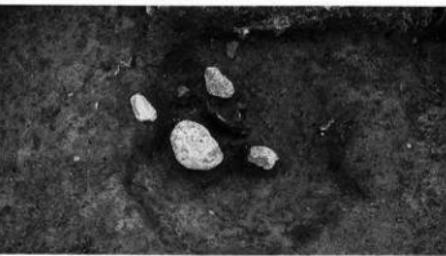
7 20号竪穴完掘状況



3 20号竪穴内遺物出土状況（北より）



6 20号竪穴内遺物出土状況



8 20号竪穴炉



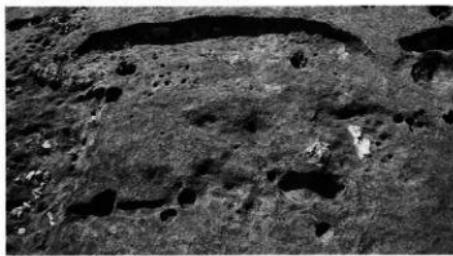
9 20号竪穴完掘状況（2次）



1 21号竪穴遺物出土状況（東より）



2 21号竪穴炭化材出土状況



3 21号竪穴完掘状況（東より）



4 21号竪穴掘り方（東より）



5 22号竪穴遺物出土状況（東より）



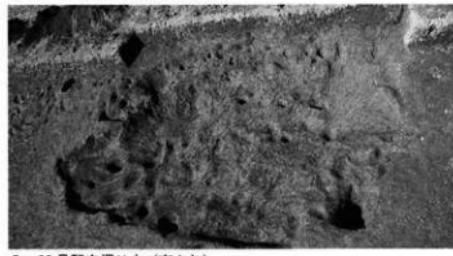
6 22号竪穴遺物出土状況



7 22号竪穴完掘状況（東より）



9 22号竪穴炉



8 22号竪穴掘り方（東より）



1 23号竪穴完掘状況（東より）



2 23号竪穴掘り方（東より）



3 24号竪穴出土状況（南より）



4 24号竪穴遺物出土状況



5 24号竪穴炭化材出土状況



6 24号竪穴遺物出土状況



7 24号竪穴調査風景



8 24号竪穴出土土器



9 24号竪穴遺物出土状況（東より）



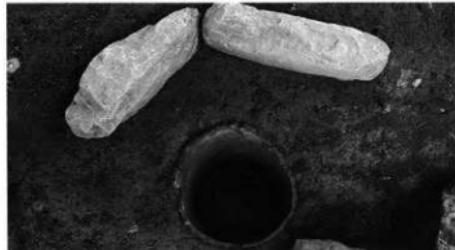
10 24号竪穴完掘状況（東より）



1 25号竪穴遺物出土状況（東より）



2 25号竪穴完掘状況（東より）



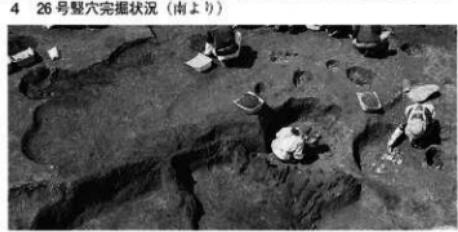
3 26号竪穴炉



4 26号竪穴完掘状況（南より）



5 27号竪穴炭化材出土状況



6 27号竪穴調査風景（南より）



7 28号竪穴完掘状況（南より）



8 28号竪穴内 71号土坑遺物出土状況（上面）



9 28号竪穴内 71号土坑遺物出土状況



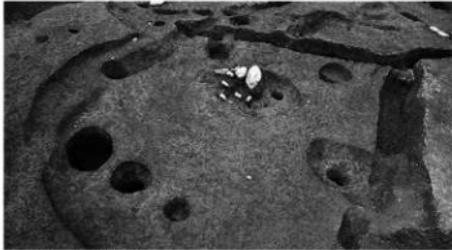
10 28号竪穴内 71号土坑遺物出土状況（下面）



1 29号竪穴遺物出土状況（南より）



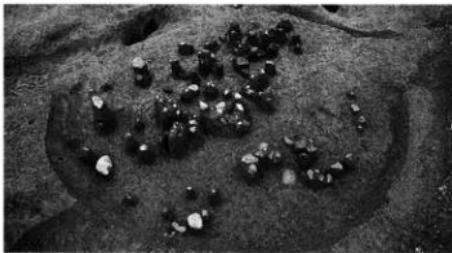
2 29号竪穴遺物出土状況



3 29号竪穴完掘状況



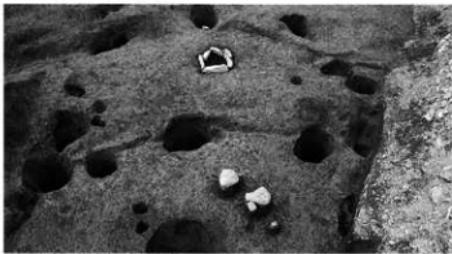
4 29号竪穴炉および78号土坑



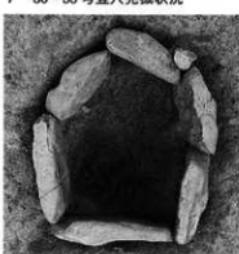
5 30号竪穴遺物出土状況



6 30号竪穴炉上層



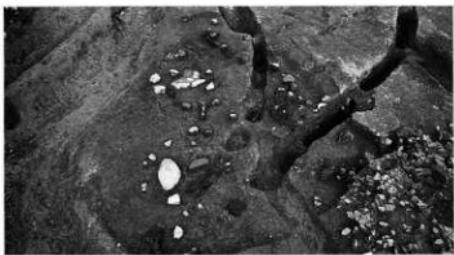
7 30・33号竪穴完掘状況



9 33号竪穴炉

8 30号竪穴炉

10 30・33号竪穴調査風景（南より）



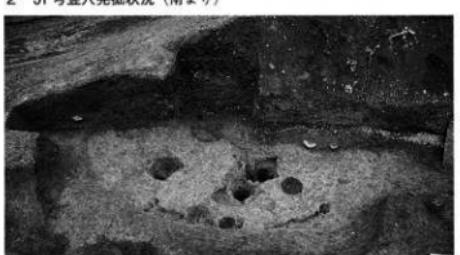
1 31号竖穴遺物出土状況（南より）



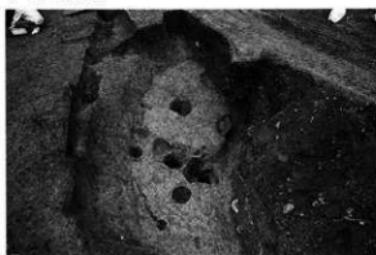
2 31号竖穴完掘状況（南より）



3 31号竖穴炉



4 32号竖穴完掘状況（西より）



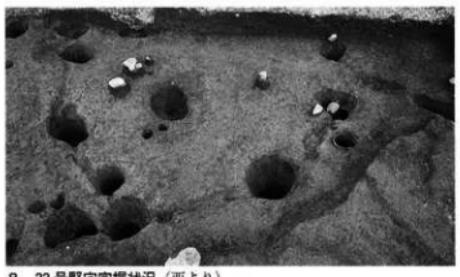
5 32号竖穴完掘状況（南より）



6 32号竖穴炉



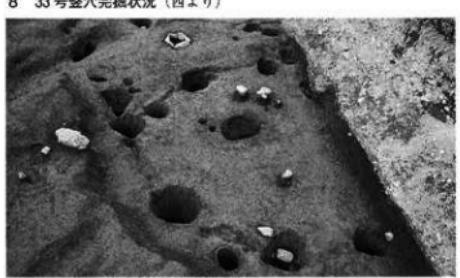
7 33号竖穴縄内壁出土状況



8 33号竖穴完掘状況（西より）



9 35号竖穴炉



10 30・33号竖穴完掘状況（南より）

図版20



1 5区窓掘状況（南より）



2 36号竪穴遺物出土状況（北より）



3 36号竪穴石圓炉（東より）



4 36号竪穴石圓炉（上より）



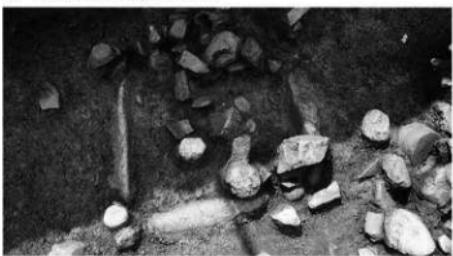
5 36号竪穴石圓炉（北東より）



6 36号竪穴窓掘状況（西より）



7 36号竪穴石圓炉（北より）



8 36号竪穴炉周辺遺物出土状況



9 36号竪穴内集石出土状況



10 36号竪穴炉内遺物出土状況



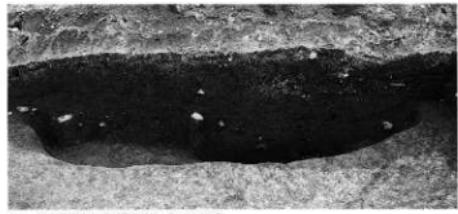
1 36号竪穴完掘状況（北より）



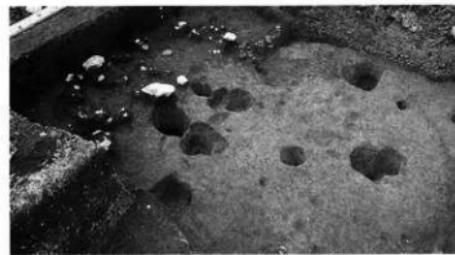
2 36号竪穴周辺土層堆積状況



3 37号竪穴遺物出土状況（西より）



4 37号竪穴完掘状況（西より）



5 38号竪穴遺物出土状況



6 5区完掘状況（南より）



7 5区完掘状況（東より）



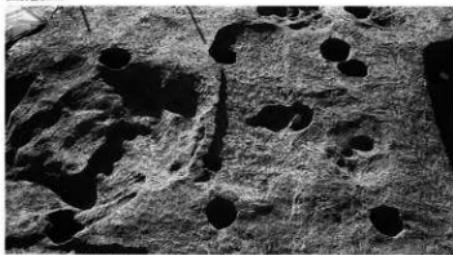
8 5区完掘状況（南より）



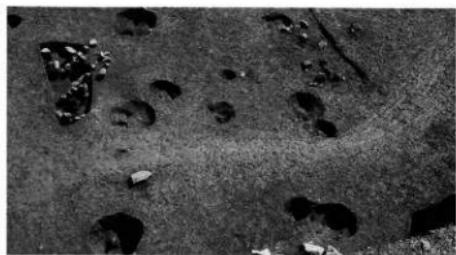
9 5区完掘状況（南より）



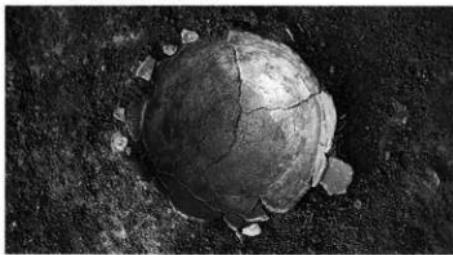
10 5区完掘状況（北より）



1 1号掘立柱建物跡（東より）



2 2号掘立柱建物跡（西より）



3 遺構外単独出土器



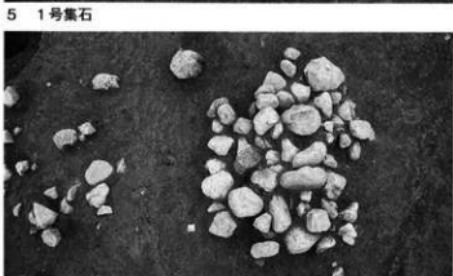
4 1号埋甕



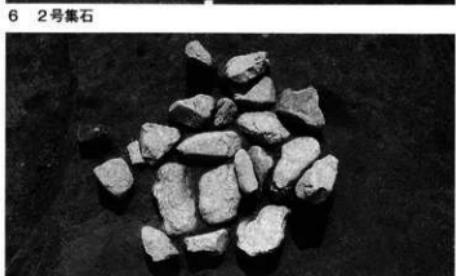
5 1号集石



6 2号集石



7 3号集石



8 4号集石



9 集石群（西より）



1 1号溝(東より)



2 2号溝(西より)



3 1号土坑



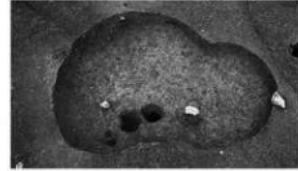
4 2号土坑



5 3号土坑



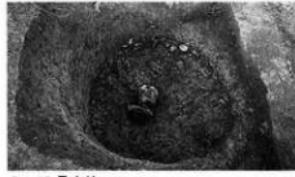
6 12号土坑



7 13・16号土坑



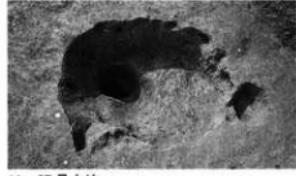
8 17号土坑



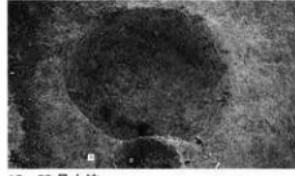
9 18号土坑



10 25号土坑



11 27号土坑



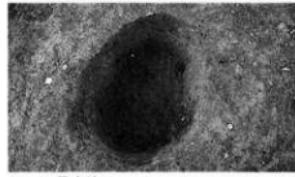
12 28号土坑



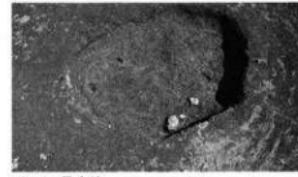
13 29号土坑



14 30号土坑



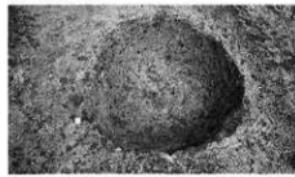
15 31号土坑



16 34号土坑



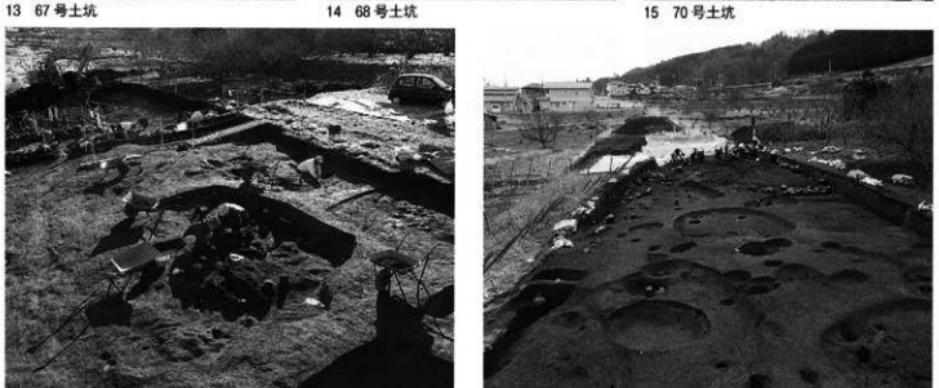
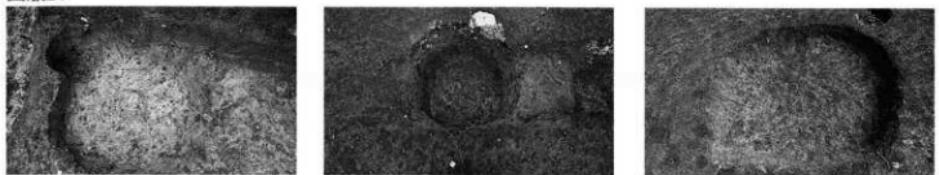
17 35号土坑

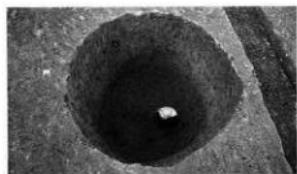


18 38号土坑



19 40号土坑





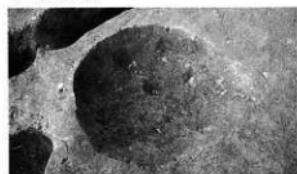
1 73号土坑



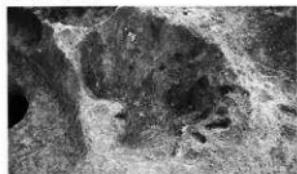
2 74号土坑



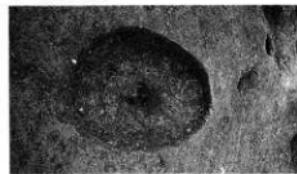
3 80号土坑



4 81号土坑



5 82号土坑



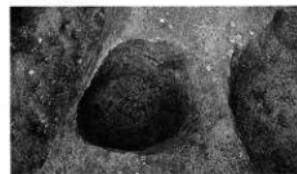
6 83号土坑



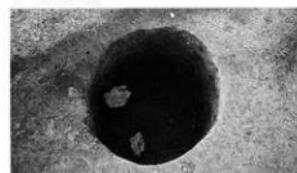
7 84号土坑



8 85号土坑



9 86号土坑



10 29号竪穴 246号ピット



11 90号土坑(上層)



12 90号土坑上層出土土器



13 90号土坑下層出土土器



14 90号土坑下層出土状況



15 7・8号集石



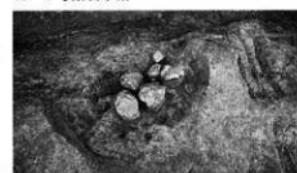
16 7号集石半裁



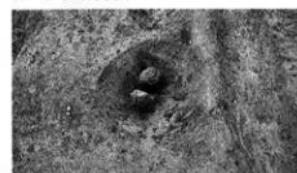
17 8号集石半裁



18 7・8号集石下層



19 9号集石



20 10号集石



21 11号集石



1 集石群（南より）



2 6号風倒木痕



3 2区空撮写真



4 1区南側空撮写真



5 1区北側空撮写真



6 3区空撮写真



7 4区空撮写真



8 5区空撮写真



9 見学会の展示室

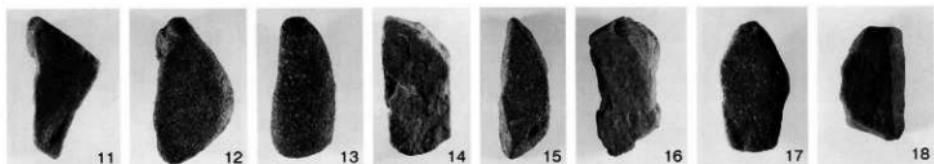
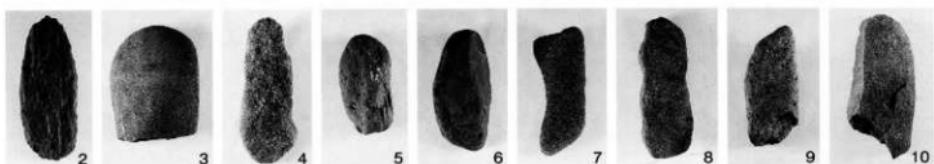
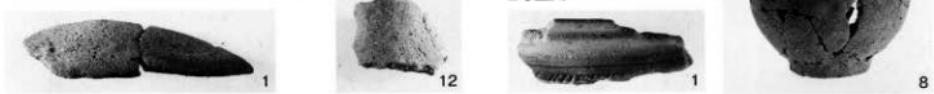


10 見学会の様子

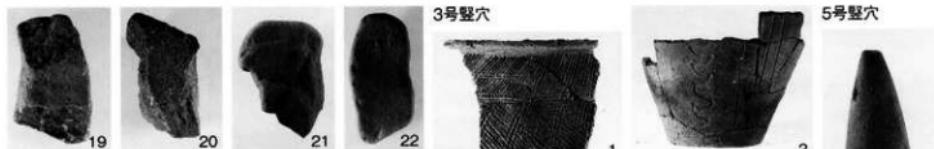
## 1号竪穴



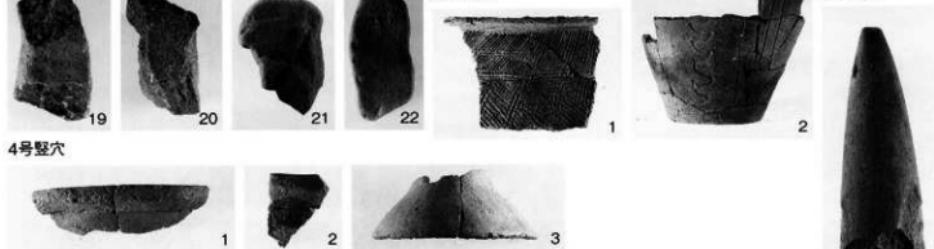
## 2号竪穴



## 3号竪穴



## 5号竪穴



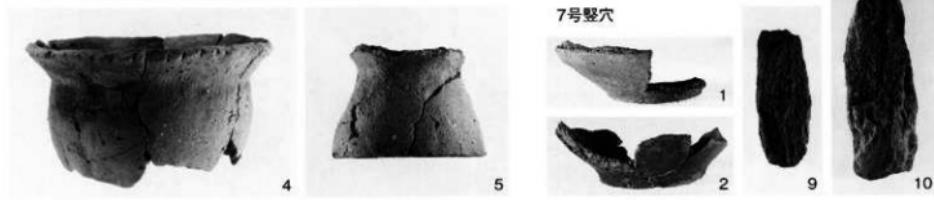
## 4号竪穴

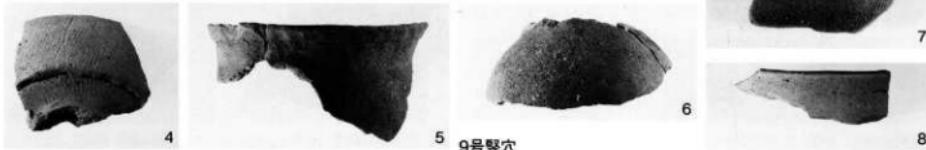
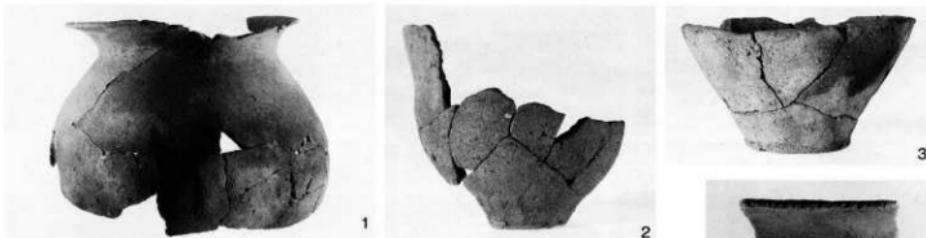


## 6号竪穴

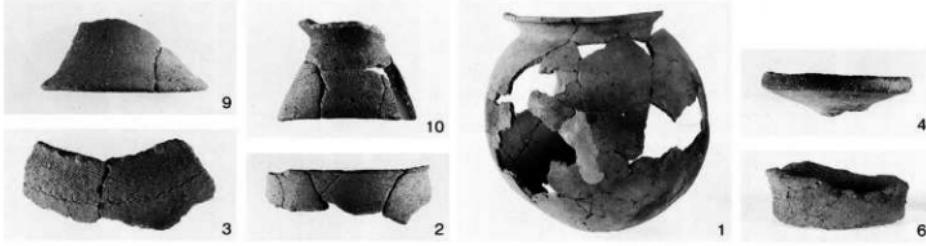


## 7号竪穴





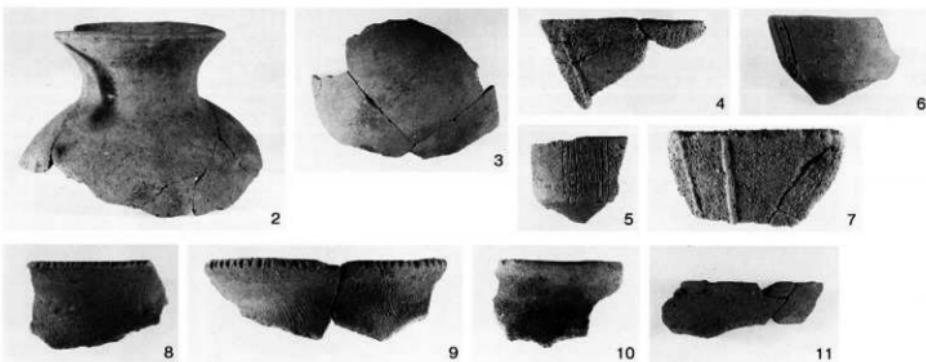
9号竪穴



10号竪穴



11号竪穴



12号竪穴



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

13号竪穴



1



2



3



4



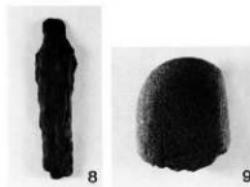
5



6



7



8



9



10



11



4

15号竪穴



2



5

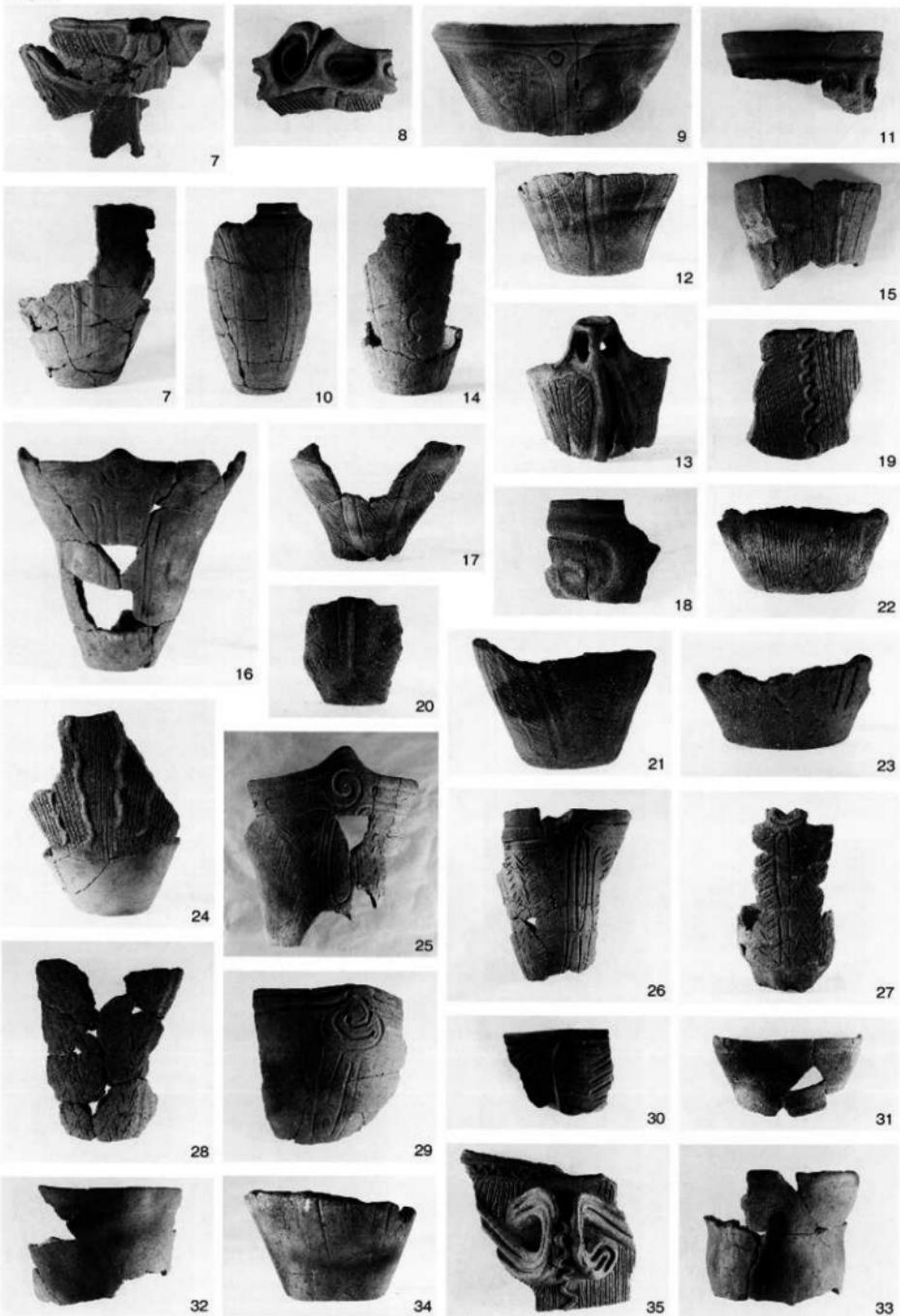


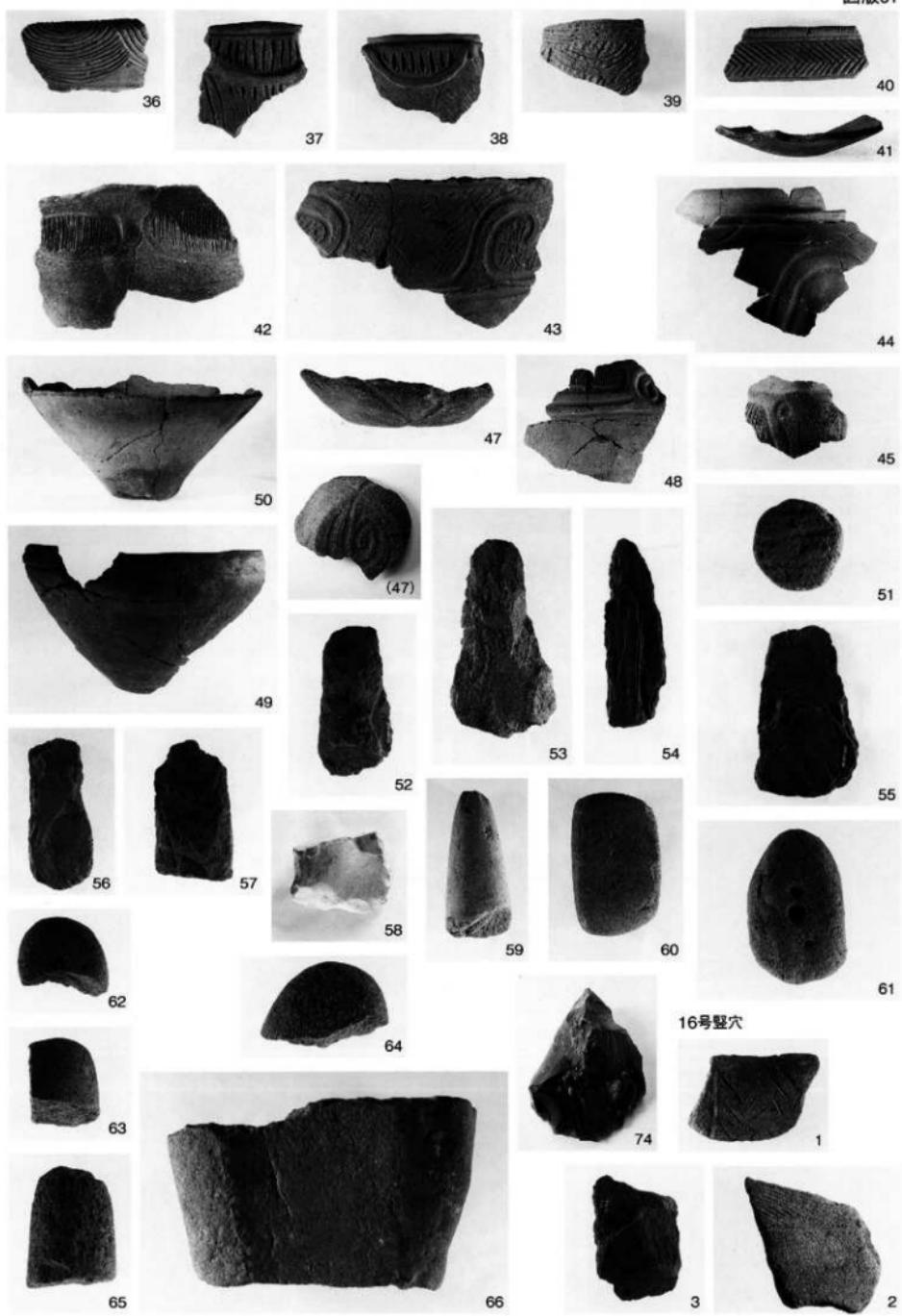
3



6

図版30

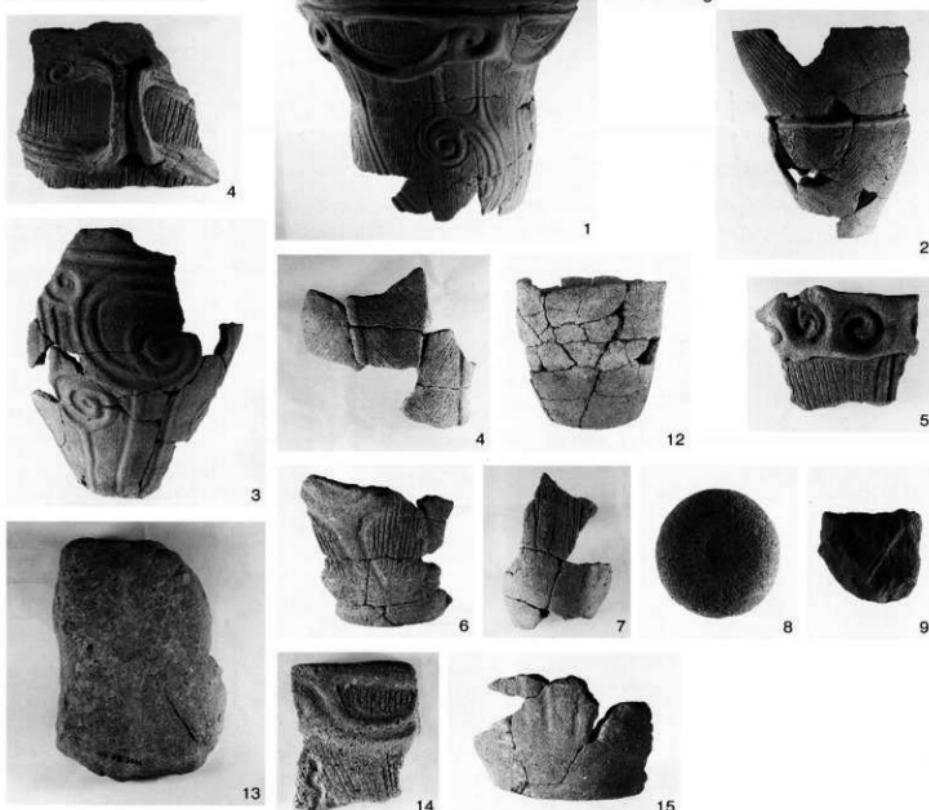




图版32  
17号竖穴

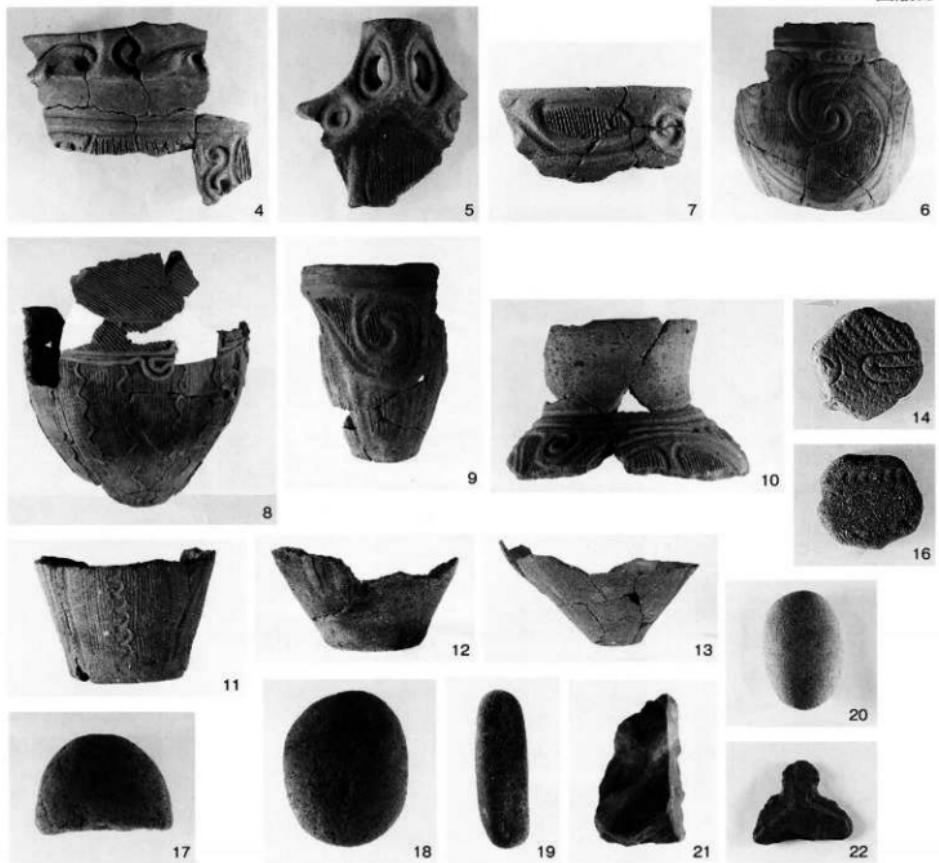


18号竖穴

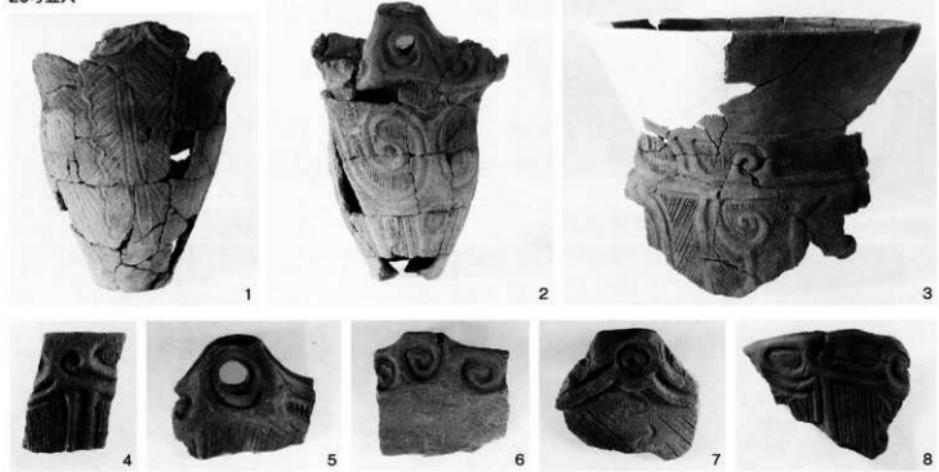


19号竖穴

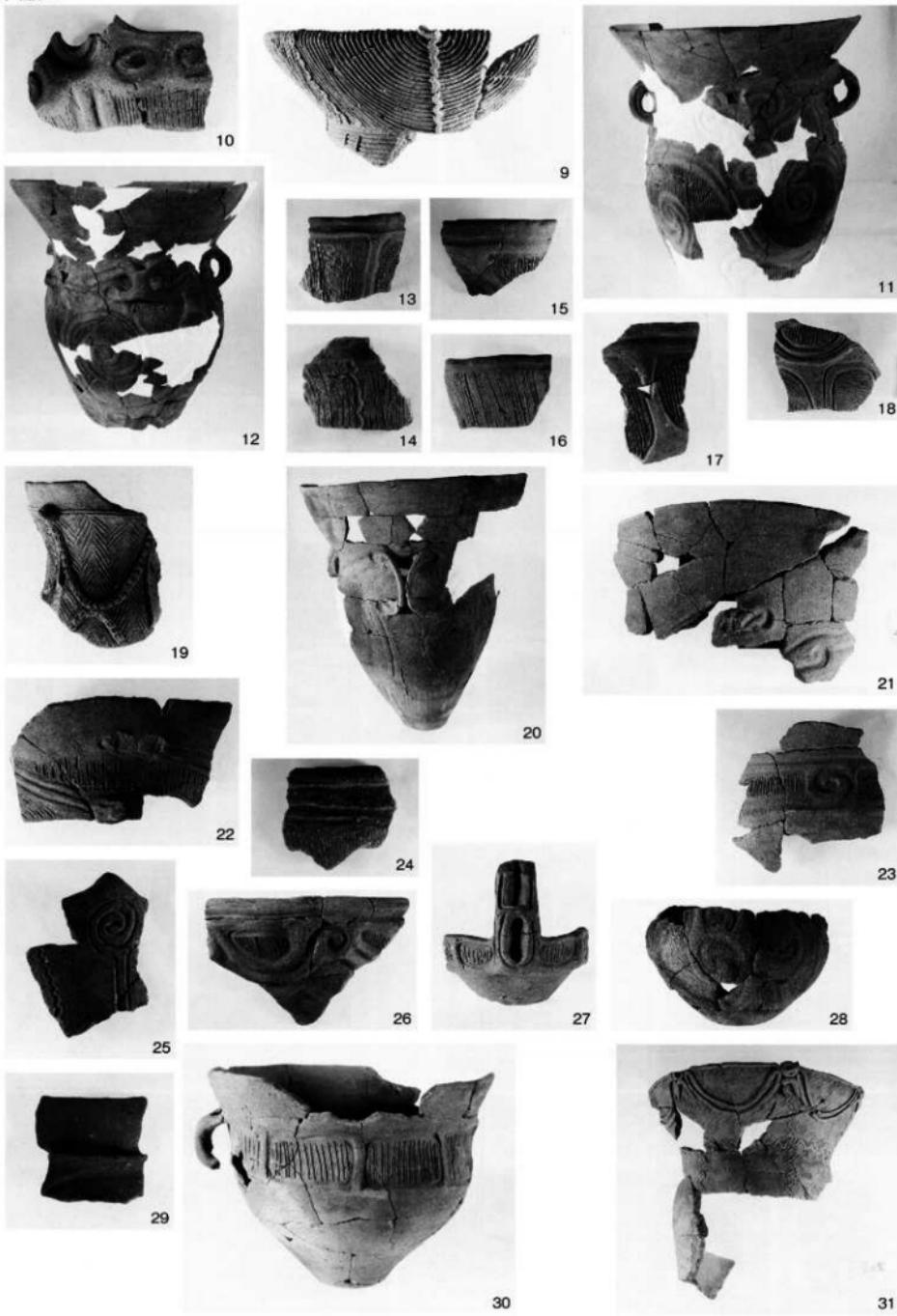


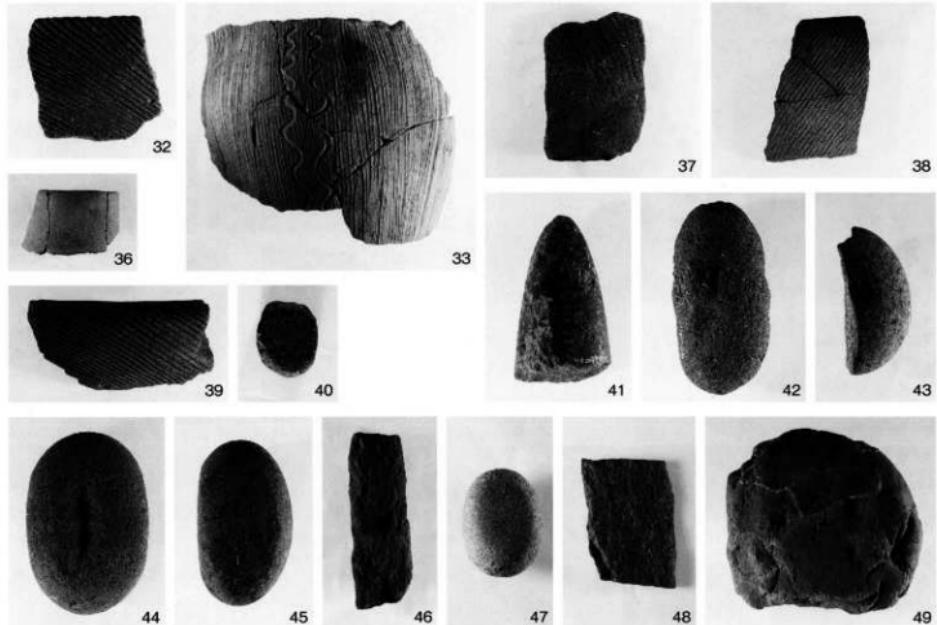


20号整穴



图版34





22号竪穴

24号竪穴



23号竪穴



26号竪穴





(4)



4



5



6



7



8



10



11

27号竖穴



1



2

28号竖穴



1



2



3

29号竖穴



1



2



3



(3)



4



5



6



7



8



9

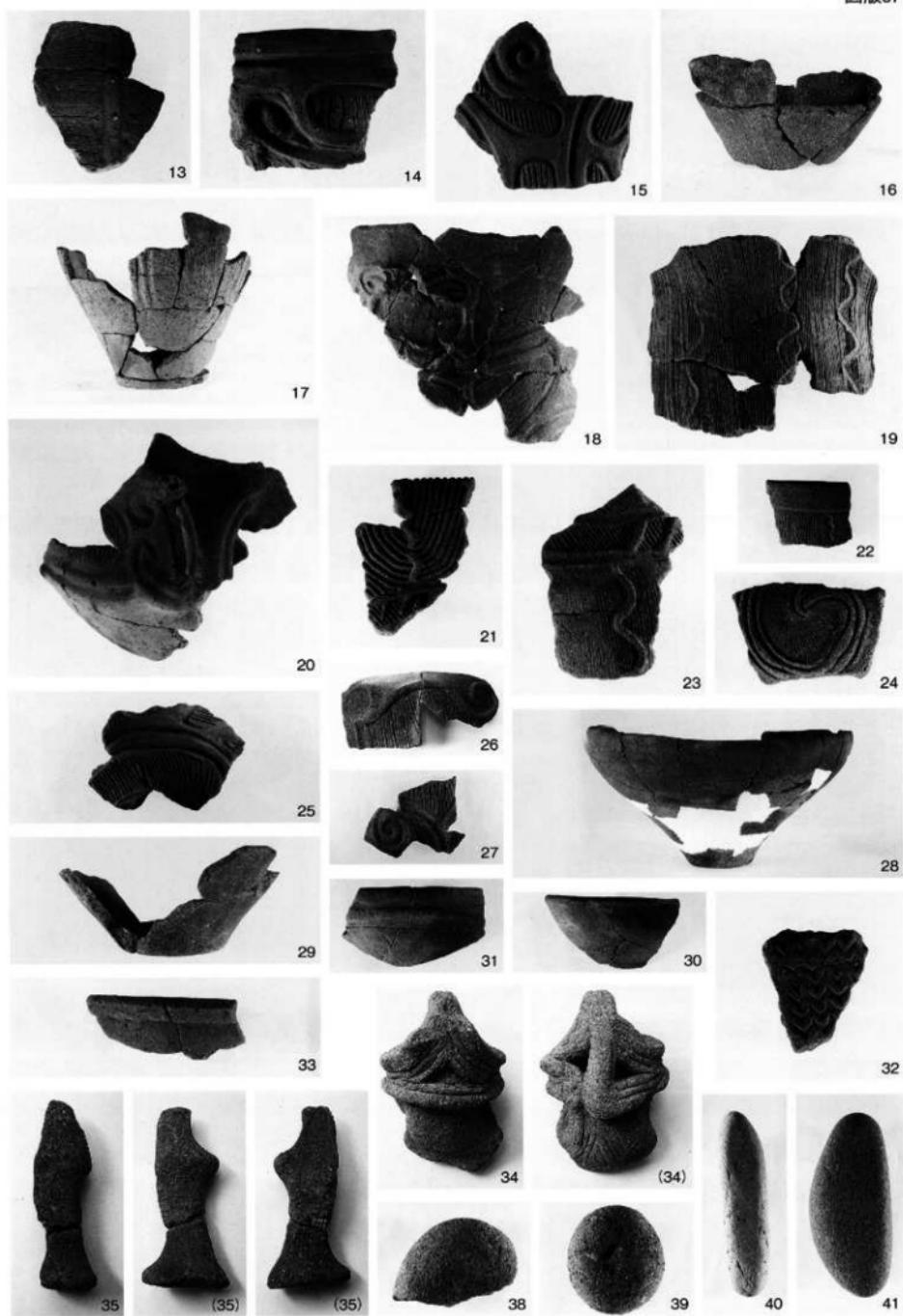


10



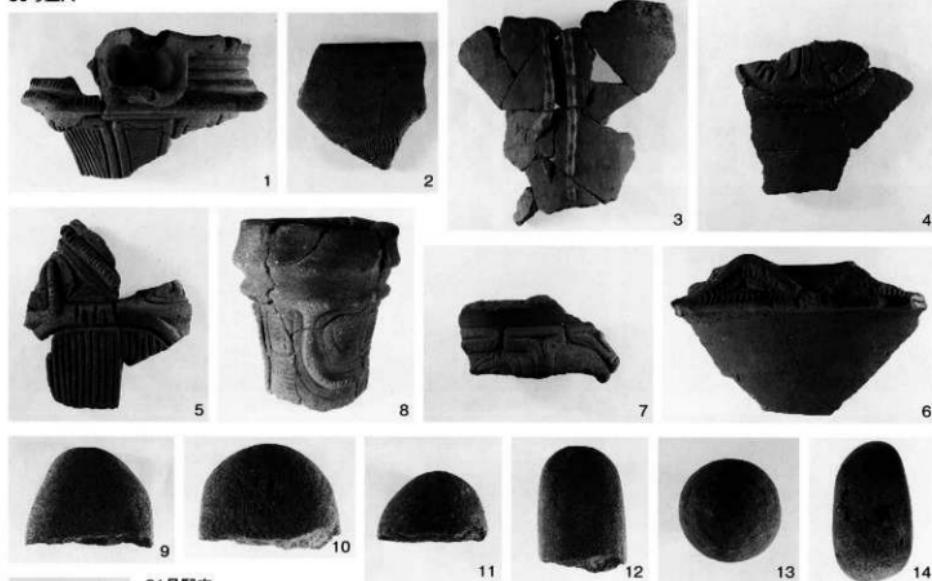
11

12

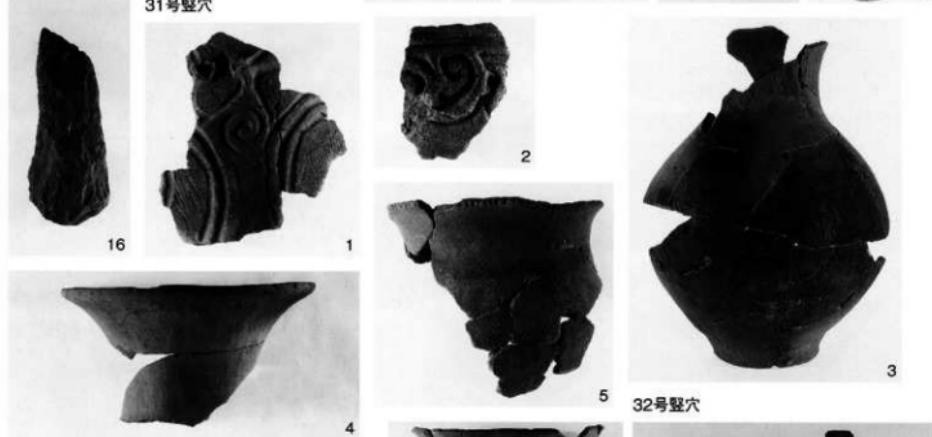


圖版38

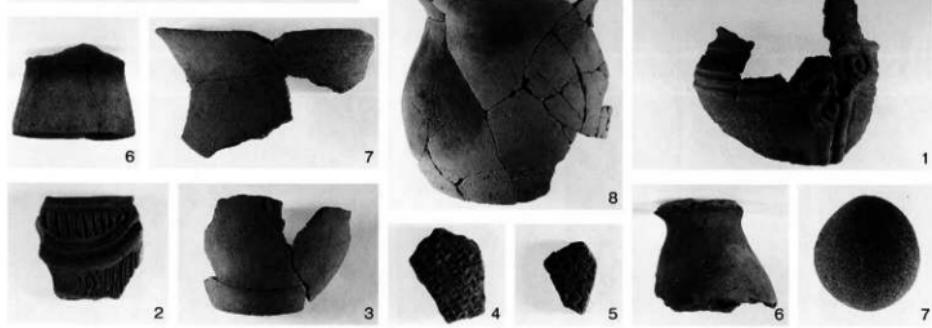
30号竪穴



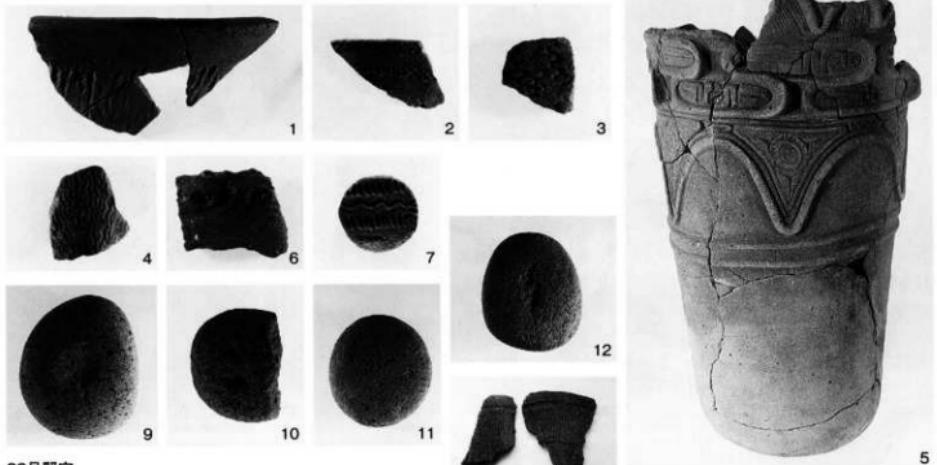
31号竪穴



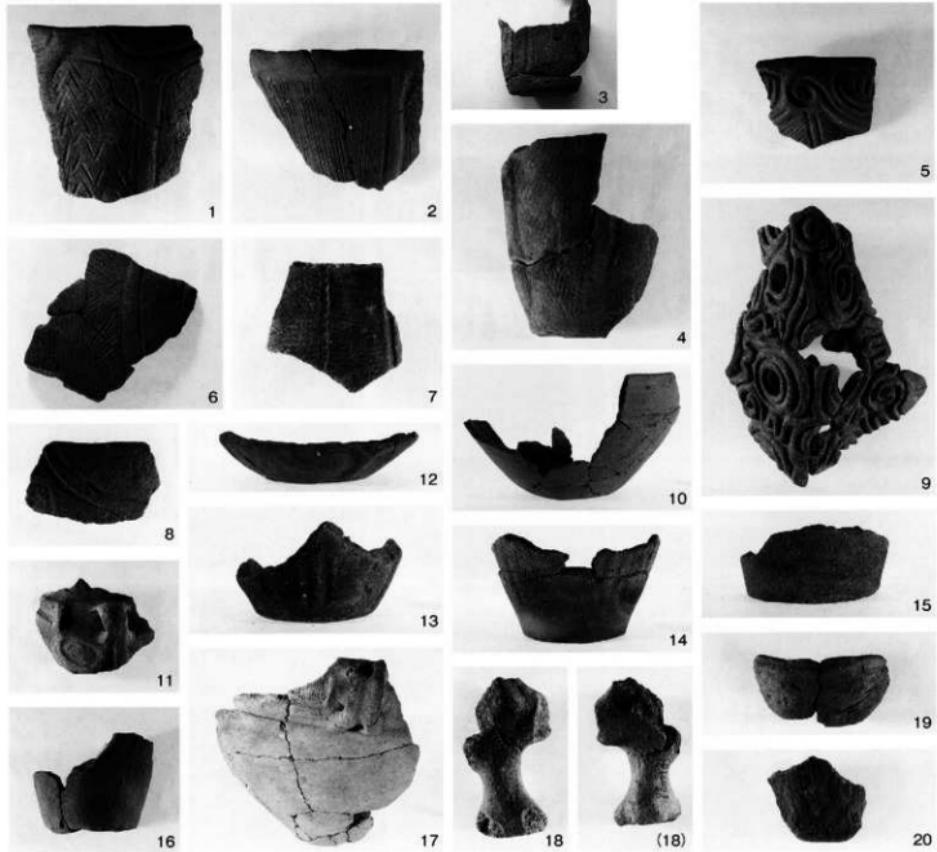
32号竪穴



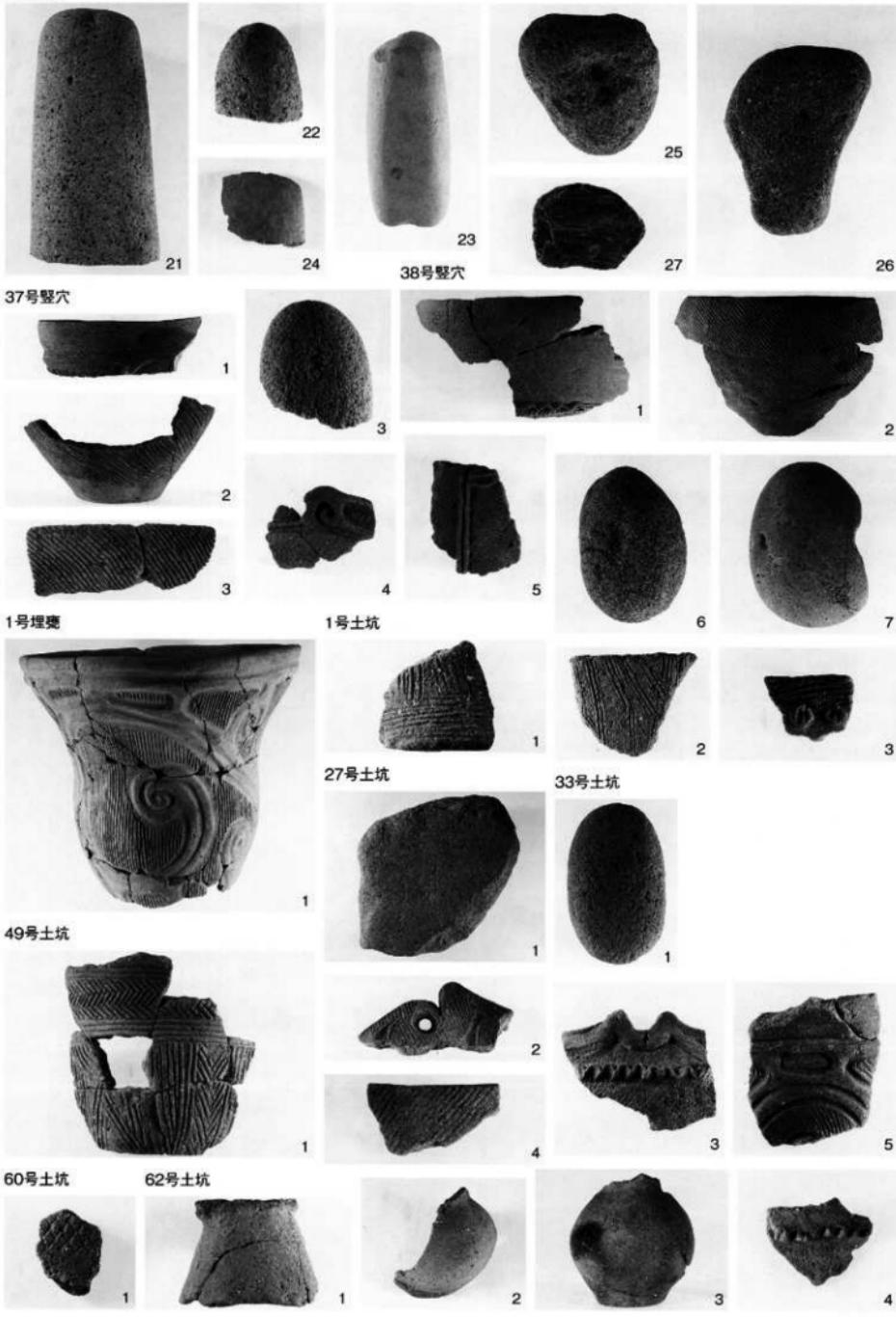
33号竪穴



36号竪穴



图版40



63号土坑



66号土坑



67号土坑



68号土坑



71号土坑



74号土坑



82号土坑



90号土坑



土器集中区



86号土坑



1

2

3

4

1

2

3

4

3号溝

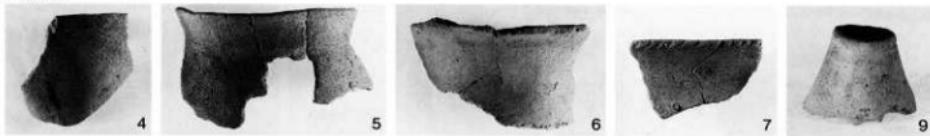


5

3

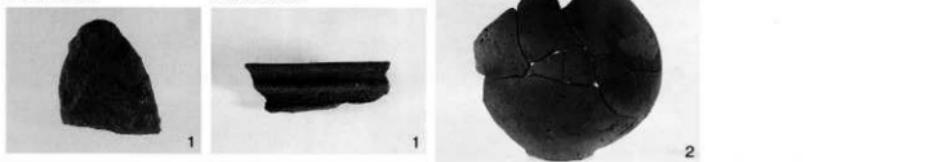
6

图版42

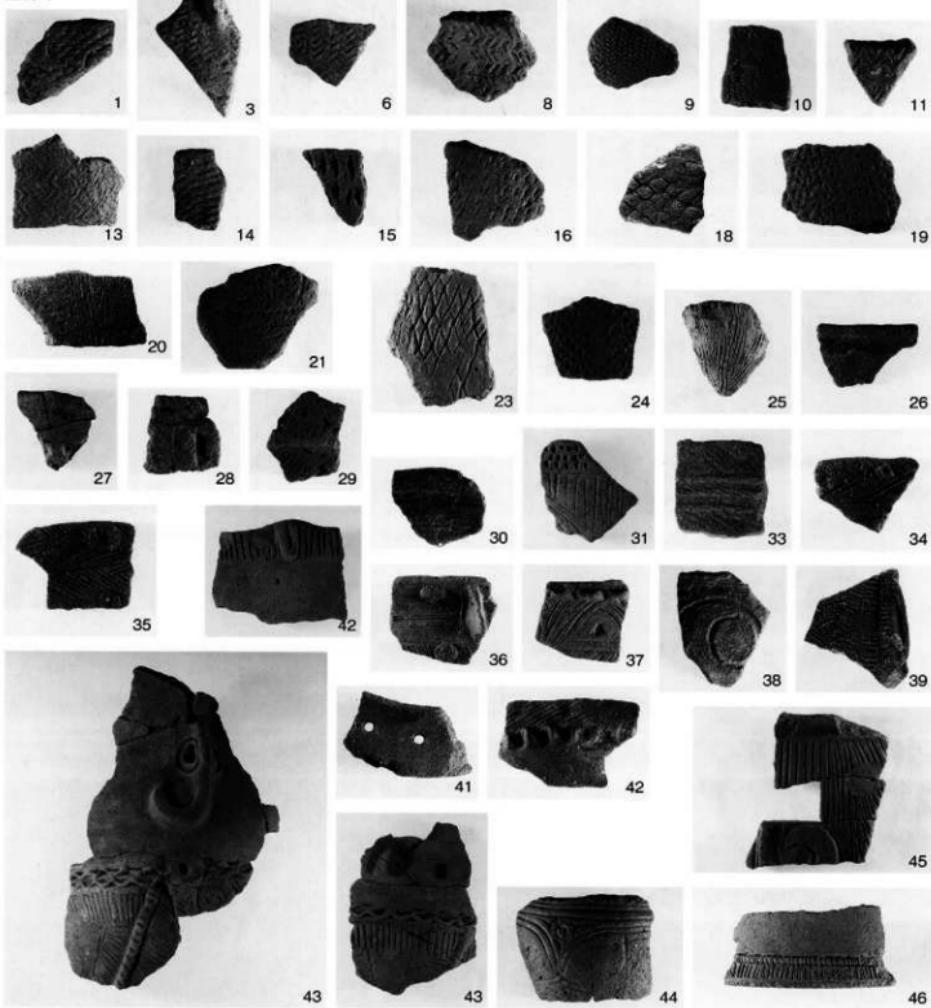


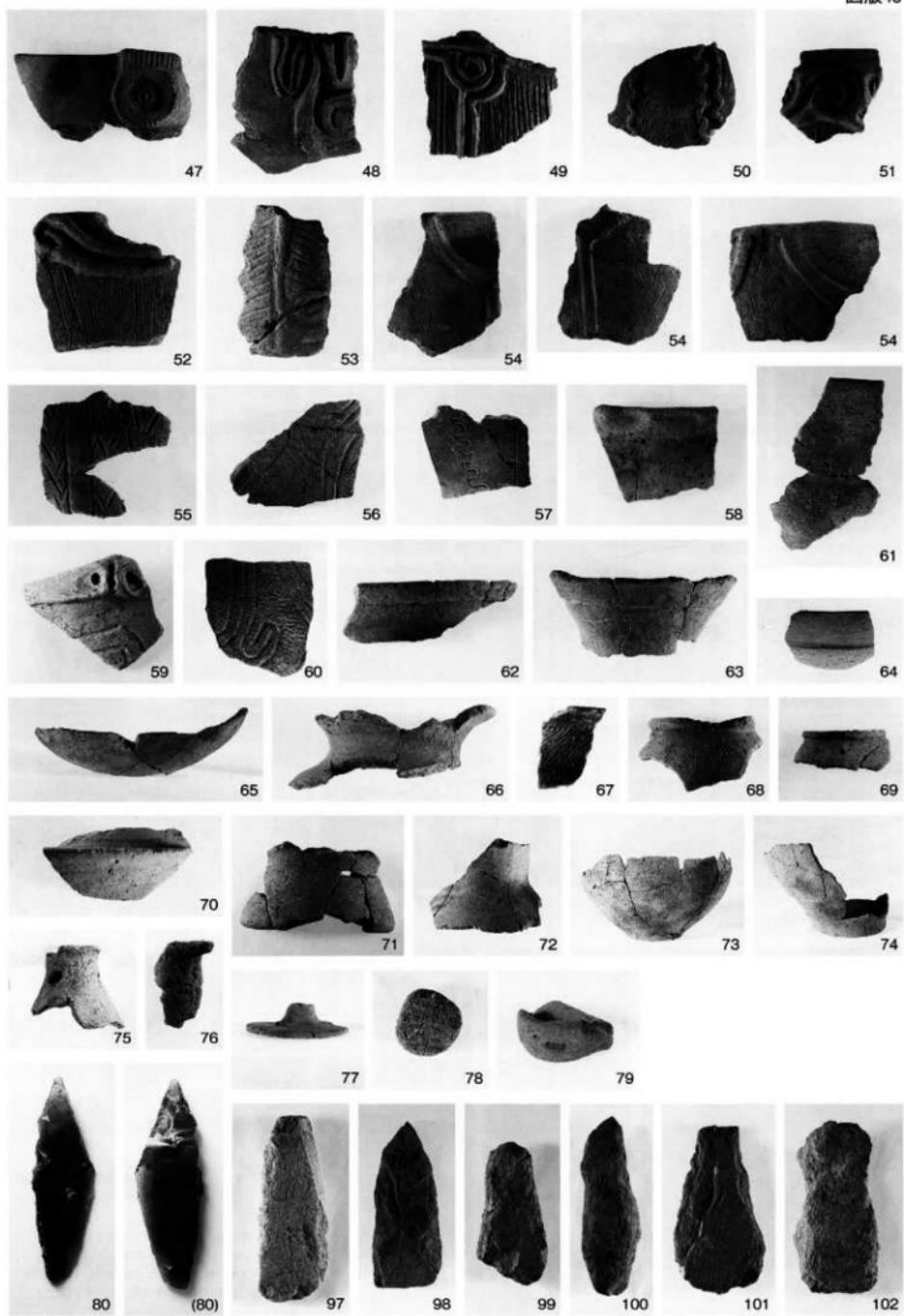
3号風倒木痕

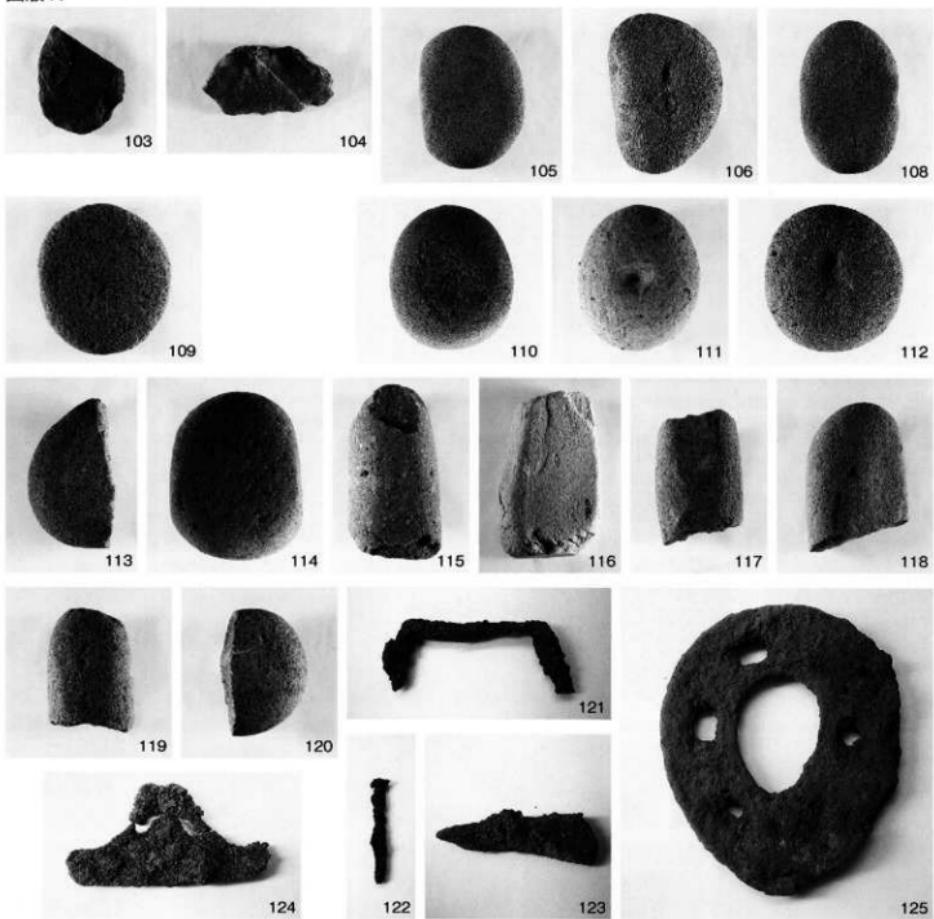
5号風倒木痕



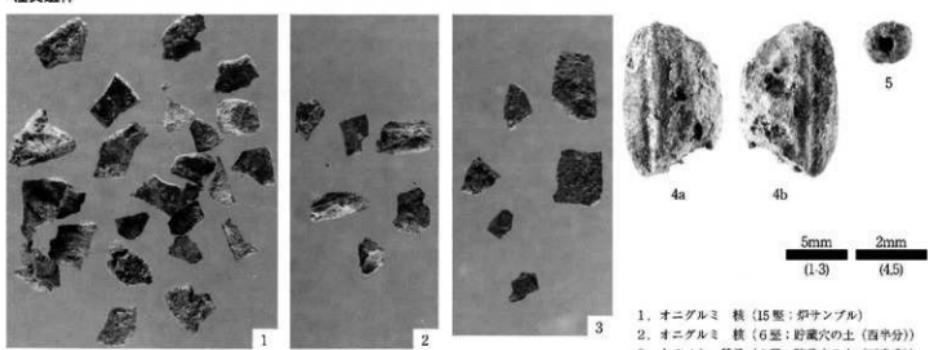
造構外





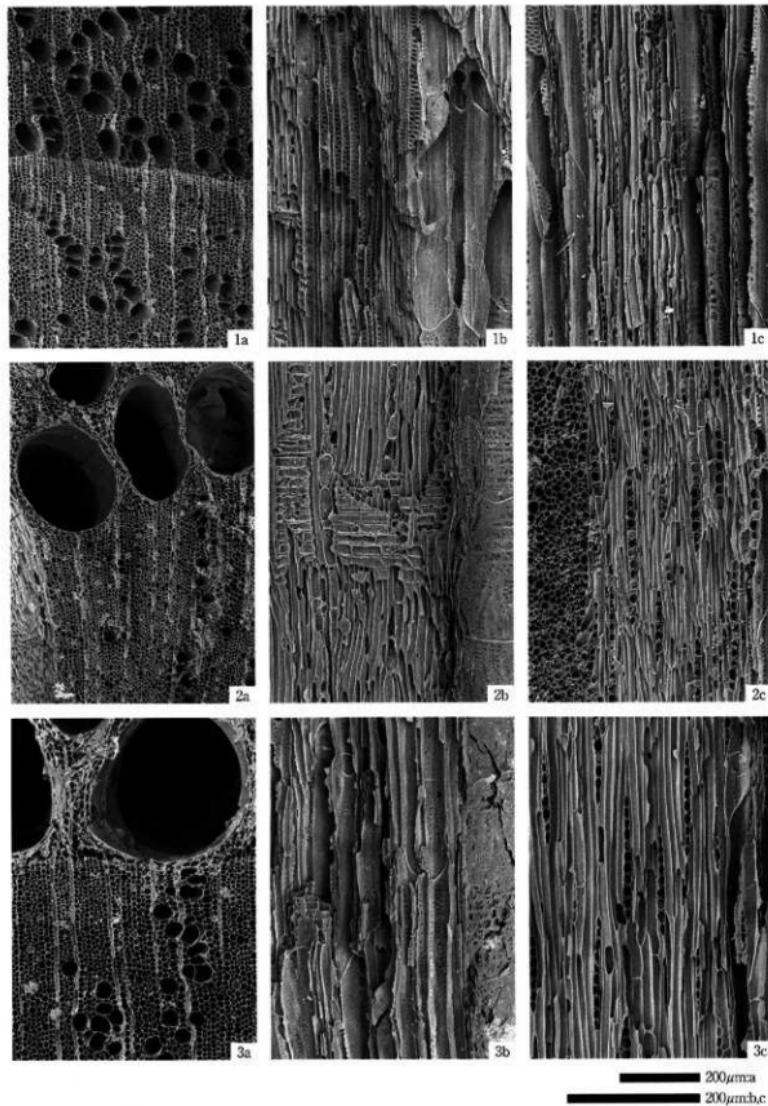


糧実遺体



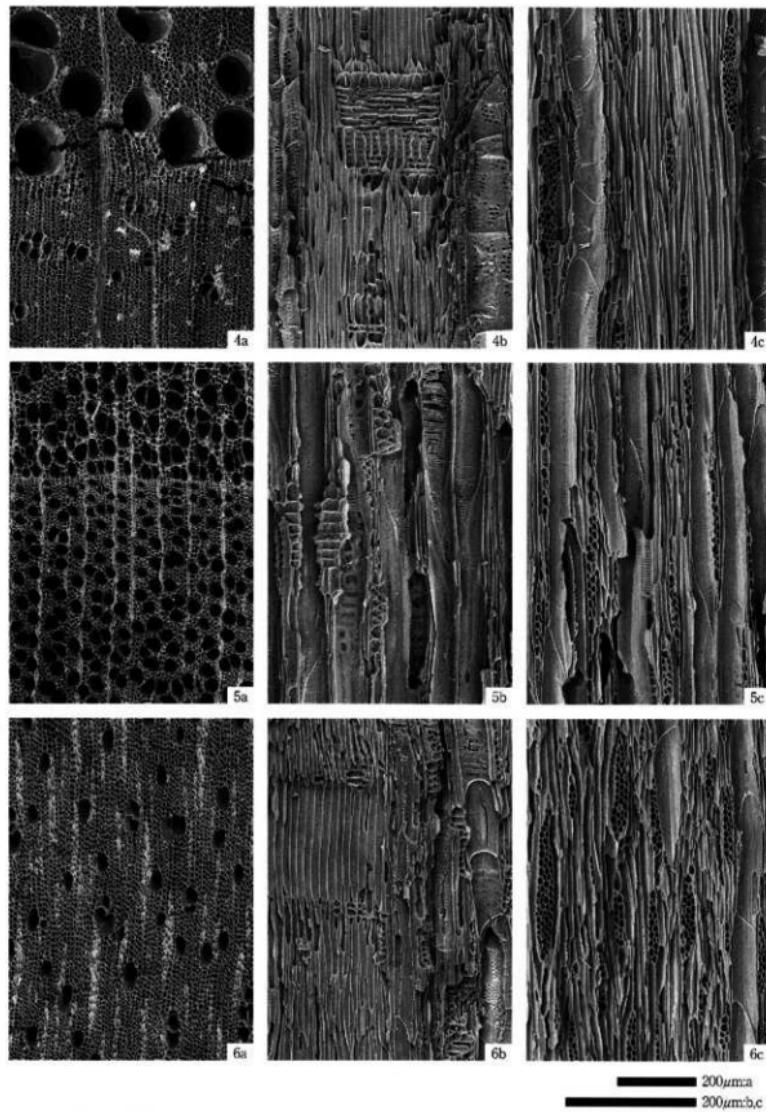
1. オニグルミ 核 (15個: 猿サンブル)
2. オニグルミ 核 (6個: 貯藏穴の土 (西半分))
3. トチノキ 種子 (6個: 貯藏穴の土 (西半分))
4. イネ 花乳 (12個: 猿内サンブル土)
5. アカネ科 核 (1個: 猿)

## 炭化材(1)



1. アサダ (27 縦 : ?4581)
  2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (02 縦 : ?3987)
  3. クリ (27 縦 : ?4580a)
- a : 木口, b : 横目, c : 板目

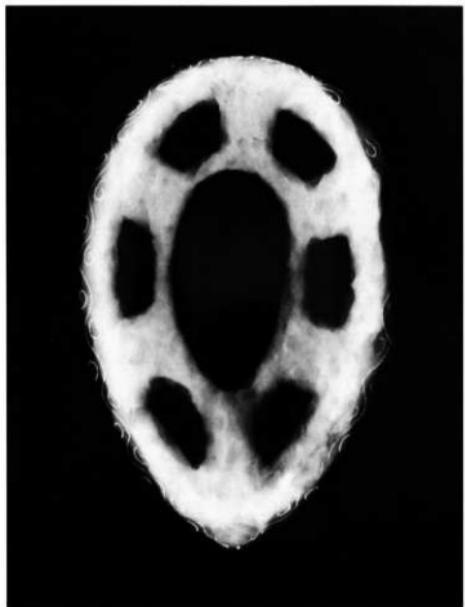
## 炭化材(2)



4. ヤマグワ (27 壓 : ?4573)  
 5. カツラ (27 壓 : ?4576)  
 6. カエデ属 (27 壓 : ?4575)

a : 木口, b : 横目, c : 板目

200 $\mu$ m  
200 $\mu$ m:b,c



1 側面に象嵌をもつ蝶



2 象嵌（部分）

## 報告書抄録

ふりがな	そねいせき (だいにちてん)
書名	曾根遺跡（第2地点）
副書名	下市之瀬上宮地線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	柳原功一・保阪太一・河西学・高橋敦
編集機関	南アルプス市教育委員会 文化財課
所在地	〒400-0403 山梨県南アルプス市鮎沢1212 TEL 055-282-7269
発行年月日	西暦2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °.′.″	東經 °.′.″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
曾根遺跡	山梨県南アル プス市上宮地	19208	KG-123	35°36' 55.14"	138°26' 54.48"	平成20年 12月～ 平成22年 3月	4491m <sup>2</sup>	市道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落遺跡	縄文中期前半～後半、弥生末～古墳初	竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡2棟、集石炉、土坑、溝、河遺跡	押型土器、縄文土器、石器、弥生土器、土師器、鉄製品ほか	旧石器のナイフ形石器、屋外集石炉群、縄文中期前葉～中葉、後半の集落、弥生末～古墳初の集落、縄文中期後半の六角形の竪穴住居

要約	台地縁部に立地する縄文・弥生・古墳時代の集落。縄文中期の集落は調査区南側を中心に存在し、中期後半では六角形の竪穴住居を中心には環状を呈し、南端では厚い層状地堆積土の下に続いている。弥生末～古墳時代初頭では台地面を中心に南北に広がり、掘立柱建物を伴う。2棟単位での建替えがあり、火災住居が目立つ。
----	---

### 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第28集

山梨県南アルプス市

#### 曾根遺跡（第2地点）

下市之瀬上宮地線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2011年3月29日

発行者 南アルプス市教育委員会

〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢1212

TEL 055-282-7269

印刷所 鬼灯書籍株式会社

〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5

TEL 026-244-0235

FAX 026-244-0210

